鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10

平成５年度発掘調査報告
（第１分冊）

平成６年３月

鎌倉市教育委員会

序　　文

鎌倉市教育委員会
教育長　米倉　雄二郎

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相ついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす大規模な工事も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査をするようにしてきました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で、調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは国民の責務でありますが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当たってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮詰めて行って頂きたいと思います。

本書は平成５年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼申し上げます。

例　言

1．本書は平成４年度及び平成５年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（３分冊）である。

2．本書所収の調査地点及び所収分冊は別表のとおりである。

3．現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した。

4．出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

5．各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

序文……I

例言……II

平成５年度の概観……III

１．公方屋敷跡……1

第一章　調査地点の位置と歴史的環境……6

第二章　調査の概要……9

第三章　検出された遺構と遺物……14

第１節　遺構……14

第２節　遺物……32

第四章　まとめ……77

〈附篇〉　公方屋敷の花粉化石……78

２．永福寺跡……103

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……109

第２章　調査の経過と概要……110

第１節　調査の経過……110

第２節　層序……111

第３章　検出した遺構と遺物……112

第１節　１面の遺構と遺物……112

第２節　２面の遺構と遺物……117

第３節　３面の遺構と遺物……119

第４章　まとめ……122

附編１．井戸内堆積物の花粉化石及び樹種同定……143

附編２．鎌倉永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺体

―井戸址出土の動物遺体について―……153

3．大倉幕府周辺遺跡群 ……199
第一章　調査地点と周辺の遺跡 ……203
第二章　調査の経過と概要 ……204
第三章　本調査での成果 ……210
第１節　二面検出の遺構と遺物 ……210
第２節　三面検出の遺構と遺物 ……224
第四章　調査のまとめ ……230

（第２分冊）

4．北条政村屋敷跡……1
第一章　調査地の位置と環境……5
第二章　調査の経過と堆積土層……8
Ⅰ　調査の経過……8
Ⅱ　堆積土層……9
Ⅲ　試掘調査……10
第三章　遺構と遺物……12
Ⅰ　１面の遺構……12
Ⅱ　２面の遺構……17
Ⅲ　第３層出土遺物……26
Ⅳ　第４層の遺構……28
第四章　まとめと考察……34
Ⅰ　遺跡の年代と性格……34
Ⅱ　道路について……34
Ⅲ　問題点……36
（附論）　市内遺跡発掘調査事業に係る花粉分析業務……37
5．長谷小路周辺遺跡……59
第一章　調査地点の概観……63
第二章　調査の概要……69
第三章　検出遺構と出土遺物……71

第１節　中世……71
第２節　中世以前……87
第四章　まとめ……90
6．長谷観音堂周辺遺跡 ……107
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……111
第二章　調査の経過と堆積土層 ……114
第三章　検出された遺構と出土した遺物 ……117
第１節　中世の遺構と出土遺物 ……117
第２節　中世以前の遺構と出土遺物 ……130
第３節　本地点における火山灰質堆積物について ……137
第四章　まとめと考察 ……141
7．妙本寺遺跡 ……163
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……167
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……167
第３章　出土遺物 ……170
第４章　まとめ ……173
8．天神山下城 ……179
第１章　遺跡の立地及び周辺の遺跡 ……183
第２章　トレンチ調査 ……184
・まとめ ……184
9．若宮大路周辺遺跡群 ……189
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ……193
第二章　調査の概要 ……194
第１節　調査区の設定 ……194
第２節　堆積土層と生活面 ……194
第三章　検出遺構 ……196
第１節　第一面検出遺構 ……196
第２節　第二面検出遺構 ……198
第３節　第三・四面検出遺構 ……200

第四章　出土遺物 ……201
第五章　調査のまとめ ……211
10. 笹目遺跡 ……223
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……227
第２章　調査の経過と検出した遺構 ……228
第３章　出土遺物 ……230

（第３分冊）

11. 若宮大路周辺遺跡群……1
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……11
第二章　調査の経緯……14
第三章　検出した遺構・遺物……20
第四章　まとめ ……221

平成５年度調査の概観

平成５年度の緊急発掘調査実施件数は10件で、対象面積は、1130㎡であった。前年度の12件、5837㎡と比較すると件数、面積共に減少する。これは４年度の本稿で指摘した経済情勢の後退現象の影響を反映せざるを得ない緊急発掘調査の宿命的な側面が、より顕著に表れた結果であろう。この傾向は事業者負担による調査ではさらに著しく、特に民間事業に伴う調査は激減状態であった。この中で国庫補助事業調査が継続し得たのは、金利の低下等の要因により個人住宅建築等の自己事業がむしろ増加傾向を示すという、特異な現象の結果と考えられる。

本市では昭和46年度から緊急発掘調査を実施しているが、調査量は平成２年度まで常に増加傾向を保っていた。それが３年度でやや減少し、４年度、５年度で一気に激減といえる状況を呈している。このように経済状況の変動によって、本来学問的であるべき発掘調査の件数が乱高下するのは鎌倉のみならず考古学全体にとって憂慮すべき事態といえよう。

５年度の調査原因の内訳は、専用住宅が６件、自己用店舗併用住宅が２件、共同住宅との併用住宅が２件であった。この10数年、家屋の老朽化に伴う建て替えに際し新たな事業を計画に採り入れ土地の有効活用を図ろうとする傾向が顕著であったが、５年度でみる限りその動向がやや鈍化したようである。やはり、経済状況の反映であろう。

５年度調査の特記事項としては名越ヶ谷遺跡（地点３）で大町大路沿道所在の可能性を窺わせる建物遺構を検出した点や、長谷観音堂周辺遺跡（地点６）で近世・近代の変遷過程を層位的に捉えることができたことなどが挙げられる。また、由比ヶ浜南遺跡（地点８）は海岸近くの砂丘上に広く形成される方形竪穴建物群を主とした、いわゆる浜地遺跡内の比較的高地に位置し、８世紀代から継続する遺構群が検出され、同区域内の新たな知見が得られた。

また平成６年度への継続調査であるが、宇津宮辻子幕府跡（地点10）は４年度に実施した若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目325番イ外地点）の北方に位置し、宇津宮辻子幕府跡に関する新たな知見と共に小町大路沿いの遺構群についても新資料が得られるものと期待される。

１　名越ヶ谷遺跡

同遺跡内の大町四丁目1880番６外に所在する。平成５年３月、自己用専用住宅建設に係わる事前相談があり、地下車庫を含めた計画であるので、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は４月13日～17日に実施され、地表下115㎝で中世遺構面が検出された。このため試掘途中であるが、４月15日に設計担当者と設計変更の可否等を協議したが、地下車庫及び納戸区域については事前調査の実施が不可避であると判明した。これを受けて県と協議し、当該区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの県の指導を得た上で改めて事前調査の実施を前提に細部にわたる

打合せを行った。

4月19日に文化財保護法第57条の2の届出が提出され、続いて4月30日、県教育長名による調査実施と本旨とする通知書が事業者宛送付された。そして同日付けで調査実施依頼書が市教育長宛に提出された。

以上の経過を経て、5月3日から5月24日にかけて調査が実施されたのである。調査地点は逆川の南岸の緩斜面上に位置するが、調査によって川に向かって、すなわち南北方向に斜面上を下る数条の布堀状溝が検出された。溝底には小ピットが不規則な間隔ながらも多数穿たれており、またその年代は14世紀代と考えられる。逆川に関わる、例えば「堰」、或いは土留施設のような機能を有する遺構と考えられる。

2　笹目遺跡

同遺跡内の笹目町302番5に所在する。遺跡内には北条時隆邸跡・北条時定邸跡・遺身院跡などの存在が推定されており、市内中心部近くの枢要域内に立地する。本調査地点は遺跡東南部区域内にあり、基盤層は砂丘により形成される。

平成5年2月、自己用住宅建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施の上協議をすすめることとした。3月19日の現地打合せを経て、4月19日から21日にかけて試掘調査を行ったところ、地表下60cmで3面に及ぶ中世遺構面の存在が確認された。このため担当者と協議し、設計変更の可否について検討依頼するが不可能であることが判明した。そこで国庫補助事業調査を実施すべきとの県教育委員会の指導にもとづき、5月6日事業者と協議し調査方法等についての調整を進め調査実施について合意し、具体的な準備に入ることとした。

5月10日、文化財保護法第57条の2による届出書が提出され、国庫補助事業調査として実施すべきとの副申を添えて県宛送付した。そして5月18日付けで県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付され、更に同日付けで事業者から調査実施依頼書が提出された。

5月19日、現地にて設計担当者と調査実施方法ならびに土留、表土掘削、残土搬出等の土木工事施工方法などについて最終的な打合せを行い、準備の整うのを待って6月1日から9月8日にかけて発掘調査が実施されたのである。

調査により14世紀代を中心とする数棟の掘立柱建物遺構や多数の土壙などが検出された。また南北方向に走行する道路状遺構が検出されたが、これは鎌倉内に七ヶ所あったといわれる「塔の辻」の一つで、現在もその名が字名として残る由比が浜の塔の辻へと通ずる道路と考えても大過なしとし得る成果が挙げられた。

3　名越ヶ谷遺跡

遺跡内の大町三丁目1217番１に所在する。平成５年４月、自己用店舗併用住宅建設に係わる事前相談があり、包蔵地内であるので試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は４月22日に実施され、地表下60cmで数面に及ぶ中世遺構面が検出され、事前調査の実施が不可避であると判断された。このため４月26日、担当者と設計変更の可否を協議したが不可能であると判明したため、国庫補助事業調査として実施すべきとの県の指導にもとづき、改めて事前調査の実施を前提に作業をすすめることとした。

４月28日に文化財保護法第57条の２の届出が提出され、続いて５月20日、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付された。その後事業者側の事由により協議が暫く中断したが、６月22日に再開し調査実施方法等を打合せした。そして更に細部の調整をすすめるため、６月28日現地において事業者及び施工担当者と具体的事項について協議を重ねた。以上の経過を経て７月１日、調査実施依頼書が市教育長宛提出され、７月６日から８月24日にかけて調査が実施されたものである。

調査によって14世紀代の掘立柱建物跡、井戸、土壙そして土丹敷遺構などが検出され、比較的調査例が希薄であった大町大路沿道区域内の新たな都市遺跡資料が得られたと評される。なお本調査では遺構検出面が試掘のデーターよりも高位にあり、大町大路北側の本地点周辺区域では近世或いは近代において削平地形がなされた可能性を指摘し得る。

４　米町遺跡

遺跡内の大町二丁目2315番外に所在する。平成５年２月、住居併用共同住宅建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。２月22日と23日の両日、試掘調査を行ったところ、地表下30cmで中世遺構面の存在が確認され、事前調査の実施が不可避であると判明した。そこで調整のための協議に直ちに入る予定であったが、設計変更の可否についての検討も含めて事業者側が設計方針を確定する必要が生じたため、暫く中断せざるを得なかった。

５月20日に担当者との協議を再開し、設計変更がないことが確認されたため、事前調査実施を前提とした協議をすすめることとした。５月20日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、自己用住宅区域を対象として国庫補助事業調査を実施すべきとの副申を添えて県宛送付した。５月25日、担当者と調査実施方法を県の指導にもとづきながら協議し、土木工事及び作業員の派遣等の相当分の協力を事業者から受けた上で、国庫補助事業調査を行うこととした。そして５月27日に県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付され、続いて５月31日に事業者から調査実施依頼書が市教育長宛に提出されたのを受けて、発掘調査が実施されたのである。

調査は７月12日から９月６日にかけて行われて、14世紀代を中心とする建物遺構や井戸などが検出され、遺跡内に存する上行寺近辺の貴重な考古学データーが得られたのである。

5　材木座町屋遺跡

米町遺跡と同様に中世鎌倉の商業区域として知られる本遺跡は、滑川東側の砂丘及び湿地上に形成される広大な遺跡である。調査地点は遺跡地内の材木座二丁目217番６外に所在する。

平成５年４月、自己用住宅地造成に伴う開発行為に係わる事前相談があり、埋蔵文化財包蔵地であるので、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は５月25日～27日に実施され地表下40cmで数面に及ぶ中世遺構面を検出して、掘削深度計画が２ｍに達する道路整備区域を対象とする事前調査の実施が不可避であると判明した。このため６月３日、設計変更の可否を協議したが不可能であると確認されたので、県の指導にもとづき国庫補助事業調査の実施を前提に協議をすすめることとした。７月20日、文化財保護法第57条の２の届出が調査実施依頼書と共に提出され、続いて７月22日付けで、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付された。

以上の経過を経て、設計担当者と調査の開始に向けて諸準備を整えたが、事業者側の事由により開始時期が遅延し、９月10日から10月16日に至る調査期間となった。

調査によって13世紀末から14世紀代の方形竪穴建物遺構や、溝、土壙等の遺構が検出され、従来比較的調査例が希薄であった本遺跡北辺部の新たな考古学的資料が得られたのである。

6　長谷観音堂周辺遺跡

浄土宗海光山慈照院長谷寺は観音礼場坂東三十三箇所の第四位として本尊十一面観音への信仰が厚く、一年を通して参詣者で賑わう名刹である。当遺跡は長谷寺正面区域一帯を占め、調査地点は参道入口近くの長谷三丁目39番４外に所在する。同地点は平成４年度実施の調査（長谷三丁目41番イ地点）の東側に隣接する。

平成４年12月、自己用店舗併用住宅改築に係わる確認申請の事前相談があり、杭打工法により基礎工事を伴う計画であるので試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は平成５年１月20日～21日に実施され、地表下70cmで近世及び中世の遺構面が検出された。このため事前調査の実施は不可避と判断されたので、対処方法を協議することにしたが、事業者の事由により一時中断せざるを得なかった。そして平成５年７月協議を再開し、設計変更がないことが確認されたため県の指導にもとづき、国庫補助事業調査の実施を前提に協議を継続することとした。８月３日に設計担当者と実施方法等を打合せしたのに続いて、８月27日文化財保護法第57条の２の届出が提出された。９月２日付けで、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付され、その後施工担当者と９月16日現地において調査実施に際しての具体的細目について調整をすすめた。これを踏まえて９月20日付けで調査実施依頼書が市教育長宛提出され、更に細部の事項を整えた後、10月18日から12月28日にかけて調査を実施したものである。

調査により調査地は近世・近代の層位状況が極めて良好な状態で把握でき、北隣の調査成果と併

せて古代から近代にかけて繁栄する長谷寺門前にふさわしい新たな考古学的資料が得られたものと評される。

7　上杉氏憲邸跡

浄明寺犬懸ヶ谷は管領職を世襲する犬懸上杉氏の居館跡と伝わる。上杉氏憲（？～1417）は上杉禅秀の乱の主因者で、彼の死と共に犬懸上杉氏は滅亡する。調査地点は犬懸ヶ谷のほぼ中央部に位置する、浄明寺一丁目639番外に所在する。

平成５年３月、住居併用共同住宅建設に係わる開発申請の事前相談があり、設計内容に鑑みて文化財保護法にもとづく手続きが必要であり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は４月９日に実施され、地表下20cmで数面に及ぶ中世遺構面を検出し現計画の下では事前調査が不可避であると判明した。４月23日、設計変更の可否を協議したが不可能であると確認され、更に協議を続けることとしたが、事業者側の事由により暫く折衝を中断した。その後10月６日に協議を再開し、自己用住宅区域を対象とした国庫補助事業調査を実施すべきとの県の指導を得た上で、改めて事前調査の実施を前提に協議を開始した。10月13日の協議を経て、10月25日に文化財保護法第57条の２の届出が提出された。そして11月８日付で、県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付され、続いて11月11日調査実施依頼書が市教育長宛提出された。その上で調査に伴う土木工事等の詳細の調整をすすめた後、11月25日から30日にかけて国庫補助事業区域分の調査が実施されたのである。

調査によって15世紀代の建物跡や焼土面などが検出され、史実にふさわしい遺構の状況が確認できたものと評される。

8　由比ヶ浜南遺跡

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡の南側に広がる由比ヶ浜南遺跡は、海岸線の変動に因るものか、その様相に不明な要素が多い。調査地点は遺跡内の中央部からやや西寄りの長谷二丁目188番２外に所在する。

平成６年１月、自己用住居建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。１月19日～21日に試掘調査を行い、地表下90cmで中世及び古代遺構面の存在を確認した。このため建物本体については埋蔵文化財に対する影響がないものの、ＲＣ構造の擁壁設置区域に関して事前調査が必要と判断された。１月24日、事業者等と調査実施方法等について協議し、また文化財保護法第57条の２による届出書も同日付で提出された。そして２月７日付で県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付された。更に２月８日、調査実施依頼書が市教育長宛に提出されたのを受けて、２月17日から３月18日にかけて発掘調査が実施された

のである。

調査により14世紀代を中心とする方形竪穴建物遺構や土壙などが検出され、また８～10世紀代の住居跡も発見された。遺構面の標高数値は海抜約９ｍと高く砂丘高地上に形成されている。

9　若宮大路周辺遺跡群

若宮大路を中心とした広い範囲を占める当遺跡内の、由比が浜一丁目123番５外に所在する。

平成６年２月、自己用住居建設に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。同調査は２月22日～23日に実施され、地表下50cmで中世遺構面を検出し地下車庫区域を対象とした事前調査が必要と判断された。２月23日、直ちに文化財保護法第57条の２の届出が提出され、続いて２月28日付で県教育長名による調査実施を本旨とする通知書が事業者宛送付された。そして３月１日、調査実施依頼書が市教育宛提出されたのを受けて、３月10日から26日にかけて調査が実施されたのである。

調査によって13世紀後半から14世紀前半の年代に属する、方形竪穴建物跡などが検出された。

10　宇津宮辻子幕府跡

宇津宮辻子幕府の所在地とされる遺跡内の、小町二丁目389番１に位置する。小町大路に東面し「日蓮辻説法跡」と大路を挟んで向かい合う箇所である。

平成５年11月、自己用住宅建築に係わる確認申請の事前相談があり、試掘調査を実施のうえ協議をすすめることとした。12月９日～15日に試掘調査を行い、地表下60cmで数面に及ぶ中世遺構面の存在を確認した。このため平成６年１月13日、設計変更の可否も含めて担当者と協議したが杭打工法の変更がないため、県の指導にもとづき国庫補助事業調査の実施を前提に準備をすすめることで合意した。１月20日、文化財保護法第57条の２による届出書が提出され、続いて２月５日付けで県教育長名による調査実施を本旨とした通知書が事業者宛に送付された。そして３月22日に調査実施依頼書が市教育長宛に提出されたのを受けて、３月28日から発掘調査が開始されたのである。

本調査は７年度への継続調査であるが、宇津宮辻子幕府或いは小町大路に係わる新たな資料が得られるものと期待される。

平成5年度発掘調査地点一覧

（調査実施順）

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
1	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目 1880番6外	原田俊行	専用住宅	都市	80m²	5.5.3～5.5.24
2	笹目遺跡 (No.207)	笹目町 302番5	橋本弘	専用住宅	都市	200m²	5.6.1～5.9.8
3	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町三丁目 1217番1	今村広司	店舗併用住宅	都市	200m²	5.7.6～5.8.24
4	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目 2315番外	山本均	住居併用共同住宅	都市	100m²	5.7.12～5.9.6
5	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目 217番6外	山本和夫他	専用住宅に伴う道路整備	都市	80m²	5.9.10～5.10.16
6	長谷観音堂周辺遺跡 (No.296)	長谷三丁目 39番4外	石橋喜義	店舗併用住宅	都市	190m²	5.10.18～5.12.28
7	上杉氏憲邸跡 (No.258)	浄明寺一丁目 699番外	岡本弐	住居併用共同住宅	城館	30m²	5.11.25～5.11.30
8	由比ヶ浜南遺跡 (No.315)	長谷二丁目 188番2外	鈴木道子他	専用住宅	都市	60m²	6.2.17～6.3.18
9	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	由比が浜一丁目 123番5外	久保田雅彦	専用住宅	都市	40m²	6.3.10～6.3.26
10	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目 389番1	松木寛子	専用住宅	官衙	150m²	6.3.28～6.6.28

本書所収の平成4年度調査地点

（調査実施順）

No.	遺跡名	所在地	事業者	調査原因	種別	面積	調査期間
11①	公方屋敷跡 (No.268)	浄明寺三丁目 143番2	横塚ヒロ子	専用住宅	城館	200m²	4.1.6～4.4.9
12①	永福寺跡 (No.61)	二階堂字杉ヶ谷 520番1外	井出光二	専用住宅	寺院	1012m²	4.3.13～4.7.28
13①	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下三丁目 607番外	五十嵐 績	店舗併用住宅	官衙	140m²	4.6.9～4.8.25
14②	北条政村屋敷跡 (No.131)	常盤字殿入下 643番4外	高野礼二	専用住宅	城館	150m²	4.9.4～4.10.17
15②	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比が浜三丁目 1175番2外	小栗啓三郎	住居併用共同住宅・雨水槽	都市	90m²	4.9.10～4.10.28
16②	長谷観音堂周辺遺跡 (No.296)	長谷三丁目 41番イ	山上由美	自己用店舗	都市	100m²	4.9.25～4.10.26
17③	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町一丁目 325番イ外	秋月利子	住居併用共同住宅	都市	188m²	4.11.2～5.3.31
18②	妙本寺遺跡 (No.232)	大町一丁目 1146番	大松義典	専用住宅	社寺	25m²	4.12.15～4.12.22
19②	天神山下城 (No.358)	山崎字宮廻 708番1外	西山 清 他	住居併用共同住宅	城館	130m²	5.2.2～5.2.16
20②	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	扇ガ谷一丁目 74番9外	佐野洋之	自己用事務所併用住宅	都市	100m²	5.2.8～5.3.3
21②	笹目遺跡 (No.207)	笹目町 425番1外	近江和夫	専用住宅	都市	30m²	5.2.15～5.3.6

①……第1分冊
②……第2分冊
③……第3分冊

鎌倉市全図

1：50,000

平成5年度の緊急発掘調査地点（1～10）と
本書掲載の平成4年度調査地点（11～21）
＊遺跡名は一覧表参照

1．　公方屋敷跡（No.268）

浄明寺三丁目143番地２地点

例　言

1．　本報は、公方屋敷跡内の鎌倉市浄明寺三丁目143番2における緊急発掘調査の報告書である。

2．　発掘調査は、専用住宅建設範囲の200㎡を対象として、平成4年1月6日から4月9日にかけ鎌倉市教育委員会によって実施された。

3．　調査地点の土壌花粉化石の分析は、㈱パレオ・ラボ鈴木茂氏に依頼した。

4．　調査体制は下記の通りである。

担　当　者　松尾宣方

調　査　員　原　廣志　岩野裕充　渡部律子　山上玉恵

調査補助員　小西さつき　橋場君男　中村一夫　田代幸子
佐久間康一　岩崎卓治

調査協力者　河村四志男　渡辺鉄雄　寺平義夫　高橋作造
長島三男　斉藤政蔵　増田　保　御園生正民
松崎靖弘　岩間敏雄　成田初枝　池谷ツル

協力機関　㈳シルバー人材センター　鎌倉考古学研究所

現地調査・資料整理に際し、中田　英　服部実喜　手塚直樹　馬渕和雄　田代郁夫の諸氏に貴重なご教示と援助を賜った。記して謝意を表する。

5．　本報の執筆は原、橋場が分担し文末に名を記し、編集は原が行った。

6．　本報掲載写真は、遺構を原が、遺物を佐藤仁彦が撮影した。全景写真は木村美代治が撮影した。

7．　遺物実測・トレース・図版作成は、須佐直子　橋場君男　中村一夫の協力を受けた。

8．　本発掘調査の出土遺物等の資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本 文 目 次

例　言……2
目　次……3

第一章　調査地点の位置と歴史的環境……6

第二章　調査の概要……9
1．調査の経過と方法……9
2．土層堆積……11

第三章　検出された遺構と遺物……12
第1節　遺構……12
1．Ⅰ面……12
2．Ⅱ面……21
3．Ⅲ面……26
4．トレンチ調査……29
第2節　遺物……32
1．Ⅰ面……32
2．Ⅱ面……35
3．Ⅲ面……63
4．トレンチ調査……70

第四章　まとめ……77

〈附篇〉　公方屋敷跡の花粉化石
鈴木　茂……78

挿 図 目 次

図１　調査地点周辺の主な調査地旧跡……７
図２　調査地点位置図……８
図３　グリット配置図……９
図４　調査区南壁他土層堆積図……10
図５　Ⅰ面遺構全体図……折込……13・14
図６　井戸１……12
図７　Ⅱ面遺構全体図……折込……15・16
図８　建物１……折込……17・18
図９　建物２……折込……19・20
図10　建物２模式図……21
図11　建物３……22
図12　溝１（木組残存部分）……23
図13　溝１断面復元模式図……24
図14　道路及び溝１セクション図……25
図15　Ⅱ面下かわらけ溜り……26
図16　Ⅲ面遺構全体図……折込……27・28
図17　Ⅲ面下トレンチ配置図……29
図18　第１・２トレンチ……30
図19　Ⅰ面井戸１出土遺物……32
図20　Ⅰ面上出土遺物(1)……34
図21　Ⅰ面上出土遺物(2)……35
図22　Ⅱ面建物１出土遺物(1)……36
図23　Ⅱ面建物１出土遺物(2)……37
図24　Ⅱ面建物１出土遺物(3)……39
図25　Ⅱ面建物１出土遺物(4)……41
図26　Ⅱ面建物１出土遺物(5)……42
図27　Ⅱ面建物１出土遺物(6)……44
図28　Ⅱ面建物２出土遺物……46
図29　道路遺構出土遺物……47
図30　溝１出土遺物(1)上下層……48
図31　溝１出土遺物(2)下層……50
図32　Ⅱ面上出土遺物(1)……53
図33　Ⅱ面上出土遺物(2)……55
図34　Ⅱ面上出土遺物(3)……56
図35　Ⅱ面下かわらけ溜り出土遺物(1)……58
図36　Ⅱ面下かわらけ溜り出土遺物(2)……59
図37　Ⅱ面下出土遺物(1)……61
図38　Ⅱ面下出土遺物(2)……62
図39　Ⅲ面遺構出土遺物……64
図40　Ⅲ面溝２出土遺物(1)……65
図41　Ⅲ面溝２出土遺物(2)……66
図42　Ⅲ面上出土遺物(1)……68
図43　Ⅲ面上出土遺物(2)……70
図44　Ⅲ面下第１トレンチ出土遺物……70
図45　Ⅲ面下第２トレンチ出土遺物……71
図46　Ⅲ面下第２トレンチ
　　かわらけ溜り出土遺物(1)……73
図47　Ⅲ面下第２トレンチ
　　かわらけ溜り出土遺物(2)……74

図 版 目 次

図版１－１．調査地点全景（西から）　２．公方屋敷跡を望む（本調査地点より東方）……93
図版２－１．Ⅰ面全景（西から）　２．Ⅱ面全景（西から）……94
図版３－１．Ⅱ面建物１（西から）　２．Ⅱ面溝１（西から）……95
３．Ⅱ面下かわらけ溜り全景（東から）
４．Ⅱ面下かわらけ溜り西部（南から）
図版４－１．Ⅲ面全景（西から）　２．Ⅲ面下第１トレンチ（南から）……96
３．第１トレンチ　東壁セクション
図版５－１．Ⅲ面下第２トレンチ（北から）……97
２．第１トレンチ　西壁セクション
図版６－１．Ⅱ面建物２　Ｐ７　２．Ⅱ面溝１　木器椀……98
３．Ⅱ面建物１　下駄・かわらけ等
４．Ⅱ面建物１　銭・かわらけ
５．Ⅱ面建物１　漆器皿　６．Ⅲ面溝２　漆器椀
図版７－１．建物１出土遺物　青磁碗　瀬戸天目茶碗・小型壷・卸皿・灰釉水注……99
四耳壷・山茶碗窯系捏鉢・手焙り
図版８－１．Ⅱ面溝１出土遺物　青磁鉢　白磁碗・皿　褐釉鉢　瀬戸皿・瓶子・卸皿……100
魚住捏鉢・漆付かわらけ・骨製笄
２．Ⅲ面溝２出土遺物　青磁碗　黄釉盤　かわらけ
図版９－１．Ⅱ面下かわらけ溜り出土遺物……101
２．燈明皿
図版10－１．Ⅲ面下第２トレンチかわらけ溜り出土遺物……102
２．Ⅱ面下出土墨書かわらけ
３．Ⅰ面上出土遺物　瀬戸灰釉皿・香炉
４．Ⅲ面上出土遺物　長斧

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

「鎌倉城」とも呼ばれる天然の要害、馬蹄形の山塊に囲まれた鎌倉旧市街は、由比ケ浜から市街中心を鶴岡八幡宮に向かって縦貫する若宮大路があり、鶴岡八幡宮社頭で東西に走る横大路に突きあたる。横大路を東に進むと、かつて六浦路と言われていた県道金沢・鎌倉線となり、蛇行する滑川と併行しながら朝比奈峠へ続いていく。この六浦路沿いには奈良・平安時代の創建という荏柄天神や杉本寺などがあり、武蔵国久良木郡（現横浜市金沢・磯子方面）へ至る街道として栄えていたようである。本遺跡は六浦街道沿い、鎌倉市街地の北東部浄明寺地区に所在し、鎌倉五山第五位臨済宗浄妙寺の東方に位置しており、古来から「公方屋敷」、「御所ノ内」などの地名で呼称されていた地である。この地は、北は大蔵山の丘陵が杉本寺背後にある杉本城から西に張り出してきており、南は衣張山丘陵の北端がある。南側丘陵の山裾を東から西に向かって滑川が流れている。

本遺跡の西方には臨済宗功臣山報国建忠禅寺が今なお法燈を保ち、東には源実朝の創建した大慈寺や四代将軍藤原頼経の御願寺の五大堂明王院の旧蹟が知られる。西側には滑川に架かる青砥橋を挟んで青砥藤綱邸跡が構えられていたと伝える谷戸が北向きに開口している。南側の西寄りには六浦路を挟んで稲荷小路遺跡がある。昭和56年に発掘調査（２地点）が行われ、六浦路の側溝と覚しき溝や武家屋敷等の遺構・遺物が確認されている。浄妙寺旧境内に当たる地域の発掘調査は二ケ所で実施されているが、昭和59年の発掘調査（３地点）では建物跡や井戸、土壙が発見されている。平成元年の発掘調査（４地点）では、道路状遺構や四時期以上の溝等の遺構が検出されており、これらの遺構群は浄妙寺の塔頭各庵の一部であると考えられた。

本遺跡の谷戸一帯は足利公方屋敷跡と伝えられているが、今は家屋が建ち並びその面影は見られない。土地の人はこの辺を「お屋敷」と呼んでおり「いつか公方様がここに帰ってくる」と代々言い伝えられた場所である。調査地点の東側に空閑地があり、現在でも家屋が建っておらず水田地として残されている。

足利公方屋敷に関して、『鎌倉志』や『新編相模国風土記稿』には足利尊氏が住んでいた屋敷とだけ記されている。しかし『鎌倉欖勝考』では『吾妻鏡』を引用して、この土地が旧は大江広元の領地であったが、宝治元年（1247）に興った「三浦の乱」の際、広元の子西阿が三浦方に組みして没収され、その後この地は足利義氏（道号足利左馬入道正義）の領地となったという。これについて『鎌倉市史　総説編』では義氏の大蔵稲荷下の邸とあるのはここであろうと指摘している。

『梅松論』には元弘三年（1333）五月、千寿王が鎌倉大蔵谷の邸を落ちたとあるのもこの屋敷であったという。さらに足利基氏がこの邸宅に住んだのに始まり、観応年間頃に関八州の主になって、氏満・満兼・持氏・成氏らによって引き継がれたようである。康正元年（1445）鎌倉を落ちて下総国古河へ移り住むのであるが、『鎌倉市史　総説編』には「元弘の乱」の際、尊氏が後醍醐天皇に味

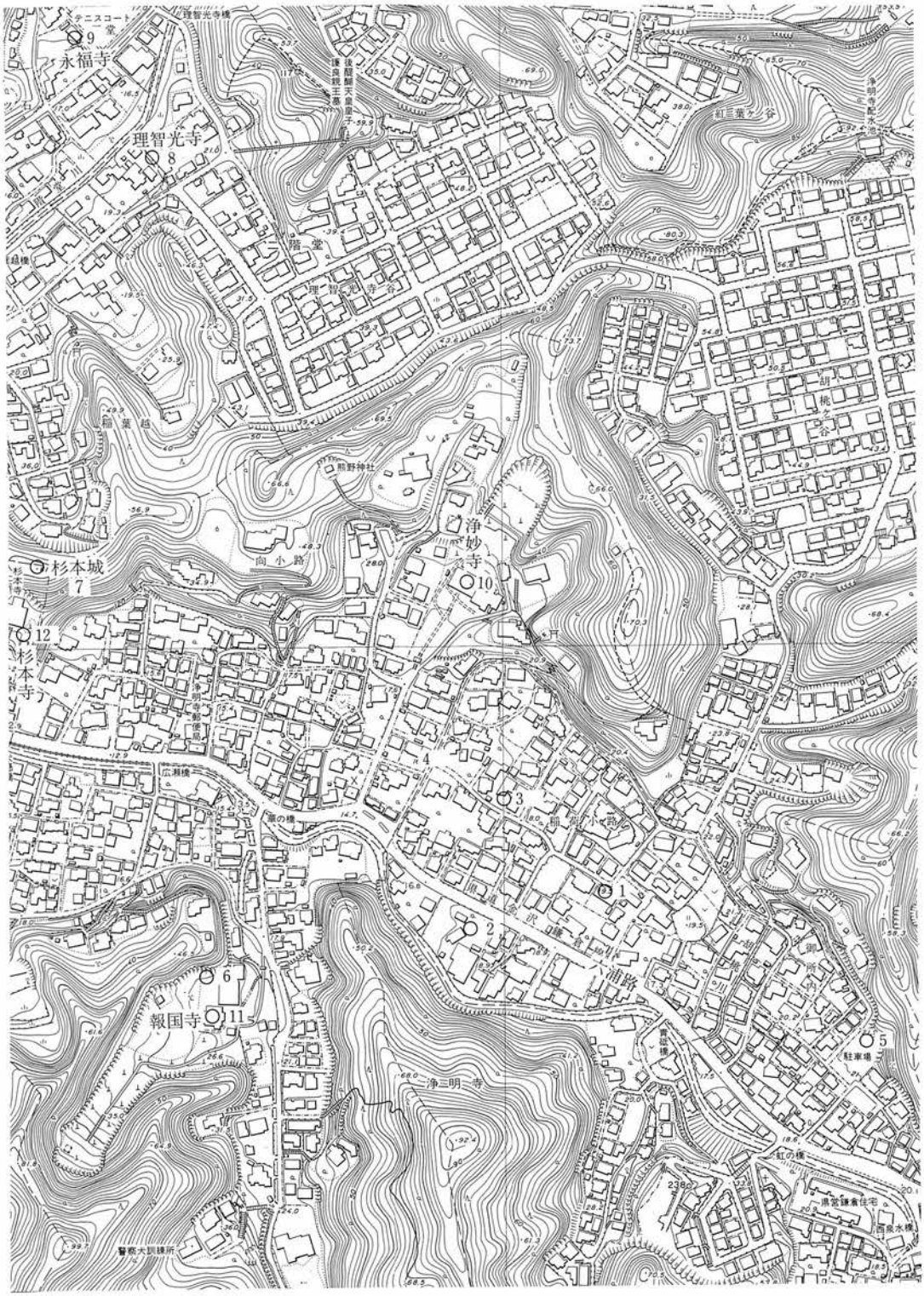


図１　調査地点周辺の主な調査地旧跡

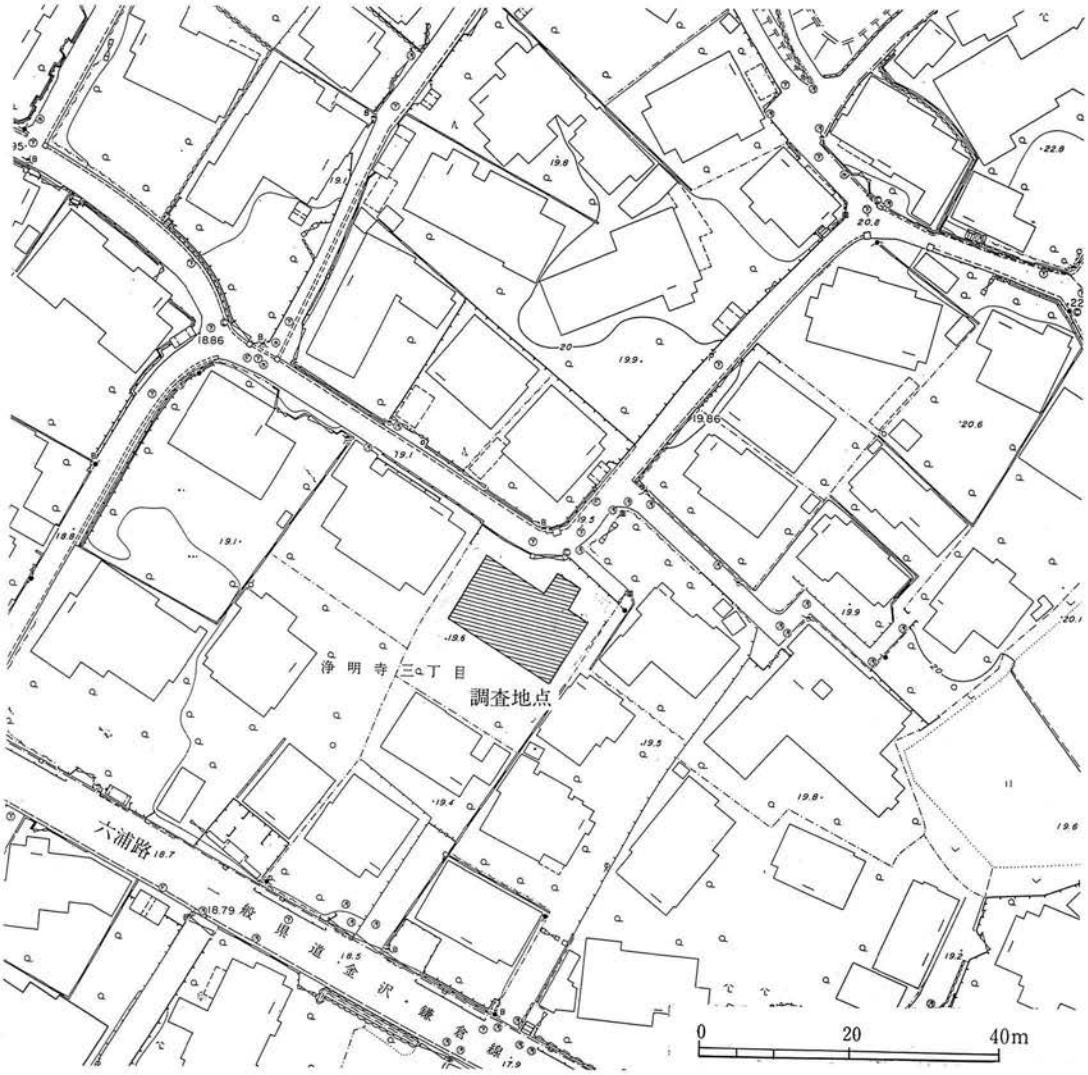


図 2　調査地点位置図

方し北条氏によって屋敷が取り潰されたが、その後足利氏の勢力が確立し、基氏はこの所謂公方屋敷の地に居を構えたであろうと指摘している。

調査地点周辺の主な調査地・旧跡

1．本調査地点（浄明寺稲荷小路143番２）
2．浄明寺稲荷小路遺跡
3．浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺稲荷小路129番２）
4．浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺向小路90番１）
5．公方屋敷跡内やぐら
6．報国寺境内やぐら
7．杉本城跡
8．理智光寺跡
9．永福寺跡
10．浄妙寺
11．報国寺
12．杉本寺

※番号は図１の地点

第二章　調査の概要

1．調査の経過と方法

本調査は、公方屋敷跡（鎌倉市№268）の遺跡地の一角に位置した鎌倉市浄明寺三丁目143番２に所在する専用住宅建設用地の内、建築申請に係わる区域約200㎡を対象にして実施された緊急発掘調査である。本調査に先立ち、鎌倉市教育委員会文化財保護課は公方屋敷跡地内に所在する申請地において事前の埋蔵文化財確認調査を行い、濃密な中世に属する遺構・遺物が発見され発掘調査による埋蔵文化財の記録保存が必要であると認められた。これを受けて、文化財保護課と建築施主との協議の結果、今回の発掘調査を実施するはこびとなった。

現地調査は平成４年１月６日から開始された。文化財保護課が行った確認調査の結果によれば、

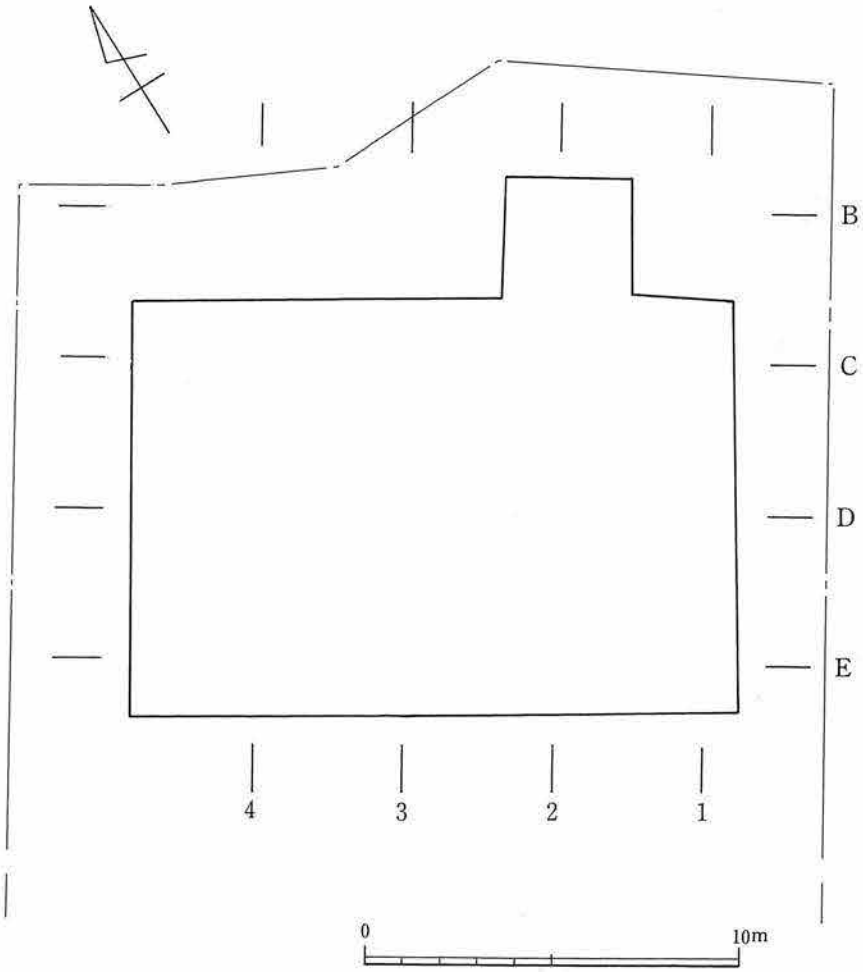
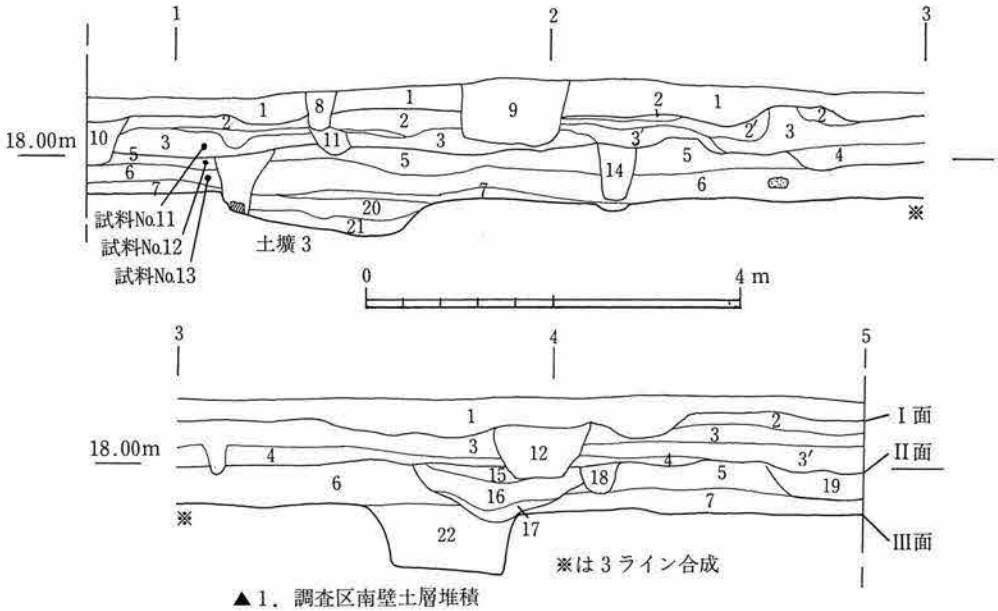
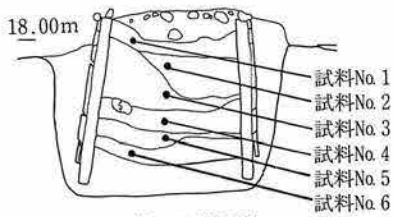


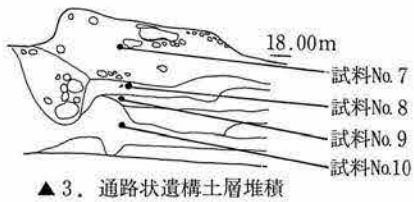
図３　グリット配置図



▲1．調査区南壁土層堆積



▲2．溝1土層堆積



▲3．通路状遺構土層堆積

図4　調査区南壁土層堆積図

1．調査区南壁土層堆積

1．暗茶褐色砂質土：拳大土丹塊・遺物・炭化物を少量含み、締り弱い。
2．茶褐色粘質土：土丹細片を多量に含み、締り強い。I面構築地業層。
3．暗茶褐色砂質土：頭大土丹塊を少量、遺物・炭化物を多量に含み、締り弱い。
4．黒褐色砂質土：炭化物を多量に含む。締り弱い。
5．暗黄褐色砂質土：土丹細片・貝砂を多量に含み、締り強い。
6．暗黄褐色砂質土：拳大土丹塊・砂粒を多量に含み、締り強い。5・6層はII面構築地業層。
7．暗褐色砂質土：貝砂・炭化物・土丹粒を多量に含み、締りやや有り。
8．茶褐色砂質土：炭化物・土丹粒少量含む。締り弱い。
9．暗褐色砂質土：拳大土丹塊・を炭化物多量に含み、締り弱い。
10．茶褐色砂質土：土丹細片を多量、炭化物を少量含む。
11．茶褐色砂質土：土丹細片を少量含む。締り弱い。
12．暗茶褐色砂質土：土丹粒・炭化物を少量含む。
13．暗黄褐色砂質土：土丹細片を多量、炭化物を少量に含む。締り強い。
14．黄褐色砂質土：土丹細片を多量に含む。締り強い。
15．黒褐色砂質土：炭化物を多量に含む。
16．暗褐色粘質土：土丹細片・貝砂を含み、締り強い。
17．茶褐色粘質土：有機物腐蝕土。15～17層は土壙覆土。
18．暗褐色砂質土：土丹粒・炭化物を多量に含む。締り少し有る。
19．暗褐色砂質土：土丹細片・貝砂を多量に含み、締り強い。
20．茶褐色砂質土：貝砂を多量に含み、締り弱い。
21．暗褐色粘質土：貝砂を少量、炭化物がやや多く、締り強い。
22．暗褐色砂質土：土丹細片・貝砂を多量、炭化物・遺物やや多く含む。

3．路地状遺構下土層堆積

1．暗黄褐色砂質土：大小破砕土丹・貝砂を多量に含み、締り強い。路地構築地業層。
2．暗茶褐色砂質土：土丹粒・貝砂を多量に含む。路地遺構の基盤層か。
3．茶褐色粘質土：土壌化の進んだ有機物腐蝕土。
4．茶褐色粘質土：有機物腐蝕土。土丹粒を少量含む。
5．茶褐色粘質土：有機物腐蝕土。締り弱い。
6．暗茶褐色砂質土：土丹粒・貝砂を多量に含む。やや締り有り。
7．暗黄褐色砂質土：土丹細片・貝砂を多量に含む。締り非常に強い。破砕土丹の地業層。
8．暗茶褐色粘質土：土丹粒・貝砂を少量含む。締り弱い。

※　溝1土層堆積については、図14を参照されたい。

地表下およそ70～100cmある破砕土丹地業層の直上まで、ほぼ全面に近・現代の客土層や旧水田耕土が認められるという。そこで現地調査に当たっては、最近の客土や水田耕土が堆積する深さ約70cmまで重機を導入して取り除くことから始められた。水田耕土以下は人力によって掘り下げを行うと、調査区のほぼ全域に破砕土丹を突き固めて整地した地業面が認められ、これをⅠ面とした。Ⅰ面では井戸や切石積列、道路などの遺構を検出したが、後世の削平がかなりの範囲で深くまで及んでいることが判明し、図面・写真等の記録保存を行った後、引き続き以下の遺構確認するため掘り下げ調査を行った。調査の結果、三時期以上の生活面を検出した。各生活面で検出した遺構には、Ⅱ面で建物跡や道路とそれに伴う側溝、Ⅲ面で道路と大溝、その他に土壙・かわらけ溜りなども認められた。調査地が谷戸の開口部にあたり、調査期間中は常に湧水に悩まされながらの調査ではあったが、同年4月9日までの間に必要な記録を取り無事終了した。

調査に当たっては、便宜上瑞泉寺側を北と呼び、敷地に北面した道路両縁石の芯々2点を基準に東西軸線を設定し、調査区外北東にこの軸線上の任意の一点を設けて、この点から東西と南北の両方向に4m間隔の方眼を組み、南北軸に算用数字、東西軸にアルファベットを付した。南北軸は正方位とは一致しておらず、軸方位N—32°—Eである。各々の方眼区画の名称は、その北東隅の杭番号をもって呼称する。

2．土層堆積

調査区はシートパイルに囲まれていたので、土層堆積状態の観察には調査区南壁と、北側張出部の東壁にそれぞれセクションベルトを残し観察を行なった（図4・14)。現地表下70～100cmまでは客土や水田耕土が厚く堆積し、これを除去すると大小土丹塊・炭化物・かわらけ片等を含んだ厚さ30～40cmの中世包含層が現われる。包含層を排除すると茶褐色粘質土上面に達する。これをⅠ面と称する。Ⅰ面は破砕土丹の版築による整地層で、短期間に幾度も再地業されたらしく層状を呈している。上面には部分的に貝砂や炭化物が認められた。Ⅰ面下には暗茶褐色砂質土で炭化物、かわらけ片等を多量に含んだ遺物包含層の堆積が見られ、更に掘り下げていくと細かく破砕した土丹を主体とした整地層が表出し、これをⅡ面とした。Ⅱ面は厚さ35～45cmの二層から構築された堅牢な地業層で下部はやや大きめの破砕土丹を根固めに、上部は緻密に突固められており、上面には炭層が確認された。特に調査区西側で厚く覆われていた。Ⅱ面の下には締りの強い暗褐色粘質土が認められ、明瞭な土丹地業層は見られなかった。従って、この粘質土層の上面をⅢ面として遺構検出を行った。Ⅲ面の深さですでにシートパイルの強度の問題が出てきたので、Ⅲ面以下はトレンチを入れて下方を探査した。幾度にも及ぶ流水で運ばれた粘土質で締りの強い灰褐色や暗褐色等の自然堆積土層が薄い砂層に挟まれる形で厚く堆積していた。第1トレンチではサブトレンチを入れ、さらに掘り下げたところ標高16.40m程で砂層が検出された。

第三章　検出された遺構と遺物

第１節　遺構

１．Ｉ面

Ｉ面は標高18.40～18.50ｍで確認されたが、調査区の中央から南東側では、近・現代の大規模な撹乱壙がかなりの深さにまで及んで土丹地業面が削平を受けていて、面上も荒れた様子が観察された。遺構は、切石列３列・土壙４基・井戸１基・道路状遺構などが検出されたが、建物跡や柱穴等が殆ど見られずあまり活発な生活を思わせる状況は認められない。面上には中世期の遺物包含層が堆積していた。遺物の項でＩ面上出土遺物（図20・21）としたものは同層中から出土している。

ａ．道路状遺構と切石列（図５・14）

道路は調査区北東側の張出部で検出した。破砕土丹が叩き占められて非常に硬く、面上には砂と貝殻粒を混ぜたものが敷かれた状態で全面に広がっており、道路面は北壁から南にかけて微少な傾斜で下がっている。南側の路肩に当たる部分には、凝灰質砂岩（鎌倉石）切石が縁石状に縦列で置かれていた(切石列１)。さらに同質の石材で切石列１と平行してＣ軸に添うように検出されたのが切石列２である。切石列１・２の位置や方向・幅はII面以降では、道路の側溝の両肩として検出されており、遺存状態は良くないが石積みの溝で合った可能性が強い。東西軸方位はＮ―32°―Ｅである。切石列３は、II面では切石積列として検出されるが、Ｉ面ではすでにその形態を留めていない。

ｂ．井戸１（図５・６）

Ｅ―３グリット杭北に接する形で検出された。平面形は一辺1.2ｍ程の隅丸方形プランを呈し、壁は下位に弱い段をもち底面に近づくに従い窄まり、底面は円形を呈し径50㎝余り標高が16.10ｍで砂層となっている。井戸枠の痕跡は見られず素掘りの井戸と考えられる。調査中でも一晩で肩一杯まで水が溜り、水量はかなり豊富である。

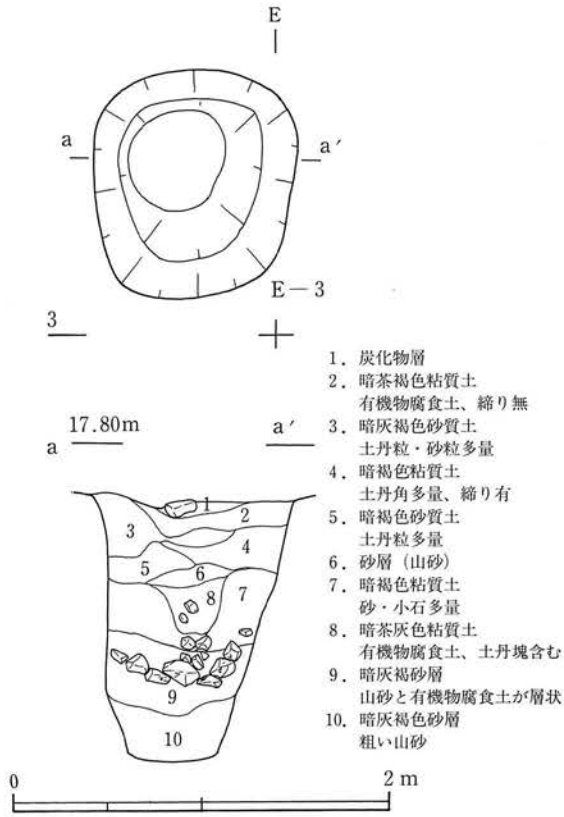


図６　井戸１

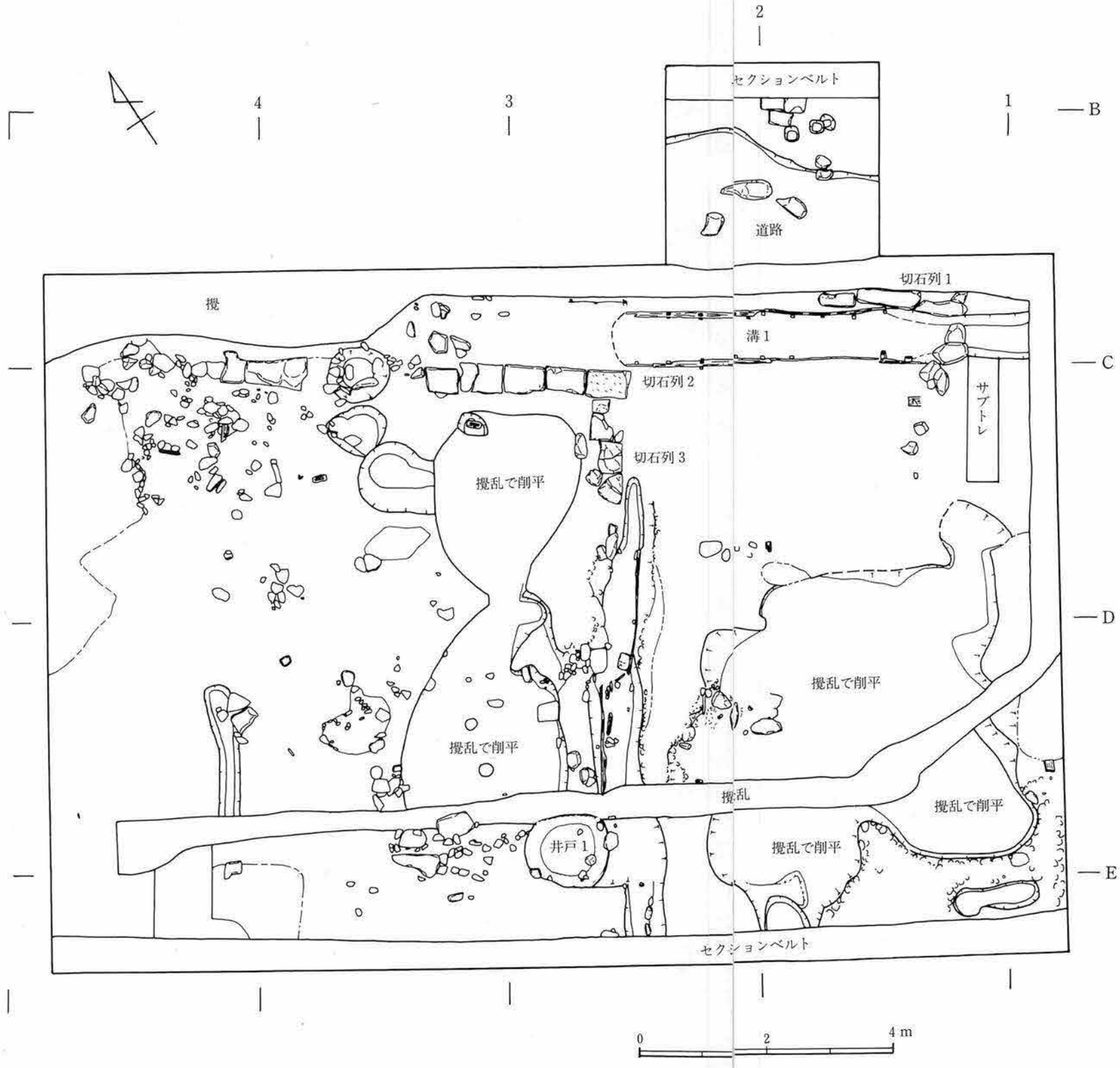

2
4
3
1
B
C
D
E
セクションベルト
道路
切石列 1
溝 1
撹
切石列 2
切石列 3
サブトレ
撹乱で削平
撹乱で削平
撹乱で削平
撹乱
撹乱で削平
撹乱で削平
井戸 1
セクションベルト
0
2
4 m

図 5　Ⅰ面遺構全体図

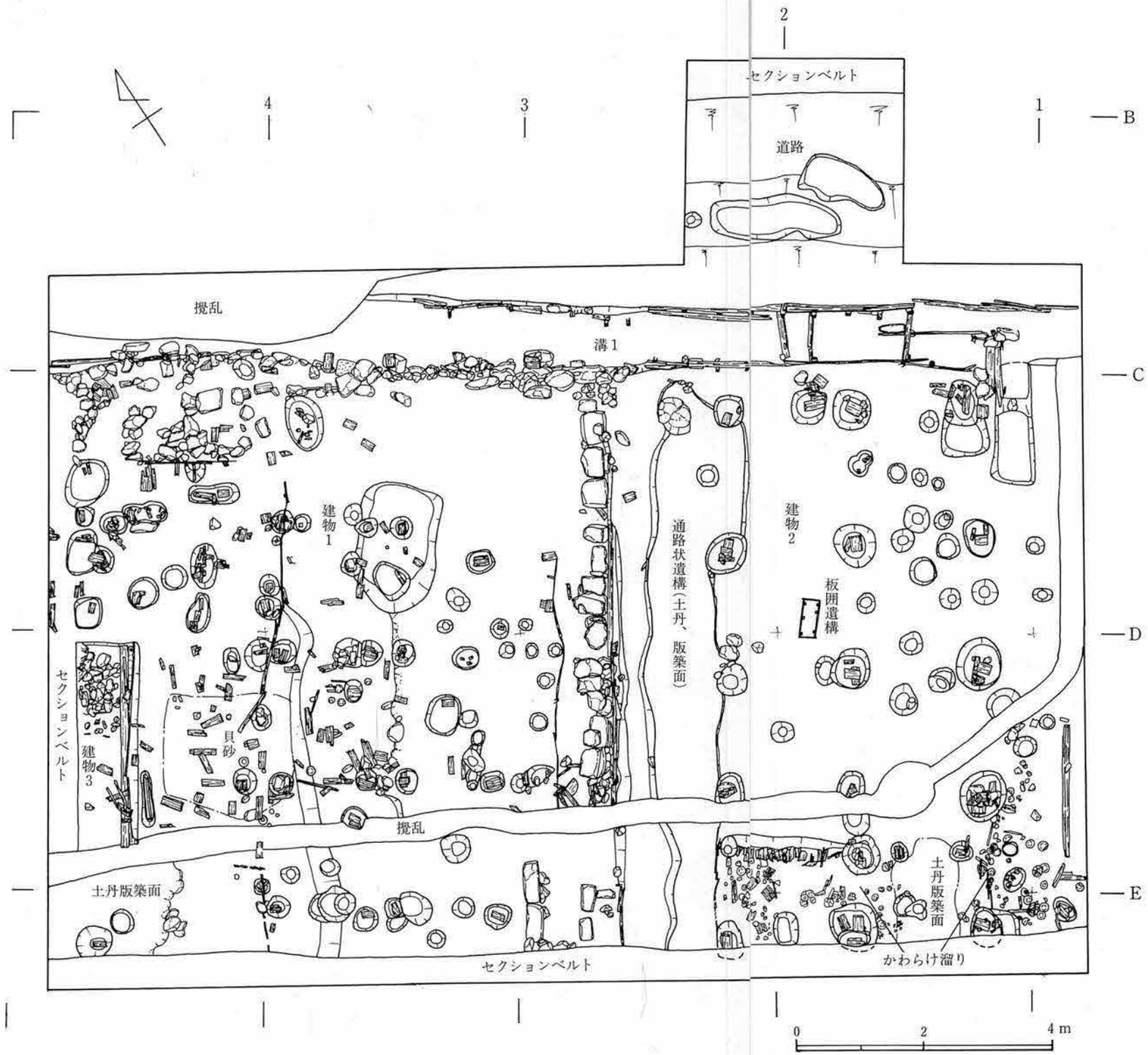

2
1
4
3
B
C
D
E
セクションベルト
道路
撹乱
溝1
建物1
通路状遺構（土丹、版築面）
建物2
板囲遺構
セクションベルト
建物3
貝砂
撹乱
土丹版築面
土丹版築面
かわらけ溜り
セクションベルト
0
2
4 m

図7　II面遺構全体図

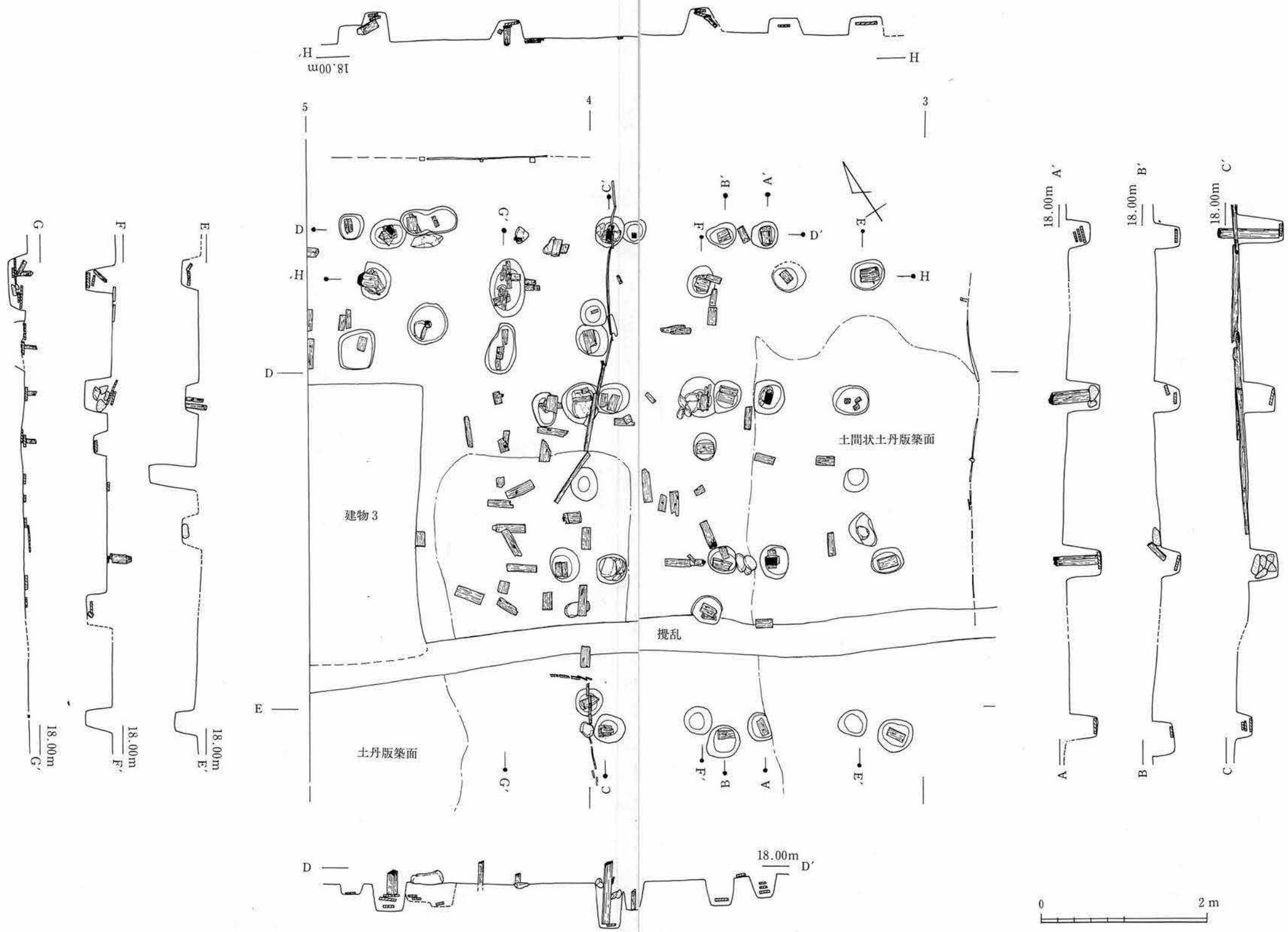


図8　建物1

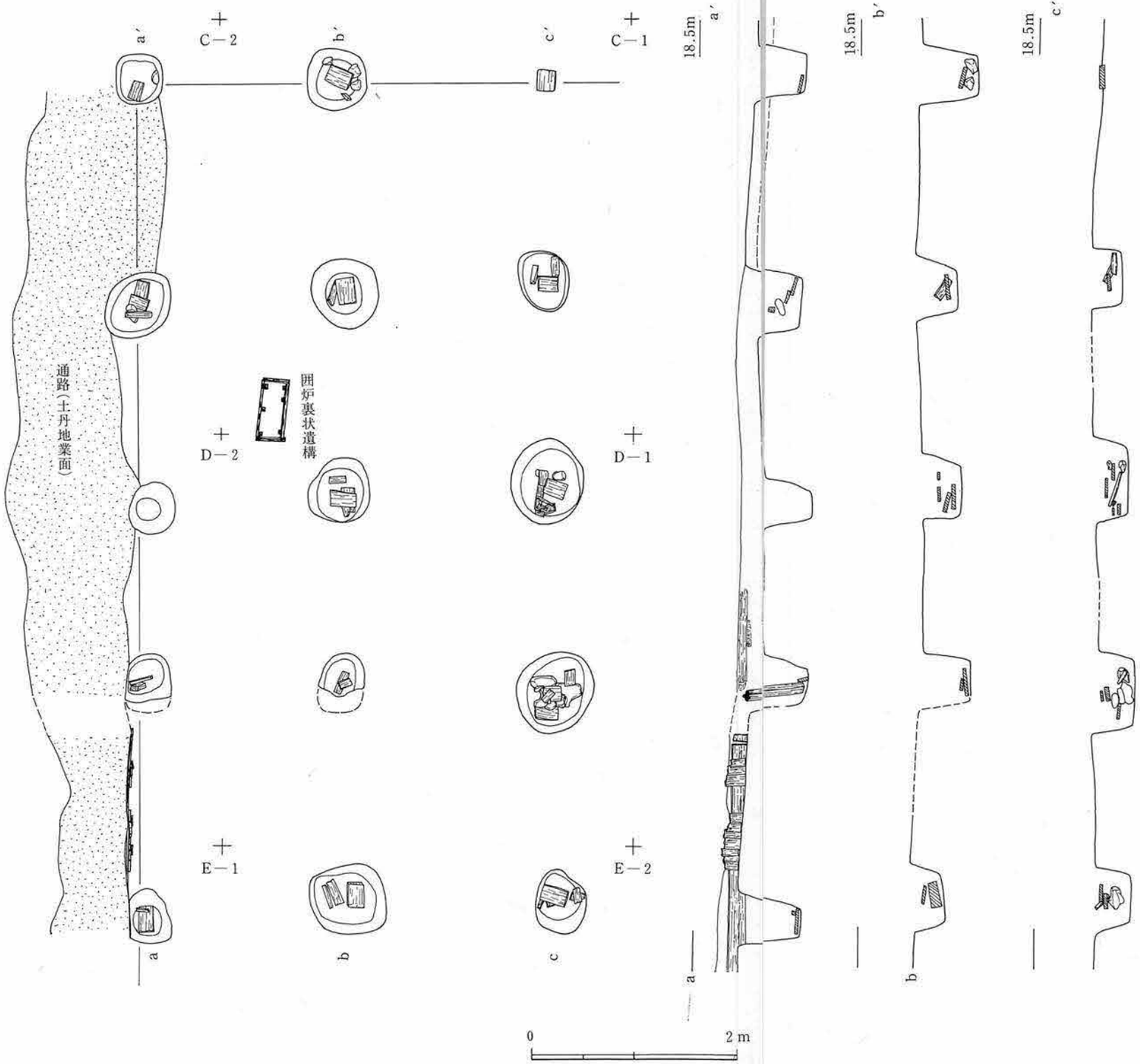

a′
C−2
b′
c′
C−1
18.5m
a′
18.5m
b′
18.5m
c′
通路（土丹地業面）
囲炉裏状遺構
D−2
D−1
E−1
E−2
a
b
c
a
b
0
2 m

図 9　建物 2

2．II面

II面は標高17.90～18.20mで確認された。Ⅰ面よりそれほどの厚い包含層もなくII面が表出したが、Ⅰ面に比べて礎板を有する建物や柱穴、ピット・土壙などが多く検出され、遺構の密度が高く遺存状態は良好なものとなる。面上には厚い薄いの差はあるものの、ほぼ全域に亙って炭化物が確認されておりこの面を検出する際、一連の面として捕らえられた目安にもなった。検出された遺構は、Ⅰ面ですでに現れていた道路とそれに伴う側溝・切石積列（切石列３）の他に、建物３棟・土壙４基・板囲遺構１基・柱穴50口等が発見され、それに伴なう遺物も増大して生活の匂いの強い、地割り的な区画をもつ空間であったことが感じとれる。調査区北側の東西に走る道路と側溝、中央には側溝南肩に取りつくような直行した南北位の通路状の路面があり、この通路を挟んで東西にはそれぞれ建物が配置されている。II面下かわらけ溜りは建物２の整地層直下から検出された。

a．建物（図７～11）

建物１

通路西側、C～E－３・４グリッドで検出した。建物形態は板壁を持つ掘立柱建物址であるが、構造的に全体形が把めないため判然としない部分が多い。柱穴列配置（エレベーションH～H′以下　H列）から２棟が重複している可能性もある。確認規模は東西6.7m・南北6.0m以上を測る。柱間寸法はA～C列が南北３間以上で各間芯々198cm、D列が柱穴５口で東から50cm、106cm、30cm、265cmで１・２穴間に礎板、３・４穴間に礎石を置く（３穴からの距離106cm、106cm）、H列が柱穴５口で東から100cm、100cm、231cm、160cmで２・３穴間中央に礎板を置く。C列北側には部屋割りを示す壁板材が残る。G列は北側に柱穴２口があるだけで南側は細かい間隔で礎板が置かれている。礎板上に細い角材の床束柱が見られた。A～E列柱穴の中には頂部が焼けた角柱根が認められた。建物東部には細かい破砕土丹による版築面に貝砂を撒いた土間状の広がりが検出された。

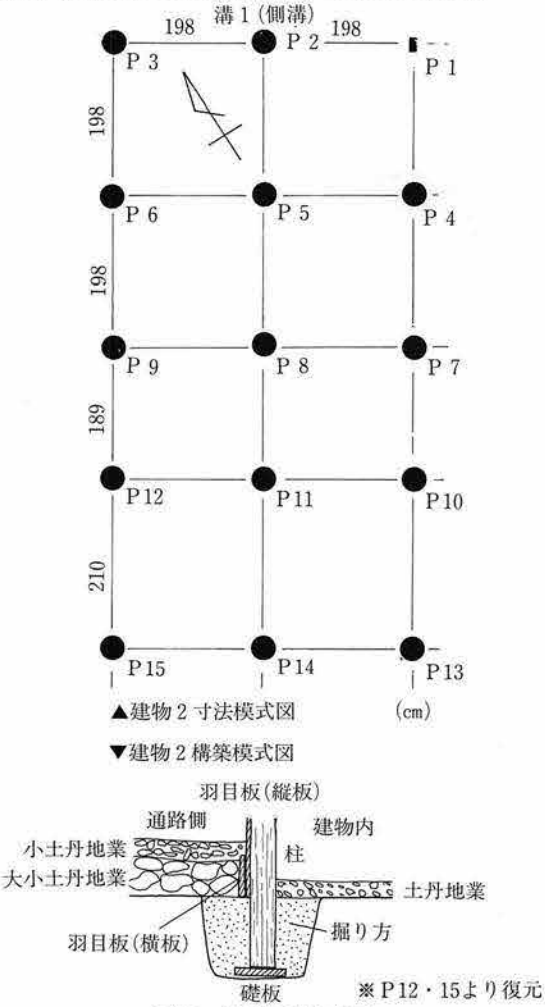


図10　建物２模式図

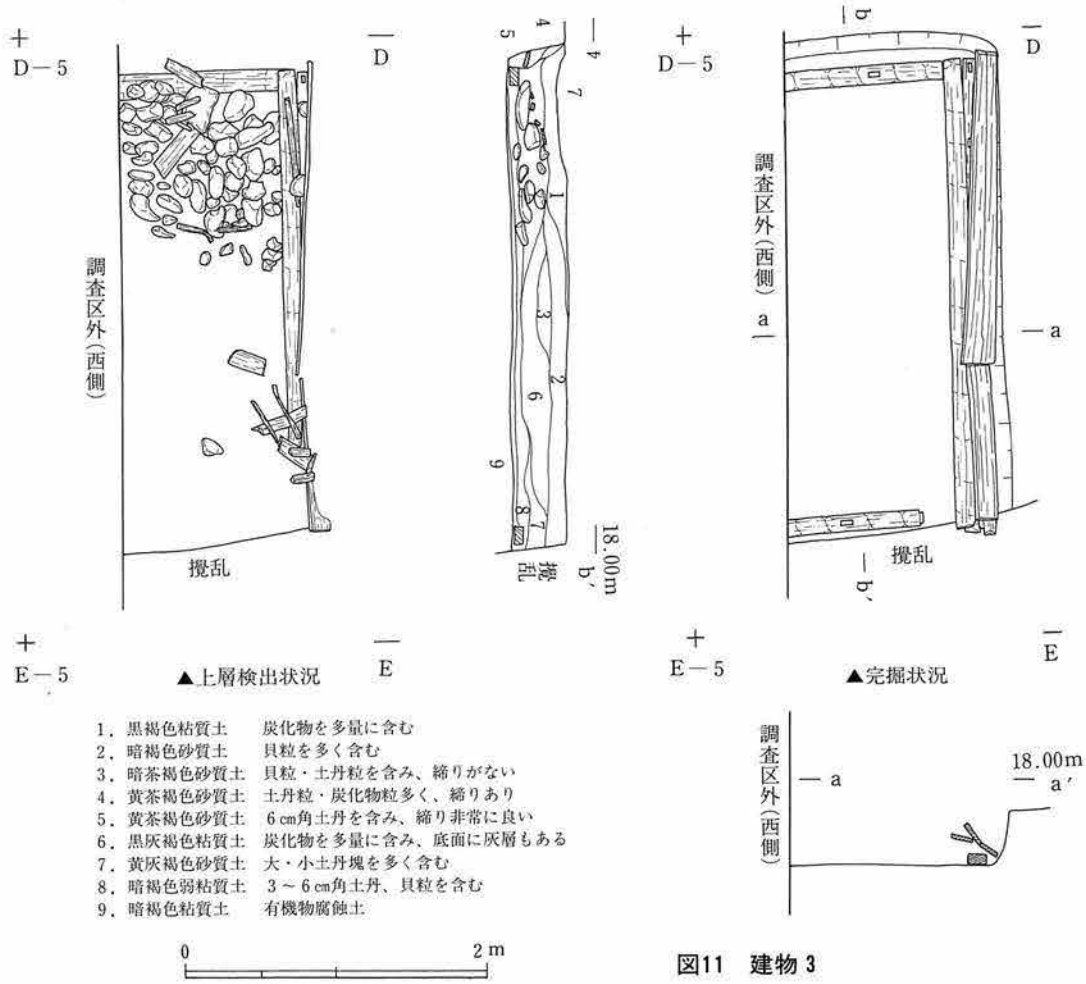
建物２

通路東側、溝１（側溝）南肩に面して検出した板壁を残す掘立柱建物跡、現状で南北４間×東西２間以上である。さらに南・東の調査区外へ延びる可能性もある。規模は南北795cm、東西399cm以上であり、柱間寸法は南北が北から198cm・198cm・189cm・210cm、東西が198cm・198cmを測る。東西列方位はＮ－33°－Ｅである。柱掘り方は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、直径50～75cmとかなり大きく、深さは検出面より40～60cm程で、標高は17.40～17.70mである。検出した柱穴の内Ｐ９以外には底面に１～４枚の礎板や礎石が遺存している。Ｐ12には頂部が幅９cm×5.5cmの炭化した角柱根が残るが、Ｐ１は礎板だけで掘り方を検出できなかった。Ｐ12～15間で一部遺存していた板壁の羽目板や建物１の床束柱にも焼けた痕跡が認められた。さらに面上を覆っていた炭化物層は、この時期に火災が起きて建物が焼失した状況が窺える。

Ｐ５・８間西側で長方形に板囲した遺構を検出した。大きさは南北60cm、東西36cm、高さ21cm程で内部に板を支える杭が東・西辺に３本づつみられ、鉢形手焙り（図28－27）も出土している。

建物３

調査区南西部Ｄ－４グリッド、建物１を壊して建てられた方形竪穴建築址である。西側は調査区



1．黒褐色粘質土　炭化物を多量に含む
2．暗褐色砂質土　貝粒を多く含む
3．暗茶褐色砂質土　貝粒・土丹粒を含み、締りがない
4．黄茶褐色砂質土　土丹粒・炭化物粒多く、締りあり
5．黄茶褐色砂質土　6cm角土丹を含み、締り非常に良い
6．黒灰褐色粘質土　炭化物を多量に含み、底面に灰層もある
7．黄灰褐色砂質土　大・小土丹塊を多く含む
8．暗褐色弱粘質土　3～6cm角土丹、貝粒を含む
9．暗褐色粘質土　有機物腐蝕土

0　2m

図11　建物３

外に延びるため東西長は不明である。東辺土台の軸方位は建物２・３南北列と同一方向を示す。現

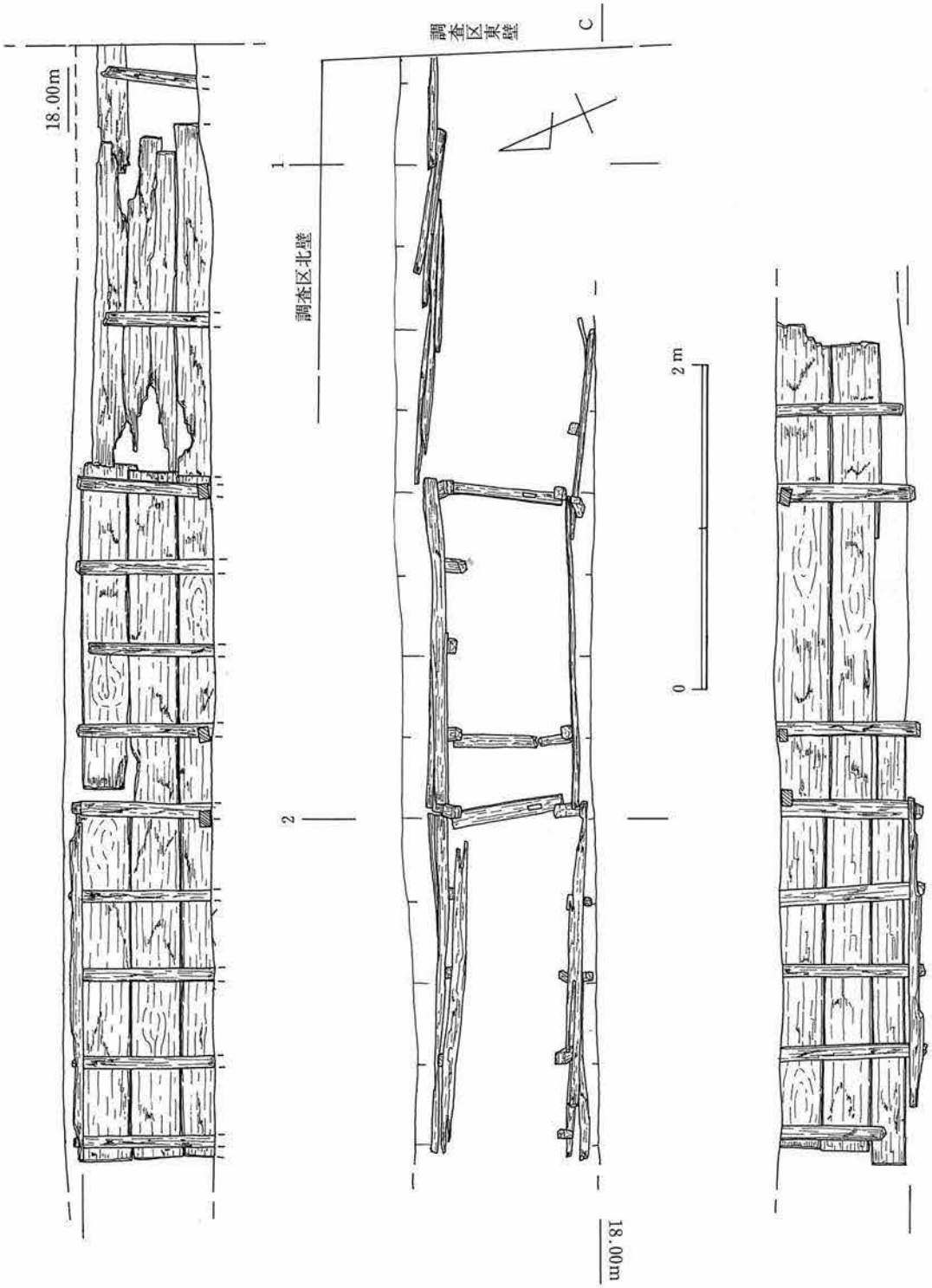


図12　溝１（木組残存部分）

状での規模は、南・北土台のホゾ穴芯々で南北296cm、東西130cm以上、掘り方は南北350cm程、東西150cm以上の長方形を呈すると思われる。土台材は厚さ7.5cm、幅13cm、長さ東辺が306cmで両隅はホゾ組で固定する。東辺土台には50cm間隔で間柱のホゾ穴を切っており、壁を構成する横板も遺存していた。しかし覆土中からは土丹塊・木片を除いて良好な遺物は発見されなかった。

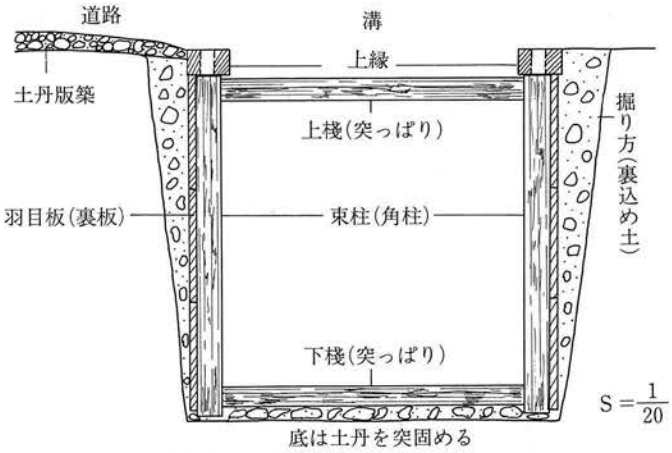


図13　溝１断面復元模式図

ｂ．道路及び溝１（図12～14）

Ⅰ面道路の土丹版築と貝砂層を剝ぐと、その下に大小土丹塊の多く含んだⅠ面道路構築時の荒基礎が20～30cmの厚さであり、さらに木片・貝殻粒が混じる有機物腐蝕土を取り除くと、貝粒混じりの破砕土丹版築地業によるⅡ面道路が表われた。位置と幅はⅠ面時と変わらず東西に走る。道路面レベルは横断面でみると北から南へ低くなり、調査区北壁と溝肩まで18cmの比高差が認められ、道路の中央がやや高くなって、配水を考慮した造作の路面である。道路幅員は南溝肩から調査区北壁まで４ｍあり、さらに調査区外に延びている。標高は北端18.35m、溝肩18.10mで、方位はＮ－32°－Ｅである。道路を覆う砂質土は、海砂を主成分とし、貝殻粒を多量に含むものであった。海砂はⅠ面道路でもそうであったが、道路における砂と貝殻を含む砂質土は道路面の積み足しや道路作り下地と同時にその補修・維持（例えば、路面が凸凹に荒れたりした時）に貝砂が利用されていたようである。道路面の二ケ所に浅い凹みが認められたが、覆土は非常に締まりの良い貝砂で、道路補修のために入れられたものであろう。

溝１

道路検出に伴って、道路の南側に溝が確認された。この側溝はⅠ面において遺存状態が悪く明確なプラン検出が行えず、可能性を指摘しただけに留めておいた切石列１・２間を掘り上げたものである。溝１は東半部が木組みの構造であるが、西半部は土丹塊や鎌倉石塊の乱石積みで溝壁を構築している。標高は東端が17.05m、西端が16.90mで東から西に向かって緩やかな傾斜を示している。木組み部分の溝は、幅90cm、深さ90cm程である。掘り方は断面が箱形を呈し、木組みで強固な構造を持つ。溝上部には余り良好な状態ではないが、ホゾ穴を切った縁木が束柱を受ける。束柱は羽目横板を押さえる形で50cm間隔と細かく建てられており、北辺と南辺の束柱がそれぞれ向かい合わせで、対応した位置に配されている。溝内には内側への倒壊を防ぐ為に突っぱりの役目を果たす桟木が溝底に３本残っていた。このような構造は若宮大路側溝や今小路周辺遺跡の南谷武家屋敷の溝な

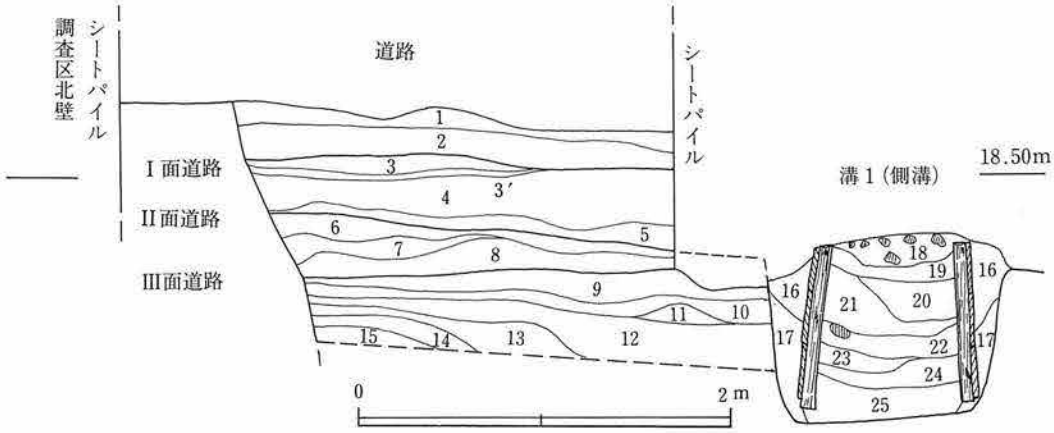


図14　道路及び溝1セクション図

1．茶褐色粘質土　5～10cm角土丹少量含む
2．灰褐色粘質土　5～10cm角土丹多量、締りあり
3．暗黄褐色砂質土　5～7cm角土丹を密に突き固め、下面に貝砂層
4．暗黄褐色砂質土　大・小土丹塊を多量に含む
5．暗褐色粘質土　有機物腐食土、木片・貝粒を少量含む
6．暗黄褐色砂質土　5～7cm角土丹を密に突き固めた土丹地業層
7．暗黄褐色砂質土　拳大土丹をやや多量、貝砂粒少量含む
8．暗褐色砂質土　有機物腐食土と砂層（貝粒混り）互層
9．暗黄褐色砂質土　大・小土丹塊を多量に含む土丹地業層
10．灰褐色粘質土　5～10cm角土丹やや多し、締りあり
11．暗黄褐色砂層　山砂層
12．灰褐色粘質土　混入物が少なく、非常に締りが強い
13．灰褐色粘質土　若干の土丹角を含む
14．暗灰褐粘質土　5～10cm角土丹多め、締りややあり
15．青灰褐色粘質土　混入物少なく、締り非常に強い
16．灰褐色砂質土　5～7cm角土丹、砂（砂利）多量、締りあり
17．暗灰褐色砂質土　5cm角土丹、貝砂粒やや多し、締りあり
18．暗灰褐色砂質土　5～10cm角土丹多し、締りややあり
19．暗褐色粘質土　土丹・貝砂粒を多く含む
20．灰褐色砂質土　荒砂、土丹塊を多く含む
21．暗灰褐色砂質土　土丹・貝砂粒が多く、下層に炭化物層あり
22．灰褐色粘質土　小土丹塊多し、若干貝粒を含む
23．灰褐色粘質土　小土丹塊、砂利・貝粒を多く含む
24．灰褐色粘質土　小土丹塊、砂利、有機物腐食土を多く含む
25．暗茶褐色粘質土　大・小土丹塊を敷いて

どと近い作り方を示している。

覆土は上層にI面構築時の土丹細片を多く含んだ暗灰褐色土、以下は暗灰褐色～暗褐色の貝砂を多く含む土層で、最下層の堆積は有機物腐蝕土である。溝底は大小土丹塊と砂を混ぜて突固めて厚さ20cm程もあり、束柱はこの中に埋め込まれた形になり固定している。

c．II面下かわらけ溜り（図15）

かわらけ溜りは建物2の南端、調査区南壁近くで発見された。図10下位の建物2構築摸式図にあるように建物内の床下に当たる部分には、丁寧な版築で土丹地業層が施されていた。かわらけ溜りはこの土丹地業層直下の広範囲にわたって確認された遺物群で、市内調査においてしばしば見られる方形竪穴建築址などの建物や井戸が機能を失った後、廃棄されてゴミ捨て穴と化す例とは異なっている。

かわらけ溜りはE－1グリッド西側の土丹版築面を境にし、西側と東側との二群に分けられる。この範囲には茶褐色の水分を多く含有し、植物繊維や木質などの（食料残骸含むであろう）有機物腐蝕土層が厚く堆積していた地域で、かわらけ等の遺物もこの層中に混じって出土した。出土遺物にはかわらけの他に木製品の折敷・杓文字・箸・櫛があり、銭は21枚と多く見られた。

3．Ⅲ面

Ⅱ面より２層からなる破砕土丹地業、貝砂層・炭化物を含んだ砂質土を40～50cm程剝がすと、暗褐色を呈した締まりの強い粘質土の地山に近い土が表われ、上面に貝砂や土丹版築が部分的に認められたもので、これをⅢ面とした。この面も他の生活面同様に東側が高く、調査区西端へ向かってなだらかに傾斜している。標高は西端17.50m、東端17.65mである。

この面より検出された遺構は、調査区北側の道路と側溝（溝２）の他に土壙６基、柱穴86口、それにまとまりのない礎板や杭であり、それに伴う遺物も少量であった。

a．道路及び溝２（図16）

Ⅱ面道路の30cm程下から検出したが、断面の観察からはⅢ面時に至るまでに薄い間層を挟んで道路面が何時期か見られ、部分的な貼り替えや補修を繰り返し継続的に使用されていたようである。路面には楕円形の扁平な大型土丹（径30～50cm）を全体に敷き、隙間に小土丹を貝砂と一緒に

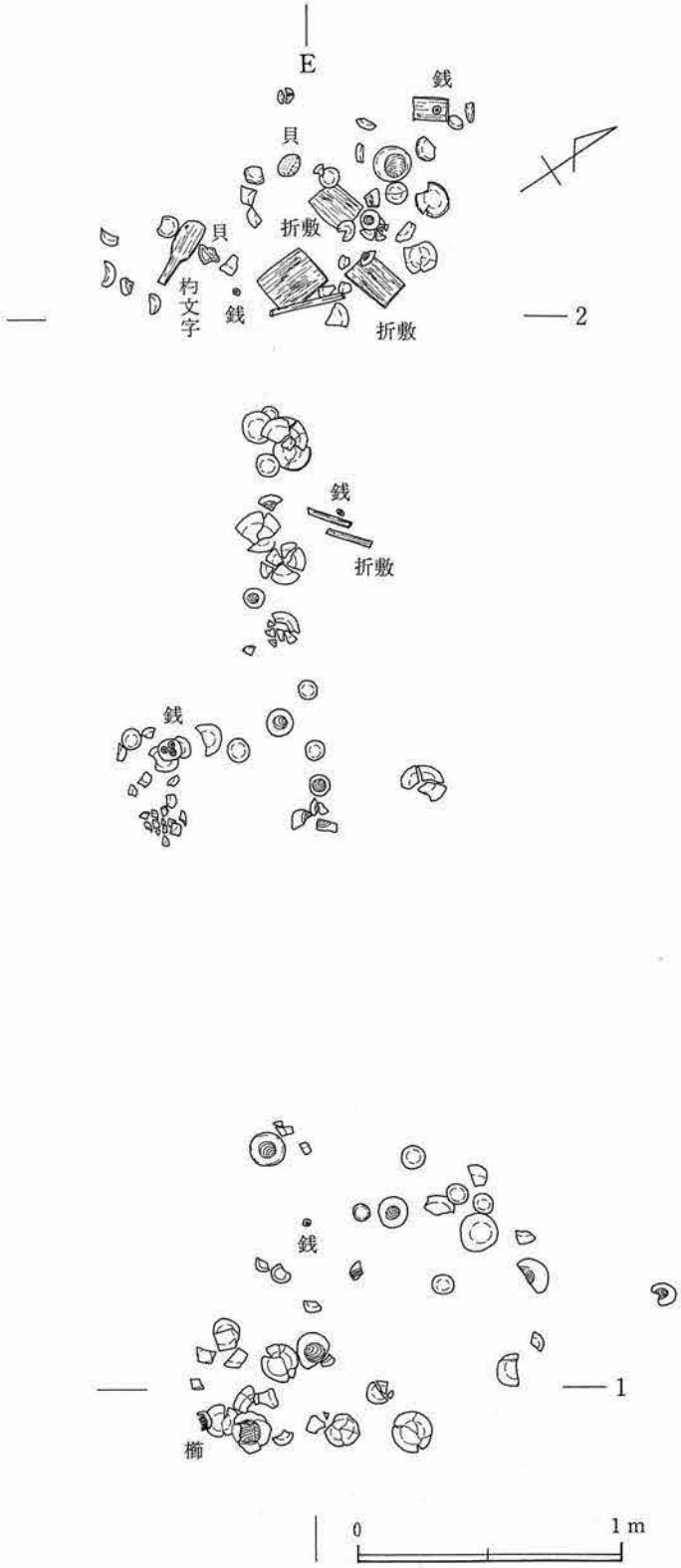


図15　Ⅱ面下かわらけ溜り

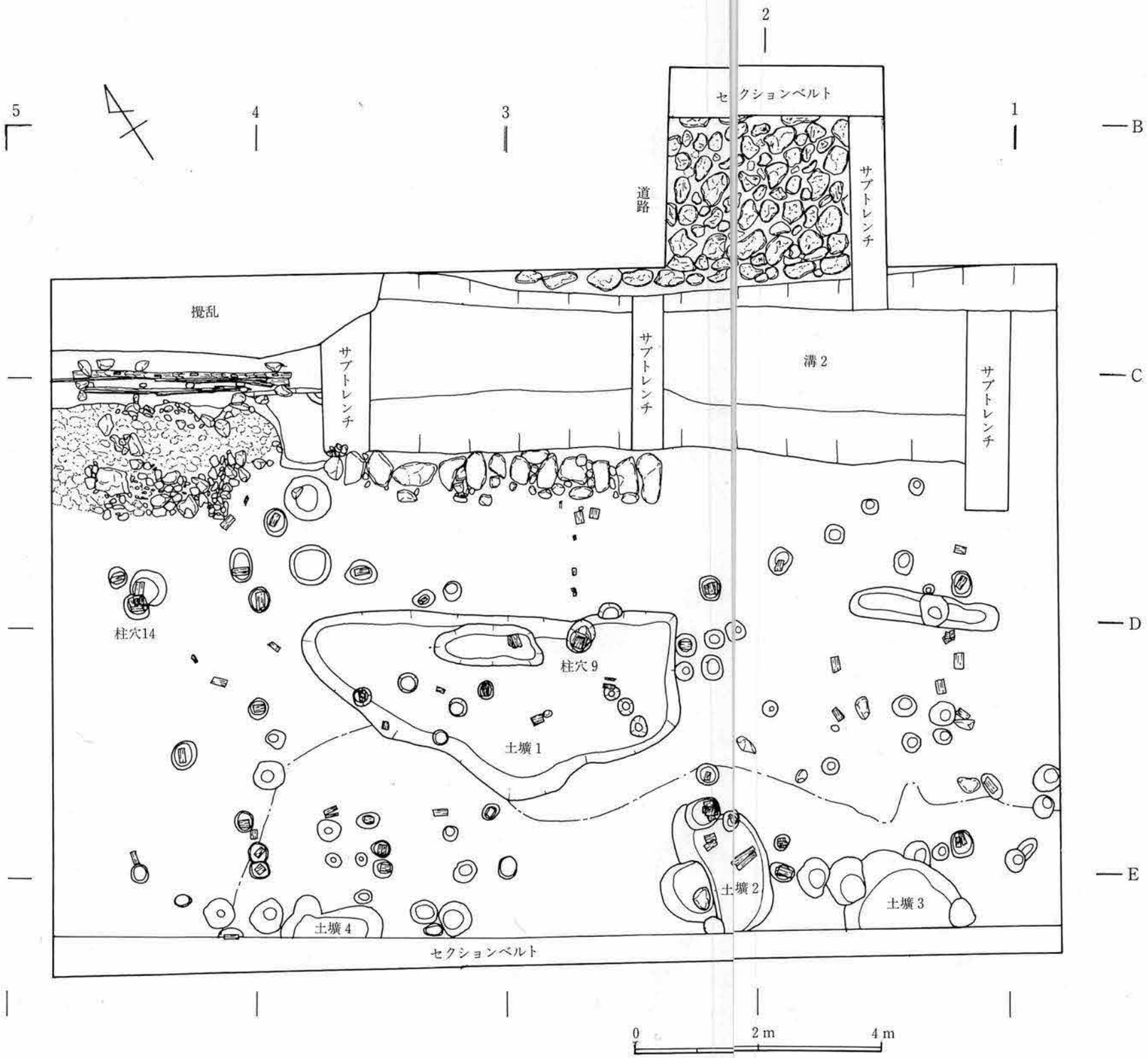


図16　III面遺構全体図

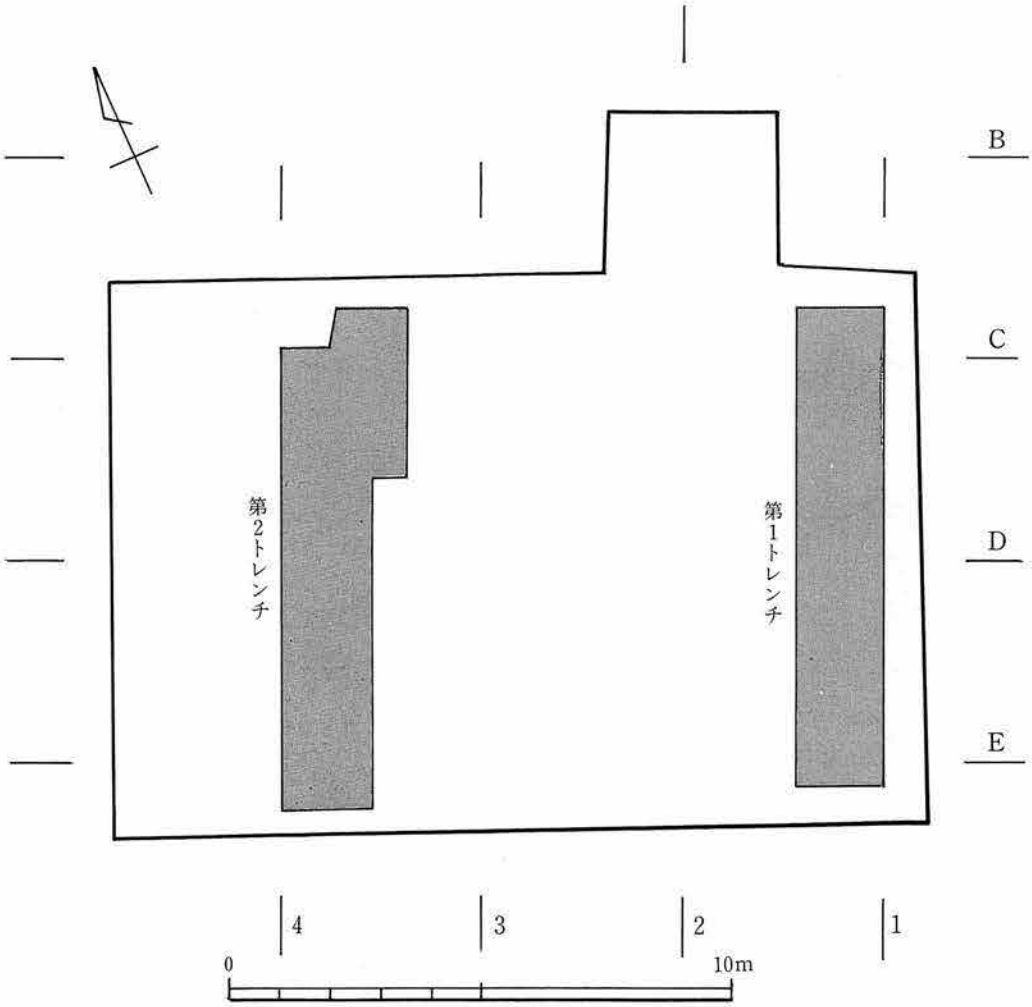


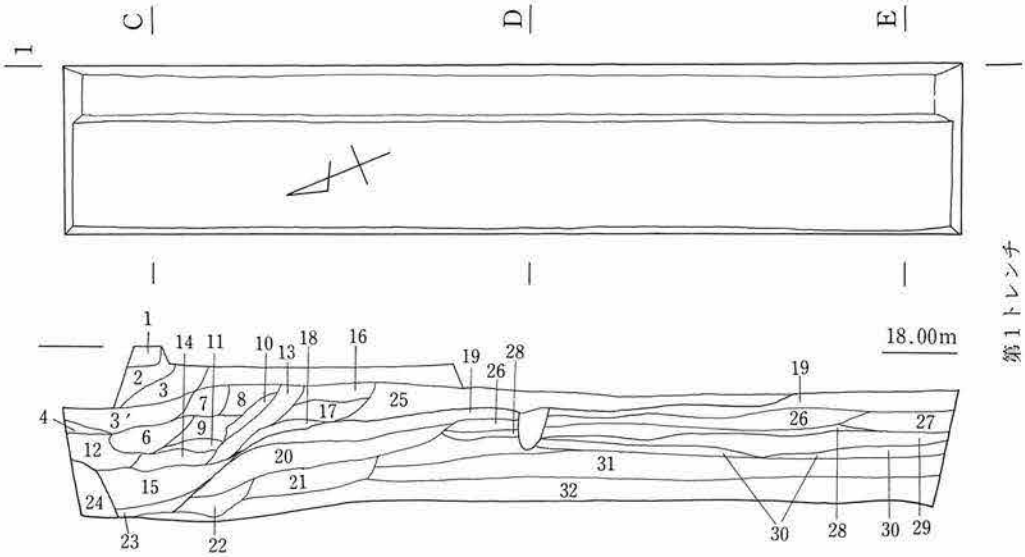
図17　III面下トレンチ配置図

突き固めている。溝２は木組みの側溝であるが、遺存状態が悪く木組みは西端部だけに残る。掘り方は幅２m程、確認面深さ１mで逆台形を呈す。基底部には66cm間隔でホゾ穴を切った土台材を置き、逆側基底部から推定し幅は120cm程であろう。溝肩部には大小土丹塊を突き固め補強している。

（原）

４．トレンチ調査

シートパイルの強度の問題からIII面以下の面的な調査は困難であったため、２トレンチによる調査方法を採用した。両トレンチはグリットの南北軸に平行して設定した。第１トレンチは調査区東側に位置し、その東壁は１軸に沿う。長さは9.5m、幅は1.8mである。第２トレンチは調査区西側に在り、西壁は４軸に沿う。幅は1.8m、長さは9.1mである。第２トレンチは、内部で検出された溝状の落ち込みとかわらけ溜まりの範囲を確認するために北東部分を拡張した。



1．暗茶褐色砂質土　砂利、貝粒多量、しまり無し
2．茶褐色砂質土　有機物腐食土
3．暗茶褐色砂質土　土丹角多し、3′はやや砂が多い
4．暗灰褐色粘質土　木片多し、しまり無し
5．暗灰褐色砂質土　2～3cm角土丹多し、しまり強い
6．暗灰褐色砂質土　大土丹塊、土丹粒・砂が多量、しまり無し
7．灰褐色粘質土　土丹角多量、貝砂粒少量
8．暗褐色粘質土　土丹粒少量、しまり無し
9．暗褐色粘質土　砂層と有機物腐食土の互層状を呈す
10．灰褐色粘質土　土丹角多量、しまり無し
11．暗茶褐色土　有機物腐食土
12．暗褐色粘質土　砂層と有機物腐食土の互層状を呈す
13．暗褐色粘質土　土丹粒、灰色粘土ブロック多量
14．暗灰褐色砂質土　大土丹塊少量、しまりやや無し
15．暗灰褐色弱砂質土　灰色粘土ブロック、土丹粒、木片多量
16．暗褐色粘質土　土丹角多量、若干褐鉄分を含む
17．暗灰褐色粘質土　土丹粒、灰色粘土ブロック多し、しまり強い
18．灰褐色粘質土　土丹角多量、しまり有り
19．暗褐色粘質土　土丹粒・木片少量、しまり強い
20．暗褐色粘質土　砂ブロック、灰色粘土ブロック多し
21．茶褐色粘質土　灰色粘土ブロック多く、しまり有り
22．暗褐色砂質土　灰色粘土ブロック少量、しまり無し
23．茶褐色砂質土　砂ブロック少量、しまり有り
24．暗灰褐色粘質土　灰色粘土ブロック、土丹角やや多く、しまり強い
25．暗褐色粘質土　土丹粒多量、貝粒・灰色粘土ブロック多く、しまり強い
26．暗褐色粘質土　貝粒・灰色ブロック多量、しまり有り
27．暗灰褐色砂質土　灰色粘土ブロックやや多し。しまり有り
28．暗茶褐色砂質土　土丹角・砂粒多量
29．暗褐色砂質土　砂粒（荒砂）多し
30．暗灰褐色砂層　荒砂多量
31．暗灰褐色砂層　荒砂多量、木片少量
32．茶褐色砂質土　有機物腐蝕土（植物か）

1．暗褐色弱粘質土　小土丹、貝・砂粒を多量に含み、しまり有り
2．暗褐色粘質土　土丹粒を多量、貝粒・灰色粘土ブロック少量、しまり強い
3．暗褐色粘質土　土丹粒、灰色粘土ブロック少量、しまり強い
4．暗褐色粘質土　貝粒、灰色粘土を多量、しまり有り
5．暗褐色粘質土　土丹粒、灰色粘土ブロック少量
6．暗茶褐色粘質土　大・小土丹塊を多く含む
7．暗褐色砂質土　貝砂粒、木片を多量、しまり無し
8．暗褐色砂質土　灰色粘土ブロック、木片が多量
9．暗褐色粘質土　砂粒、灰色粘土ブロック、木片多量
10．暗褐色弱粘質土　土丹塊、灰色粘土ブロック、多量

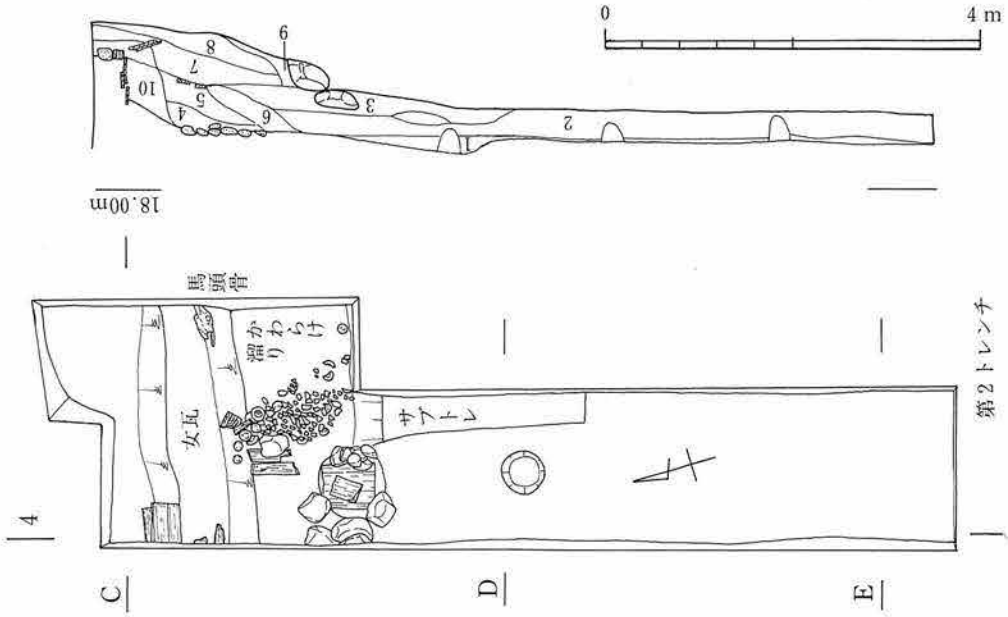


図18　第1・2トレンチ

a．第１トレンチ（図17・18）

第１トレンチの層序は、25層（Ⅲ面構成土）までが遺物包含層で、それ以下が無遺物層である。最下位の砂層は、井戸１の側壁下位にみられる砂層とレベル差がほとんど無いことが確認された。標高は16.40mである。

明瞭な遺構は確認されなかったが、トレンチ中央部西壁付近でピット１口が検出された。堆積状況からは、北側へ微少な傾斜をもち、北端に急激に落ち込むことを確認した。この落ち込みは、ちょうど25層と17層の接点辺りが肩部になる。

トレンチ内では、落ち込みの底面と古代遺構の検出を目的としてサブトレンチを東壁側に設定した。その結果、約80cmの厚さで粘土層と砂層が互層に堆積する自然層であることを確認した。

b．第２トレンチ（図17・18）

第２トレンチは、２層までが遺物包含層で、以下に自然堆積層が続く。第１トレンチ同様、２層最下面が第Ⅲ面として把握されている。

遺構は、第１トレンチと同じくゆるやかな北への傾斜と勾配のある落ち込みが認められる。この傾斜する面上に、柱穴・かわらけ溜まり等が検出された。柱穴は径70cmの円形で、底面に２枚の礎板を置く。下方の礎板は50cm四方の方形で、厚さは５cmと大型である。礎板上には小土丹塊の根石を伴う。柱穴は単一で検出されたためにその全体像は明らかでないが、柵列や橋脚等何らかの施設に伴う可能性がある。トレンチ壁際に残る木片は、Ⅲ面溝２の残余と考えられる。

かわらけ溜まりは、落ち込み部分の途中に形成される。範囲は120cm×60cmの広がりをみせ、内に女瓦を含む。この落ち込みは二回の傾斜をへて、底面に到る。底面の標高は17.20mである。落ち込みの底面上には馬の頭骨が単体で出土した。二回続く落ち込みの内、北側のそれは溝２の掘り方形成時の削平に因るものとおもわれる。落ち込みの肩部は土丹塊の敷かれる９層最下面と考えることができる。これに対応するとおもわれるのが、調査区北側張り出し部の断面にみられる南へのなだらかな傾斜である（図14参照）。両者を併せて同一時期の溝と解することができるが、詳細な検討は後日を期したい。

（橋場）

第２節　遺物

調査時に出土した遺物は、かわらけ・常滑・木製品などを主体とし、瀬戸・中国陶滋器や骨・貝などの自然遺物を含めた総量はテンバコ約70箱分であった。ほとんどの遺物は包含層か、地業層中（生活面構成土）から出土しており、遺構内から出土したものは数少ない。遺物の分類は各生活面の包含層と各面検出の遺構別に依ったが、一括して投棄されたような状況を示した資料は少なく、散発的な出土が多かった。そのせいか共伴関係にやや混乱が見られるように思われる。

１．Ｉ面

ａ．井戸１出土遺物（図19）

１～９―かわらけ　いずれも糸切り底のロクロ成形である。１～３が口径6.6cm前後の小型、４～７が口径10.4～11.1cmの中型、８・９が口径13cmを越える大型の製品である。

１～３は器高が高く、体部が直線的かやや開き気味に立ち上がり、中程に弱い稜を有する特徴をもつ。４～７は器高が高く、底部より直線的に口端に向って体部が開いていく。器壁は底部が薄く基底部から体部中程が肥厚し、口唇にかけて薄くなる。８・９は底径８cm以上、器高４cm以上で、体部が逆「ハ」字状に開き気味に立ち上がる。５は底部穿孔を施す。

11―青磁　無文鉢の底部片、復元底径10.7cm。釉薬は黄ばんだ灰緑色で、貫入多く失透している。高台部にまで厚い釉が及んでいる。胎土は灰色で岩石質に焼け、やや気孔が多く含む。

10―瀬戸　天目茶碗の体部下半～底部、底径4.6cm。高台削り出し。釉薬は口縁端で黒褐色、以下の部分では黒色の失透で高台脇以下は露胎である。胎土は灰色で緻密である。

12～14―銭　12熙寧元宝（初鋳1068年）、13元祐通宝（初鋳1086年）、14磨り銭で銭名不明。

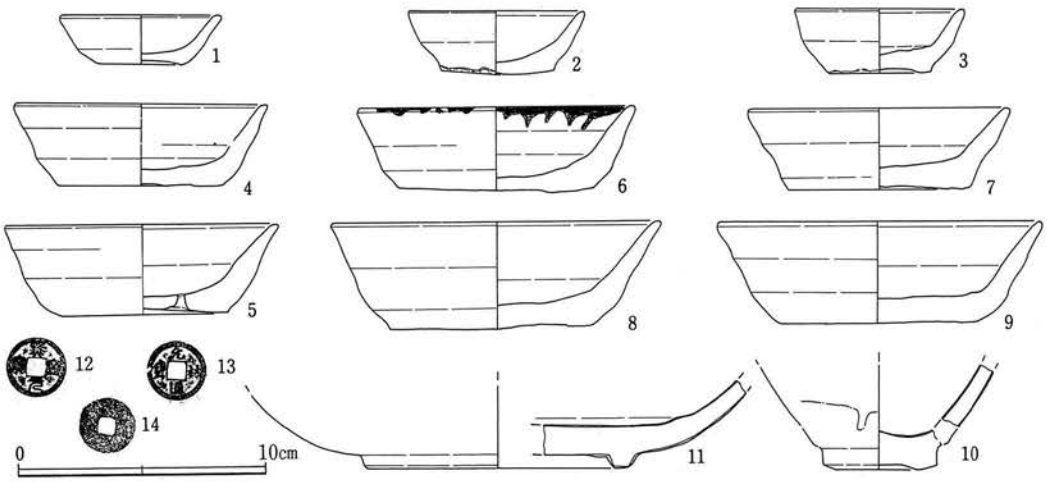


図19　Ｉ面井戸１出土遺物

b．Ⅰ面上出土遺物（図20・21）

1～15―かわらけ　糸切り底のロクロ成形かわらけ。1～8は小型品、9～14は大型品である。

1は器高が高く、厚手で底部から丸味を持って立ち上がり、体部中程に弱い稜を持つ。2～4は器高があまり高くなく、底部よりも体部の方が器壁が厚くなる。体部は直線的かやや開き気味に立ち上がる。5・6は口径7.7cm、器高が高く薄手の器壁をもち、胎土も精良である。7は器高が低く厚手で、体部中程に強い稜をもち直立気味になる。8は器高が低く薄手で、体部下半の稜から開き気味の器壁になる。9～12は口径12.5cm前後で、厚手の底部をもつ。体部が逆「ハ」字状に立ち上がり口縁がやや外反気味になる。13・14は体部下半が丸味をおびるが、稜から薄い器壁になり、直線的に開く形になる。15は口径16.3cm、底径9.8cm、器高4.6cmと超大型品。体部は丸味をおびるが内湾していない。体部壁は薄く胎土も比較的精良である。

16・17―青磁　16は蓮弁文鉢体部下半片で、内底に二重の円圏文を巡らす。釉薬は暗い青緑色で厚く、多くの貫入が見られる。素地は灰白色で粘性が強く堅緻である。17は無文鉢底部片、復元底径10.4cm。釉薬は淡青緑色で厚く畳付けを除いて施釉される。素地は灰白色でやや夾雑物を含む。

18～22―瀬戸　18は灰釉皿で口径11.6cm、底径5.6cm、器高2.9cm。底部は糸切り離しのまま、体部に強いロクロ痕を残し口唇部が三角形状になる。釉薬は灰緑色の透明なもので外面下半以下は露胎である。胎土は灰白色で堅緻である。19は灰釉碗で口径12.4cm、底径4.2cm、器高4.5cm。底部から直線的に開いて立ち上がる体部、ロクロ目が強く残る。釉薬は内面が深緑色、無高台で外面は全体に灰緑色釉のハケ塗り。20は卸皿で口径14.8cm、底径8.4cm、器高4.2cm。体部は外反気味で口唇部が角張る。内底の卸目は粗雑で、鋭くヘラで斜めに切り込、外底は糸切り痕を残す。釉薬は外面が口縁付近のみ、内面は内底まで施される。21は無文の三足香炉で口径8.9cm、底径5.9cm、器高5.9cm、最大径9.9cm。口縁部は外側に強く折り返さる。雑な作りの足を貼り付ける。釉薬は淡い灰緑色の灰釉で良く溶けきっている。胎土は灰白色で堅緻である。22は入子で口径5.1cm、底径2.8cm、器高1.8cm。ロクロ成形で底部糸切り。口唇から内底にかけて灰緑色の自然釉が付着する。胎土は精良均質で灰色を呈し硬い焼きである。

23―鬼瓦　左側足部片で、表面は縁帯を凹線で区画した中に珠文を別范で貼り付けている。調整法は表面が縦位ナデで、裏面は粘土剝ぎ取り痕（糸切り）を残し、未調整である。胎土は小石・黒色砂の多い粗土で灰色である。

24―瓦器質製品　小型香炉、口径9.7cm、底径8.8cm、器高3.8cm。外面は磨きを施した後、菱形の渦巻き文スタンプを四段に押捺している。内面はナデ調整のみ。器表は黒色で磨かれ光沢をもち良く焼き締まり、胎土は良好で淡赤灰色である。

25―刀子　全長16.6cm、刃長9.7cm。刃部と茎の境が明瞭でない。切先が鋭く茎の尾に目釘穴がみられる。

26―骨製笄　残存長7.4cm、幅1.5cm、厚さ4mm。平たい板状に刃物で削り出した後、全面を良く

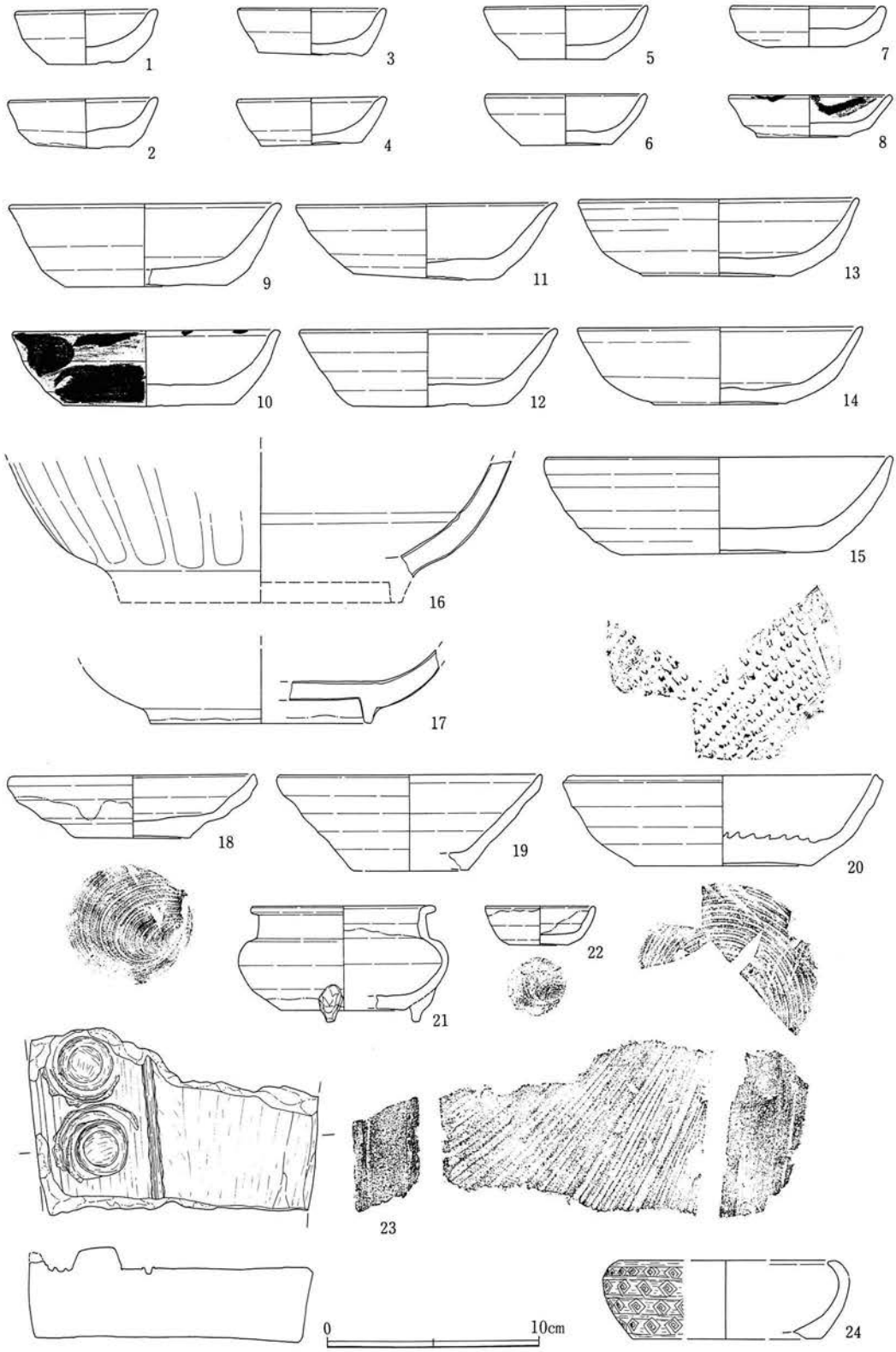


図20　Ⅰ面上出土遺物(1)

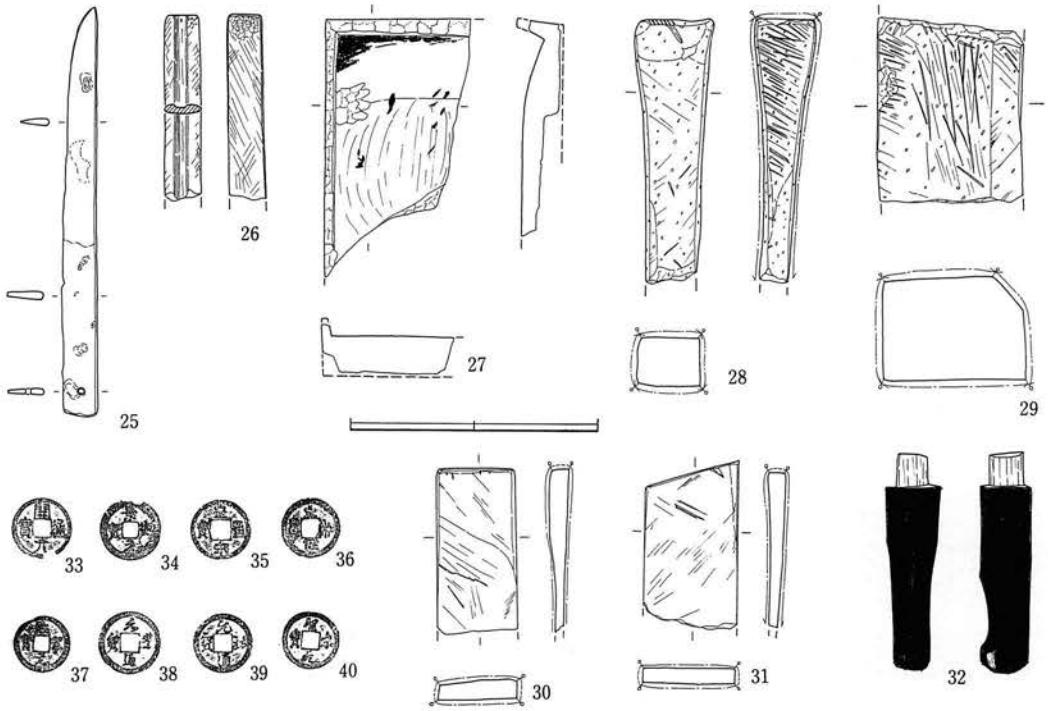


図21　Ⅰ面上出土遺物(2)

磨いている。

27―硯　黒色の粘板岩質で表面は良く使用して滑らか、海部の側縁寄りに墨が残る。

28～31―砥石　28は中砥、緑色味灰白色の凝灰岩質で方柱状を呈す。四面とも砥面として使用し、中央部が摩耗して細くなる。29は荒砥、白色の砂岩質で五面ともに刃物の引っかかり傷が著しく使用頻度の高さを窺わせる。30・31は仕上砥、灰白色の泥板岩で方板状である。両面は良く使い込んでおり、側面は切断痕を残す。

32―膳の脚　長さ8.6cm、差込み部1.4cm。獣足様の作り上端の差込み部分を除いて黒漆を施す。

32～39―銭　32開元通宝(621年)、33景徳元宝(1004年)、34皇宋通宝(1039年)、35至和元宝(1054年)、36熙寧元宝（1068年)、37元豊通宝（1078年)、38元祐通宝（1086年)、39聖宋元宝（1101年)。

2．Ⅱ面

a．Ⅱ面建物１出土遺物（図22～27）

1～48―かわらけ　ロクロ成形の糸切り底。1～31は小型品で口径7.3cm～8.1cm、底径4.8cm～5.8cm、器高1.6cm～2.0cmを計り、平均が口径7.5cm、底径5.1cm、器高1.8cmである。32～48は大型品で口径11.7cm～13.2cm、底径6.5cm～7.8cm、器高3.3cm～3.8cmを計り、平均が口径12.7cm、底径7.4cm、器高3.6cmである。小型の1～17は体部が丸味をおびるが中程に稜をもち開き気味になる。25～28は

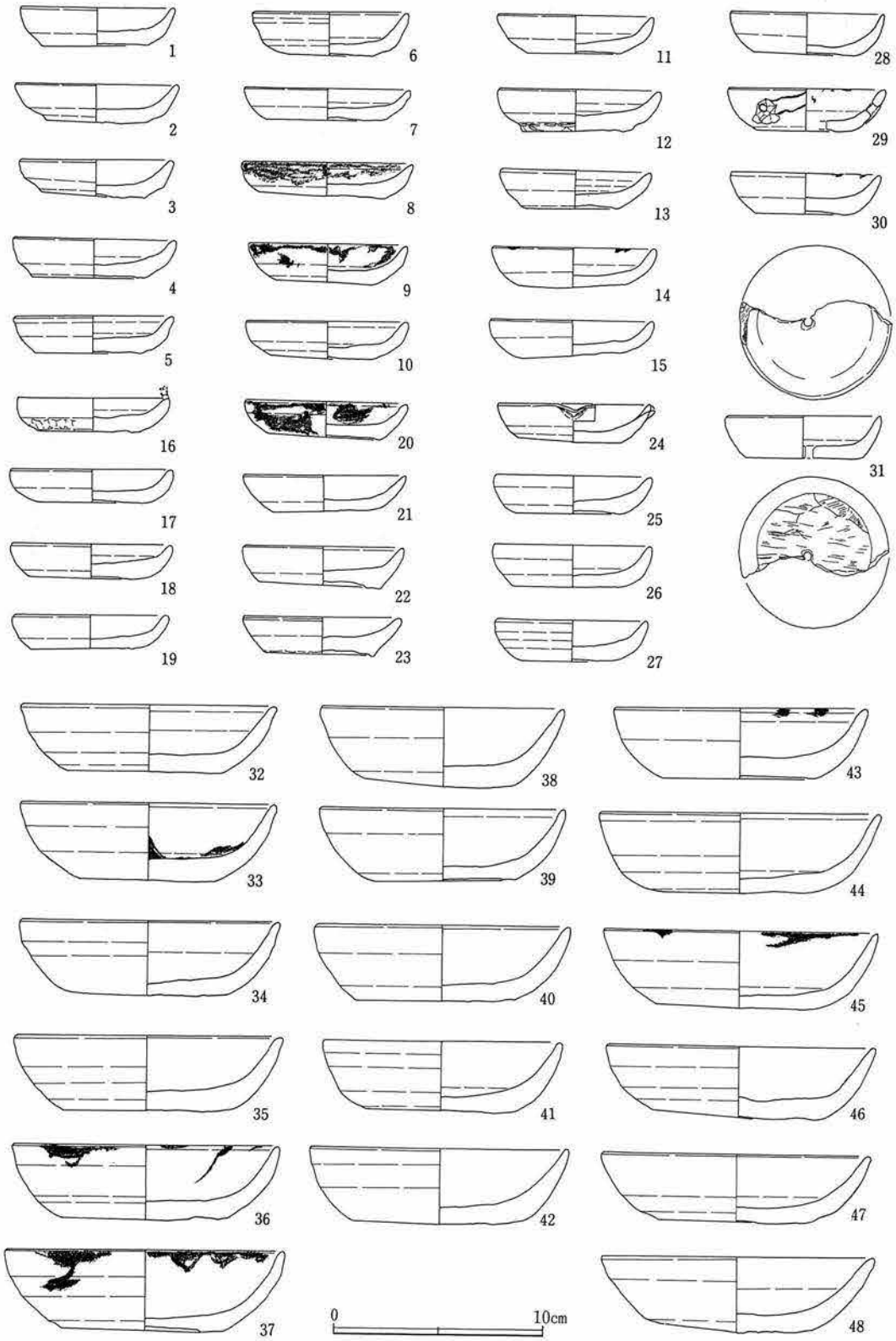


図22　II面建物１出土遺物(1)

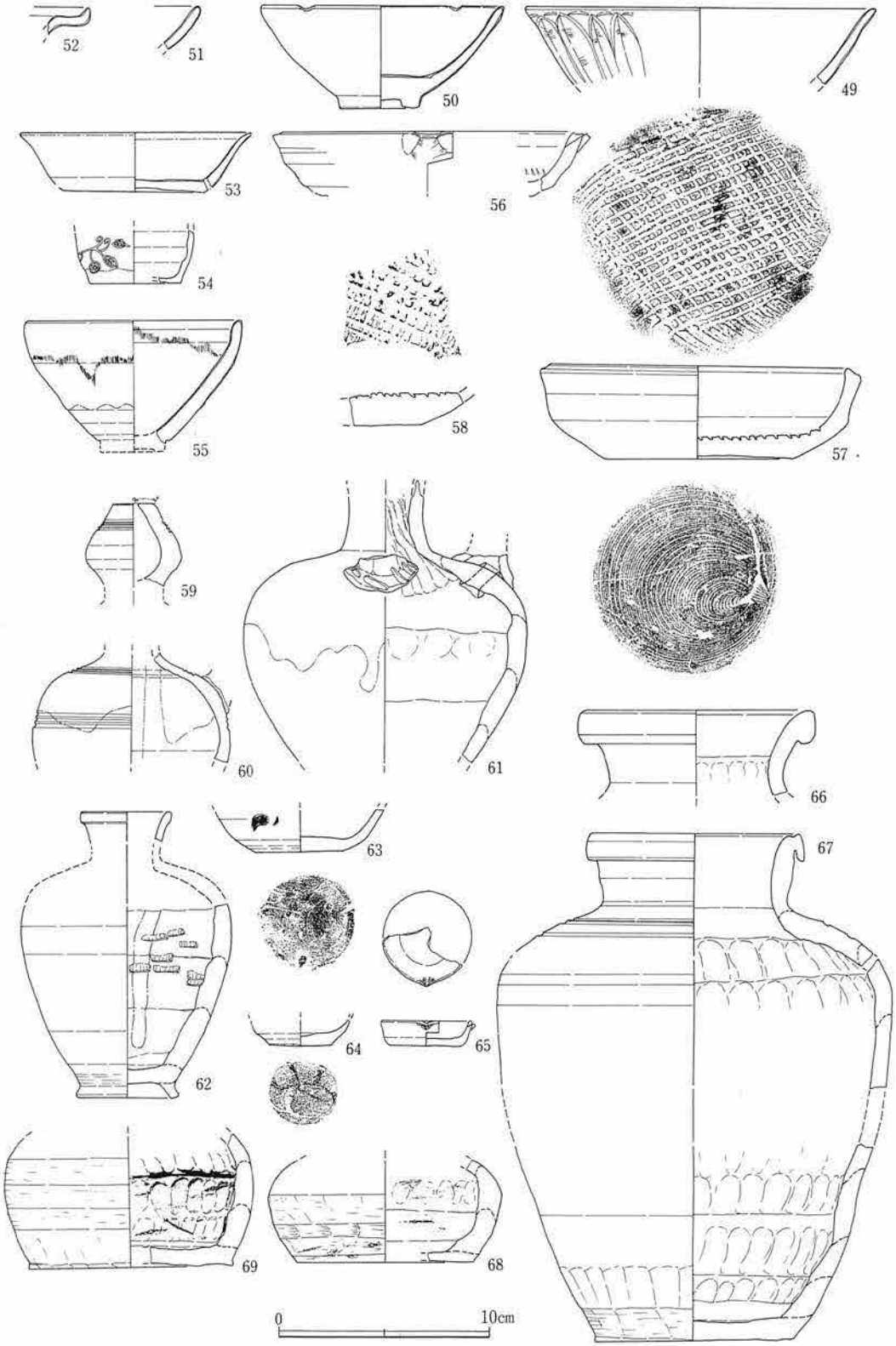


図23　II面建物１出土遺物(2)

体部が丸味をおび内湾気味になる。18～24は体部が丸味をおびるが内湾気味にならない。29～31は穿孔かわらけ、29が体部、30・31は底部に焼成後、穴をあけている。大型の31～38は体部上半で稜が付き、直立か外反気味になる。39～45は体部が丸味をおび内湾気味になる。46～48が体部が丸味をおびる内湾気味にならないもの。

49～52―青磁　49は蓮弁文碗、復元口径16.6cm。細手での単弁鎬蓮弁文を配す。素地は灰白色で、釉薬は暗緑色透明である。50は無文碗、口径11.5cm、底径3.8cm、器高4.9cmである。口縁部が直行し、刻みを入れて輪花状になる浅い碗である。素地は灰白色堅緻、釉薬はやや厚めで暗緑色失透する。51も無文碗、素地は灰白色堅緻、釉薬は灰緑色の不透明である。52は鉢口縁片、素地は灰白色釉薬は淡水青色で厚く半ば失透している。

53―白磁口元皿　口径11.0cm、底径6.9cm、器高2.8cm。器壁が薄く口縁部が緩やかに外反する。素地は灰白色堅緻、釉薬は青味灰白色で不透明である。

54―青白磁　小型の水滴か、底径4.3cm。外面に草花文をあしらう。上･下半部を別々の外型作り、素地は灰白色精緻、釉薬は青白色で透明、底部脇から露胎になる。

55～65―瀬戸　55は天目茶碗、口径12.4cm、底径2.2cm、器高6.2cm。口縁部が上方へ直立し、体部も直線的な立ち上がりをもつ。素地は灰白色で堅く締る。釉薬は黒褐色で口縁付近は赤味をおびた茶褐色で光沢をもつ。56～58は卸皿、56は口径14.7cm、外反気味の口縁の器壁がやや薄くなり、口唇部が角張り片口がつく。胎土は黄味灰白色、釉は灰緑色のものがうすくハケ塗りふうにかけられる。57は口径15.2cm、底径8.9cm、器高4.5cm。器壁は緩やかに内湾気味に立ち上がり、中程で強い稜をもち外反したような形になる。底部は糸切り底。釉は灰緑色のものがうすくハケ塗りされる。胎土は灰色で堅緻である。58は卸目は粗雑で浅い切り込み。釉は灰緑色のものがうすくハケ塗り、胎土は灰白色でやや荒い。59は仏華瓶、最大径4.6cm。胴部に四条の沈線を刻む。頚部に続く破面は研磨して平らに仕上げる。胎土は黄色をおびた灰白色でザラッとした土、釉薬は光沢のある緑色で厚くかかる。60・61は水注。60は頚部径2.6cm、胴部径9.5cm。肩部と胴部に三条の沈線を巡らし、肩部に把手の痕跡が残る。胎土は灰白色で、釉薬は光沢のある灰緑色で厚い。61は頚部径4.3cm、胴部径13.4cm。注口は肩部に貼り付け、基部がヘラ押しで菊座ふうに作くられ、肩部に開けられた孔は丸棒で押しただけで内側に粘土がはみ出す。胎土は灰白色で、釉薬は光沢のある暗緑色で頚部から胴部中程にかけて厚くかけられる。62は小型の四耳壺である。口径4.2cm、胴部径10.0cm、底径5.0cm、器高13.5cm。口縁部は玉縁になり、肩部が欠失するが胴部はすぼまる形で、「ハ」字に開く高台が張り付けられる。内面はササラ状の木口で押した痕跡が残る。釉薬は灰緑色のハケ塗りが薄く見られる。胎土は灰色で堅緻である。63～65は入子。63は底径4.1cm、外底面は糸切りを残し、細い棒状の圧痕を持つ。体部に墨痕があるが不明。胎土は灰色で堅緻、内面に自然釉が付着する。64は底径3.0cm。ロクロ成形だが、外底面をヘラ削りで整形している。内面に自然釉の降灰と、紅の付着が見られる。65は口径4.3cm、底径3.4cm、器高1.2cm。内側からヘラで押し出した片口をもち、外底面はヘラ削り整形を施す。内面に自然釉の降灰が見られ、胎土は灰色で堅緻である。

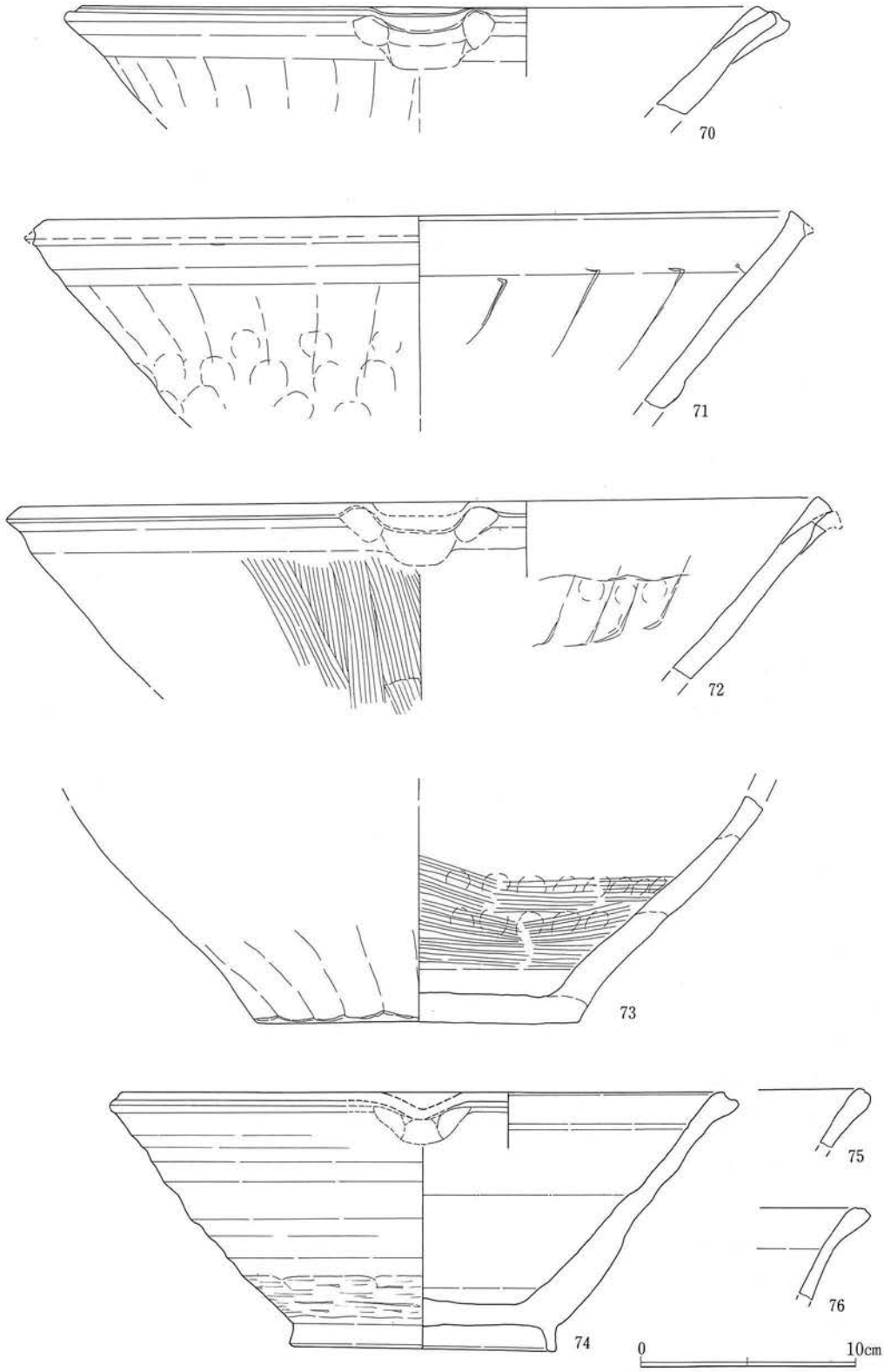


図24　II面建物１出土遺物(3)

66～73・77～82―常滑　66・67は中型の壷。66は口径10.6cm、玉縁状の口縁をもつ。胎土は灰色で白色と黒色の砂粒を含み、器表は黒褐色から茶褐色になる。67は口径10.0cm、底径9.4cm、器高24.1cm、胴部径18.2cm、口縁が玉縁状に折り曲げられている。肩の張りは余り強くなく二本の沈線が巡っている。胴部下端はヘラ削り調整を施す。胎土は石英粒をを多く含むが粘性強く黒灰色で、器表は黒褐色から茶褐色で肩部に暗緑色の自然釉がかかる。68・69は鳶口壷。68は底径9.4cm、肩部径11.1cm、肩部下半の胴部はヘラ削り調整を施す。内面は粘土紐の輪積み痕を残す。内外面に紅のような赤色物が付着している。肩部には灰緑色の自然釉がみられる。胎土は白色と黒色の砂粒をを多く含み、暗褐色を呈す。69は底径9.4cm、胴部径11.8cm。胴部は外面ヘラ削り調整、内面には全体に指頭痕を残し、紅が付着している。胎土は白色と黒色の砂粒が多く、割れ口が岩石質を呈す。２点とも紅壷の可能性がある。70～73は捏鉢。70は口径33.1cm、口縁部はやや肥厚し、端部が凹んでいる。口縁付近は横ナデ、下半は縦ナデで調整を施す。片口を残している。胎土は小石粒の多い粗土、淡い橙色を呈す。71は口径35.8cm、口縁端部は平らで外面に強い横ナデを施し稜が付くその下は縦位のヘラナデで調整するが指頭痕も残る。内面は摩滅しているが、ヘラナデ痕がわずかに見られる。胎土は小石粒の多い橙色系の色調である。72は口径37.7cm、口縁端部は平らで外面に強い横ナデで段差ができる。下半はササラ状の刷毛目が認められる。胎土は白色と黒色の砂粒を含みやや粘り気があり、暗褐色を呈す。73は低部径15.3cm、砂目底。調整は外面下半にヘラ木口のナデ、内面にはササラ状の刷毛目痕がつく。胎土は白色粒を含み割れ口が岩石質で、器表は橙色である。77～82は甕である。77は口径37.2cm、口縁は「N」字に折り返し、縁帯状になる。内面頸部にはヘラ木口のナデの痕跡を残す。胎土は灰色の精良土で、割れ口はコンクリートのように堅緻である。頸部に灰緑色の自然釉が厚目にかかる。78は口径40.5cm、口縁部は「く」にが外反させ、端部を上下に引き出している。胎土は暗灰色の良土で、粘り気があり割れ口が岩石質である。頸部から肩部にかけて灰緑色の自然釉が厚く見られる。79は口縁を「N」字に折り返している。胎土は黒灰色に焼き上がり、白色粒を多く含みザラザラした感じになる。自然釉の降灰が見られる。80はN字口縁で幅広い縁帯をもつ。胎土は白色粒を多く含みザラザラし黒灰色、器表は淡い橙色を呈す。81はN字の口縁であるが、上方への引き上げが強く幅広い縁帯をもつ。胎土は黒灰色の岩石質で良く焼き締る。82も口縁片、割れ口を黒漆で接合している。

74～76―山茶碗窯系捏鉢　74は口径28.4cm、底径12.2cm、器高12.1cm。口縁が肥厚し、端部に凹みができる。外面は胴下部にヘラ削り整形を施し、付け高台になる。内面は胴中程まで摩滅が強くみられる。胎土は小石を多く含んだ粗土でザックリして灰褐色を呈す。75も口縁端部が丸くなり、凹みができる。胎土は小石を多く含んだ粗土の灰色で、口縁から内面にかけて灰緑色の自然釉が付着する。76は口縁端部が丸くなる。胎土は小石を含むが比較的良好で、灰褐色を呈す。

83～88―手焙り　83～85は瓦質輪花形のもので、砂や石粒を含んで焼成も瓦ににた仕上がりである。特徴はやや浅めの鉢形の胴部が、輪花形に作られ板状の三脚を有する。83は口径36.2cm、底径30.5cm、器表は磨かれており、二個一組の菊花文のスタンプ押印文様が付けられる。84は口径36.8

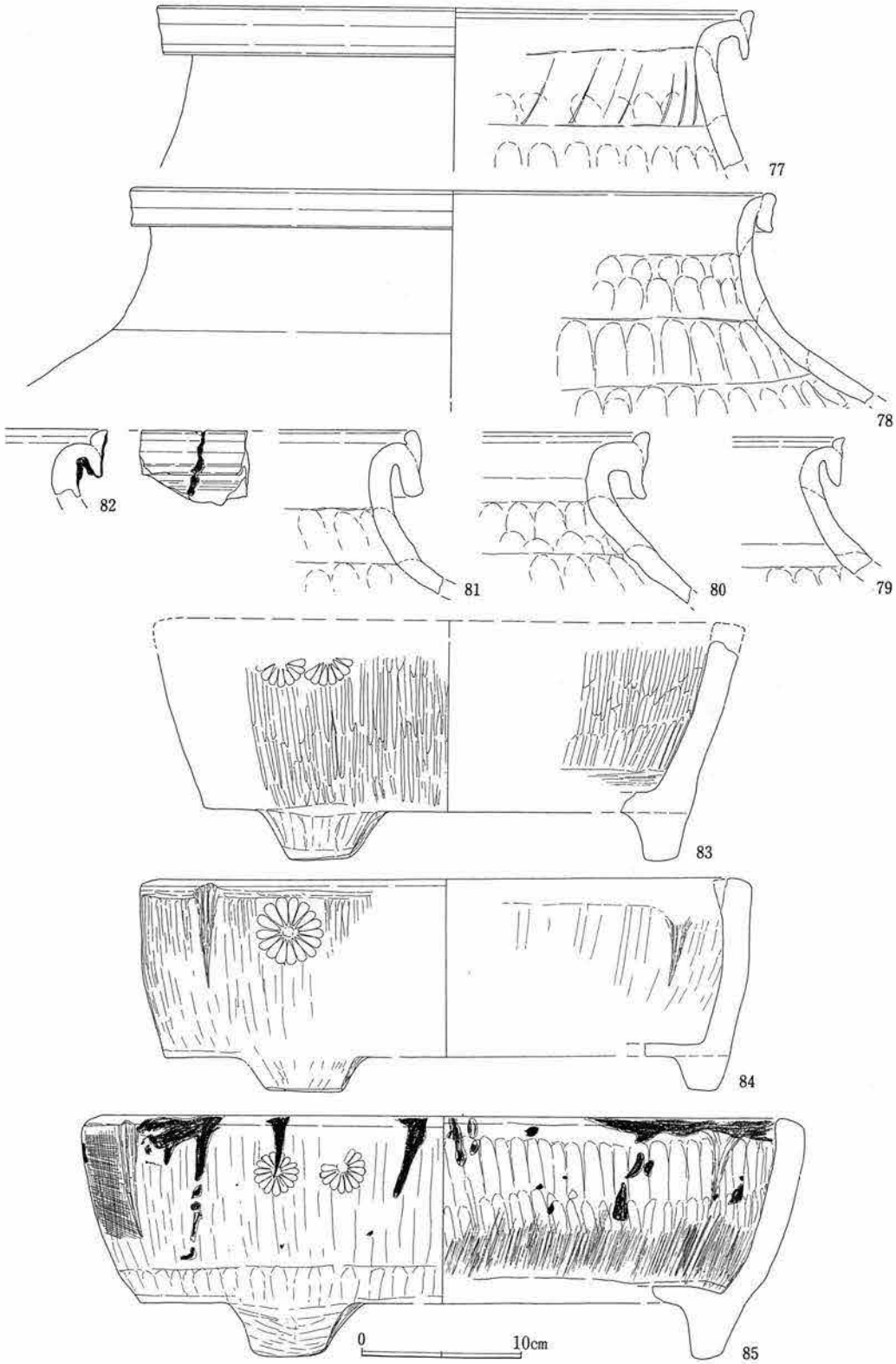


図25　II面建物１出土遺物(4)

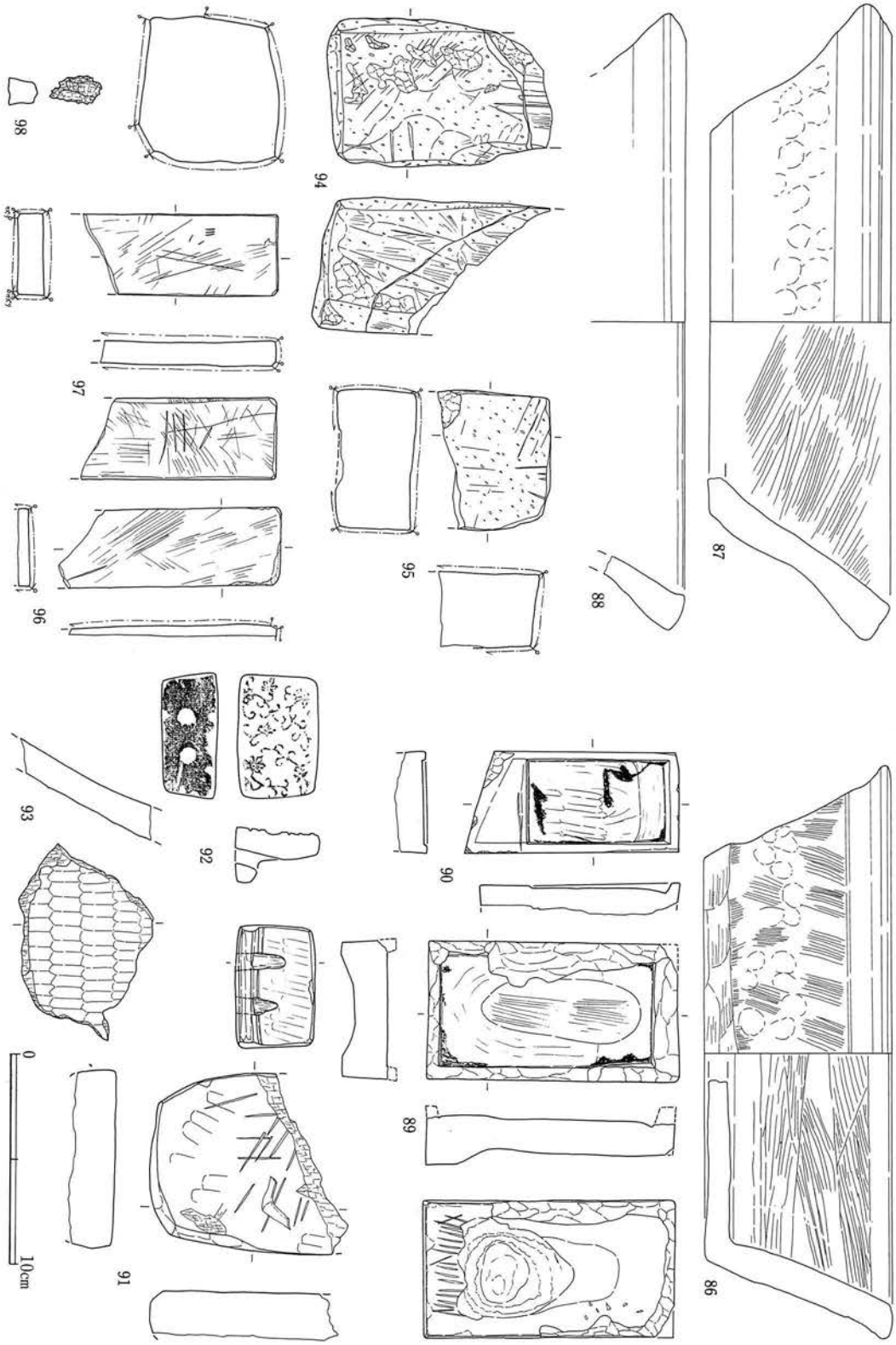


図26　II面建物１出土遺物(5)

cm、底径35.3cm、器高13.2cm。器表は内外面ともに良く磨かれており、大きめの菊花文のスタンプが押されている。85は口径45.2cm、底径37.9cm、器高15.0cm。器表は磨かれているが、内面下部に引っ掻いたような痕跡が見られる。部分的に黒漆が認められ、一部に布きせして黒漆で固めた跡もある。外面上部には二個一組の小さな菊花文のスタンプが押されている。

86～88は鉢形のもので器形的には側面観逆台形の浅い鉢形を呈す。外底面は砂底で、外傾した胴部は口縁に至り肥厚し、内方か外方または両方に少し張り出す。成形は回転台の輪積み、整形は横位ナデを主体とし、木口状工具による掻きナデが目立つ。外面下端にはヘラ削りを施す。86は口径27.2cm、底径19.1cm、器高9.0cm。胎土は砂粒を多く含んだ粗土、焼きがやや甘く茶灰色を呈す。87は口径30.0cm、底径18.0cm、器高8.6cm。胎土は砂粒を多く含んだ粗土、焼成堅緻。87は口径29.2cm、外面に黒漆が厚く塗られている。胎土は雲母・砂粒を含むが良好で灰色、器表が黒灰色で焼きが良い。

89・90―硯　89は緑味暗褐色の細かな粘板岩、大きさは長さ11.8cm、幅6.6cm、厚さ2.2cm以上である。両面硯に使用したものか、裏面も加工している。良く使い込んでいるためか陸部から海部にかけてかなり凹んでいる。90は長さ8.6cm・10.1cm、幅4.7cm、紫褐色の泥板岩。陸部にはノミ状の削り痕があるが、全体に浅い彫り。下方は斜めにカットされ外形に沿って線刻がある。

91～93―滑石製品　91は滑石鍋底部を加工して作った温石、厚さ2.2cm。両面はノミ状工具で整形する。92は体部を加工したスタンプである。表面は長方形を呈し、文様は楓の枝葉を細かく繊細に表現する。背面は取手（鍋の鍔）に二ケ所の穿孔がある。93は鍋の体部片である。緩やかな曲面の丸ノミによる丁寧な削り痕が残る。

94～97―砥石　94･95は荒砥、前者は砂岩質で荒いザックリ感じもので、四面が全て砥面となる。後者は砂岩質の荒い石質で四面を使用している。ともに茶色味を帯びた灰白色である。96・97は仕上砥、泥板岩を方板状に加工し、両面は砥面として使用するが、側･端面はノコ状の切断痕を残す。ともに緑がかった灰白色を呈す。

98―燧石　メノウ質で明るめの茶色を呈す。上と右側の一部に打撃痕が認められる。

99～103―漆製品　99は平高台皿、口径9.0cm、底径6.5cm、器高1.2cm。文様は内面に亀甲文を三個組み合わせ、口縁の三ケ所に鶴を配す。外面にも向かい合わせで鶴を朱漆で描いている。地塗りは黒漆である。100は深鉢、口径19.2cm。口縁部は厚手で内湾し体部上方に最大径をもち、布施鉢の形を呈す。黒漆は内外面ともに薄くかけられ、木目、ロクロ痕が認められる。木質は良く目が積んだものを使用。101は膳脚部、長さ9.7cm。獣足ふうに加工し黒漆を塗ったもので、差し込み部は木地のままである。102･103は櫛。102は疎な歯をを有するもので、厚く黒漆を塗っている。長さ12.1cm、幅3.2cm、棟が緩やかな丸みをもつ。103は密な歯をもつもので、薄い黒漆か、渋などをぬつた可能性もある。

104～110―木製品　104は箱製品、正方形で幅13.6cm、高さ2.6cm、底板と枠板からなる。底板に両端を仕口した枠板で縁を作るが、底板及び枠板仕口には錐で穴を開けて木釘を打って固定した丁

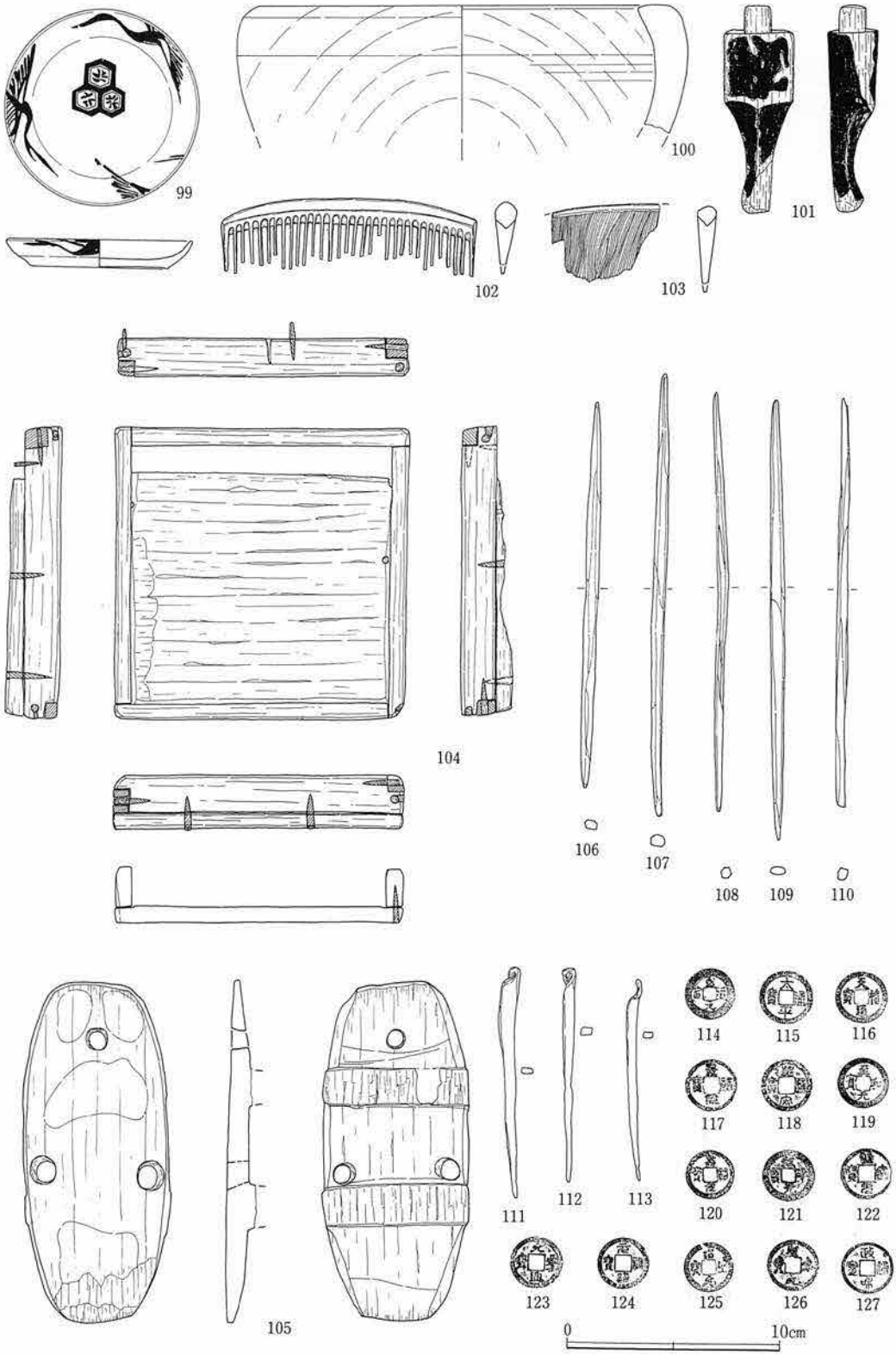


図27　II面建物１出土遺物(6)

寧な作り方をする。106～110箸状木製品、長さに統一性ががなく、断面形も不揃いである。成形は小刀による粗い削りによる。105は下駄である。小判形を呈し、台長16cm、幅6.8cm、柾目材、両歯を殆ど欠く。足先と踵部にへり窪みがある。小さく女性か子供用のものか。

111～113―釘　角釘で長さはそれぞれ11cm、10.1cm、9.5cmを計る。

114～127―銭　114至道元宝（995年）、115太平通宝（976年）、116天禧通宝（1017年）、117景祐元宝（1034年）、118皇宋通宝（1039年）、119至和元宝（1054年）、120嘉祐元宝（1056年）、121治平元宝（1064年）、122熙寧元宝（1068年）、123元豊通宝（1078年）、124元祐通宝（1086年）、125紹聖元宝（1094年）、126聖宋元宝（1101年）、127政和通宝（1111年）。

b．II面建物2出土遺物（図28）

1～28―かわらけ　すべて糸切り底のロクロ成形、1～8は小型品で口径7.2cm～8.2cm、底径4.2cm～5.9cm、器高1.6cm～2.2cmを計り、平均が口径7.7cm、底径5.2cm、器高1.9cmである。10・11・22は中型品で口径11.0cm～11.4cm、底径7.1cm～7.3cm、器高3.0cm～3.6cmを計る。12～21・23～26は大型品で口径12.1cm～13.4cm、底径7.1cm～8.7cm、器高3.1cm～3.7cmを計り、平均が口径12.8cm、底径7.8cm、器高3.5cmである。

小型の1・2・8は体部が丸味をおびるが内湾気味にならないもの。3～7は体部が丸味をおびるが中程に稜をもちやや開き気味になるもの。中型の10・11は体部が丸味をおびるが器壁が薄く、器高が高めで口径と底径比の差が少ない。22は内湾気味になり薄い器壁をもつが器高が低く口径と底径比の差がある。大型の11～16は体部が丸味をおびるがやや開き気味になるもの。17～26は体部が丸味をおび内湾気味に立ち上がるが、口縁下の強いナデにより僅かに屈曲する。全体に器壁の薄い作りである。

27・28―手焙り　27は土器質鉢形で口径36.5cm、底径28.2cm、器高9.3cm。外傾した胴部は口縁にいたり肥厚し、口縁が平らになる。底部の器壁は薄く、外底が砂目底になる。胴部の外面は上半が横位ナデ、下半に木口状工具による掻きナデの調整と成形時についた指頭圧痕、底部近くは横位ヘラ削り調整を施す。内面は上半が木口状工具による掻きナデの調整、下側は横位の粗いナデを行う。胎土は粗く芯部まで焼き締まっていない。28は瓦質で底径25.8cm、厚手で外表が研磨され黒灰色の仕上がりになる。胎土は石粒や砂を交える粗い土で灰褐色、焼成も瓦に似た焼き上がり。胴部下半に二本の凸帯が巡り、底部脇は二段の段差がつくように仕上げている。

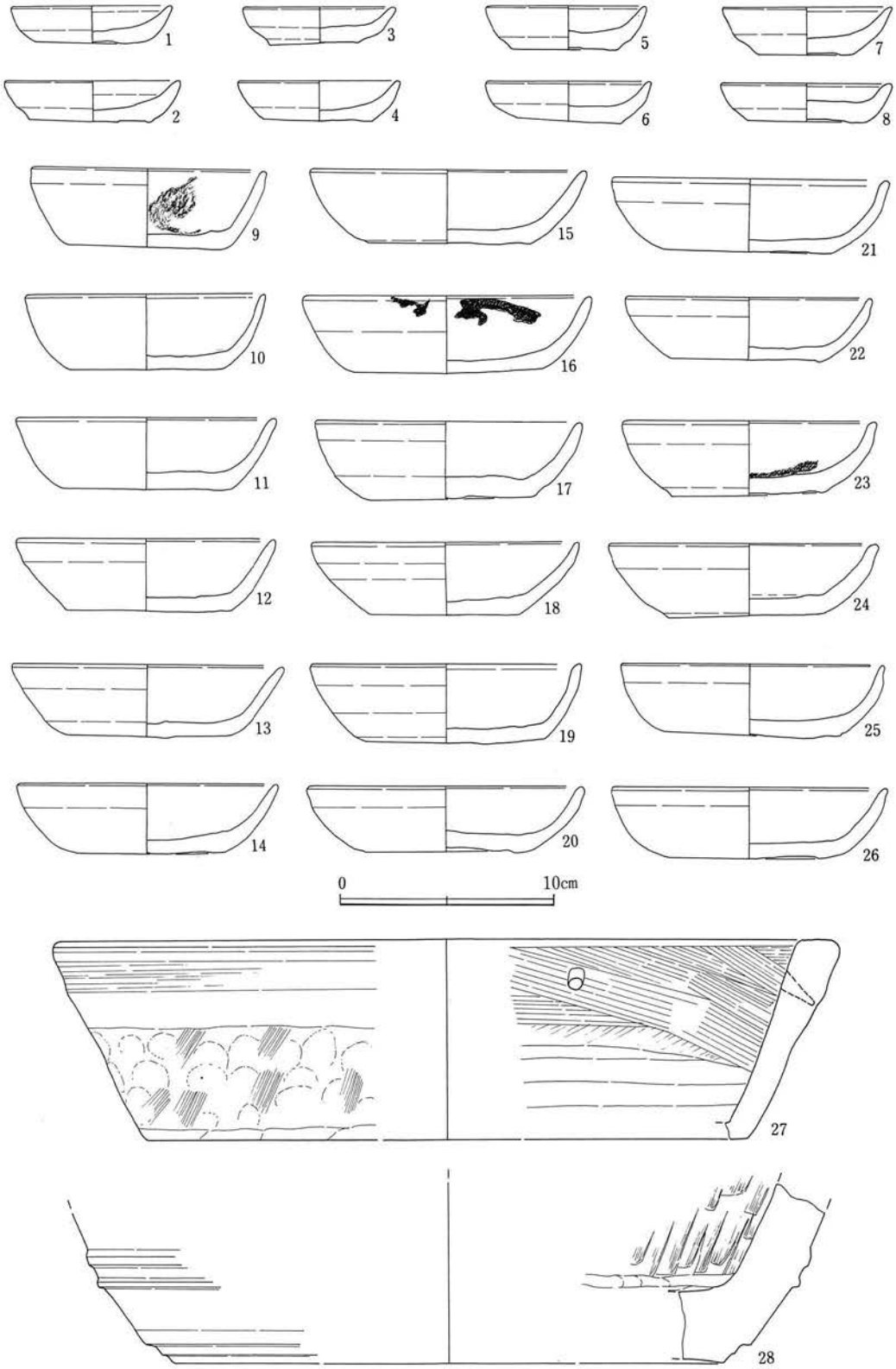


図28　II面建物 2 出土遺物

c．道路遺構出土遺物（図29）

道路遺構に伴う図示可能な遺物は、1～9のII面道路上と10のII面道路構築土中から出土したものだけである。

1～4—かわらけ　すべてロクロ成形、小型品の1は口径7.4cm、底径4.7cm、器高1.7cm、体部はやや浅い角度で直線的に立ち上がる。2は口径7.4cm、底径4.7cm、器高2.0cm、直線的な器壁をもつが口縁部やや内湾している。3は口径7.5cm、底径4.2cm、器高2.0cm、内湾気味の器壁をもつ。

4の大型品は口径12.1cm、底径7.2cm、器高3.3cm、器壁は底部からなだらかに立ち上がり、やや内湾して丸味ある口縁端部にいたる。

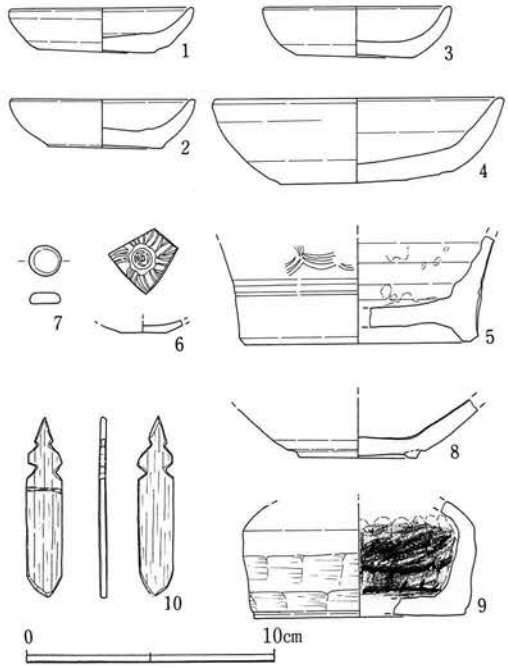


図29　道路遺構出土遺物

5・6—青白磁　5は梅瓶で底径9.2cm。胴部下位には二本の沈線を巡らし、その上位に渦巻文を刻んでいる。高台内部を削り込んで上げ底ふうに整形する。釉薬は淡青白色の透明釉、素地は白色で結晶状になる。6は小皿で底径1.8cm。極めて薄い器壁の内面は中央が牡丹、廻りに花弁ふうの花文を配した型捺し作りである。外底は露胎。釉薬は淡青白色で透明、素地は純白に近く結晶状。

7—瀬戸　灰釉碗で底径4.8cm。付け高台で、外底に糸切り痕が残る。釉薬は深緑色、胎土堅緻。

8—常滑　鳶口壷で底径8.8cm、肩部径9.5cm。外面の胴部下半は横位ヘラ削りで調整、内面は成形時の指頭圧痕を残し、紅のような赤色物が付着する。胎土は茶褐色で白色と黒色の砂粒を含む。

9—碁石　白石で径13mm、厚さ5mm。ほぼ円形で白色の凝灰岩質である。

10—人形木製品　長さ7.4cm、幅1.4cm、厚さ3mmの人形である。薄板に烏帽子を被った横顔を削り出す。下端も削り出し先端を尖らせている。片面頚部下に紐で結んだような圧痕が認められる。

d．溝1出土遺物（図30・31）

溝1の木組み上端はI面検出時に表出しており、1～23の覆土上層からの出土遺物は溝が埋没していく最終段階のものであり、共伴関係にやや混乱が見られるかもしれない。なお、24～67は覆土下層から出土した。

1～12—かわらけ　1～5は小型品で口径7.3cm～7.9cm、底径4.7cm～5.1cm、器高1.8cm～2.2cm。1・2は体部下半で屈曲する器壁を持つのに対し、3は斜め上方に伸びる貧弱な器壁をもち、4・5は薄く内湾気味の器壁を持つ。6も小型であるが口径9.3cm、底径5.1cm、器高2.6cmと一周り大きく、全体に薄手の器壁をもつ。

7～10は中型品で口径11.1cm～11.5cm、底径6.1cm～6.9cm、器高3.1cm～3.7cm。7・8は体部上

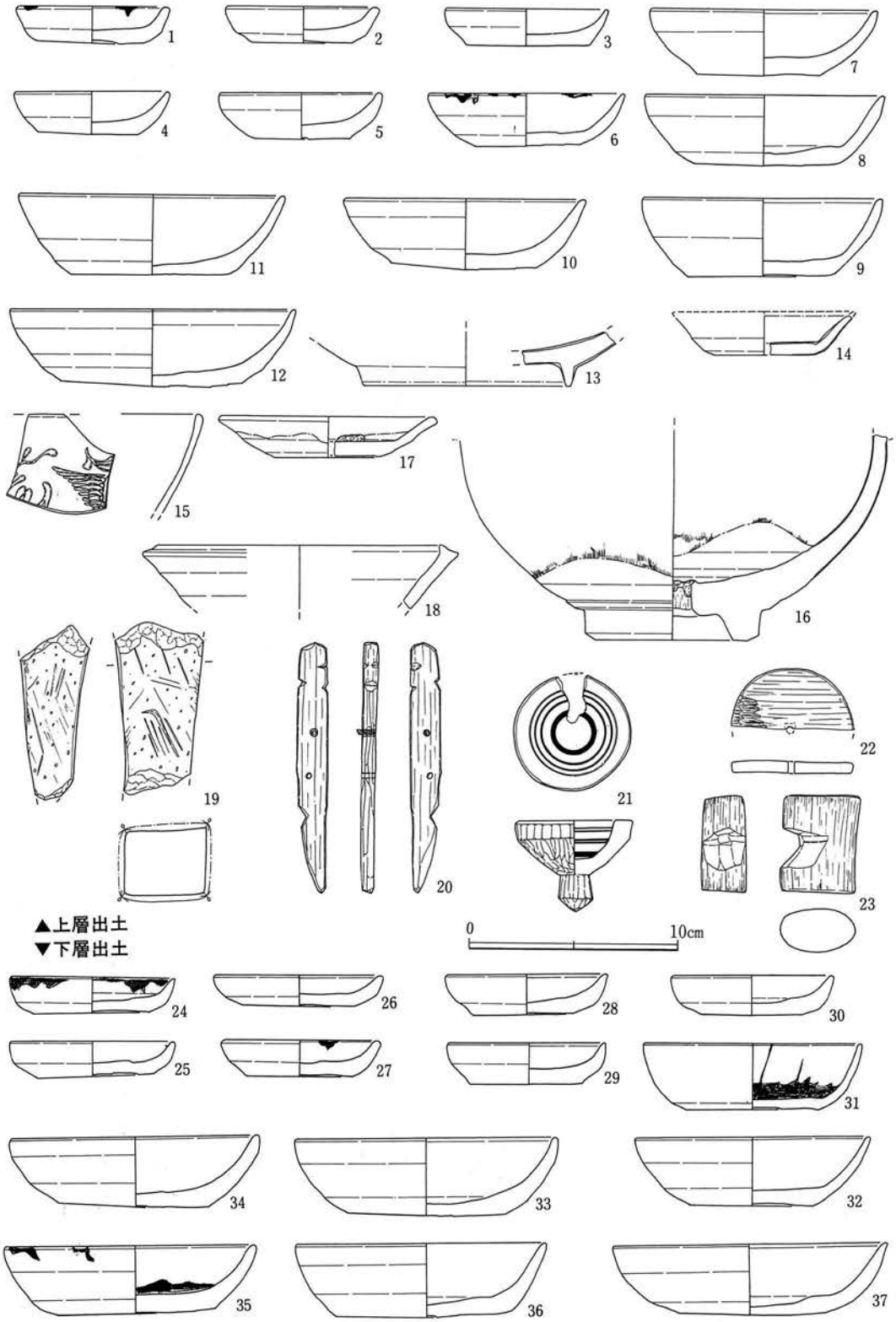


図30　溝１出土遺物(1)上下層

方で屈曲する器壁をもつのに対し、9が斜め上方に伸び中程から内湾気味の器壁になるもの、10は体部がやや浅い角度で直線気味に立ち上がる。全体に底部より体部の器壁が薄い。

11・12は大型品である。11が口径13.1cm、底径7.7cm、器高3.8cmで、12が口径13.8cm、底径8.6cm、器高3.7cmである。全体に薄手で内湾気味の器壁を持つもの。

13—青磁　無文鉢で底径9.9cm、素地は灰色と赤味係った部分があり、釉薬は深緑色で高台畳付を除き厚くかけられる。

14—白磁　口元皿で推定口径8.8cm、底径4.7cm、推定器高2.1cm。口縁部が緩やかに外反し、外底まで釉がかけられる。素地は灰白色で緻密、釉薬は緑味灰白色でやや不透明である。

15—青白磁　碗か、内面には鳳凰の翼らしき文様がのぞく。素地はきめ細かな乳白色、釉薬は青灰色で、二次焼成ために半ば失透している。

16—褐釉　植木鉢で底径8.3cm、体部径20.4cm。側面観は高台が小さく、内湾の強い碗形を呈す。高台内は削り出しで、底中央に径1.8cm程の孔が開けられている。ロクロ成形で体部下端から高台外縁周はヘラ削り整形を施す。素地は白色・赤色石粒を含み粘性が強く硬く焼き締まり、表面が灰褐色、芯部が赤みを帯びた灰色である。釉薬は内面が飴色、白濁した飴色で光沢を持つ。口縁は上端破面から推定して玉縁状に肥厚すると考えられる。

17・18—瀬戸　17は灰釉小皿で口径10.4cm、底径5.3cm、器高2.0cm。口縁部は緩やかに外反し、端部が丸味を持つ。内底に重ね焼きの痕跡(ぼたもち)、外底に糸切り痕を残す。胎土は灰白色堅緻、釉薬は明るい緑色の灰釉が体部上半にかかる。18は卸皿で復元口径15.1cm、直進した口縁の端部が肥厚し、凹みができる。胎土は灰白色堅緻、灰色の釉をハケ塗りする。

19—砥石　中砥で緑味灰白色の凝灰岩質、方柱状の四面とも砥面に使う。

20～23—木製品　20は人形で長さ12cm、幅1.4cm、厚さ7㎜。細長い板材の一端を斜めに尖らせ、反対端を横顔の表相に削っている。首の部分は両側からV字に切り込みを入れ、目も両面から刻んで表現する。下端の片側にも小刀でV字の刻み込みが施されている。中央の二ケ所に孔が開けれ、上孔には細い棒の一部が残る。21は独楽で径5.6cm、高さ4.4cm。口縁部の厚い碗形を呈し、芯棒(ヘソ・径1.5cm)は一対で作り出している。外面は細かい丹念な削り痕を残す。内面は滑らかな器表に仕上げられ、回転施文で2本の二重の細墨線と、その内側に太目の墨入れが行われている。22は径5.8cm、厚さ6㎜、円盤状の木製品であり、中央に径3㎜の孔が開く。23は長さ4.6cm、断面卵形を呈したもので、両端は鋸で平らに切断する。片側をL字に粗く削り込んでいる。用途不明。

24～37—かわらけ　24～30は小型品で口径7.6cm～8.0cm、底径5.0cm～5.5cm、器高1.7cm～2.0cm。これらは概ね底部から斜め上方に立ち上がり、体部下半で屈曲した器壁になる。

31・32は中型品。31は口径10.4cm、底径6.4cm、器高3.2cm、ぜんたいに薄手の丸味をおびる器壁になる。内面には茶色の漆が付着する。32は口径11.2cm、底径6.1cm、器高3.3cm、底部に比し体部の器壁が薄くなる。

33～37は大型品で口径12.2cm～13.0cm、底径7.3cm～8.5cm、器高3.2cm～3.6cm。33～35は底部か

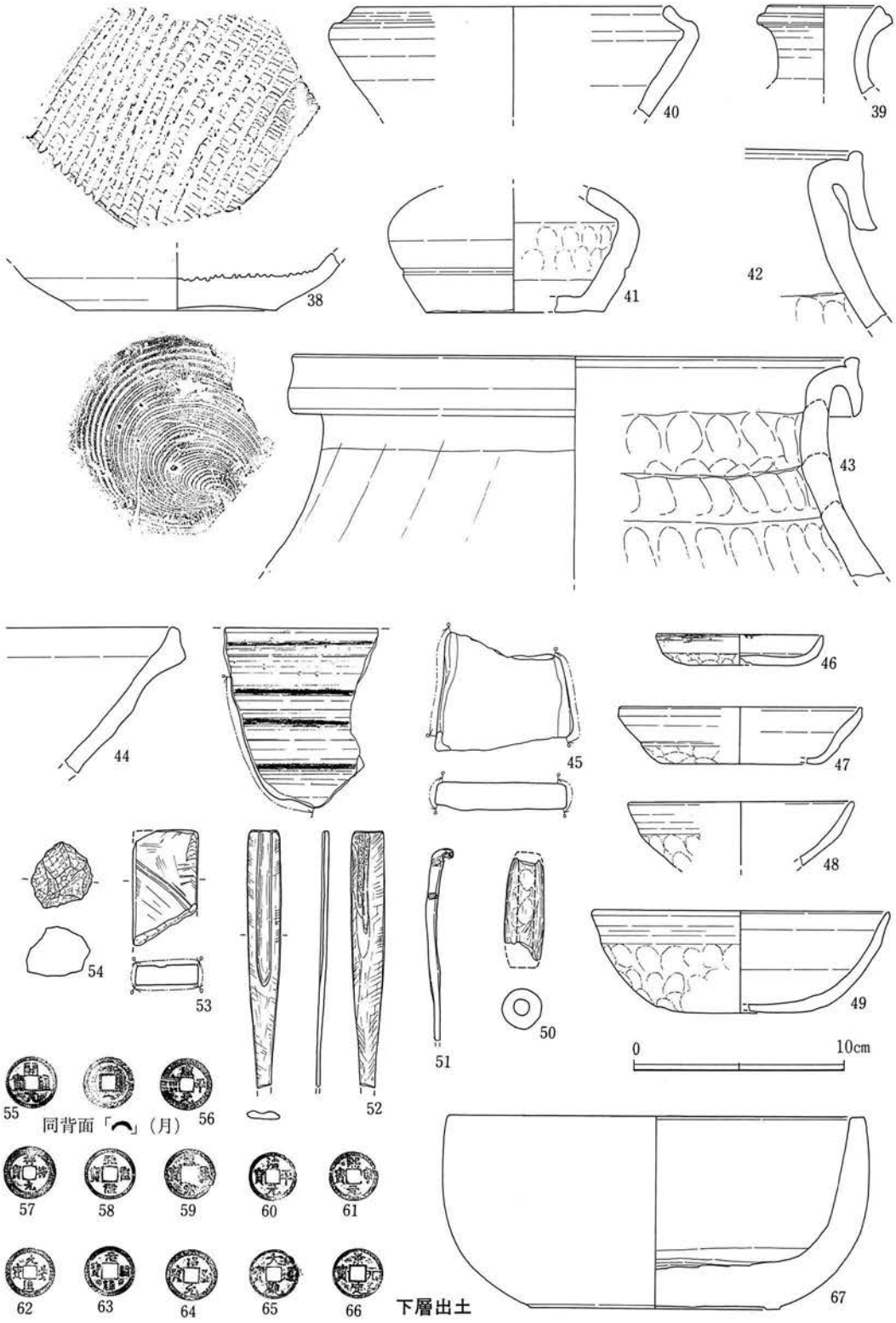


図31　溝１出土遺物(2)下層

ら内湾気味に立ち上がり、体部上半で弱く屈曲した器壁になるのに対し、36は体部が斜め上方に直線的に立ち上がるもの、37は体部が内湾する器壁を持つ。

38・39―瀬戸　38は卸皿で底径9.5cm、厚手で底部が糸切り。卸目は粗雑で、ヘラで斜めに切り込んでいる。胎土は黄味灰白色でやや軟質、淡黄褐色の薄い釉がハケ塗りされている。39は瓶子で口径5.1cm、口縁端部に段差を持つ。胎土は灰白色で堅緻、淡い灰緑色の灰釉を施すが二次焼成で落が目立つ。

40～43―常滑　40は短頸壺で口径14.6cm、最大径17.7cm。体部最大径より1.5cm程上で頸部が終わる。内外面は丁寧な横ナデで調整する。41は鳶口壷で底径8.6cm、最大径12.0cm。胴部は内外面とも横ナデで調整し、下半には太い沈線が巡る。肩部に灰緑色の自然釉の降灰が見られる。胎土は灰褐色で堅緻、器表は黒灰色である。42・43は大甕、42が口縁端部をN字状に折り返し、幅広の縁帯を作る。胎土は灰褐色で岩石質、赤銅色の自然釉が見られる。43は口縁部をく字に外反させ、上下に拡げている。胎土は黒灰色で岩石質、器表はこげ茶色で肩部に暗緑色の自然釉が見られる。

44・45―研磨痕のある陶片　44が魚住捏鉢片を転用したもの、45は常滑片で両側面が磨られる。

46・47―白かわらけ　46は手捏ね成形で口径8.0cm、底径5.2cm、器高1.4cm。体部下半から外底にかけて指頭圧痕が残る。胎土は灰白色で、焼成良好で硬質。47も手捏ね成形で口径11.5cm、底径7.6cm、器高2.7cm。口縁端部は強いナデで尖り気味になる。体部下半から外底にかけて指頭圧痕・指紋が残る。胎土は黄白色で焼きが甘く粉質である。

48―早島式　手捏ね成形で口径10.8cm、外面下半には指頭押しナデ痕が残る。外面上半から内面良くナデ調整が施される。胎土は肌色で細砂質、焼き締まりに欠けるが軽い。

49―瓦器質　手捏ね成形で口径14.2cm、底径7.1cm、器高6.8cm。外面下半には指頭押しナデ痕外面上半から内面かけて丁寧な横ナデを施す。胎土は微砂質で割れ口が板層状を呈し暗灰色である。

50―土錘　径1.9cmの円筒形を呈す。かわらけ質の粘土を棒に巻き付けて製作する。焼成不良。

51―釘　長さ9.2cm以上で断面方形の角釘である。

52―骨製笄　長さ12.2cm以上、幅1.6cm、厚さ4mm。下端を欠損するが両面とも良く磨かれる。

53―砥石　仕上砥で方板状の緑色味灰白色の泥板岩質である。

54―燧石　敲打痕を残し、石材は白色で半透明の石英を用いている。

55～66―銭　55開元通宝(621年)、56咸平元宝(998年)、57祥符元宝(1008年)、58天聖元宝(1023年)、59皇宋通宝（1039年)、60治平元宝（1064年)、61熙寧元宝（1068年)、62元豊通宝（1078年)、63元祐通宝(1086年)、64紹聖元宝(1094年)、65大観通宝(1107年)、66景定元宝(1260年)南宋銭。

67―木器　口径20.2cm、底径12.1cm、器高9.2cmの深鉢である。漆はかけられていないが全体に黒ずんでいて〝目ずり〟をしたものとも考えられる。体部は内湾の強い器形で、厚手の木地で重量感のある作りであり、低い高台を持つ。

e．II面上出土遺物（図32～34）

1～19―かわらけ　すべてロクロ成形、1～12は小型品で口径7.5cm～8.3cm、底径5.0cm～5.7cm、器高1.7cm～2.1cm（12を除く）である。1～3は体部が短めで斜め上方へ直線的に立ち上がる器壁を持つのに対し、4～7は体部下半で稜が付き屈曲した器壁をもち、8～11は体部が内湾して立ち上がる器形で、外面口縁下のナデで幾分屈曲する。12も体部が内湾する器形で口径7.4cm、底径4.4cm、器高2.3cmであるが、他の小型品に比べ器高が高く器壁は薄めである。

13は中型品で口径11.1cm、底径6.8cm、器高3.5cmである。体部が内湾気味に立ち上がり、外面口縁下のナデで幾分屈曲する。

14～19は大型品で口径12.6cm～13.4cm、底径6.9cm～8.3cm、器高3.5cm～3.8cmである。14・15は体部が内湾気味に立ち上がり、外面口縁下のナデで幾分外反気味になる。16・17は体部が緩やかに内湾する器形で、中程に弱い稜がある。18・19は体部が内湾する器形であるが、全体に器壁が薄手である。特に体部壁はかなり薄く整えられ、同じ法量のものに比べ軽量である。

20・21―青磁　ともに蓮弁文碗口縁部片である。21は外面に幅広い複弁蓮弁文がある。釉薬はくすんだ灰緑色、素地は灰白色で粘りが強く締りがある。22も幅広の蓮弁文を持ち、口縁部が僅かに外反する。釉薬は暗青緑色で半透明、素地は灰白色である。

22・23―白磁　ともに口兀皿である。22は口径11.1cm、底径7.3cm、器高2.5cmであり、口縁部が緩やかに外反する。底部は平底で釉を施すが、ザッと拭き取ったようになる。釉薬は緑がかった灰白色。素地は灰白色で結晶状を呈す。23は底径5.5cm、底部壁が厚く露胎である。釉薬は灰白色で白濁している。素地は灰白色の岩石質である。

24―青白磁　小型の水滴である。上・下半部を別々に外型で作っており、把手の痕跡が僅かに残る。外面には六弁花と枝葉をあしらう文様が見られる。素地は極めて精緻、釉薬は青白色だが再火のためか肌が荒れる。

25―黒褐釉　壷で口径5.8cm、直立した短い口縁を持つ。素地はごく細かな土で橙赤褐色を呈し、釉薬は黒褐色で光沢のないもの。

26～28―瀬戸　26は灰釉瓶子で底径7.5cm。底部円板に粘土紐輪積み技法による指頭痕が、内面全体に残る。胴部の外面はヘラによる横ナデで整形する。胎土は灰白色できめ細かく良く焼き締り、淡黄褐色の薄い釉が底部にまで及ぶ。27は卸皿で底径8.9cm。底部は外底が糸切り、内底はヘラで鋭く斜めに切り込んだ卸目がある。胎土は灰白色で、灰緑色の薄い釉がハケ塗りされる。28は入子、口径7.9cm、底径4.4cm、器高3.0cm。丸形を呈したロクロ成形で外底が糸切り。内底面は自然釉が見られるが、かなり磨滅している。胎土は精良で灰色を呈し、焼成は良好で硬い。

29～33―常滑　29は中型の壷、口径12.2cm、最大径23.0cm。口縁部は外反し端部が玉縁状になる。肩部には二条の沈線が巡り、「窯印」ふうのヘラ描きも一部に残っている。胎土は暗灰褐色の岩石質で、器表は赤銅色で肩に降灰が見られる。30・31は捏鉢である。30は口径32.1cm、口縁端部が平らな面をなし、外面の強い横ナデで外反気味である。下半は縦位のヘラ木口によるナデで整形する。

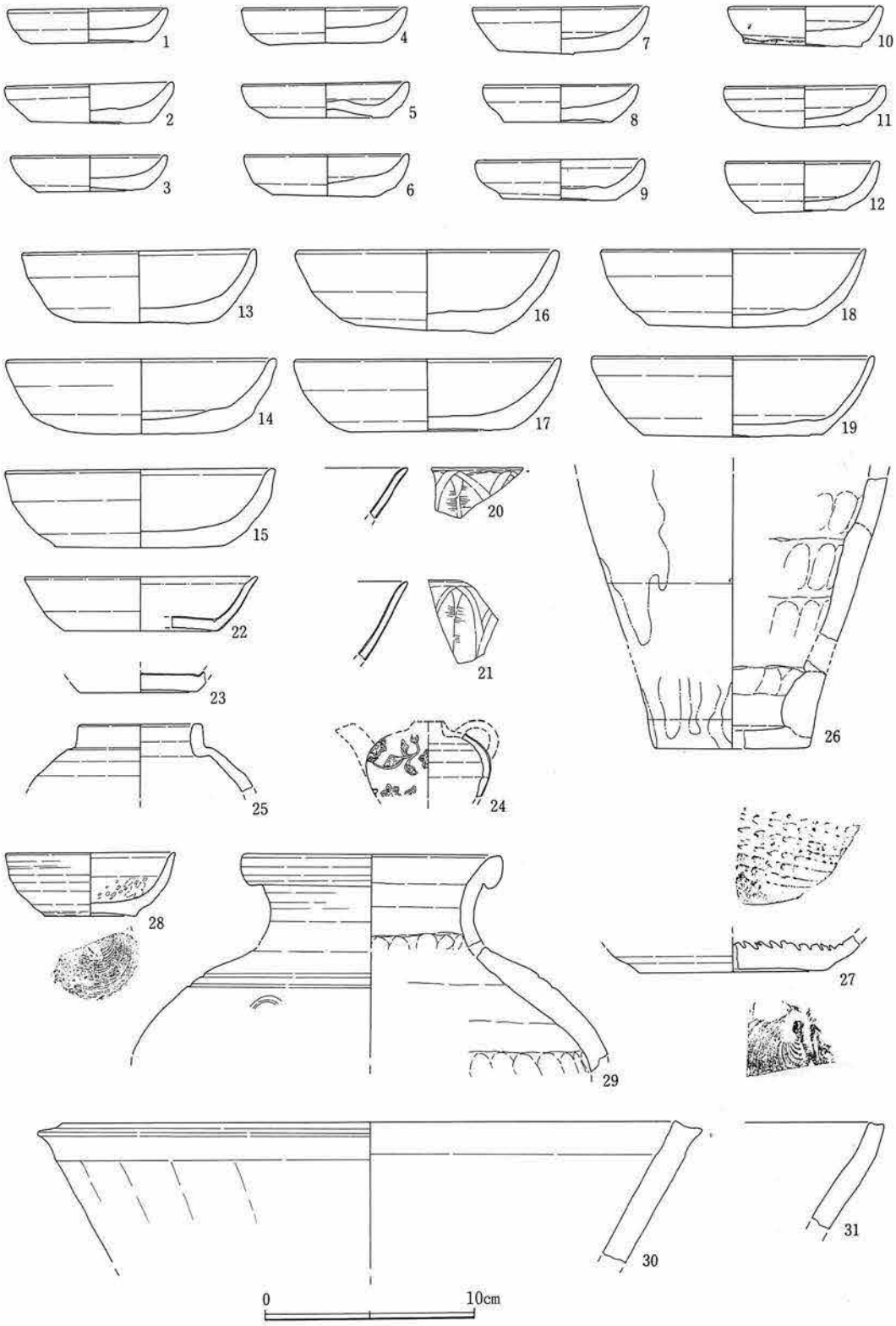


図32　II面上出土遺物(1)

胎土は小石粒の多い粗土で灰黒色である。31は外面口縁下の強いナデで幾分屈曲した口縁になる。胎土は細かな白色石粒を含むが粘り気があり、灰黒色で岩石質の良い焼き上がり。32・33は甕である。32は口径41.2cm、口縁部は「く」字に外反させた後、端部を上下に引き出して縁帯としている。外面はヘラ木口の縦ナデで整形、内面が指頭圧痕と横ナデが残る。胎土は灰色の精良質な土で石粒が少ない。33は口径33.2cm、口縁部は「く」字に外反させ、端部を上下に拡げているが上方の引き出しが強い。外面は頸部が横ナデ、肩下が木口状工具による粗いナデで整形し格子の叩き目を施す。胎土は白色石粒を交え粘性が強く、灰黒色である。

34・35―山茶碗窯系捏鉢　34は底径12.4cm、外面は胴下部にヘラ削りで整形し、断面台形の付け高台を持つ。内底から胴部中程まで良く磨滅している。胎土は灰色で小石の多い粗土である。35は外面口縁下の強い横ナデで外反気味になり、口縁端部が肥厚し丸くなる。胎土は灰色で石粒の少ない土で、焼成は硬く焼き締っている。

36―備前摺鉢　内面の6条一単位の櫛掻き上げ条線は、内底付近で磨滅している。外面は粘土巻き上げ時の指押し痕を横ナデで整形する。胎土は砂・石粒を含む瓦質に近く、焼成は甘い。

37・38―手焙り　ともに瓦質で輪花手焙りになろう。37は外面口縁下に連続した小さな菊花文をスタンプするが、器表は再火の為か爆ぜてしまっている。内面は縦位のナデで整形する。胎土は砂質にとみ、焼成軟質で淡赤灰色に近い。38は外面に大きめの菊花文（16弁）スタンプが押される。内面の整形は口縁付近が横位、以下は縦位の棒状の磨きが施される。胎土は小石粒・砂粒が多く灰褐色、器表が黒灰色で硬い焼き。

39―土鍋　羽釜。直立した口縁の外面下に鍔を付けたものである。胎土はやや粒質の粘土で砂粒を多く含む。外面は横ナデで仕上げている。

40―白かわらけ　手捏ね成形で口径11.2cm、底径7.5cm、器高2.4cm。口縁端部は強いナデで尖り気味になる。体部下位から外底にかけ指頭圧痕が残る。胎土は粒質の土で黄味をおびた白色。

41・42―硯　41は長さ10.2cm、紫褐色の粘板岩で石の目が細かく赤間石かもしれない。硯面は極めて滑らかで、陸部から緩やかに海部へ傾斜する。側面・裏面に製作時の刃物による切断痕を残す。41は長さ6.2cmで陸部が短い。灰黒色の粘板岩で部分的に赤味をおびる。側面の縁が極めて薄く作られている。

43―滑石製鍋　石鍋で口縁の下に鍔が付く。薄めの器壁を持ち、鍔は丸味のある凸形を呈する。外面の整形は口端と胴部が5mm程の巾で縦位の削り、鍔は横位の削りを施す。内面は斜めの擦痕。

44―研磨痕のある陶片　常滑の破片を転用したものである。両側面を中心に磨かれている。

45・46―銭　45元豊通宝（1078年）、46元祐通宝（1086年）。

49・50―漆器　49は輪高台の小型椀で口径11.1cm、底径7.2cm、器高3.2cm。抽象的な模様で何をデフォルメしたものか良く分からない。体部壁に比べ底部が厚く作られる。50も輪高台の椀であり、口径14.5cm、底径7.2cm、器高6.3cm。極めて薄い器壁の精巧な作りである。大空を飛翔する鶴をモチーフにしてデフォルメしたものであろう。

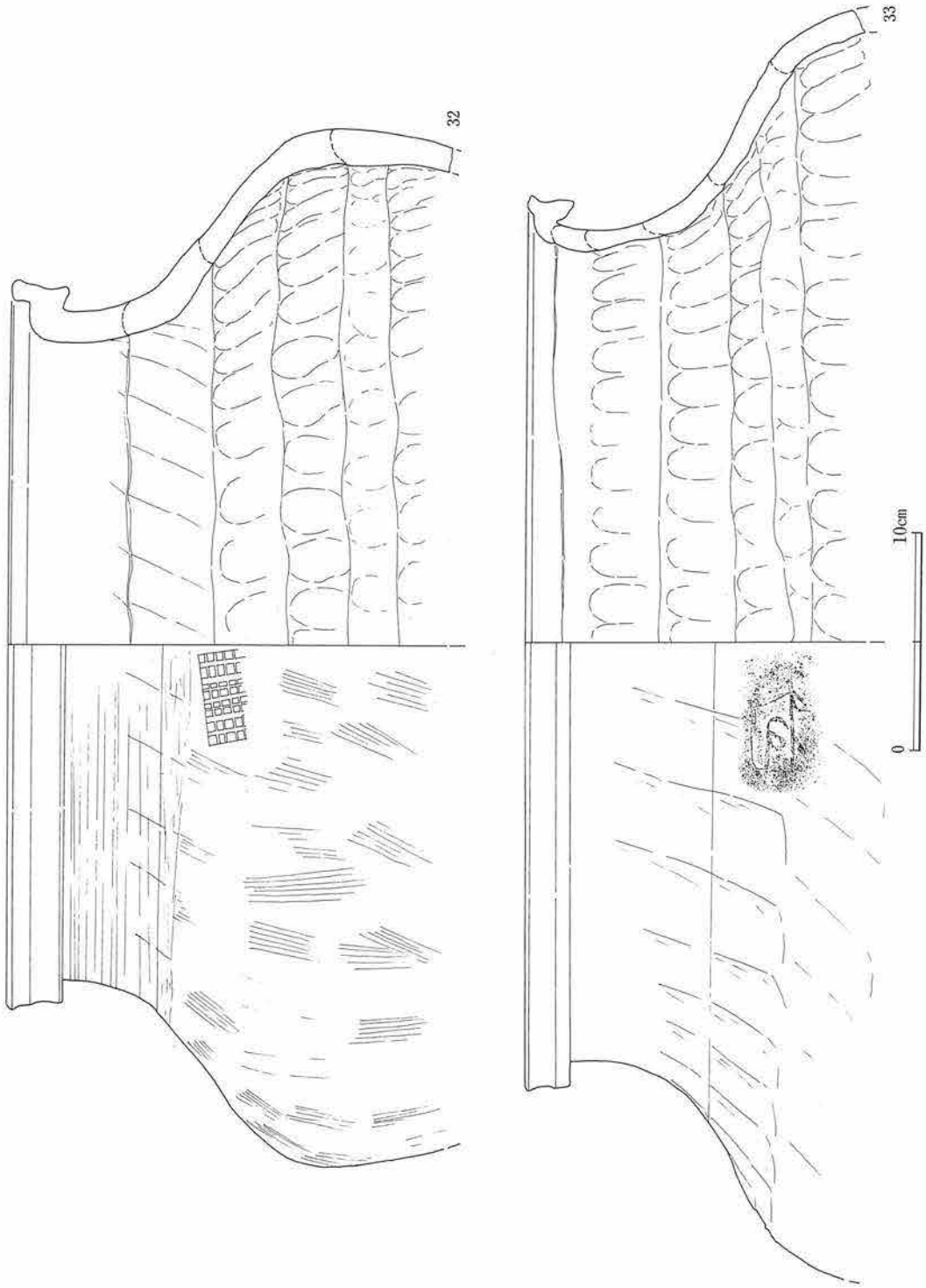


図33　II面上出土遺物(2)

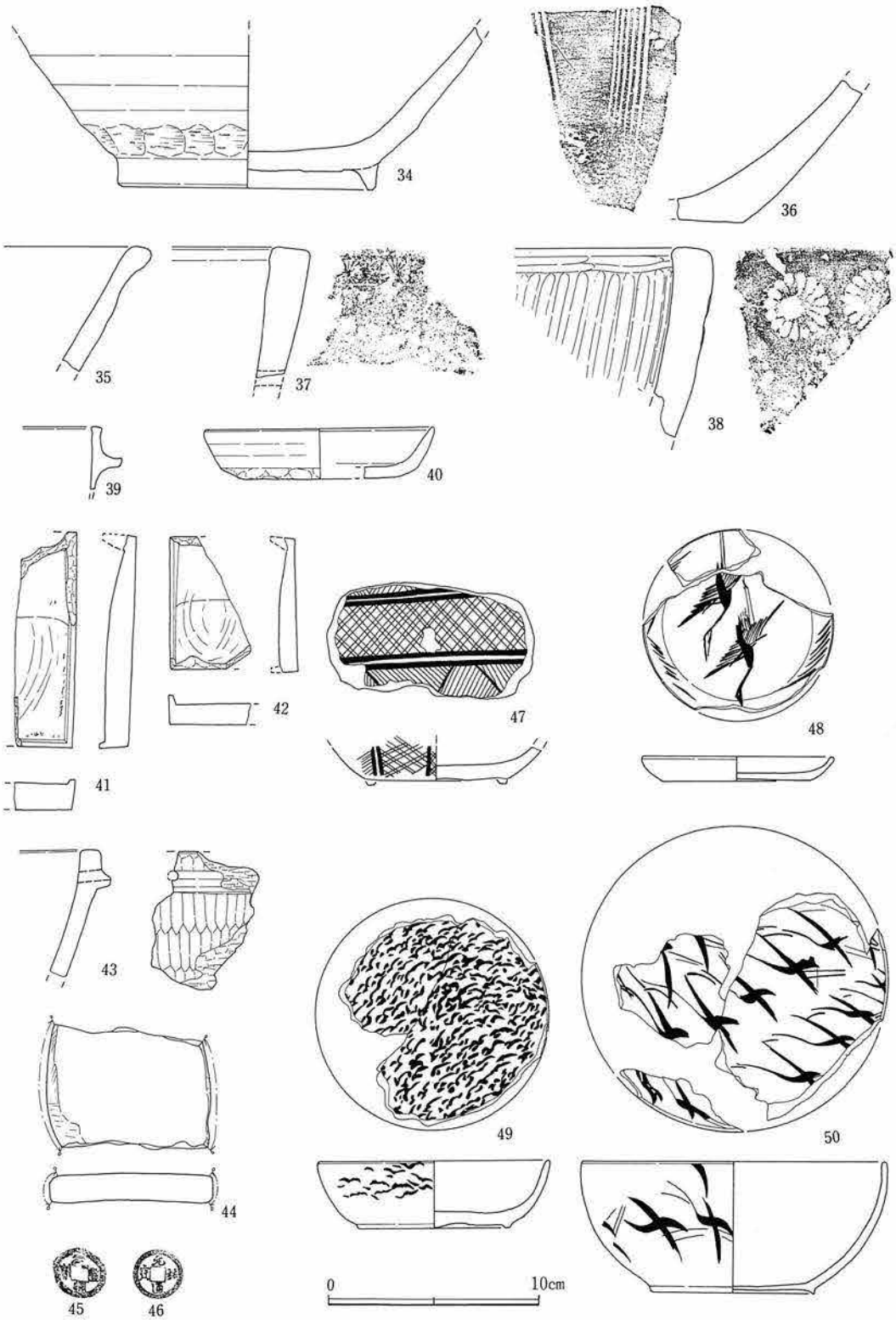


図34　II面上出土遺物(3)

f．II面下かわらけ溜り出土遺物（図35・36）

1～66―かわらけ　すべてロクロ成形の糸切り底。1～32は小型品である。小型のかわらけには、大別して1～24・32の器高が低い一群と、25～31の器高が高めになる一群とに分けることが可能である。器高の低い一群は口径7.4cm～8.2cm、底径4.7cm～5.8cm、器高1.5cm～1.9cmを計る。器高は2cm以下で底径はばらつきがみられるものの、口径が8cmを越えた例（8・18・19・24）は少なく、殆どのものが口径7.7cm前後の数値に収まる。1～3は体部下端が屈曲して短く上方へ立ち上がり、内湾が強い器壁もの。4～19は体部下半に屈曲部が見られ、屈曲部から直線的ないし僅かに内湾気味に立ち上がる器壁を持つ。20～23は体部に屈曲部を持たず、底部から斜め上方に緩やかに内湾して立ち上がる。24は体部が薄い器壁で緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁は外面の強いナデで内傾気味になる。一方、器高の高い一群は口径7.4cm～8.1cm、底径4.6cm～5.5cm、器高2.2cm～2.4cmを計り、器高はすべて2cmを越えていて、薄手の器壁を持つものが多く見られる。25・29・30は器壁が薄く、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。26～28・31は体部下半に屈曲部を持ち、屈曲部から直線的ないしやや外半気味に立ち上がる。24・28・31・32は燈明皿である。この中で特に注目したいのが31・32の燈明皿である。31は外面体部と内面に煤の付着が見られる。内面の煤は、口縁部から内底にかけて正方形状の痕跡として残っている。32は煤の付着が外面は口縁から体部上半にかけて、内面は口縁部から内底にかけて認められる。内面に付着する煤は、方形状の痕跡が濃淡で二重にかさなってみえる。これらの方形状に残る煤は、方形の紙ないし布をかわらけの内面に敷いて油を入れたものか、また油がしみ込んだものを入れてできた痕跡と考えられる。

33～35は口径10.8cm～11.5cm、底径5.8cm～6.3cm、器高3.0cm～3.4cmの中型品。体部の器壁が薄く、内湾して立ち上がる。33・34口縁端部がやや尖り気味であるのに対し、35は丸味をもって治めている。

36～65は大型品。大型のかわらけには大別して36～61の器高がやや低めの一群と、62以下に見られる器高の高い一群とに分けることができる。前者の法量は口径12.3cm～13.7cm、底径6.8cm～8.8cm、器高3.3cm～3.5cmである。口径は59が13.7cmと頭出した大きさで、他のものは13cm以内にほぼ収まる口径であり、器高は3.5cmを越えることはない。36～41は器壁が薄く、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁下のナデのため口縁部が幾分外半する。42～47は体部が緩やかに内湾し、器壁の厚さが体部と底部でさほど変化しないもの。48～53・56・57は体部が幾分内湾しただけで立ち上がり、器壁が体部より底部が厚手になる。58は体部下半が内湾し、稜からやや外半気味になり丸い端部を持つ。54・55と60・61は体部外面の口縁下に稜が巡り、その下が凹んでいる。体部は緩やかに内湾している。54・55が底径が大きいのに対し、60・61は底径が小さい。一方、後者の法量は62が口径12.0cm、底径6.8cm、器高3.8cmで、65は口径13.8cm、底径7.8cm、器高4.0cmと口径にばらつきが見られる。すべて内湾する器形で、器高が高く、器壁が薄く作られたものである。

67―白磁　口兀碗の口縁小片。口縁部は外反がやや強い。素地は黒色粉粒を少量交える白色土。

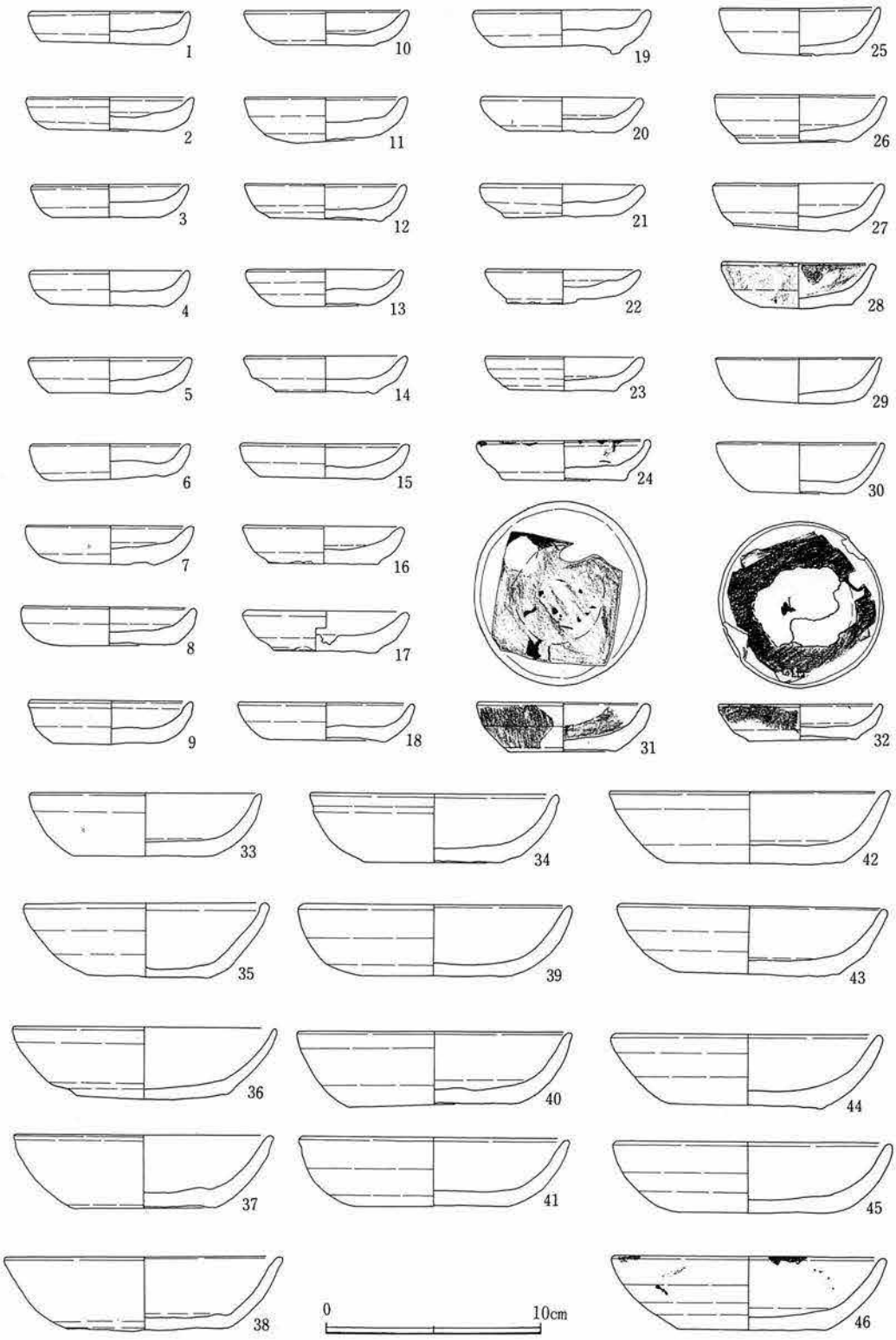


図35　II面下かわらけ溜り出土遺物(1)

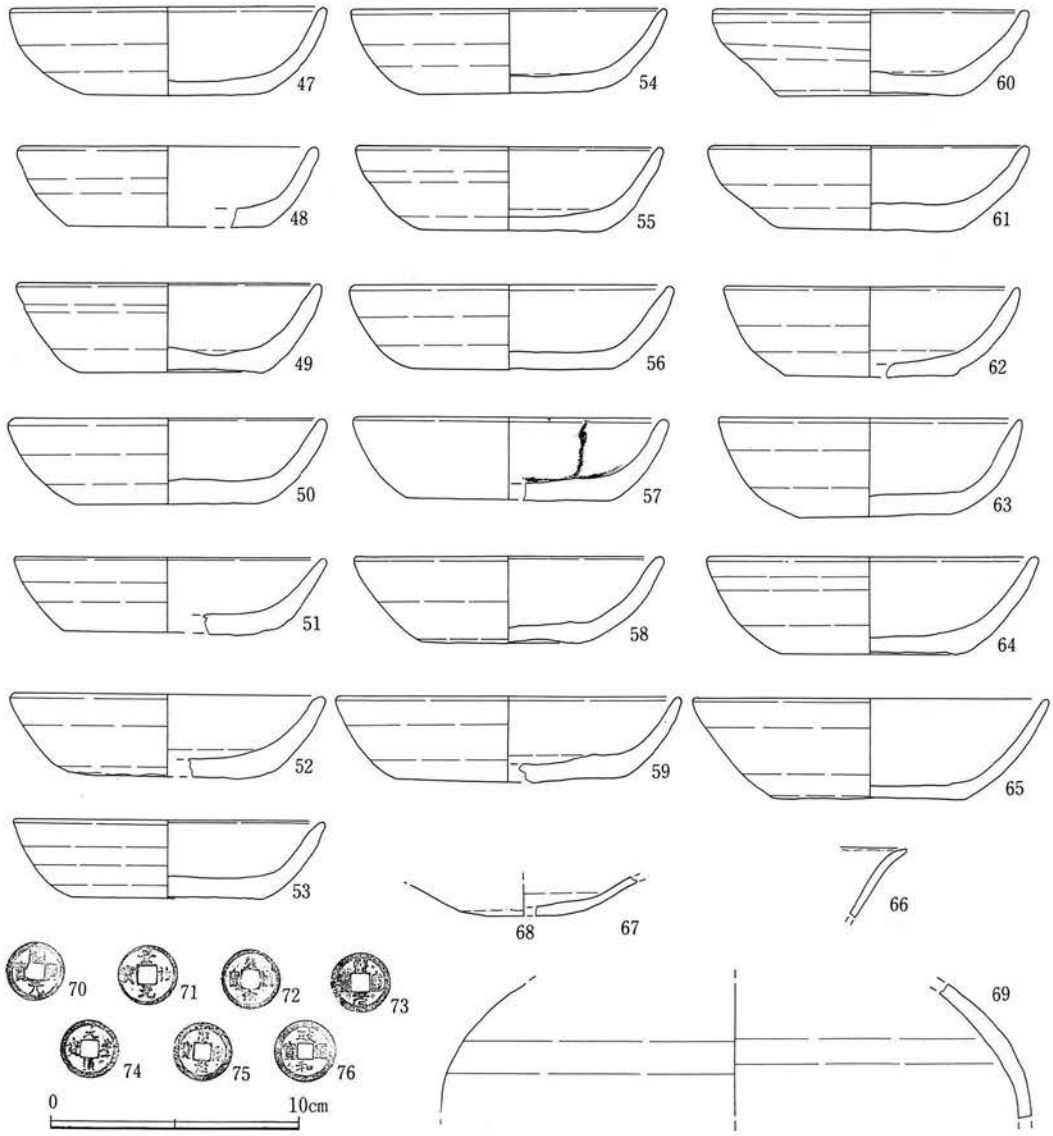


図36　II面下かわらけ溜り出土遺物(2)

釉薬は淡く緑がかった灰白色で透明である。

68—白青磁　皿の底～体部片、底径2.9cm。器形は小さく平らな底部から緩やかに外方に延びる体部で、下端はヘラ削りでやや屈曲して立ち上がり、口縁側は外反する傾向にある。素地は黒色粉粒を少量含む白色土、釉薬はやや失透した水青色である。

69—褐釉　壷の肩部片。素地は灰色で黒色・白色粒をやや多く交じえ、微孔が少しあるが粘性のたかい胎土。外面に淡茶色で光沢のある非常に薄い釉を施している。

70・76—銭　70開元通宝(621年)、71景祐元宝(1034年)、72皇宋通宝(1039年)、73熙寧元宝(1068年)、74元豊通宝（1078年)、75景祐元宝（1101年)、76聖宋通宝（1039年)。

g．II面下出土遺物（図37・38）

1～17―かわらけ　すべてロクロ成形である。1～11は小型品。1～4は口径7.6cm～7.9cm、底径4.4cm～5.6cm、器高1.7cmである。器高が低く、体部は1・2が斜め上方に直線的に、3・4が斜め上方に幾分内湾して立ち上る。ともに口縁端部が薄くならず丸く治まる。5～7は口径7.9cm、底径5.5cm、器高1.9cm～2.2cmである。器高がやや高めで、体部が内湾して立ち上がる。底部は糸切り位置が低いため、厚くなり突出底状を呈する。8・9・11は口径7.8cm～8.0cm、底径5.3cm～5.5cm、器高1.8cmである。体部下半に屈曲部を持ち、屈曲部から直線的ないし僅かに内湾して立ち上がる。10は口径7.4cm、底径4.6cm、器高2.0cm。体部は強く内湾している。

11は墨書かわらけである。内面を中心に抽象化された、立ち姿の鶴二羽が描かれている。外面体部の屈曲部に焼成後の粗い削りが施され稜を部分的に消している。

12～19は大型品。口径12.3cm～12.9cm、底径7.3cm～8.2cm、器高3.4cm～3.6cm。12～14は体部が内湾して立ち上がり、丸味のある口縁端部を有する。15・16は体部は底部から斜め上方にやや直線的に立ち上がり、口縁下のナデで内湾気味になる。17～19は体部が内湾気味に立ち上り、口縁下にナデによる弱い稜が巡る。

20～22―青磁　20は蓮弁文碗で口径11.1cm。細い単弁の鎬蓮弁を外面に配す。素地は灰白色で、釉薬は淡青緑色で厚く、半ば失透している。21は無文碗で口径10.9cm。厚手で内湾した体部を持つ。素地は灰色で堅緻、釉薬は淡青緑色透明である。22は折縁鉢口縁小片。口縁を水平に折り曲げ、端部が上方に引き出した形である。素地は灰白色、釉薬は透明な青緑色を呈し貫入が多い。

23～25―青白磁　23は皿で底径3.0cm。器壁は小ぶりの平らな底部から緩やかに外方に延びる。外底は掻き取りで露胎である。素地は白色で堅緻、釉薬は透明な水青色である。24は花生の底部片。底部から胴部にかけて段状になり、類例から察すると六角形の胴部を呈するようである。素地は白色堅緻、釉薬は透明な青白色である。25は梅瓶胴部片。器表に渦巻文が彫られている。素地は灰白色で結晶状を呈し、釉薬は淡青白色、ほぼ完全な透明釉である。

26―白磁　輪花小皿で復元口径7.0cm、底径2.4cm、器高1.3cm。口縁部に切込を入れて輪花状に表現する。内面に細い区画線の中に草花文を型捺ししている。素地は白色で堅緻、釉薬は透明で白色釉を施すが、口縁端部は釉を掻き取られて口兀になる。

27―褐釉　長胴壷底部片で底径6.6cm。内外底面は粗いロクロ目を残し、こげ茶色の釉が外底まで施されている。素地は茶褐色を呈し夾雑物の少く粘性の強い精良土である。

31―瀬戸　入子で底径4.3cm。ロクロ成形で底部は厚く、糸切り痕を残す。外面に自然釉が見られる。胎土は灰色で精良、焼成は硬質である。

28～30―山茶碗　すべて胎土は水簸された良質土で、焼成が良好で灰白色を呈す。ロクロ成形で薄い器壁をもち、外底には糸切り痕を留める。切り離し後粘土紐を貼り付けて高台を作る。畳付部には籾痕を残す。28が底径5.2cm、29が底径4.6cm、30が底径3.9cmである。

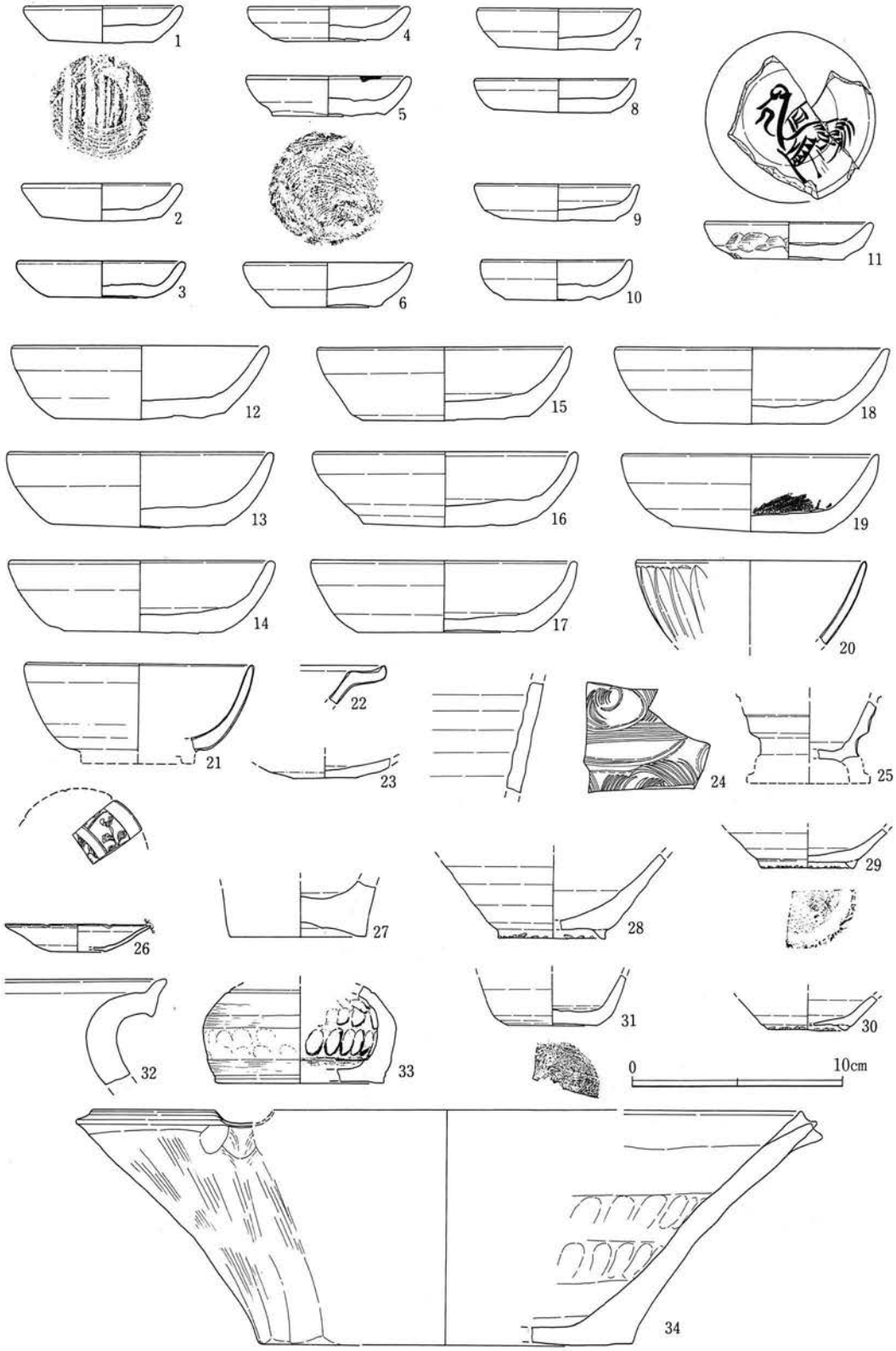


図37　II面下出土遺物(1)

32〜34—常滑　32は甕口縁片。口縁部は強く水平方向に折り曲げ、丁寧な横ナデで口端を上方へつまみ出している。胎土は白色粒を交じえ、粘性のある良土で灰黒色。口縁内面に暗緑色の自然釉がかかる。33は鳶口壷で底径8.1cm。肩部には一条の沈線を巡らし、胴部は指頭圧痕を残す部分と、ヘラ削りで整形を施す部分とがある。内面全体に指頭圧痕を残し、紅が付着する。紅は圧痕の深い所に溜る。胎土は石粒の少ない灰黒色の良土。34は捏鉢、復元口径36.2cm、底径17.9cm、器高11.3

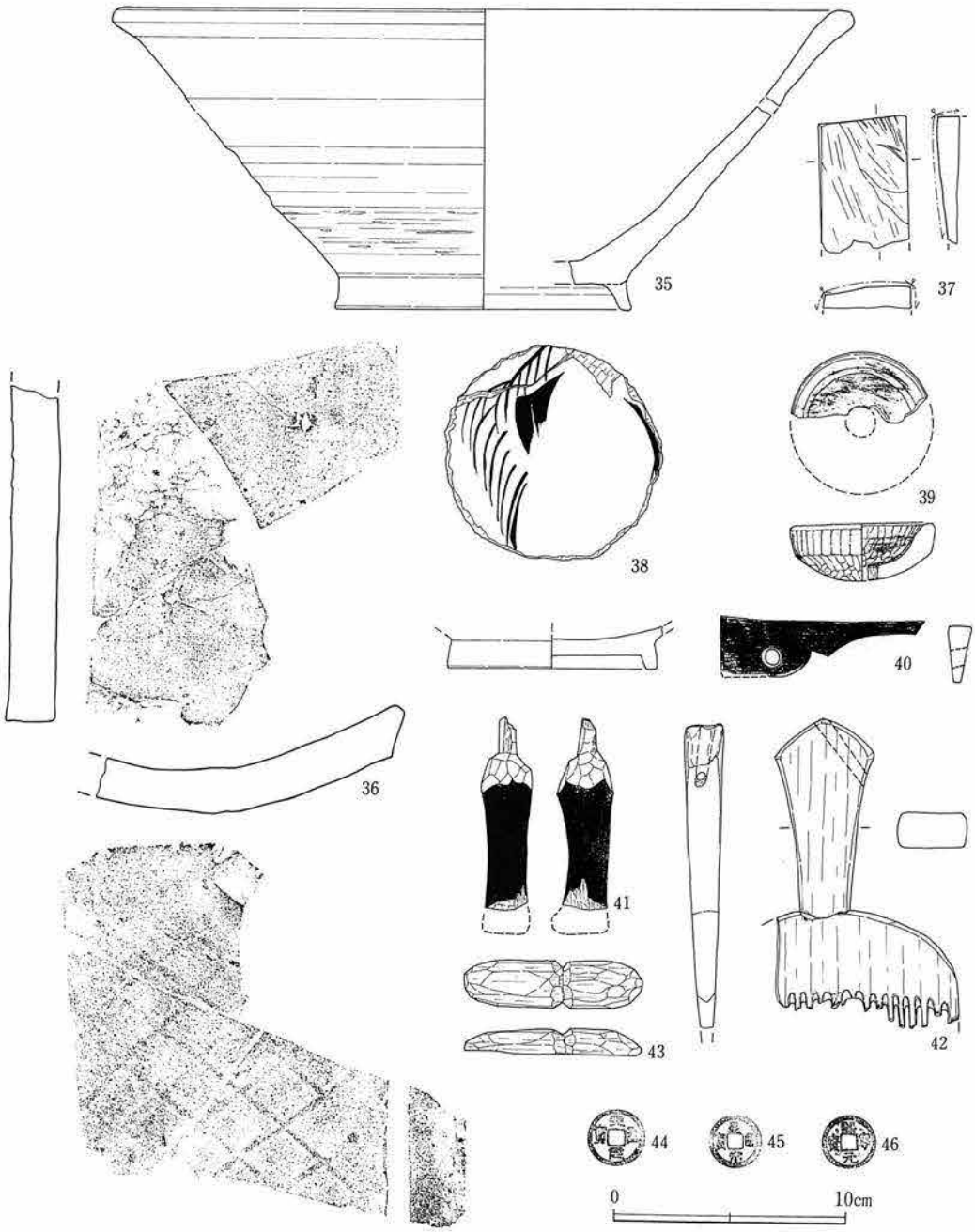


図38　II面下出土遺物(2)

cm。口縁部に片口を持ち、角ばる口縁で端部が凹んでいる。口縁部は横ナデ、下半は木口状工具による縦ナデ掻き上げで整形を施している。胎土は石粒の多い粗土で淡橙色。

35—山茶碗窯系捏鉢　復元口径32.2cm、底径12.9cm、器高12.8cm。口縁部は口縁下の横ナデで外反し、端部が丸味を有してやや肥厚する。胎土は石粒の多いザックリした粗土で、焼成は硬い焼き。

36—女瓦　凸面は斜格子の叩き締めを施す。粗い離れ砂が付着している。凹面は細かな布目痕が残り、離れ砂は見られない。側面は二回のヘラ削りで面取りする。胎土は石英粒・砂粒を含むが粘性があり、硬質な焼きになる。

37—砥石　仕上砥、方板状の緑色味灰白色の泥板岩である。砥面は中央にかけて良く磨滅し薄くなる。両側面は鋸による擦り切り痕がある。

38・40・41—漆製品　38は輪高台の椀で底径8.9cm。「ハ」字形の高めの高台を持つ。内面には波頭をあしらう手描き文様が見られる。周縁の破面は意識的に加工されている。高台内には「＝」と漆掻き落としたによる記号様のものがある。40は脚の飾りとして使われた部品である。黒漆塗りで上端と左端の木口は白木のままである。径6㎜の孔が開く、上端木口にも貫通しない小孔があり、これは膳の盤に取り付けるための木釘穴であろうか。黒漆塗りの膳の脚である。仕口付近は刃物で削りが加えられ、下端は欠損する。

39・42・43—木製品　39は独楽である。復元直径6㎝で口縁部の厚い碗型を呈す。内外面は細かく丹念な削りを施し、さらに墨が全面に塗られている。芯棒は差し込み式で中央に径1.2cm孔が開く。42は竪櫛で長さ13cm以上、幅11.6cm前後、柄の長さ8.3cm。頂部は如意頭状を呈し側面に抜ける斜めの孔がある。歯は推定18本あったものと思われる。43は用途不明品である。表面は両端が丸味を持たせて断面半円形に削り、片面は平らでに仕上げている。中央部には深い削り込みが加えられ、凹んだ形になる。

44～46—銭　44天聖元宝（1023年）、45皇宋通宝（1039年）、46熙寧元宝（1068年）。

3．Ⅲ面

a．Ⅲ面遺構出土遺物（図39）

土壙2

1・2—かわらけ　1はロクロ成形の小型品である。口径9.5cm、底径7.0cm、器高2.1cmで体部は斜め上方に伸びる貧弱な器壁を持ち、器高の低いもの。2は手捏ね成形の大型で、口径12.2cm、器肉は薄く、体部中位の稜はさほど強くなく、丸味のある口縁端部を持つ。

3—銭　開元通宝（621年）。

柱穴9

4—かわらけ　手捏ねかわらけの大型品である。口径12.3cm、体部中位にくびれを有し、尖り気味の口縁端部を持つ。胎土はきめが粗く、灰黄色を呈す。

柱穴14

5～7—かわらけ　5・6は手捏ね成形、7はロクロ成形の製品である。5は小型で口径9.6cm、器肉が薄く、体部中位の稜はやや強く、尖り気味の口縁端部を持つ。6は手捏ねかわらけの大型品で口径13.5cm、体部中位の稜は非常に強く、尖り気味で凹んだ口縁端部を持つ。7は大型品で復元口径12.6cm、底径8.2cm、器高3.1cm、浅くて器高の低い皿形を呈する。体部中位でやや外反し、厚手の器壁の作りである。胎土に白色針状物質が多く見られる。

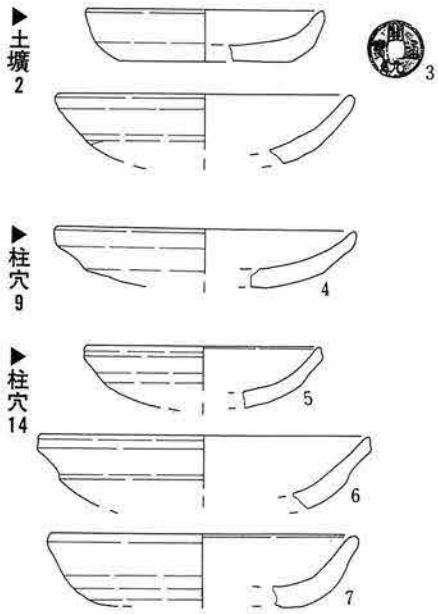


図39　III面遺構出土遺物

b．III面溝2出土遺物（図40・41）

1～15—かわらけ　1～12は糸切り底のロクロ成形、13～15は手捏ね成形の製品である。

1～7は小型品。1～5は口径7.8cm～8.0cm、底径5.4cm～5.8cm、器高1.7cm～1.9cmである。1・2は体部が斜め上方に立ち上がり口縁部が内湾する器形を呈するのに対し、4・5は体部下半に屈曲部をを持ち、屈曲部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部が薄くなるもの。5は器肉が均一で、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が丸味をもつる。6は口径8.8cm、底径6.1cm、器高1.4cm、器高が低く器壁の極めて薄いもので、体部は斜め上方へ内湾気味に延びる。7は口径9.3cm、底径6.7cm、器高2.0cm、体部は斜め上方へ内湾気味に延びる貧弱な器壁を持ち薄い作りの口縁部を有する。8～12は大型品。8～10は口径12.3cm12.8cm、底径7.3cm、8.1cm、器高3.5cmである。8は体部が内湾して高めの器高を持ち、器肉は底部が厚く体部から口縁にかけて薄くなる。9・10は厚手の器肉を持ち、体部が内湾気味に立ち上がる。11は口径に比べ底径の小さくなるもので、体部は内湾気味に立ち上がり口縁下のナデにより端部が尖り気味になる。12は口径13.0cm、底径8.3cm、器高2.9cmと低い器高を有し、内湾した体部を持ち底部の厚い器壁である。

13～15は手捏ね成形の大型品。13は口径13.0cm、器高3.0cmと低い器高を有する。体部下半の稜の弱いもので、口縁端部がやや尖り、外底は凹んだ形である。14は口径13.0cm、器高3.2cm、体部中位の稜がさほど強くなく、口縁端部が丸味を持つ。15は口径13.2cm、器高3.7cm、体部中位の稜が強く、くびれを有し体部に比べ底部が厚手の器肉を持ち、尖り気味の口縁端部である。

16～18—青磁　16は櫛掻文皿の体部片、復元口径9.5cmである。釉薬は灰緑色で透明。素地は黄色味をおびた灰色で気孔を含むが堅緻である。17・18は鎬蓮弁文碗である。17は口径14.5cm、幅広の蓮弁文をもつ。釉薬は青緑色で透明。素地は灰色、粘りが強く締りが良い。18は口径16.3cm、幅広

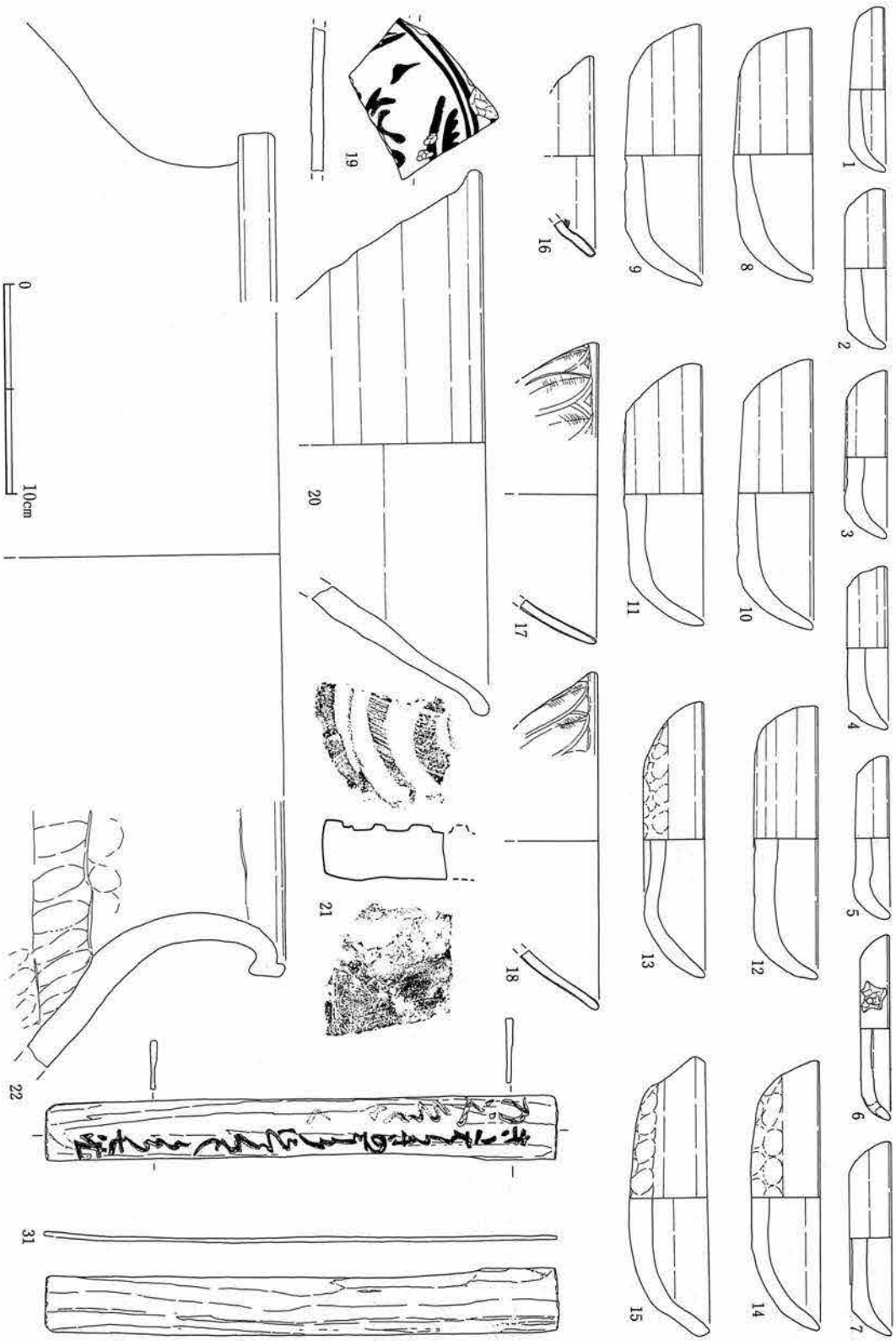


図40　III面溝 2 出土遺物(1)

の蓮弁文をもち、口縁部はわずかに外反する。釉薬は淡青緑色で半透明。素地は灰色で粘性強い。

19―黄釉陶器　泉州窯系の盤底部片である。黄土色の釉の地に茶褐色の鉄絵で文様を描いている。外底は露胎の砂底でナデで整形する。素地は石粒が少ない粘性のある土で、焼成良好。

20―山茶碗窯系捏鉢　口径26.2cm、口縁部は口縁下の横ナデで外反気味になり、端部が丸く肥厚する。胎土は石粒の多いザックリした粗土、焼成は硬く焼き締り灰色である。

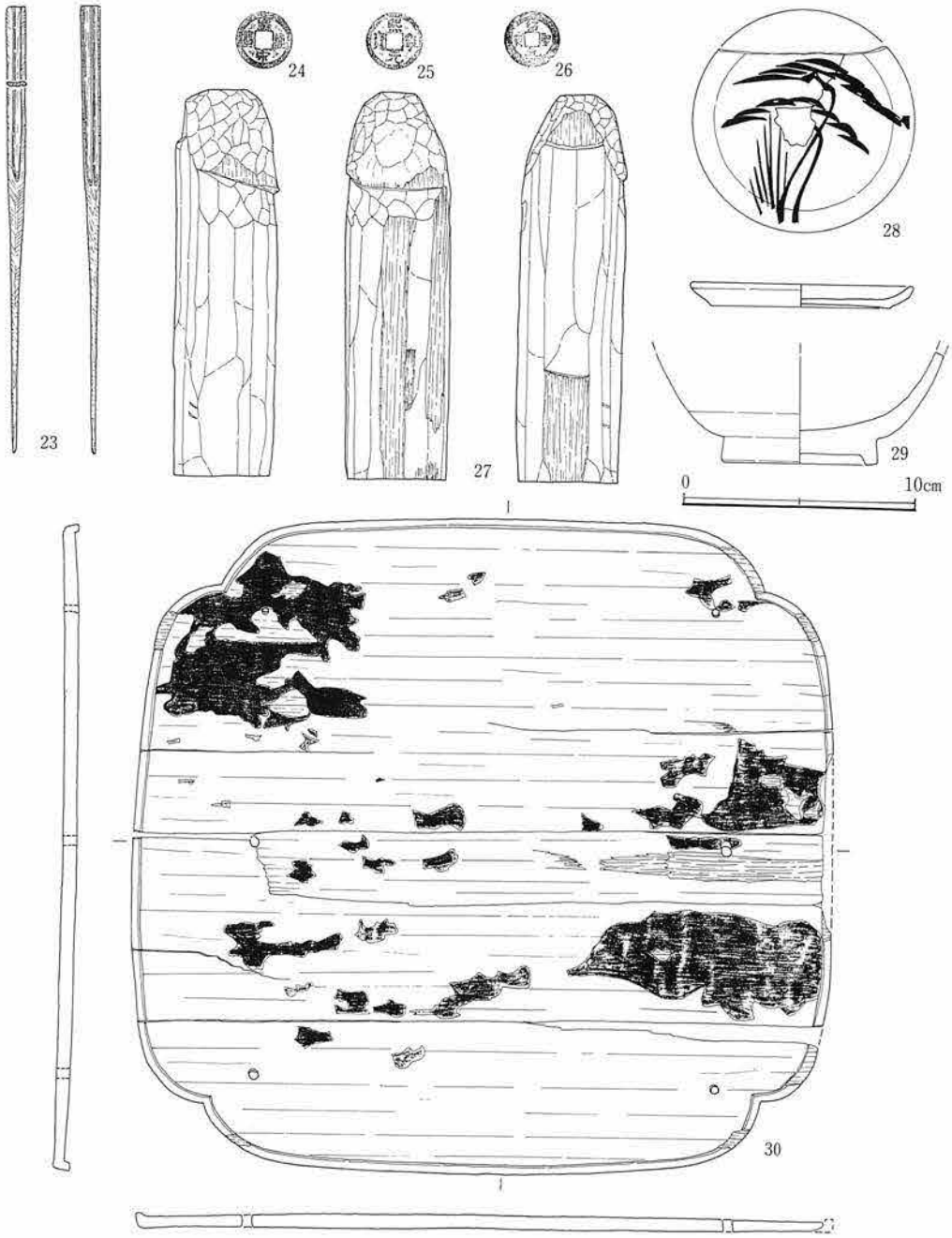


図41　III面溝 2 出土遺物(2)

21—鐙瓦　瓦当文様は左回り三巴文である。巴文は断面台形状を呈し、周縁部は幅が狭く低い作りで、離れ砂が付着する。瓦当面には粘土剝ぎ取り時の糸切り痕ないし苑の木目の条線が認められる。瓦当裏面には指頭圧痕を残す。胎土は石粒の多いもので、焼成良好、茶灰色を呈す。

22—常滑甕　復元口径40.2cmである。口縁部は強く横方向に外反させ、丁寧な横ナデで口端を上方につまみ上げている。胎土は白・黒石粒の多い岩石質もので、灰褐色をを呈す。

23—骨製笄　長さ19.2cm、幅0.8cm、厚さ３㎜と細長く、両面ともに良く研磨されたものである。

24～26—銭　24皇宋通宝（1039年）、25熙寧元宝（1068年）、26紹聖元宝（1094年）。

27—木製品　陽物で長さ16.8cm、径4.4cm。丸棒状になる様に削り出し、頭部は刃物により丁寧な削りで仕上げている。上面はやや平らな作りである。

28～30—漆製品　28は無高台の皿で口径9.6cm、底径7.6cm、器高1.0cmである。木地・漆の状態は良好で、朱文は抽象的で松をモチーフにした文様を内面だけに描いている。成形時のロクロ目痕を残すが、薄手の器肉である。29は輪高台の椀で底径7.6cm、漆は部分に剝がれており、木地には〝めずり〟が見られる。しっかりした造りの高台である。30は黒漆塗り膳で長さ30.3×28.3cm、厚さが中央６㎜、両端５㎜であり、四隅は削り込んで雲形状にする。外周には低い縁がめぐる。二脚が取り付くらしく、四隅付近と左・右の中央六ケ所に孔が開けられ、膳部と脚部を取り付けるため使われた木釘も一部遺存する。漆は遺存状態が悪く剝がれが多い。

31—木簡　「きたは（ほ）ゟきの（ニ）うにて候ゟとち七（圓）御いにて候□□…」と読める。長さ24.4cm、幅が上端3.1cm・下端2.5cm、厚さ２～３㎜で長方形の薄い板目材を使用し、両端には鋸引きで切断し、刃物で削り側面を整えている。溝の最下層から出土した。

c．Ⅲ面上出土遺物（図42・43）

1～11—かわらけ　１～７は糸切り底ロクロ成形で、８～11手捏ね成形の製品である。

１～６は小型品。１～３は口径7.4cm～7.6cm、底径5.3cm、器高1.8cm、体部中位にやや弱い屈曲部を持ち内湾する器形を持つ、体部に比べ底部の厚いもの。３は外面口縁に指頭押しによる片口状のものが見られる。４は口径8.5cm、底径6.4cm、器高1.8cmで体部下半に屈曲部を持ち、内湾気味の器形で一周り口径が大きく、内底部が盛り上がる。５・６は器高が低く内湾した貧弱な器壁を持つものである。５が口径8.1cm、底径6.4cm、器高1.5cm、６が口径8.9cm、底径7.4cm、器高1.5cmである。大型の７は口径12.7cm、底径8.5cm、器高3.1cmである。器高が低く体部下半に弱い稜を有し、浅い角度で立ち上がる。

８・９は手捏ね成形の小型品。８は口径9.3cm、器高1.8cm、９は口径9.2cm、器高2.1cmである。８は体部下位の稜が明瞭でないが、口縁部はくびれ端部が尖り気味になり、薄い器肉である。低い器高。９は体部下位に強い稜が巡り、口縁はナデ整形により端部が尖る。10・11は大型品である。10は口径13.5cm、器高3.9cm、９は口径13.1cm、器高3.8cmである。体部中位に強い稜を持ちくびれを有し、尖り気味の口縁端部になる。比較的薄手の器壁である。

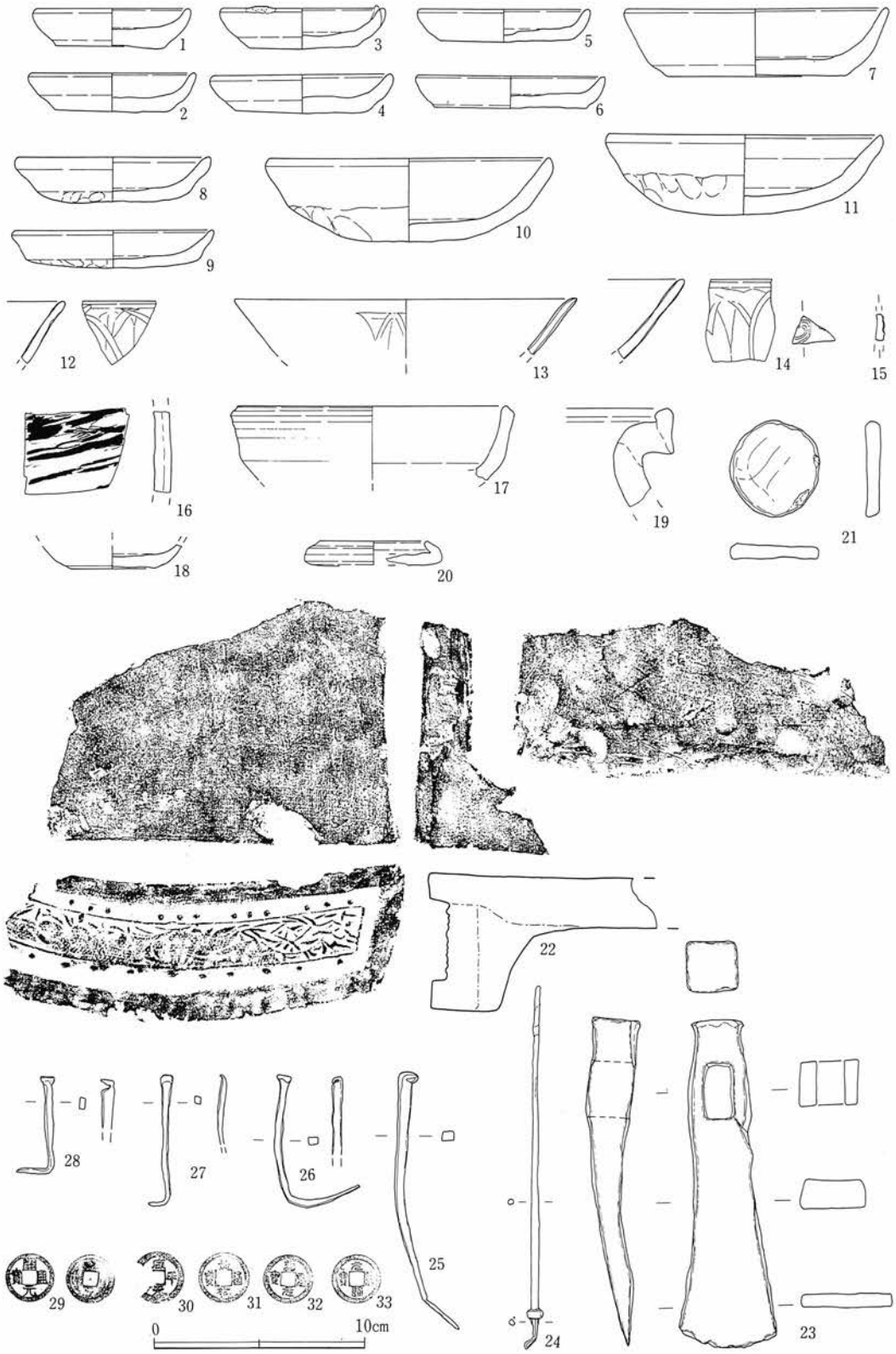


図42　III面上出土遺物(1)

12～14―青磁　すべて鎬蓮弁文碗口縁片である。12は口縁部が僅かに外反する。幅広い蓮弁で稜線が明瞭にわかる。素地は灰色で粘性が強い。釉薬は灰緑色の透明である。13は復元口径16.4cm、鎬の稜線が見られる。素地は灰色でやや岩石質で、釉薬は淡い青灰色の不透明である。14は幅広い蓮弁で明瞭な稜が残る。素地は灰白色で堅緻、釉薬は淡い青緑色の半透明である。

15―青白磁　水滴の体部片か。素地は白色で堅緻、釉薬は淡い水青色の透明である。

16―褐釉　壷胴部片と思われる。褐灰色の緻密な素地に粗砂・石粒を少し含み、石粒が溶けかける程よく焼き締ったものである。釉薬は外面が黒褐色に、内面がまだらに施される。

17・18―瀬戸　17は卸皿で口径13.5cmである。体部に屈曲を持ち上方に立ち上がり、口縁端部が角ばるものである。器壁が薄い造りである。胎土は黄色をおびた灰白色で、灰緑色の薄い釉がハケ塗りされている。18は入子、底径4.0cmである。丸形を呈したロクロ成形のもので、外底には糸切り痕が残る。内底に降灰が見られる。胎土は精良で灰色を呈し、焼成は硬い焼き上がりである。

19―常滑　甕口縁片である。口縁部は強く水平方向に折り曲げ、丁寧なナデで口端を上方のみに引き上げられている。胎土は白色粒を少し含んだ良土で灰黒色を呈しする。

20―白かわらけ　復元口径5.2cm、器高1.2cm。口縁が内方へ折り曲げられる「内折れ」形の小皿である。口縁は回しナデの段階で内側へ折り込む。胎土はきめ細かい粘土に微細砂を若干交え、肌色に近い色調である。

21―かわらけ円盤　ロクロ成形のかわらけを円形に加工したものである。径4.3cm、厚さ6㎜、外周は丸く打ち欠いた後、研磨している。

22―宇瓦　瓦当の厚さ6.5cm、復元上弦・下弦幅25.1cm・24.2cmの段顎形式である。内区文様は蓮華の蕾をもつ扁行唐草文である。界線により内外区を分け、外区内縁に珠文を置いている。珠文は上外区が三個一組にしたもので、下外区は密に配したもので、脇区には見られない。瓦当面に布目痕が着くが折り曲げ造りではなく、女瓦端部に別粘土を貼り付けて瓦当部としたものである。凹面には布目痕、凸面はナデ調整を施す。表面が灰黒色、胎土は灰褐色の精良土で良く焼き締る。

23～28―鉄製品　23は長斧、長さ15.6cm、刃部幅4.7cm、柄取付き部幅2.9cm・厚さ2.1cmである。頂部は断面方形で厚く刃部に向かって内側に丸みを持ちながら薄くなり、扇形を呈した刃先に作られている。柄を差し込む長方形の孔が開く。24は長さ17.4cmの火箸である。身部の断面は丸形で柄に取り付く部分は四角に近い形である。身部と柄部の境めの所は太くなる。25～28は角釘である。25は長さ13cm、幅6㎜程である。26は長さ9.6cm、幅4㎜程で、27は長さ6.6cm、幅4㎜程、28は長さ6.2cm以上、幅5㎜程である。

29～33―銭　29開元通宝（621年）・背面「⌣」、30咸平元宝（998年）、31嘉祐通宝（1056年）、32紹聖元宝（1094年）、33元符通宝（1098年）。

34・35―硯　34は長方硯、長さ11.7cm以上、幅5.7cm以上である。断面台形状を呈す。周縁部は細かく打ち欠いている。灰黒色の粘板岩質である。35は長方硯、長さ12.2cmである。灰黒色の粘板岩質で部分的に赤味をおびる。周縁は薄く低い。陸部と海部にそれぞれ墨痕が見られる。

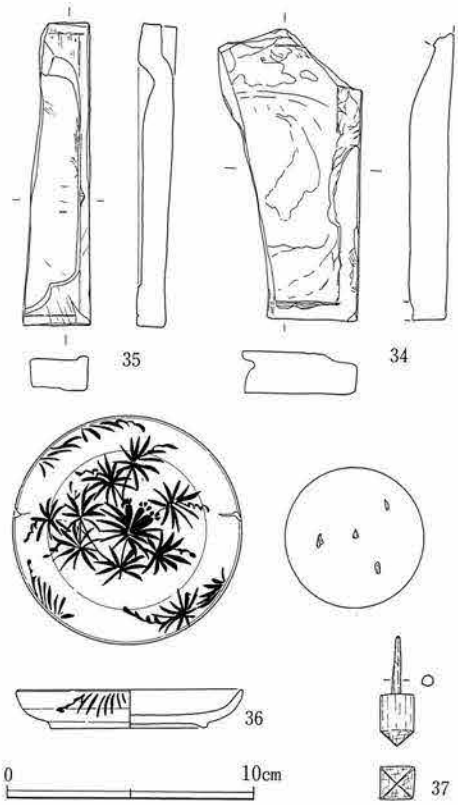


図43　III面上出土遺物(2)

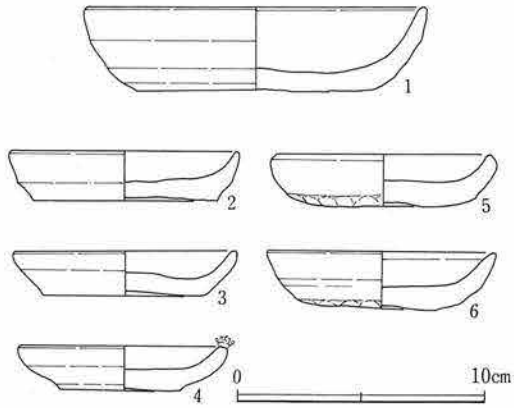


図44　III面下第１トレンチ出土遺物

36―漆器　輪高台皿で口径9.0cm、底径6.3cm、器高1.6cmである。漆・木質部は遺存状態良好である。文様は南国風の木を思わせる手描きの図柄である。器表は光沢があり、朱はやや黒んでいる。高台内にはロクロ爪の跡が残っている。

37―木製品　独楽で高さ4.7cm、芯棒長さ2.4cmである。身部は長方体を呈し、高さ2.1cm、幅1.3cm四方で先端部の尖った四角椎状に削り出している。芯棒は丁寧な削りで断面を丸く仕上げており、身部とは差し込み式で接合している。

４．トレンチ調査

ａ．III面下第１トレンチ出土遺物（図44）

１～６―かわらけ　１～５はロクロ成形で、５・６は手捏ね成形の製品である。

１は大型で口径13.8cm、底径9.8cm、器高3.3cmである。体部は内湾して浅い角度で立ち上がる器形を持ち、器高が低く体部のロクロ目が良く残る。外底には細かな糸切り痕が認められる。２～４は小型品である。２は口径9.4cm、底径7.6cm、器高2.0cmで、大きい口径で、底径比との差が余りない。体部下半に屈曲部をもつが、口縁端部が尖り気味の楔形を呈した器壁である。３は口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.8cmである。体部は底部に比べ薄い器肉で、斜め上方に直線的に立ち上がる器形を呈している。外底の糸切りは低い位置で行われ凹んでいるが、内底は突出状を呈す。４は口径8.5cm、底径4.8cm、器高1.8cmである。口径と底径比との差が大きい。体部は斜め上方に内湾しながら立ち上がり、口端が丸く仕上げられている。厚手の器壁をもつ。口端の一部は焼成後のヘラ削りで平らにしている。

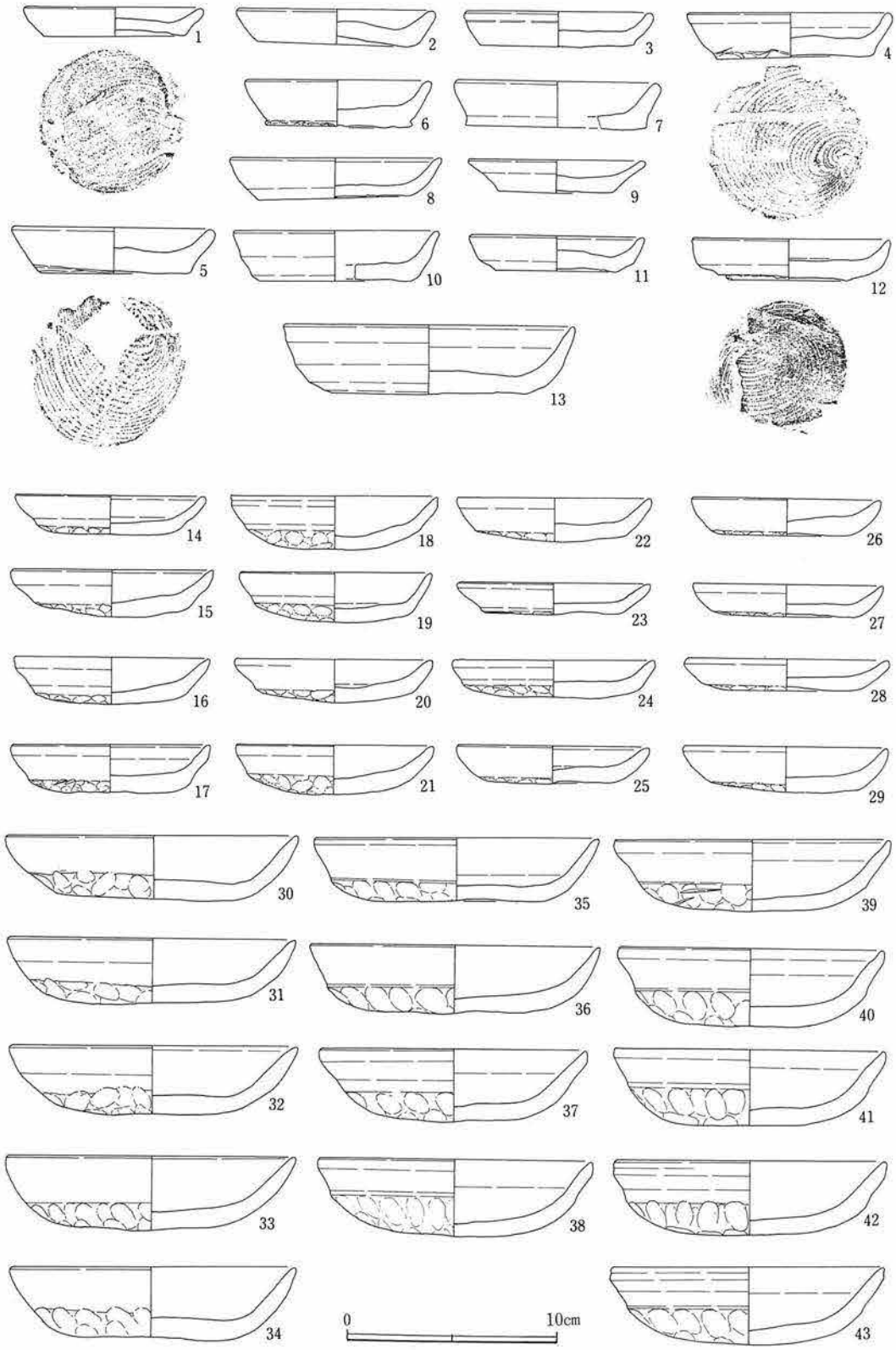


図45　III面下第2トレンチ出土遺物

5・6は小型の手捏ねである。5は口径8.9cm、器高2.1cmで体部下位に弱い稜を有し、口縁端部は強いナデを施し角ばる。全体に厚手の器肉である。6は口径9.2cm、器高2.3cmで体部下位に強めの稜をもち、くびれていて口縁端部が内外面のナデで細く尖り気味になる。厚手の器肉である。

b．Ⅲ面下第2トレンチかわらけ溜り出土遺物（図45・46）

1～46―かわらけ　1～13はロクロ成形、14～46は手捏ね成形の製品である。

1～12は小型品である。1は口径8.5cm、底径6.8cm、器高1.4cm、2は口径9.5cm、底径7.3cm、器高1.7cmである。共に器高が低く、斜め上方に直線的な立ち上がりをもつ器形である。口縁端部が丸く治まるものである。1が口径が小さめで薄い器肉であるのに対し、2が厚手の器肉で口径も大きい。3は口径9.0cm、底径7.4cm、器高1.7cmで斜め上方に直線的な体部をもつが、口縁部で僅かに内湾気味になる。底部に比べて体部の器肉が薄いものである。4・5は口径9.8cm、底径7.4cm、器高2.2cmで斜め上方に立ち上がる直線的な体部をもつ。口縁端部は僅かに肥厚し丸味が強いものである。底部壁は糸切り位置が低いために分厚く、突出底状を呈す。回転の弱い糸切り痕であり、糸切りの直しが認められる。6も底部が分厚く、近い体部の器形を見せるが、口径8.9cm底径7.4cm、器高2.2cmと口径が一周り小さい。7は口径10.0cm、底径8.8cm、器高2.2cmで体部は斜め上方に立ち上がる楔形の器壁で、口径と底径との差が少ないものである。底部が厚く、突出底状を呈す。8は口径10.0cm、底径7.2cm、器高2.0cmで薄い器肉の器高が浅いものである。体部下位に弱い稜を有し、内湾気味に立ち上がる。9は口径8.6cm、底径5.6cm、器高1.5cmで薄い器肉の低い器壁を持ち、底径が小さいために体部は逆「ハ」で幾分外半気味に立ち上がる。10は口径9.8cm、底径7.3cm、器高2.5cmで高めの器高を持つ。体部中位から僅かに外反気味の口縁部になる。やや強めのロクロ痕が体部に残る。11・12は体部下位に強い屈曲部を有し、屈曲部から上方に強く内湾する器形を呈する。外底は中央が凹んだ様に糸切りが施されるが、突出底状に底部がなる。11は口径8.4cm、底径5.8cm、器高1.7cmと低い器高である。12は口径9.6cm、底径6.0cm、器高2.0cmで底部に糸切りの切り直した痕跡が認められる。13は大型で口径13.8cm、底径9.2cm、器高3.3cm、口径が大きいわりに器高の低いものである。体部にはロクロ目痕が強く残っている。内湾した器壁を有している。

14～29は小型品の手捏ねである。14～19は体部下位に強い明瞭な稜を持ち、くびれ部が作られている。口縁部は強い横ナデ成形で端部が内湾して先端が尖り気味になるものが殆どである。14～17・19は口径9.0cm～9.5cm、器高1.9cm～2.1cm、18は口径9.8cm、器高2.5cmで口縁端部が凹み状になる。21・22は体部下位に稜を有するが、余りくびれていないものである。口径9.3cm～9.5cm、器高2.1cm～2.3cmである。23～28は器高の低い一群である。23・28はそれぞれ口径9.2cm、器高1.6cmと、口径9.7cm、器高1.6cmで薄い器肉で幾分くびれて外反した体部になる。24は体部下位に強めの稜を有し、口縁端部が尖り気味になる。器肉は厚手である。口径9.6cm、器高1.8cmである。25・26は体部下位の稜が不明瞭で、内湾した器形を呈し、口縁の端部が丸くなる。口径9.2cm、器高1.8cmで浅い器形で厚手の器壁を持つ。27・29も体部下位の稜が不明瞭で、内湾した器形を呈するが、27は薄い器肉

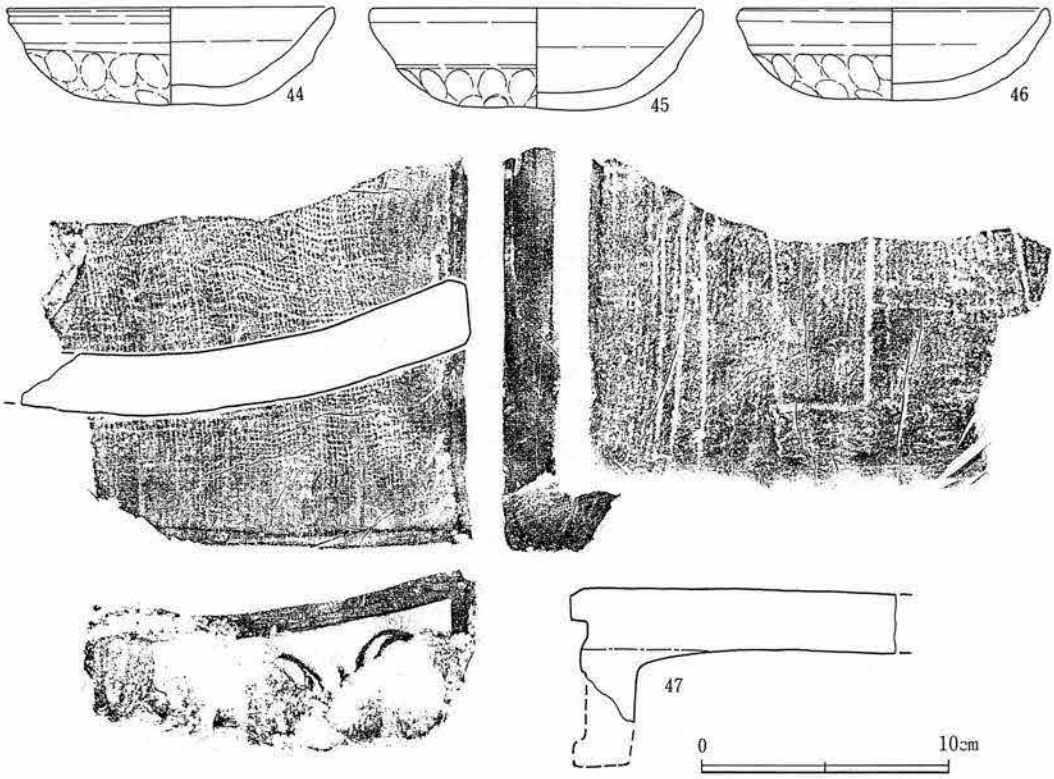


図46　III面下第2トレンチかわらけ溜り出土遺物(1)

になっており、29は厚手のもので高めの器高を有している。法量はそれぞれ口径9.7cm、器高1.5cmと、口径9.7cm、器高2.2cmである。

30～46は手捏ね成形大型品である。30～34は体部下位の稜が不明瞭で、内湾した器形を呈し口縁端部が丸く仕上げられている。口径13.2cm～13.8cm、器高3.1cm～3.5cmで低めの器高である。35・36も低めの器高を有するが、体部下位の稜が幾分明瞭になるものである。ただ口縁端部は丸味を持つ。37～46は体部中位に強い明瞭な稜を持ち、くびれ部が作られており、深い器形を呈する。口縁部は強い横ナデ成形をするために端部が内湾して尖り気味に仕上げられている。端面が溝状に凹んだもの（42～44）も認められた。口径12.7cm～13.5cm、器高3.7cm～4.0cmである。

47―宇瓦　瓦当部を殆んど欠失しているが、唐草文である。永福寺創建期の所用瓦の均正唐草文と同文タイプである。製作技法は女瓦凸面端部に粘土を貼り付けて瓦当部を作る。凹面はやや粗い布目痕を残し、凸面には離れ砂が縄目叩きにより打ち込まれている。凹面広端部と側縁にはヘラ削りの整形が施されている。胎土は砂粒・小石を含むが粘性のある良い土で焼きも硬い。表面が灰黒色、芯部が灰色を呈する。

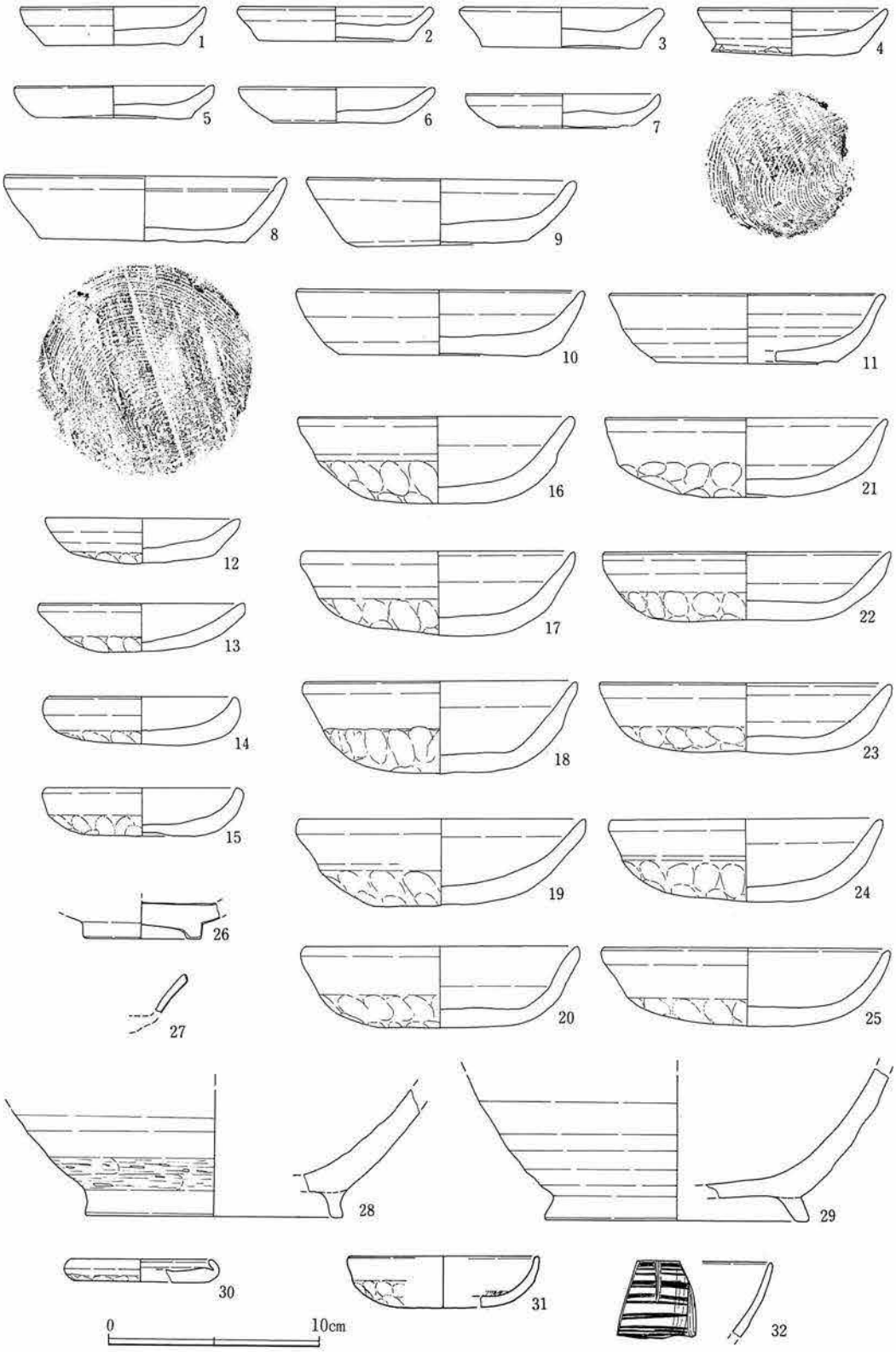


図47　III面下第２トレンチかわらけ溜り出土遺物(2)

c．Ⅲ面下第2トレンチ出土遺物（図47）

1～25―かわらけ　1～11は糸切り底でロクロ成形、12～25は丸底で手捏ね成形である。

1～7はロクロ成形の小型品である。1～4は底部が厚手で体部壁の薄いものである。1は口径8.9cm、底径6.5cm、器高1.8cmで底部から外反しながら立ち上がり、体部中位に屈曲部を有し内湾する。2は口径9.3cm、底径7.2cm、器高1.6cmで底部から外反しながら立ち上がるが、屈曲部を持たず斜め上方に開くような器壁である。3も屈曲部を有しない、斜め上方に開く器壁であるが、器肉の厚さが全体にさほど変わらないものであり、口縁の端部は丸く治められている。口径9.7cm、底径7.7cm、器高1.9cmである。4は口径8.8cm、底径7.2cm、器高2.2cmで体部が斜め上方に立ち上がるが、僅かに内湾しているものである。底部は厚く、特に底部は糸切り位置が低いために分厚く、粘土がはみ出して突出底状を呈する。5・7は底部が厚手で体部壁の薄いもので、体部が斜め上方に立ち上がるが、口縁部の直下に強い横ナデが施されて端部が尖り気味である。法量はそれぞれ口径9.6cm、底径7.6cm、器高1.6cmと口径9.3cm、底径6.4cm、器高1.6cmで低い器高である。6は口径9.4cm、底径6.1cm、器高1.7cmで全体に薄めの器肉を有したものである。体部は僅かに内湾しながら立ち上がり、丸味を持った口縁端部にいたる。

8～11は大型品である。8・9は器高が低く、底部から斜め上方にやや直線的な器壁を持つもので、口縁直下に弱い稜が巡っている。口径13.4cm、底径9.7cm、器高3.1cmと口径12.9cm、底径8.3cm、器高3.0cmである。10も器高の低いものであるが、底部から斜め上方に幾分内湾気味に立ち上がり、器肉は底部から口縁部にかけて急に薄くなる。体部に比べ底部が厚手に作られている。口径13.6cm、底径9.5cm、器高3.1cmである。11は口径13.1cm、底径8.6cm、器高3.2cmで器肉は基底部が厚く、底部中央や体部が薄手である。体部には強めのロクロ目痕を残し、器形は底部から内湾して立ち上がり、中位から口縁にかけて強い横ナデ整形を施し、口縁端部は外反気味になる。

手捏ね成形は12～15は小型品で、16～25は大型品である。小型の12～14は体部下位の稜が不明瞭なものである。12は口径9.1cm、器高2.2cmで厚い器壁を持ち、稜部から開き気味の体部で口縁端はやや尖っている。13は口径9.7cm、器高2.3cmで底部中央が薄くなる器壁を持ち、潰れた様な器形で口縁部に強いナデを受ける。14は口径8.9cm、器高2.2cmで極めて内湾の強い器形を呈する。15は口径9.5cm、器高2.2cmで体部下位に稜が弱くつくもので、薄めの器壁で特に底部中央が薄く出来ている。大型の16～20は体部中位の稜が明瞭でくびれた形になる。口縁は強い横ナデの整形で尖った端部を形作る。口径13.1cm～13.6cm、器高3.9cm～4.2cmで全体に器高の高い一群である。21～25は体部中位の稜がやや不明瞭ものである。このうち21は体部中位の稜から斜め上方に直線的に立ち上がる器形を呈する。口径13.3cm、器高3.7cm。21・22は口径13.6cm、器高3.2cmと、口径13.7cm、器高3.2cmで低い器高を有し、内湾した器形になるものである。24・25は体部中位の稜が幾分見られるもので、器高も比較的高めである。21は口径13.1cm、器高3.9cm、22は口径13.6cm、器高3.7cmである。

28・29―山茶碗窯系捏鉢　共に底部から胴部片である。28は復元底径12.1cm、外面は胴部下端に

ヘラ削りで整形し、断面台形状の貼り付け高台を持つ。胴部から内底にかけて良く磨滅している。胎土は灰色で小石粒の多い粗土である。29は外底に断面長方形のしっかりした貼り付け高台を持ち、内底の器壁が薄くなるまで良く磨滅している。胎土は幾分青味おびた灰色で、小石粒・砂粒を含むが粘性のある土である事から渥美系の捏鉢かも知れない。

30・31―白かわらけ　30は復元口径6.7cm、底径6.4cm、最大径7.5cm、器高1.0cmである。口縁が内方へ折り曲げられる「内折れ」形の手捏ね成形の小皿である。胎土はきめのやや細かい粘土に細砂を交じえ幾分肌色に近い白色である。31は手捏ね成形で復元口径9.1cm、底径5.6cm、器高2.5cmである。胎土はきめの細かい微砂質で、やや赤味がかる部分もある。体部下半に弱い指頭圧痕が認められる。

32―瓦器碗　口縁から体部片。外面の体下部には指頭痕が未調整のまま残り、口縁と内面は磨かれている。体下部にはヘラによる押し込みがなされる。内面の側壁面と外面口縁下に横位の暗文が施されている。胎土は精製された粘土で、色調は表面が黒灰色で芯部が灰色である。

（原）

第四章　まとめ

遺跡地の歴史的な風景を見ると、南に武蔵国へ通じる要路の六浦路、西方には足利氏ゆかりの浄妙寺、報国寺、北東に大慈寺跡・明王院五大堂が指呼の距離にある。また『吾妻鏡』で知られるように六浦路沿いには開幕当初、大倉幕府はじめ有力御家人の居館が営まれ、遺跡地周辺も早くから開けていたことは想像に難くない。

本調査地点の北側の道路と側溝によって形成される区画は、Ⅲ面からⅠ面に至る間改修や補修を含めて、部分的な作り替えを繰り返しながら、13世紀から15世紀にかけて連綿と生活の場が展開するという、当時の状況を示唆してくれる。このことは先に述べた検出した遺構や遺物の豊富さからも理解されよう。しかし、道路や溝といった表の場はいくら整備されていても、南側に広がる生活面は各面で大きく様相が異なっていた。Ⅱ面の時期には明確な区画の中で、通路を挟んだ両側に建物を配するというある程度の整然とした構成が存在しているが、残念ながらⅢ面・Ⅰ面では南側に広がる生活の様子を、調査地内の遺構からは読み取ることができなかった。

ここでは、Ⅰ面～Ⅲ面において検出された遺構を整理し、出土遺物も含め全体を３時期に分けて若干の検討を加え、調査地点の生活空間の変化を追ってまとめとしたい。

Ⅰ期：　Ⅲ面及びⅢ面下の遺構がこの時期に相当し、中世の基盤層上面（地山）を生活面とする。遺構は、道路と側溝（溝２）・土壙・かわらけ溜りと建物を構成しない柱穴が認められた。遺物は少量だが、同安窯系青磁皿・龍泉窯系の劃花文碗や幅広の蓮弁文碗で、かわらけには外面の稜が鋭く口唇部が縁帯状の手捏ね成形と、ロクロ成形で器高低く外面に強い丸味を持ち底径の大きなもの、八幡宮・永福寺所用瓦で創建期型式の鐙・宇瓦、土器質鉢形手焙りなどがあり、出土遺物の組成からみて13世紀前葉～中頃に比定したいところである。

Ⅱ期：　Ⅱ面及びⅡ面下の遺構がこの時期に相当し、生活面は大規模な地業が行われ、道路と溝（溝１）、直行または平行した建物群と、それを区画する通路は、この地域が最も栄えた時期といえる。遺物の種類も豊富で多量に出土した。龍泉窯系青磁蓮弁文碗、白磁口兀皿、常滑・瀬戸の量が多く魚住の鉢や瓦質輪花手焙り、かわらけは殆んどがロクロ成形で口径は大皿13cm・小皿８cm以内にまとまる。当期の年代は、概ね13世紀後葉～14世紀前葉頃の時期におきたい。

Ⅲ期：　Ⅰ面上の生活面で検出した全ての遺構がこの時期に相当し、道路は補修され引き続き残るが、しっかりとした構造の木組み側溝はすでに機能を失い埋没しており、溝は石積みのに変わり、切石列・土壙・井戸などの遺構が認められたが、明確な区画の中で整然と建物を配置するような遺構が存在していない。井戸の存在から生活の場は調査範囲より南側に広がっていた可能性も考えられる。出土遺物は量的に少なく、龍泉窯系青磁鉢、瀬戸天目茶碗・灰釉皿、井戸出土の口縁が外反傾向をもつかわらけがあり、当期の年代は概ね14世紀中葉～15世紀前葉頃の時期を考えておきたい。

〈附篇〉　公方屋敷跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

1．はじめに

公方屋敷跡遺跡は鎌倉市浄明寺字稲荷小路143番２に位置しており、木組の溝や通路状遺構、住居跡、土坑など、14世紀を中心とした遺構や遺物が検出されている。こうした遺構・遺物から予想される遺跡周辺は人間によりかなり開けた景観であったと思われる。したがって周辺植生もこうした影響をうけていたことが予想され、花粉分析結果にどのような傾向として示されるか興味深い。

2．試料

花粉分析用試料は東西方向にはしる木組の溝（溝１）、南北方向にはしる通路状遺構、２面上の住居跡の３地点より採取したが、これらの位置については遺構の章を参照されたい。また０面土坑（15世紀代）についても試料を採取し予察的に花粉分析を行った結果、ほとんど花粉がみられなかったので今回は削除した。なお試料数は溝１が６点、通路状遺構の下位の堆積物が４点、住居跡が３点の計13点である。以下に試料採取地点の土層記載を若干示すが、層位番号は便宜的に付けたもので、遺跡の層位番号とは対応していない（図１）。

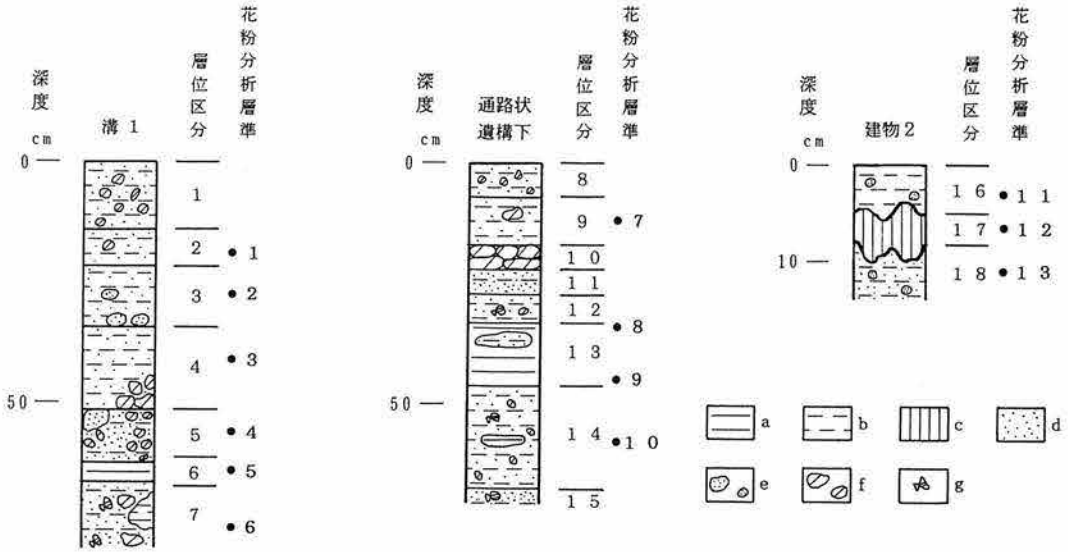


図１　試料採取地点の地質柱状図と花粉分析層準

a：粘土　b：シルト　c：土壌　d：砂　e：レキ　f：土丹　g：貝殻

1）溝1：1層は灰色の砂質シルトで、土丹片（最大径68㎜）が多量にはいり、材片が散在しており、砂の塊もみられる。2層も灰色の砂質シルトで、やや粘土質で、材片が点在している。また土丹片（最大径35㎜）やカワラケ片、炭片がみられる。3層も灰色の砂質シルトで、材片が散在し、カワラケ片や軽石を含む火山砂？の凝集レキが点在しており、このレキは一部下位との境界部に並んでみられる。本層の堆積物を一部採取し、0.25㎜の篩で水洗選別した結果、クリの表皮やウリ属メロン仲間、ナス科、イヌビエ近似種などの種子が検出された。（吉川が同定）。4層は暗灰色の砂質シルトで、材片が多くはいり、溝の南壁ぎわに土丹片が多くみられる。5層は暗灰色のシルト質砂（中粒砂主体）で、材片が点在している。溝の両側ぎわに土丹が多く、また130㎜以上のレキもみられる。6層は暗灰色の粘土で、粘性が高い。7層は暗灰色の砂質シルト～シルト質砂で、一部暗灰褐色のシルト質粘土がみられる。貝殻片（ハマグリやキサゴなど）が多くはいり、また大型の土丹が点在し、材片やモモ核（吉川が同定）がみられる。これらの層のうち2～7層について各層1点の計6点（試料№1～6）について花粉分析を行った。また溝を囲っている板材（背板、束柱、角材）について樹種同定を行ったが、これについては後述する。なおこれらの堆積物の時代は14世紀中頃～後半と考えられており、また5、6層がこの溝が使用されていたときの堆積物である。

2）通路状遺構下：8層は灰色の砂質シルトで、土丹小片が多量に含まれている。また材片が点在し、小レキがみられる。9層は黒灰褐色の砂質シルトであるがやや粘土質で、炭片が多くみられる。また黄褐色のロームが多くはいり、他地点には240㎜の土丹がみられる。10層は青灰色の土丹層、11層は黒灰色の砂質シルト～シルト質砂である。12層はやや粘土質の灰褐色の砂質シルトである。また貝殻片や土丹片が多くみられる。13層は暗灰褐色の粘土で、植物遺体が多くみられる。また暗灰色の砂質シルトがレンズ状にはいる。14層は暗青灰色のやや粘土質の砂質シルトで、貝殻や土丹の小片や材片が点在している。また黒灰色粘土や黒灰褐色シルト質粘土が薄層あるいは斑紋状にみられる。15層はシルト質の砂（中粒砂主体）で、貝殻の小片が多量にみられる。これらのうち9層より1点、13層より2点、14層より1点の計4点（試料№7～10）について花粉分析を行った。なお時代としては10層より下位が14世紀前半？、9層より上位が14世紀の中ごろから後半と考えられている。

3）建物2：16層は暗青灰褐色のシルトで、青色の砂岩小片がはいり、下位の堆積物が斑紋状に混じる。17層は赤褐色の有機質土壌層で、未分解の小材片がみられ、木本質泥炭特有の香りがする。18層は暗青灰色の砂質シルトで、青色砂岩小片が点在している。これらのうち16、17層が建物の終末時（14世紀中頃）の埋め土で、18層が地山と考えられている。花粉分析はこれら各層1点、計3点（試料№11～13）について行った。

3．木組の溝の材について

溝1を囲っている板材などについてその樹種同定を行った。試料は背板、束柱、ほぞ穴をもつ角材の3点で、同定作業は藤根（パレオ・ラボ）が行った。同定方法は各試料について横断面、放射

断面、接線断面の３方向の切片を作り、これらを生物顕微鏡下で観察・同定した（図版IV）。

観察の結果、３試料はいずれも水平および垂直樹脂道をともに欠く針葉樹材で、春材から夏材への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は水平方向に長軸をもつスギ型で、１分野に２個みられる（放射断面)。放射組織は柔細胞からなり、単列で１～９細胞高からなる（接線断面)。以上の形質から木組の溝の材（背板、束柱、角材の３点）はいずれもスギと同定される。

４．花粉分析

上記の計13試料について次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料(湿重約1.0ｇ)を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、酢酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の混酸を加え３分間湯煎）を行い、水洗後残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。

検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また検鏡に際して花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成してプレパラート）を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

５．花粉分析結果

今回検出された花粉・胞子・藻類の分類群数は３地点あわせて樹木花粉30、草本花粉24、形態分類で示したシダ植物胞子２、藻類１の計57である。これら花粉・シダ植物胞子・藻類の一覧を表１（溝１)、表２（通路状遺構下および建物２）に、主要な花粉･シダ植物胞子の分布を図２（溝１)、図３（通路状遺構下)、図４（建物２）に示した。なお分布図における樹木花粉・草本花粉・シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。一覧表および分布図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。またクワ科、バラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源とがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草花花粉に一括していれてある。

１）溝１（試料№１～６)：全試料とも樹木花粉の産出量が非常に少なく（10％前後)、草本花粉が80～90％を占めている。検出された樹木花粉のうちではマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が５％前後と最も多く出現しており、他にスギ属やハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属―マテバシイ属が連続してみられる。草本類ではイネ科が最も多く、50～65％と高い出現率を示している。この他ではヨモギ属が10％前後と安定してみられ、アカザ科―ヒユ科は試料№３において出現率が20％を越えており、アブラナ科も最上部において９％の出現率を示している。また壊れているソバ属花粉が最上部で１点だけ検出されている。

２）通路状遺構下(試料№７～10)：試料№７では検出された花粉数が少なく、分布図は参考程度

表1　溝1の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6
樹木							
マキ属	*Podocarpus*	1	-	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	-	1	2	1	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	2	-	-	-	2
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	21	12	40	19	25	13
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	4	4	6	1	1
スギ属	*Cryptomeria*	8	5	7	2	7	6
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	1	1	1	-	-	-
ヤナギ属	*Salix*	-	1	-	1	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	-	2	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	2	1	2	1	-	-
カバノキ属	*Betula*	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	2	4	1	-	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	3	1	4	2	2	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	5	4	4	2	2	7
クリ属	*Castanea*	1	-	1	2	1	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	6	1	1	6	6	5
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	4	3	3	4	-
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	2	-	-	-	-
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	1	1	-	-	-	-
ジャケツイバラ属	*Caesalpinia*	1	-	-	-	-	-
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	1	-	-	-
アカメガシワ属	*Mallotus*	-	-	-	2	-	-
カエデ属	*Acer*	1	-	1	-	1	-
トチノキ属	*Aesculus*	1	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	1	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	1	-	-	-	-	-
ツツジ科	Ericaceae	1	-	-	-	1	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	1	-	-	-	-	1
ガマズミ属	*Viburnum*	4	-	-	-	-	-
草本							
ガマ属	*Typha*	-	-	2	-	-	-
イネ科	Gramineae	439	362	551	262	269	267
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	6	3	9	2	5
クワ科	Moraceae	-	4	1	-	3	5
ギシギシ属	*Rumex*	-	-	2	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	5	-	1	-
ソバ属	*Fagopyrum*	1	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	38	24	223	10	13	21
ナデシコ科	Caryophyllaceae	1	-	22	1	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	3	4	-	-	1
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	-	3	4	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	60	13	52	16	9	11
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	1	-	1	2	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	1	1	-	-	1	-
他のマメ科	other Leguminosae	2	3	8	2	-	1
フウロソウ属	*Geranium*	-	-	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	5	-	2	5
オオバコ属	*Plantago*	1	1	1	-	-	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	1	1	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	54	67	78	57	38	60
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	10	6	7	3	4
タンポポ亜科	Liguliflorae	2	7	7	4	4	9
シダ植物							
単条型胞子	Monolete spore	13	9	28	20	14	24
三条型胞子	Trilete spore	4	1	1	3	2	2
黄緑色藻類							
	Botryococcus braunii Kutzing	1	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	67	43	78	48	50	38
草本花粉	Nonarboreal pollen	605	506	976	371	346	389
シダ植物胞子	Spores	17	10	29	23	16	26
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	689	559	1083	442	412	453
不明花粉	Unknown pollen	30	9	20	10	8	19

T. －C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

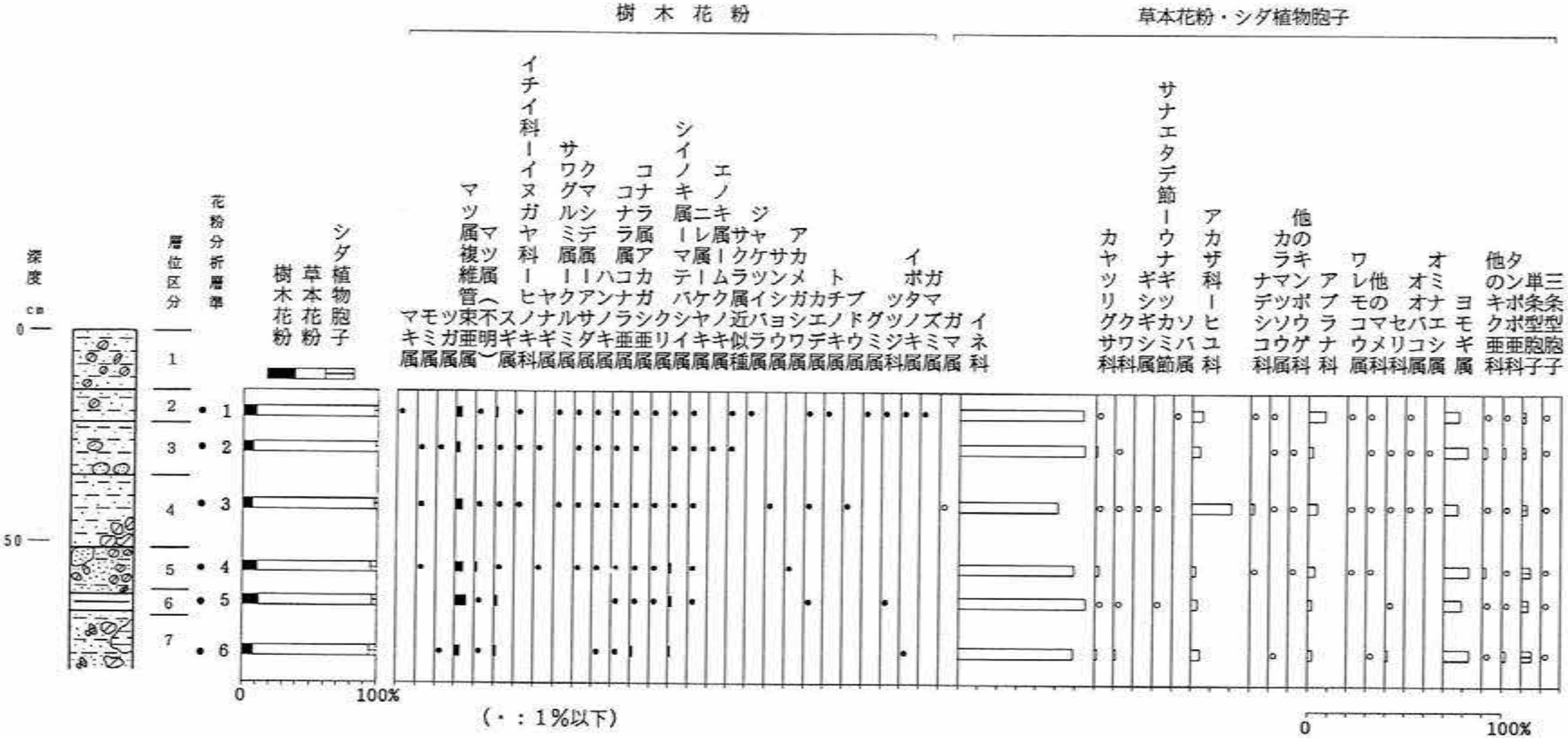


図2　溝1の主要花粉化石分布図

(出現率は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

にみて頂きたい。また本地点においても樹木花粉の産出量は少なく(試料No.7で30%)、草本花粉は試料No.7において68%、試料No.8においては99%を占めている。少ない樹木類ではニヨウマツ類が最上部で、アカガシ亜属は試料No.9において多い傾向がみられる。その他ではスギ属やシイノキ属—マテバシイ属が連続してみられる。草本類ではイネ科が20～60%と変動が大きいが最も多く、アカザ科—ヒユ科は試料No.10において47%、アブラナ科は試料No.8において57%と突出した出現を示している。その他ではヨモギ属などのキク科やマメ科が連続してみられる。

3）建物2(試料No.11～13)：樹木花粉が他の2地点よりは多く検出されており、ニヨウマツ類は試料No.12においては20%を越えて出現している。またスギ属やシイノキ属—マテバシイ属が試料No.13において10%近く検出されており、アカガシ亜属は5%前後産出している。草本類ではやはりイネ科が最も多く、上位に向い急増する傾向がみられる。試料No.13においてカヤツリグサ科は10%を越えて出現しているが、上位では1%以下である。アカザ科—ヒユ科やヨモギ属が5%前後検出されており、その他ではアブラナ科が試料No.13において5%産出している。また試料No.11においてツルムラサキ属が1点だけ検出されている。

以上のように3地点とも草本類の占める割合が高く、その中ではイネ科が最優占している。その他アカザ科—ヒユ科やアブラナ科、ヨモギ属が多く検出されている。

6．公方屋敷跡遺跡付近の古植生

当遺跡においては建物跡や通路状遺構、溝などが検出されており、人間の生活観の強い景観であったことが予想される。当遺跡における花粉分析結果ではイネ科やアカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属などが多く検出されている。これらのうちイネ科花粉については非常に多く検出された溝1ではその形態からイネなどの栽培されているものもあると思われるが、溝というゴミ捨て場的な性格から外部より植物遺体とともに供給されたものと思われる。また通路状遺構下の試料においても後述するがやはりゴミ捨て場的な性格と考えられ、溝1と同様なことからイネ科花粉が多く検出されているものと思われる。こうしたことは史跡永福寺跡においてもみられ、2溝の堆積物よりイネの穎が検出されたが、ゴミ捨て場的要素によりもたらされたと考えられている（鈴木　1991)。

通路状遺構下では植物遺体の多い試料No.8においてアブラナ科が非常に多く検出されている。また試料No.10においてはアカザ科—ヒユ科が突出した出現を示しているなど、花粉の出現傾向に特徴がみられる。堆積物中には貝殻片が多くみられる層準が存在することから、本地点もゴミ捨て場的な性格で、それらの植物遺体とともに花粉が供給されたものと思われる。またアカザ科—ヒユ科の中にも栽培される分類群があるが、多くは道端などに生育するものであり、ヨモギ属などと雑草群落を形成してたと思われる。東京都板橋区舟渡遺跡（平安期の館跡）では約80%が草本花粉で占められており、ヨモギ属やつる性の植物などの雑草一色の、人間の干渉色の強い環境に変貌していたかがうかがわれている(辻　1988)。当遺跡においてもアカザ科—ヒユ科やヨモギ属などは溝や住居周辺に雑草として存在して、花粉化石の一部はそれより供給されたと思われるが、先にも記したが

表 2　通路状遺構および建物 2 の産出花粉化石一覧表

和名	学名	通路状遺構下				建物 2		
		7	8	9	10	11	12	13
樹木								
マキ属	*Podocarpus*	-	1	-	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	-	-	-	-	1	1	-
ツガ属	*Tsuga*	-	-	-	-	1	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	9	1	3	10	19	82	2
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	5	1	-	1	2	11	1
スギ属	*Cryptomeria*	1	2	3	7	5	2	6
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	-	-	-	1	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	1	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	-	1	-	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	1	-	1	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	1	-	2	2	2	2
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	1	2	19	1	5	19	2
クリ属	*Castanea*	-	-	-	-	3	-	1
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	3	2	7	8	3	4	7
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	-	-	1	1	-	-
コクサギ属	*Orixa*	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	4	1	3	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	2	-	-	-	-	-
草本								
イネ科	Gramineae	34	636	110	60	312	201	21
カヤツリグサ科	Cyperaceae	-	6	-	6	3	2	10
ユリ科	Liliaceae	-	-	2	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	1	-	3	1	2	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	5	-	142	39	6	5
ツルムラサキ属	*Basella*	-	-	-	-	1	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	4	-	8	1	-	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	6	1	9	1	-	1
アブラナ科	Cruciferae	2	957	-	10	3	8	4
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	1	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	2	2	8	1	1	3	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	4	-	1	-	-
シソ科	Labiatae	-	1	1	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	7	41	2	14	14	7	6
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	2	2	1	2	2	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	1	2	1	7	4	2	4
シダ植物								
単条型胞子	Monolete spore	1	2	13	3	23	13	11
三条型胞子	Trilete spore	1	1	-	2	2	1	-
樹木花粉	Arboreal pollen	21	15	36	34	47	121	21
草本花粉	Nonarboreal pollen	49	1664	134	260	385	231	52
シダ植物胞子	Spores	2	3	13	5	25	14	11
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	72	1682	183	299	457	366	84
不明花粉	Unknown pollen	11	8	10	18	14	14	26

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

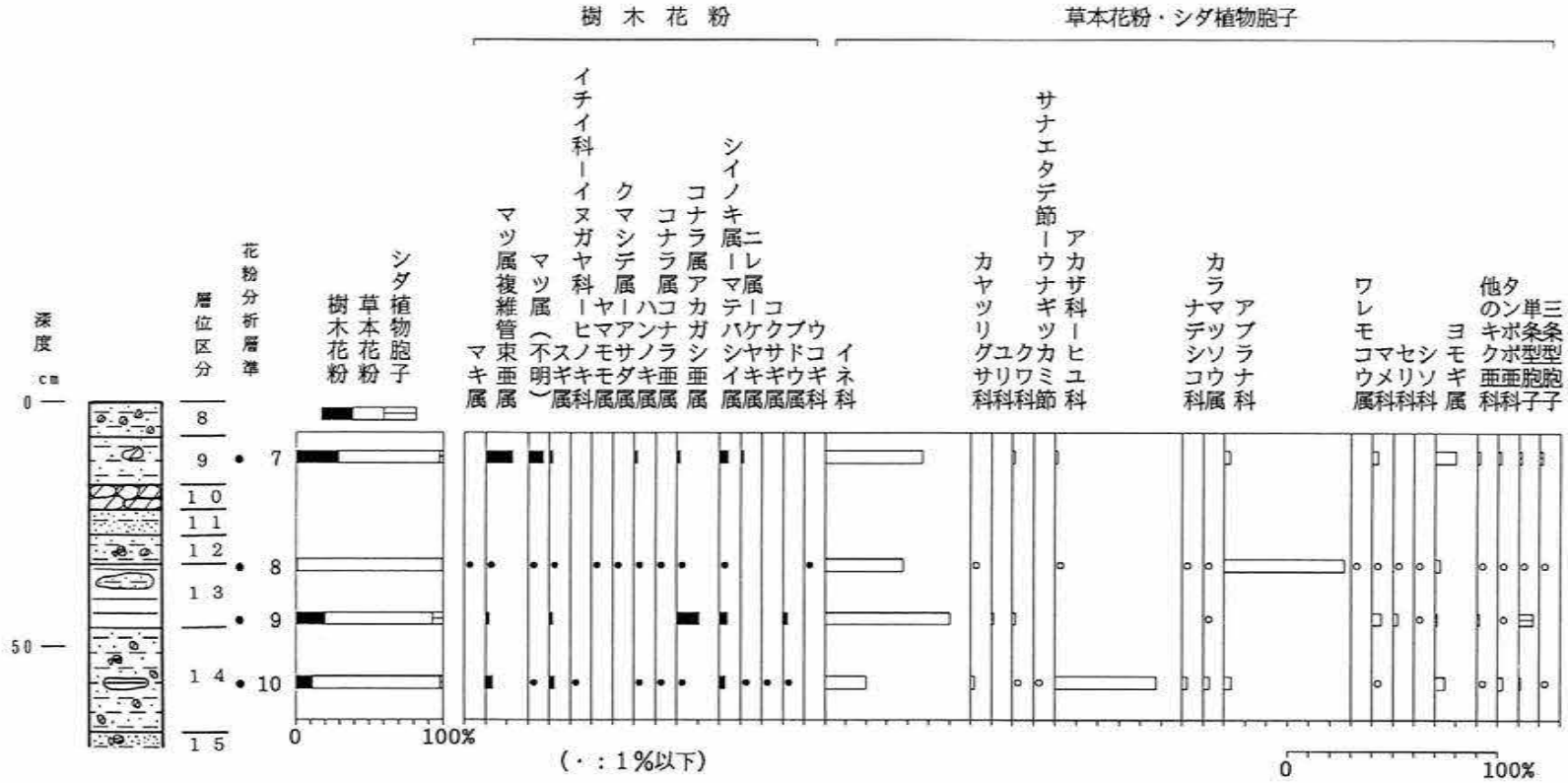


図3　通路状遺構下の主要花粉化石分布図

（出現率は花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

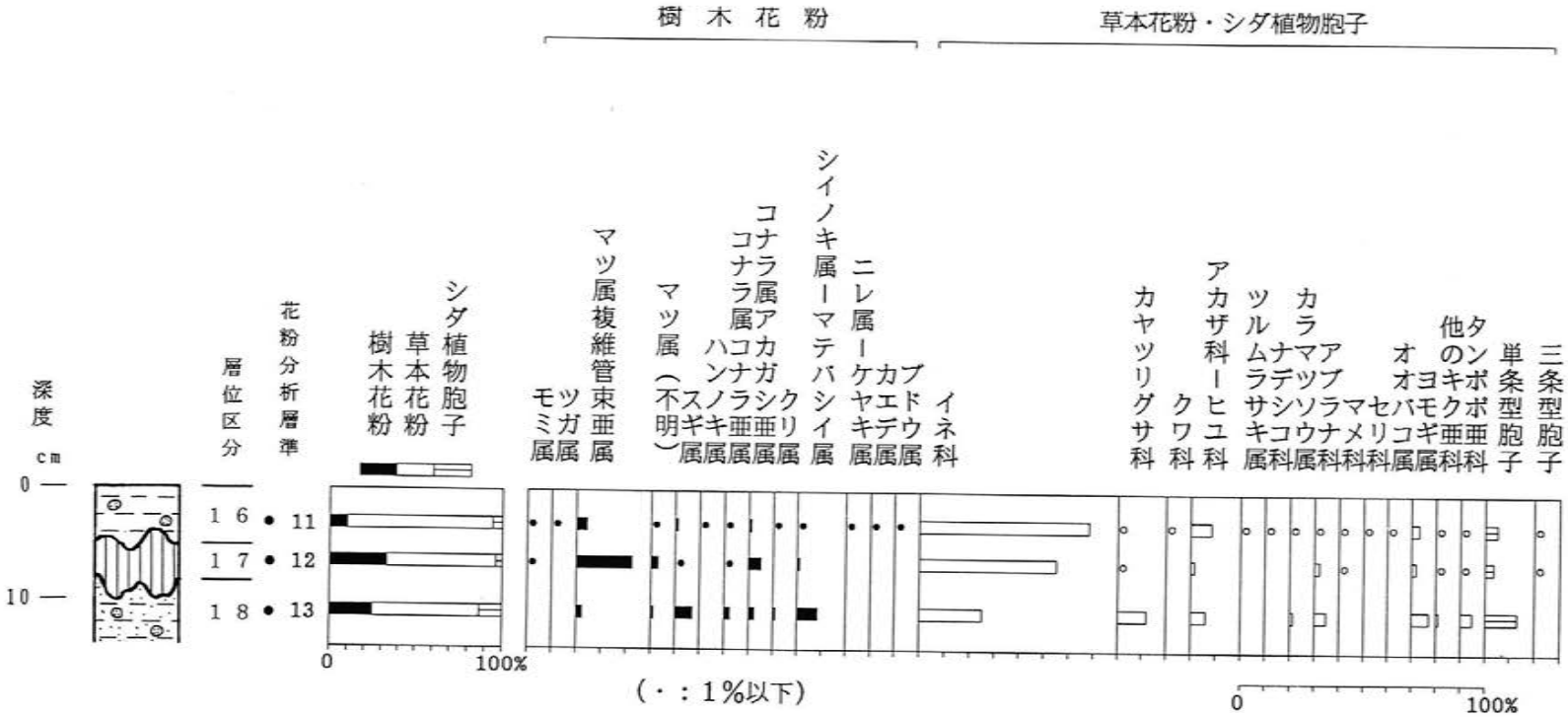


図4　建物2の主要花粉化石分布図

（出現率は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

今回の試料採取地点の性格としてはゴミ捨て場的な要素が強く、母植物の投棄により多くはもたらされていると思われる。

1点だけソバ属花粉が検出されている(溝1の最上部：14世紀中頃～後半)。同試料より別にプレパラートを作成してソバ属花粉の検出を試みたが得られず、他の時代の堆積物より混入したことも考えられ、この時代に遺跡付近においてソバ栽培が行われていたかは不明と考える。

樹木類については花粉の検出数は少なく、遺跡近辺には余りみられなかったと思われる。その中ではニヨウマツ類やスギなどの針葉樹類や、アカガシ亜属やシイノキ属―マテバシイ属を主体とした照葉樹林などが遺跡周辺の丘陵地に成立していたのであろう。

7．ツルムラサキ属花粉について

建物2の試料№11よりツルムラサキ属と思われる花粉が1個体検出されたので、以下にその花粉形態を示す。

検出された花粉の形態は六面体であるが、やや球状を示す(図版Ⅲ：8－c、8－d)。各面は正方形(図版Ⅲ：8－e、8－f)かやや長方形(図版Ⅲ：8－a、8－b)で、一辺の長さは30～39μm、対角線の長さが38～41μmで、それぞれの面に溝が1本対角線上に存在する。この溝の長さは12μm、幅は2μmで、接する他の面の溝と角で集束するように走っている。外層には棒状突起(幅は1μm)が密に存在し、稜線部分で最も長く(6μm)、溝に向かって短くなる。

以上のような形態を有する花粉としてはツルムラサキがあげられる。この現生花粉の形態について日本植物の花粉形態(島倉　1973)には、「球状と角柱状の組合せで、極観像は円形である。外層の表皮膜は柱状突起で長く密である。溝は細く、大きさは34～38×28～30μm。」と記されている。また日本産花粉の標徴Ⅰ(中村　1980)では、「正六面体の六溝型で、溝はレンズ状(長軸8μm)で六面体の各面状に配列する。外層の柱状突起は溝を取り巻いて発達し、2個の溝で囲まれた赤道面では長い棒条(高さ4μm)となり密に配列する。大きさは34.0～42.4μm。」となっている。このように今回検出された花粉化石は大きさに多少違いはみられるが、上記の現生ツルムラサキの花粉形態と類似性が高く、ツルムラサキ属に属するものと判断した。

このツルムラサキ属はもともと日本には自生しておらず、熱帯アフリカと熱帯アジアに5種が分布し(津田　1977)、青葉(1991)によるとツルムラサキは多識編(1630年刊行)ではじめて同定され、このころ渡来したものと考えられている。また牧野日本植物図鑑(牧野富太郎　1940)には江戸時代初期に中国より伝わったとされ、寺崎日本植物図譜(奥田　1977)には熱帯アジア原産で鑑賞用として明治時代に入ったと記されている。今回検出された層準(試料№11)は14世紀中頃と考えられており、上記の時代と比べてかなり古いこととなる。このように今回検出されたツルムラサキ属花粉は、ツルムラサキが日本に渡来した時代、あるいは検出された堆積物の時代に係わる問題であり、したがって正確性(確実性)を高めるためにより多くの標本が必要と考え、同試料より別にプレパラートを数枚作成してツルムラサキ属花粉の検出を試みたが他には得られなかった。この

ツルムラサキ属花粉の検出例はほとんどみられず、パレオ・ラボにおいて未公表資料に2点検出され（江戸時代の井戸内堆積物）、その他では「話」として聞いたことはあるが公表されたものがあるかどうか解らないといった状況である。また今回検出されたツルムラサキ属花粉について上部からの落ち込みや、発掘時や試料採取時における混入も考えられなくもなく（そのようなことがないように十分注意しているが）、この花粉化石については今後さらに十分に検討が必要であろう。

8．おわりに

以上のように当遺跡の分析結果においてイネ科やアカザ科―ヒユ科、アブラナ科など栽培種を含む分類群が優占しているが、花粉分析の現状では種までの言及は出来ず、したがって同試料からの種子の検出など他方面からの検討も必要であろう。

またツルムラサキ属花粉が検出され、検出した堆積物は従来考えられていたツルムラサキが渡来した時代（17世紀はじめ）よりかなり古い、14世紀中頃のものである。このようにツルムラサキが日本に渡来した年代に係わることでもあり、他からの混入や堆積物の年代などさらに十分な検討が必要であると考える。

引用文献

青葉　高（1991）「野菜の日本史」八坂書房　p.317

中村　純（1980）「ツルムラサキ科」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第13集　日本産花粉の標徴Ⅰ』p.22

牧野富太郎（1940）「ツルムラサキ」『牧野日本植物図鑑』北隆社　p.601

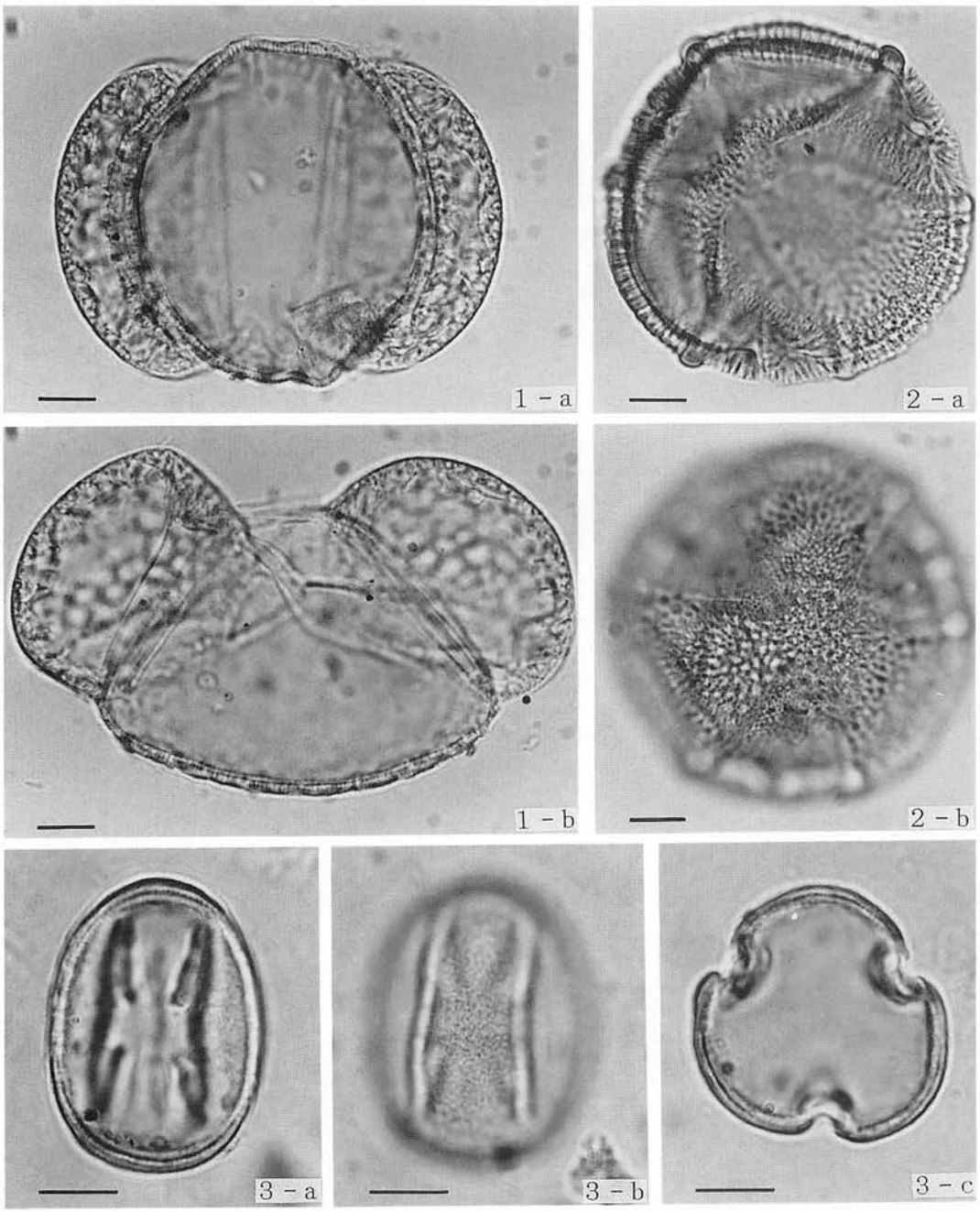
奥田　重俊（1977）「ツルムラサキ」『寺崎日本植物図譜』平凡社　p.162

島倉巳三郎（1973）「ツルムラサキ」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第5集　日本の植物の花粉形態』p.15

鈴木　茂（1991）「平成元年度史跡永福寺跡の溝内堆積物の花粉化石」『鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡　国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係わる発掘調査概要報告書―平成2年度―』鎌倉市教育委員会　p.17～25

辻　誠一郎（1988）「花粉分析に見る人間と自然」『週間朝日百科　日本の歴史　歴史の読み方3　考古学への招待』朝日新聞社　p.51～52

津田　秀樹（1977）「ツルムラサキ科」『週間朝日百科77　世界の植物』朝日新聞社　p.1812



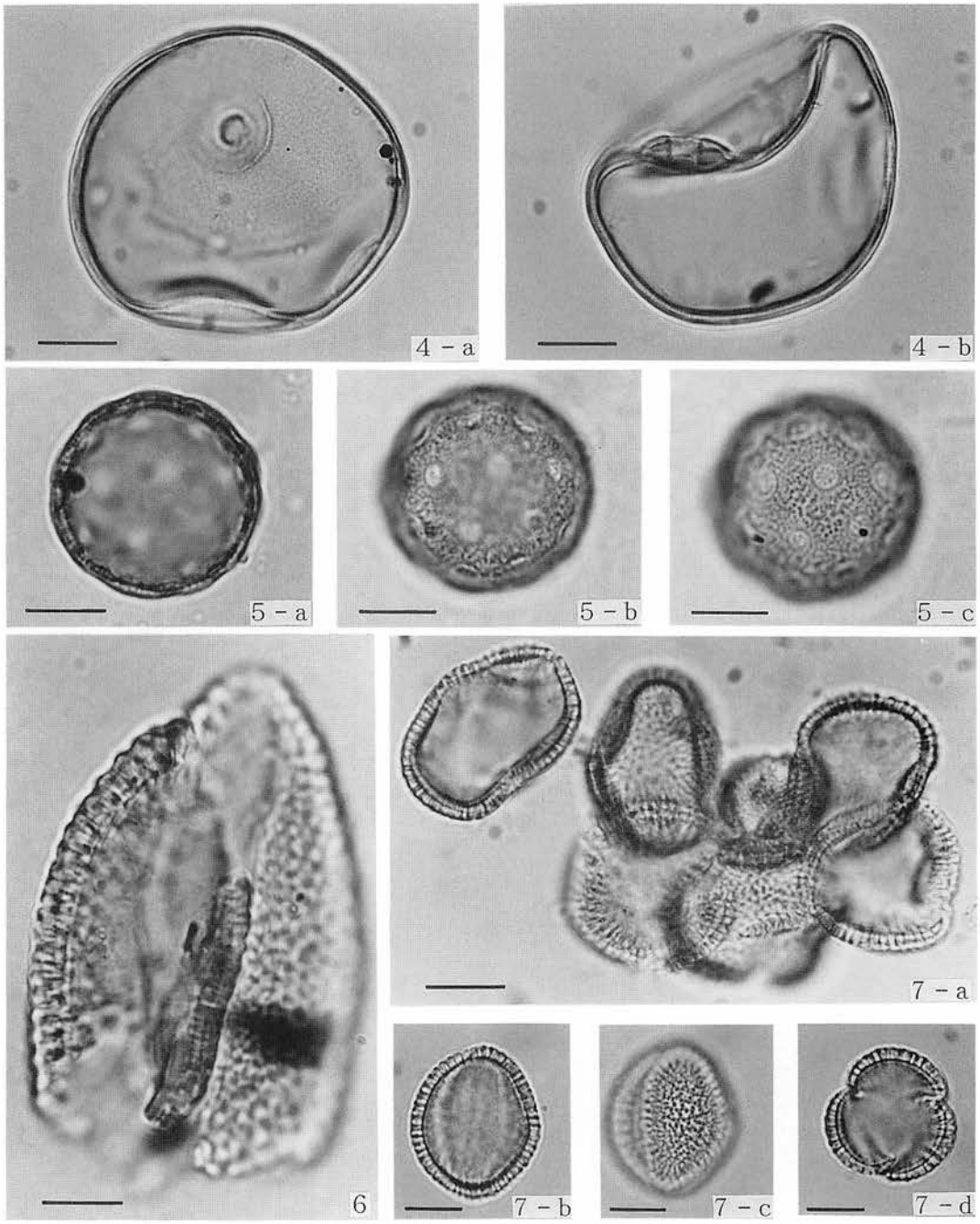
bar：10 μm

図版Ⅰ　公方屋敷跡の花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS819　試料No. 3

2：ジャケツイバラ属　PLC.SS821　試料No. 1

3：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS817　試料No. 2



bar：10 μ m

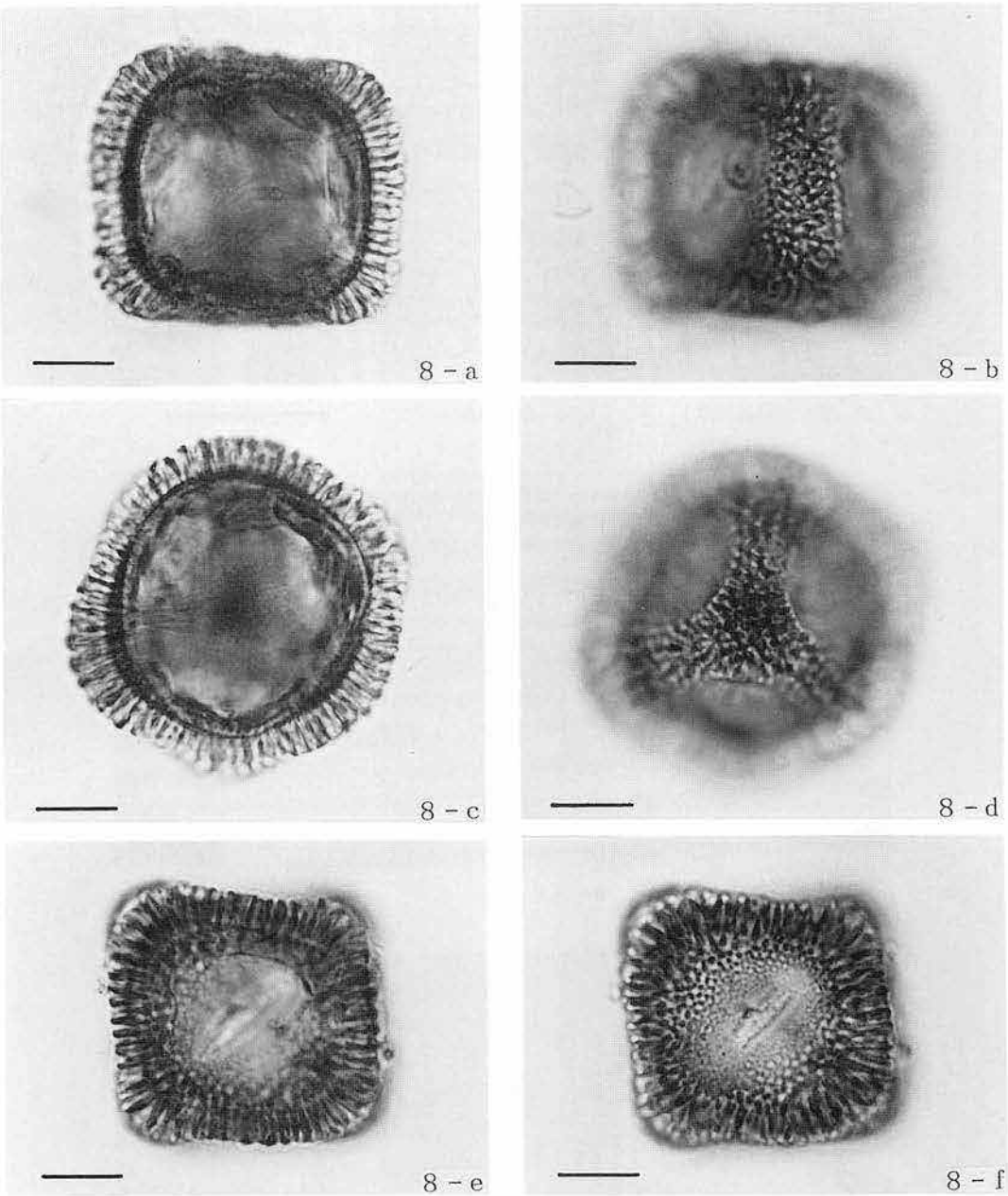
図版II　公方屋敷跡の花粉化石

4：イネ科　PLC.SS816　試料No. 1

5：アカザ科―ヒユ科　PLC.SS818　試料No.11

6：ソバ属　PLC.SS823　試料No. 1

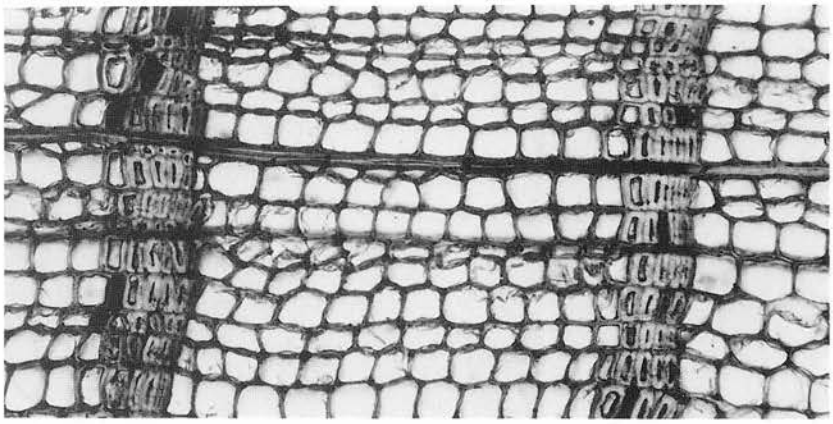
7：アブラナ科　7―a：PLC.SS814、7―b～―d：PLC.SS822　試料No. 1



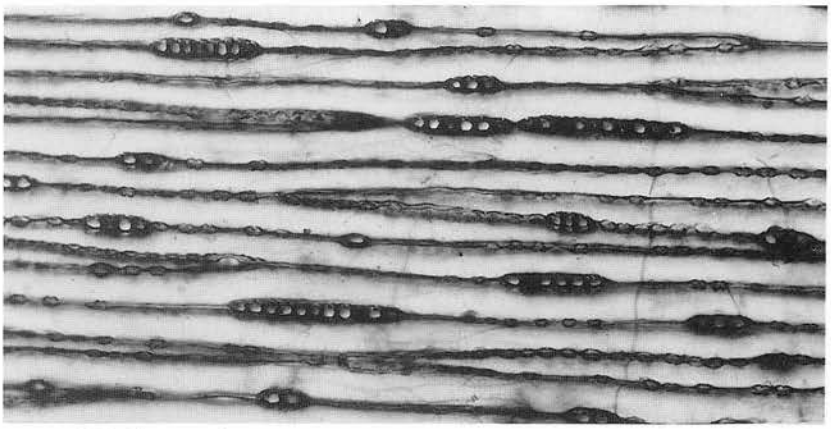
bar：10 μ m

図版Ⅲ　公方屋敷跡の花粉化石

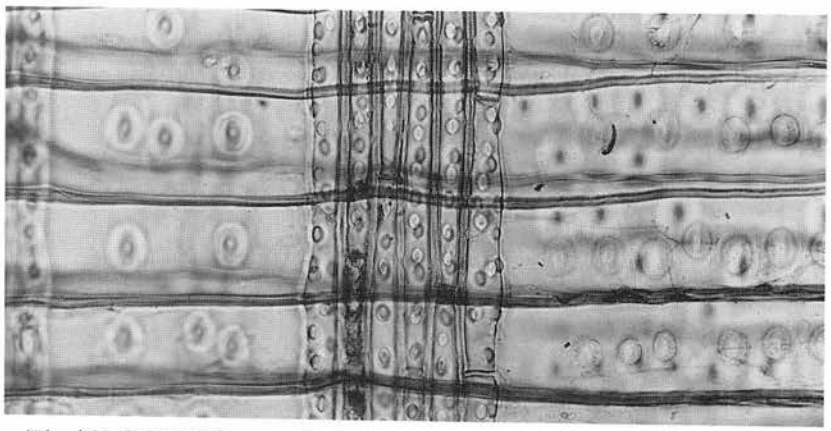
8：ツルムラサキ属　PLC.SS813　試料No.11



スギ（横断面）　　bar：0.2mm

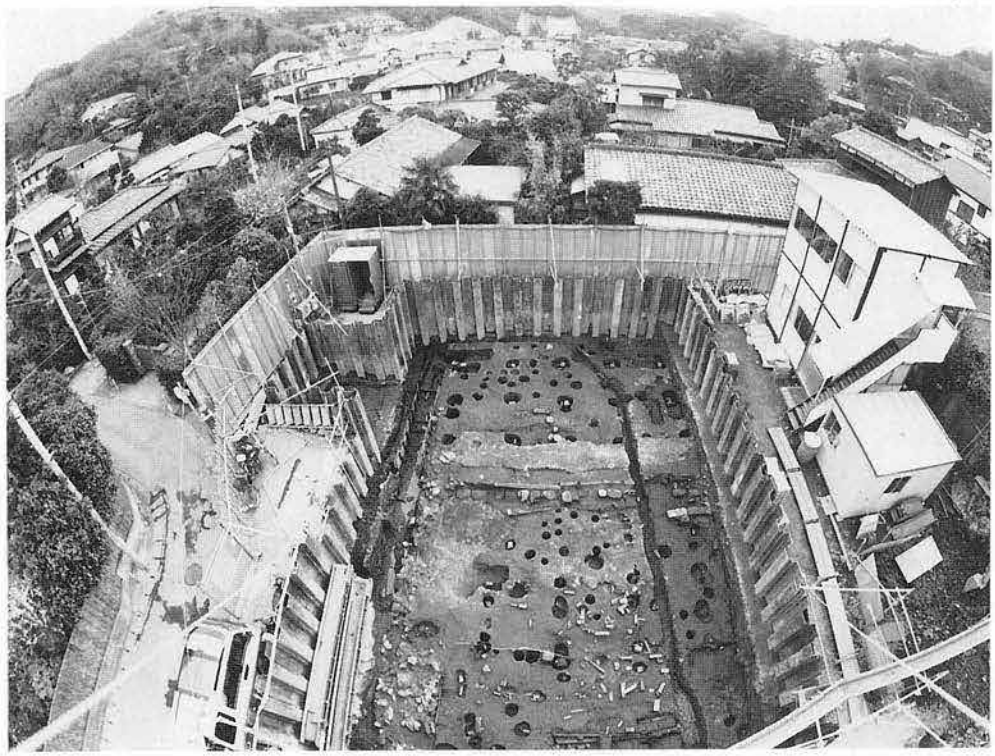


同（接線断面）　　bar：0.2mm



同（放射断面）　　bar：0.1mm

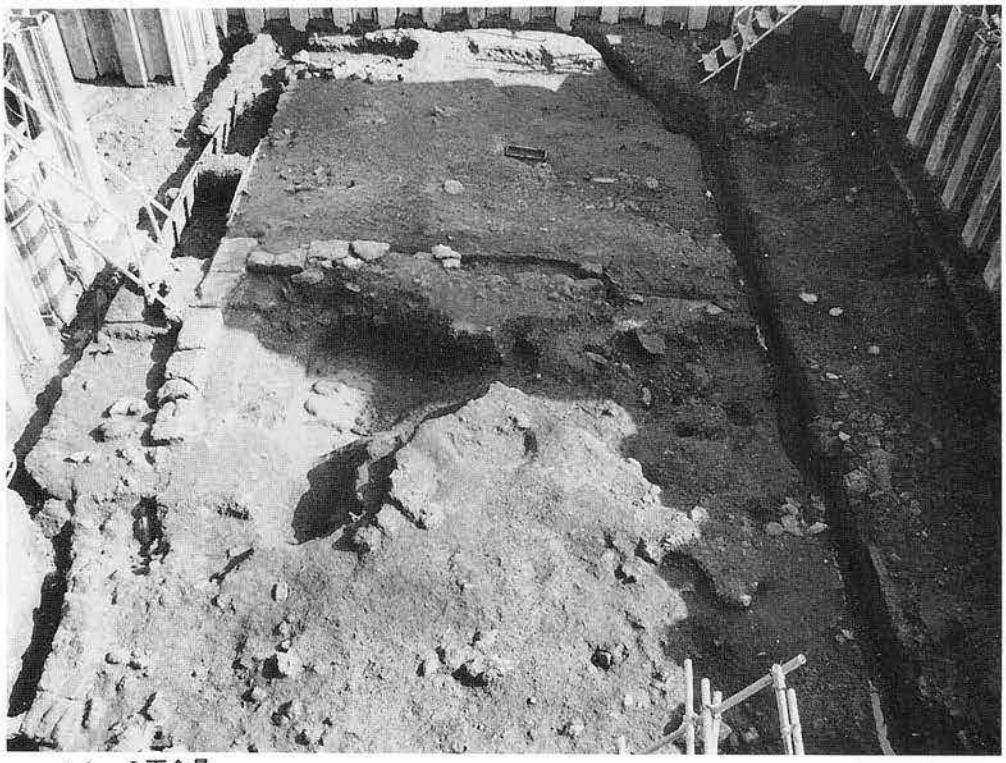
図版Ⅳ　溝１の板材（背板）



▲1．調査区全景(西から)

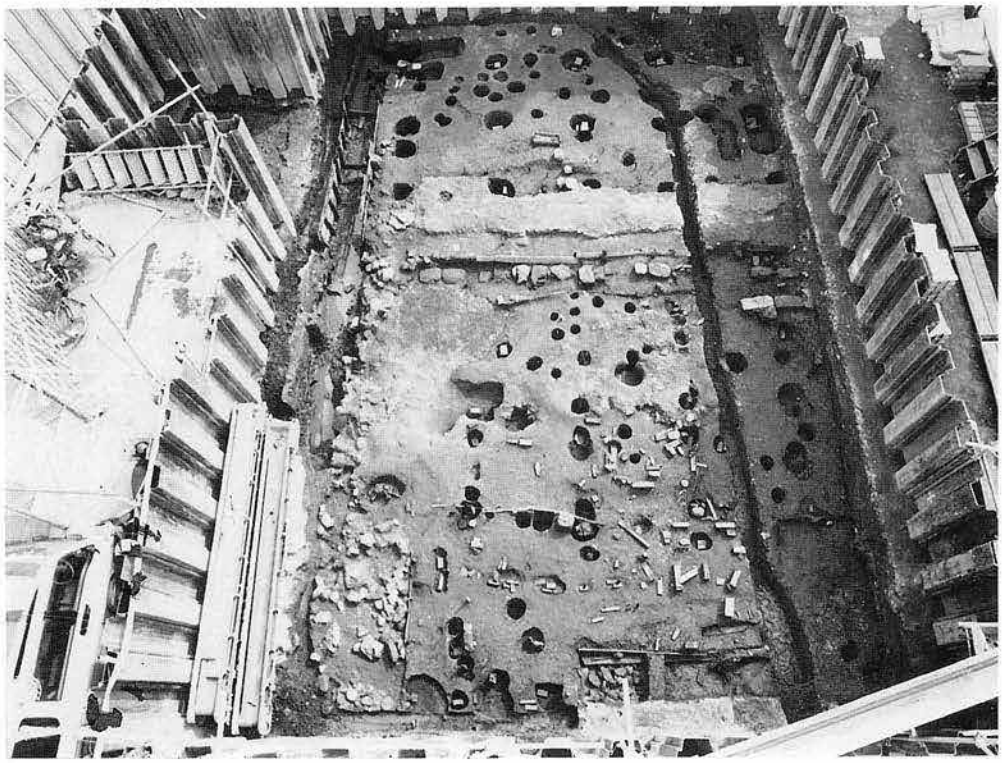
▼2．公方屋敷跡を望む(調査地点から)

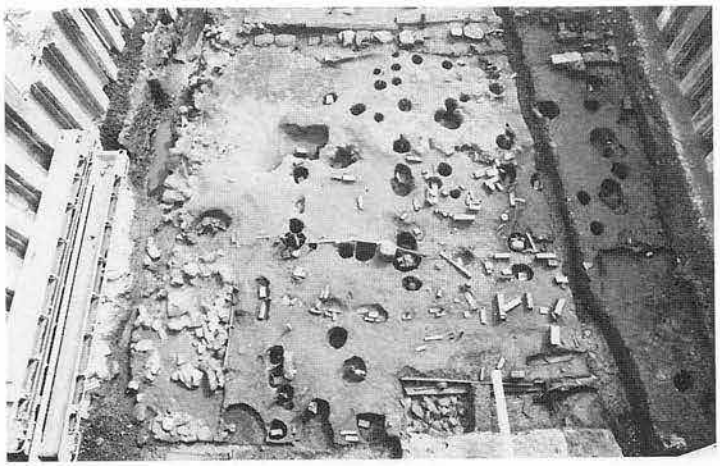
図版 2



▲1．Ⅰ面全景

▼2．Ⅱ面全景





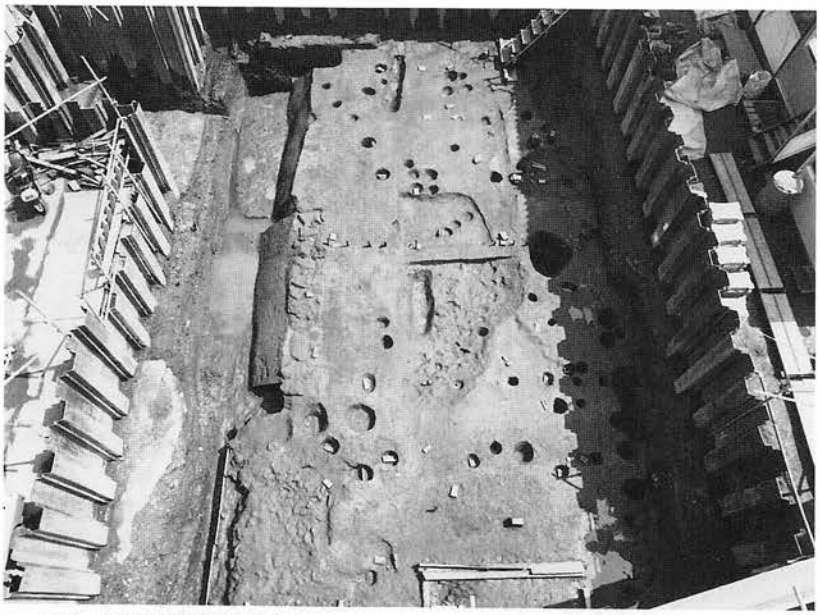
▶1. 建物1（西から）

▼2．II面溝1（西から）

▶3. II面下かわらけ溜り全景（東から）

▶4. II面下かわらけ溜り（南から）

図版 4



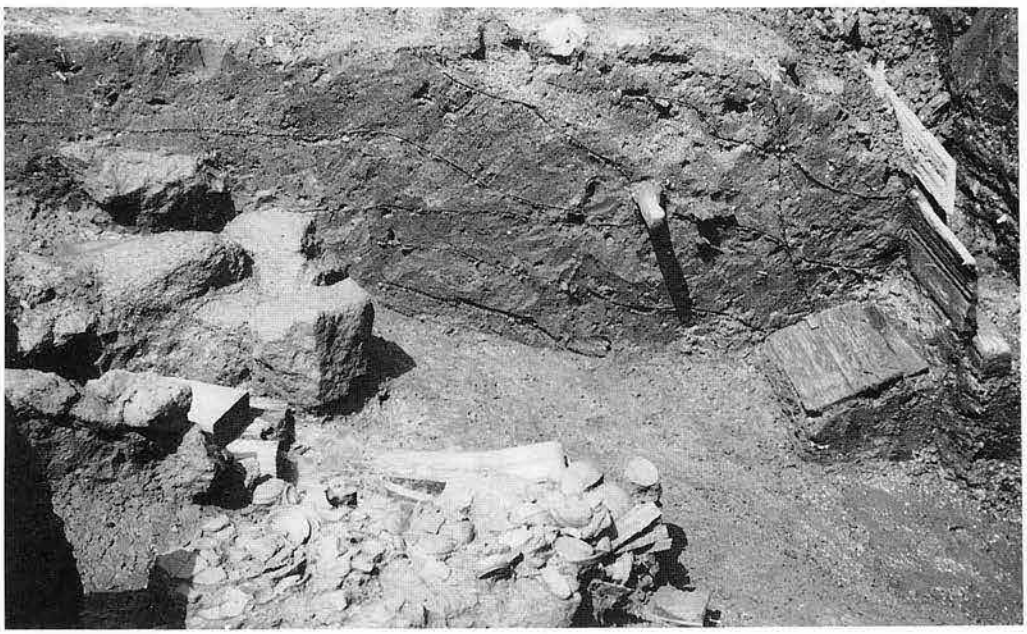
▲1．Ⅲ面全景(西から)

▼2．Ⅲ面下第1トレンチ(南から)

▼3．同東壁セクション

▶1. III面下第2トレンチ(北から)

▼2. 同西壁セクション

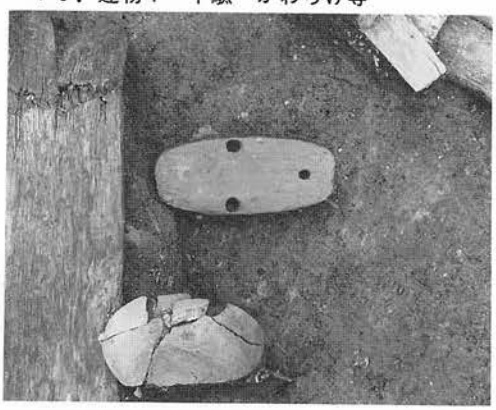


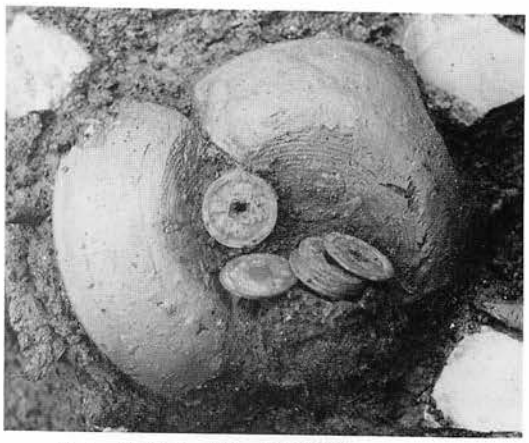
図版 6

▼1．建物2　P7

▼2．溝1　木器碗

▼3．建物1　下駄・かわらけ等





▲4．建物1　銭・かわらけ

▲5．建物1　漆器器

▲6．溝2　漆器碗

▶1. 建物1出土遺物

▲青磁碗

▲天目碗

▲小型壺

◀瀬戸

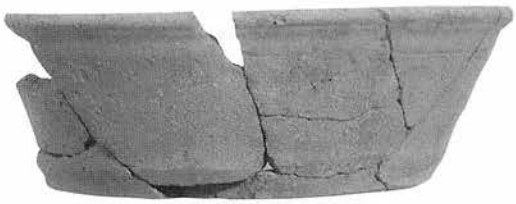
▲卸皿

▲水注

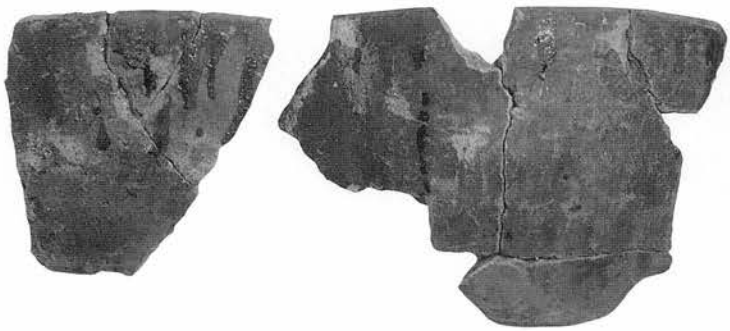
▲四耳壺

▲山茶碗窯系捏鉢

▼手焙り

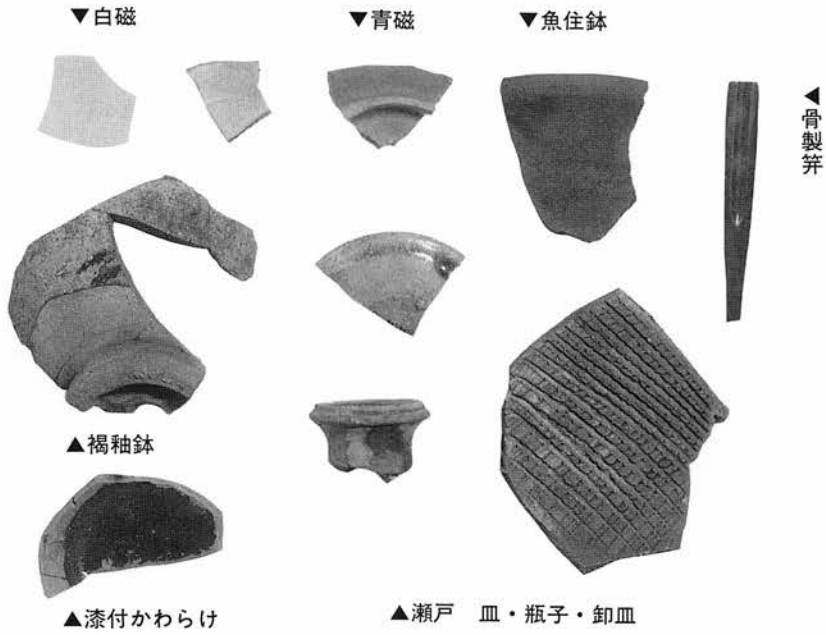


◀鉢形



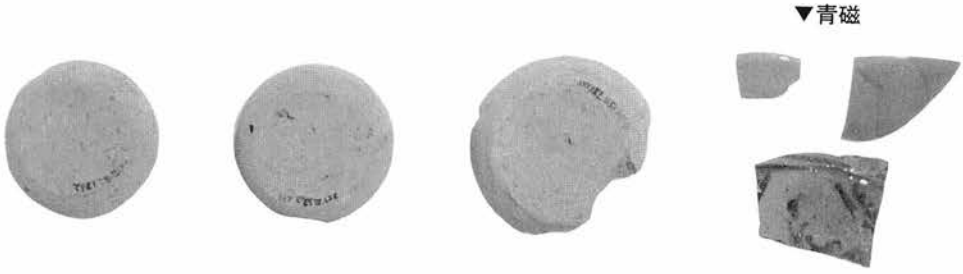
◀瓦質輪花

図版 8

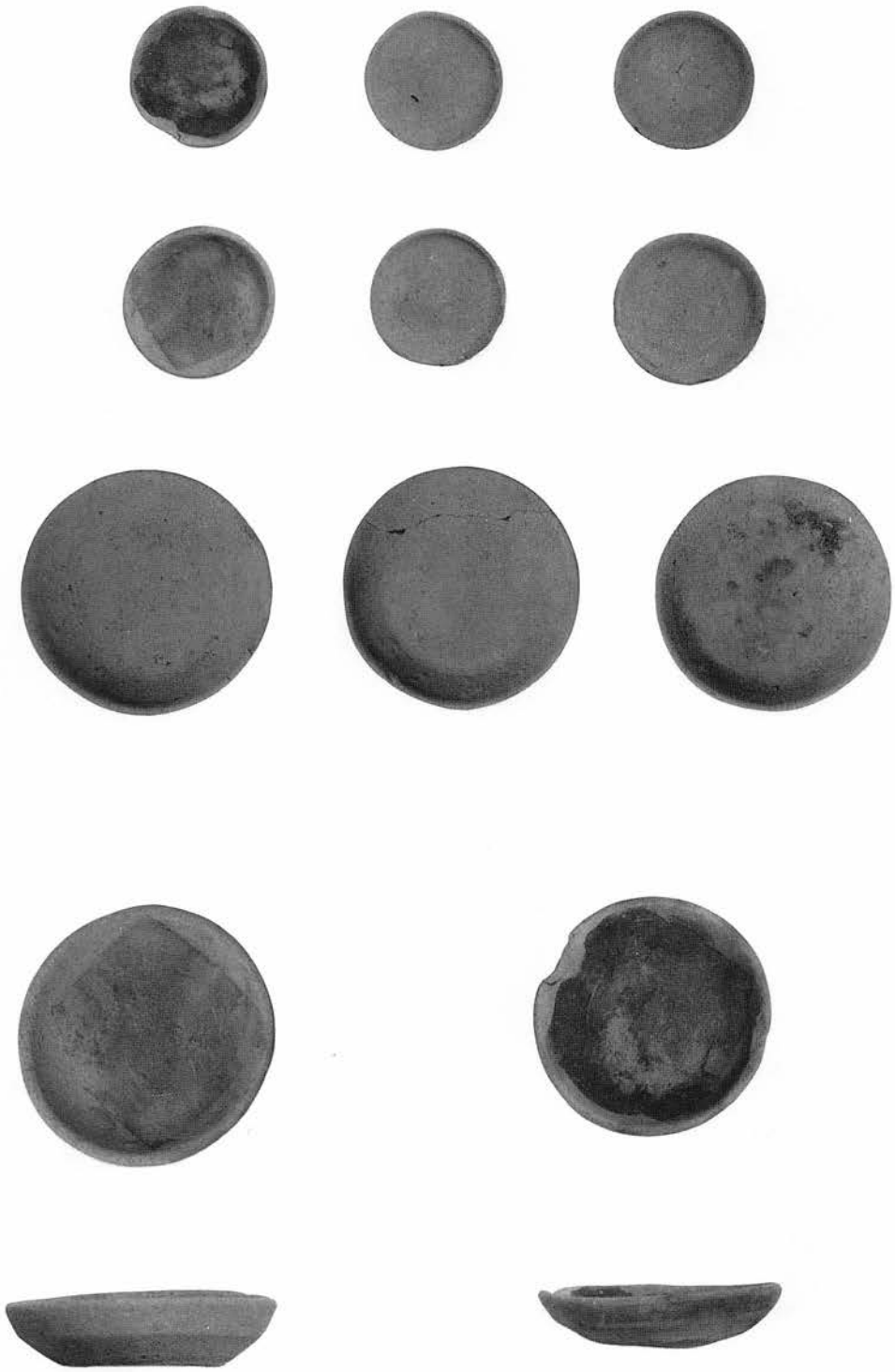


▲1．II面溝1出土遺物

▼2．III面溝2出土遺物

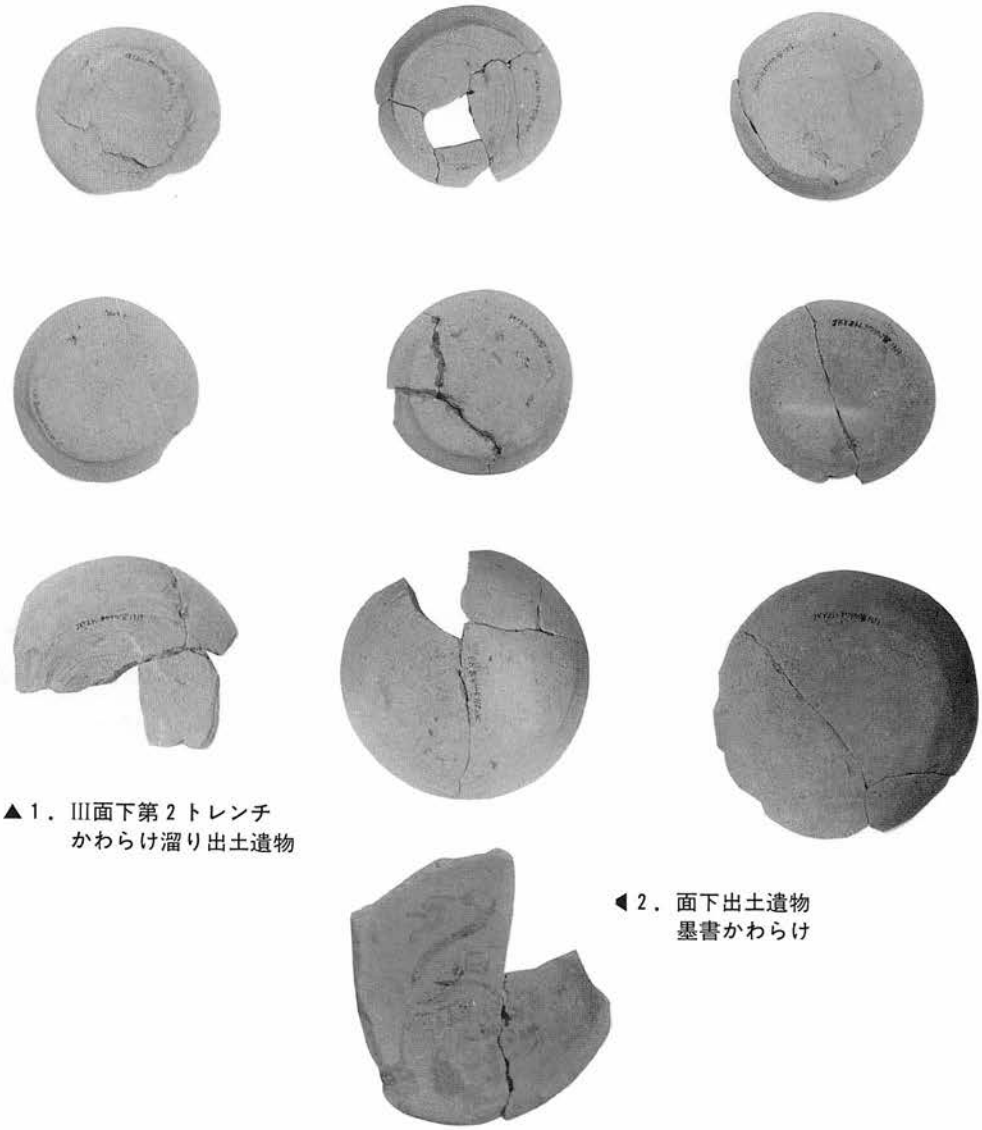


▶1. II面下かわらけ溜り出土遺物



▲2．燈明皿

図版10



▲1．Ⅲ面下第2トレンチ
かわらけ溜り出土遺物

◀2．面下出土遺物
墨書かわらけ

▼3．Ⅰ面出土遺物

▶入子

▶白磁

▶瀬戸　灰釉皿・香炉

▼4．Ⅲ面出土遺物

▶長斧

2.　永福寺跡（No.61）

二階堂字杉ヶ谷520番１外地点

例　　言

1．本書は神奈川県鎌倉市二階堂字杉ヶ谷520番１外地点における、個人住宅造成に伴う永福寺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は調査対象面積1012㎡を国庫補助事業として、平成４年３月13日から同年７月28日まで実施した。

3．本報の執筆は第１・２章・第３章―遺構・第４章を福田　誠が、第３章―遺物を菊川　泉が分担した。編集は福田が行った。

4．本報の資料整理には、福田、菊川、岩野裕已、神山晶子、小西さつきがあたった。

5．本報に使用した写真の内、遺構全景写真は木村美代治がポール式高所撮影装置を用い撮影した。他の遺構は福田が撮影した。遺物写真の内獣骨は福田が、他の遺物は木村が撮影した。

6．花粉分析及び出土した木材の樹種同定は㈱パレオ・ラボに委託した。

7．井戸出土の動物遺体調査報告にあたり早稲田大学考古学研究室、金子浩昌先生に適切な御指導また多大なる尽力を賜った。記して御礼申し上げるしだいである。

8．調査体制は以下の通りである。

調 査 主 体　鎌倉市教育委員会

主任調査員　福田　誠（鎌倉市教育委員会嘱託）

調　査　員　木村美代治、菊川英政、菊川　泉、岩野裕已

調査補助員　本城　裕、神山晶子、安達澄代、小西さつき

9．出土遺物・図面・写真等は鎌倉市教育委員会で保管している。

目　　次

例　言 ……104
目　次 ……105
第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……109
第２章　調査の経過と概要 ……110
　第１節　調査の経過 ……110
　第２節　層序 ……111
第３章　検出した遺構と遺物 ……112
　第１節　１面の遺構と遺物 ……112
　　１面で検出した遺構
　　１面茶毘遺構より出土した遺物
　第２節　２面の遺構と遺物 ……117
　　２面で検出した遺構
　　２面で出土した遺物
　第３節　３面の遺構と遺物 ……119
　　３面で検出した遺構
　　３面で出土した遺物
第４章　まとめ ……122
附編１．井戸内堆積物の花粉化石及び樹種同定 ……143
附編２．鎌倉永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺体―井戸址出土の動物遺体について― ……153

図　版　目　次

図１　調査地点及び周辺図 ……108
図２　調査地点旧地形とグリット設定図 ……110
図３　土層模式図 ……111
図４　１面遺構図……折込……113・114
図５　茶毘遺構図１ ……115
図６　茶毘遺構図２ ……116
図７　１・２面遺構出土遺物……130
図８　２面炭溜り・土壙１出土かわらけ ……131
図９　２面土壙１出土遺物 ……132
図10　２面かわらけ溜り・溝出土遺物 ……133

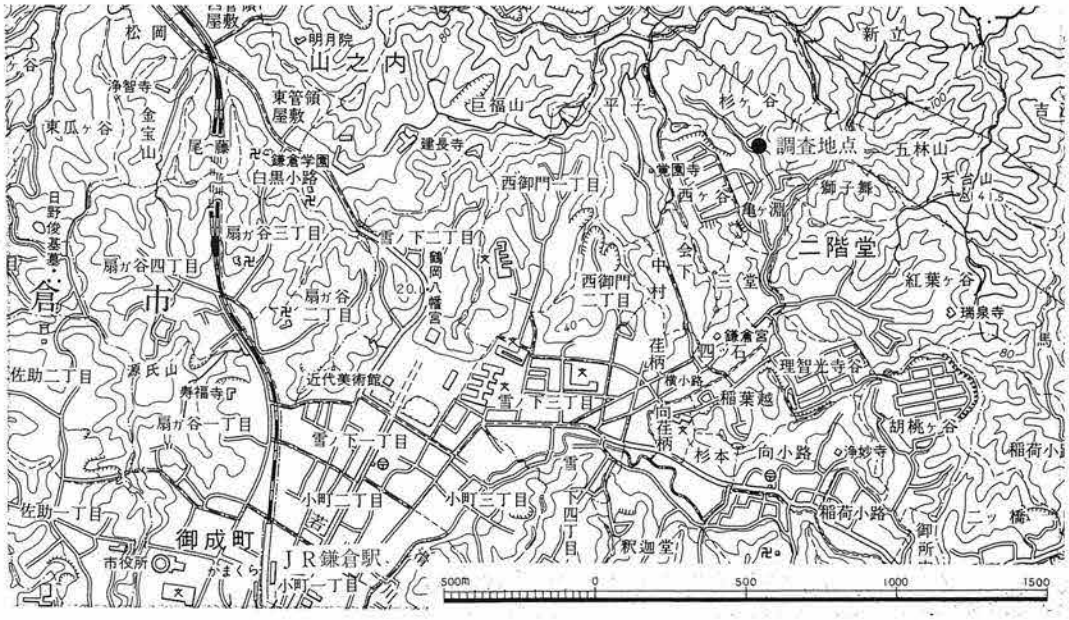
図11　2面井戸出土遺物 ……134
図12　2面出土かわらけ ……135
図13　2面出土瓦 ……136
図14　2面出土遺物 ……137
図15　3面まで出土遺物 ……138
図16　3面遺構出土遺物 ……139
図17　3面出土かわらけ ……140
図18　3面出土瓦 ……141
図19　3面出土遺物 ……142
図20　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の主要花粉化石分布図 ……145
図21　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の樹木花粉化石分布図 ……147
図22　材組織とその名称 ……149
図23　2面井戸 ……153

表　目　次

表1　茶毘遺構観察表 ……112
表2　図7・8遺物観察表 ……124
表3　図8・9・10・11遺物観察表 ……125
表4　図12・13・14遺物観察表 ……126
表5　図14・15・10遺物観察表 ……127
表6　図16・17遺物観察表 ……128
表7　図17・18・19遺物観察表 ……129
表8　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の産出花粉化石一覧表 ……144
表9　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の大型植物一覧表 ……146
表10　出土材とその樹種 ……150
表11　動物遺体観察表 ……162
表12　ノウサギ四肢骨計測表 ……164
表13　ニホンジカ成体四肢骨の計測……折込……165・166
表14　骨端部の外れた四肢骨の計測（骨体の近・遠位端計測） ……167
表15　ニホンジカ幼体四肢骨の計測 ……168

写　真　図　版

図版１　第１面全景 ……169
図版２　荼毘１・２・３ ……170
図版３　荼毘４・５・６ ……171
図版４　荼毘７・８・９・10・11 ……172
図版５　荼毘12・13・14 ……173
図版６　荼毘16・17・18 ……174
図版７　第２面北側全景・南側全景 ……175
図版８　第２面西側全景・第３面西側全景 ……176
図版９　石垣 ……177
図版10　第３面北側全景・第３面南側全景 ……178
図版11　第３面南側全景・岩盤石段 ……179
図版12　第３面井戸、掘立柱建物２・井戸石組み・弓出土状況 ……180
図版13　１・２面遺構・２面出土遺物 ……181
図版14　２面出土遺物 ……182
図版15　２面遺構出土遺物 ……183
図版16　２面出土遺物 ……184
図版17　３面まで・３面出土遺物 ……185
図版18　３面遺構出土遺物 ……186
図版19　３面出土遺物 ……187
図版20　井戸内堆積物の花粉化石 ……188
図版21　井戸内堆積物の花粉化石 ……189
図版22　井戸内出土材の顕微鏡写真 ……190
図版23　井戸内出土材の顕微鏡写真 ……191
図版24　荼毘遺構出土材の顕微鏡写真 ……192
図版25　井戸出土動物遺体　ニホンジカ ……193
図版26　井戸出土動物遺体　ニホンジカ ……194
図版27　井戸出土動物遺体　ニホンジカ ……195
図版28　井戸出土動物遺体　ニホンジカ（幼～成獣） ……196
図版29　井戸出土動物遺体　ノウサギ ……197
図版30　井戸出土動物遺体　ノウサギ・ヒキガエル・キジ・モグラ・ネズミ・イヌ ……198



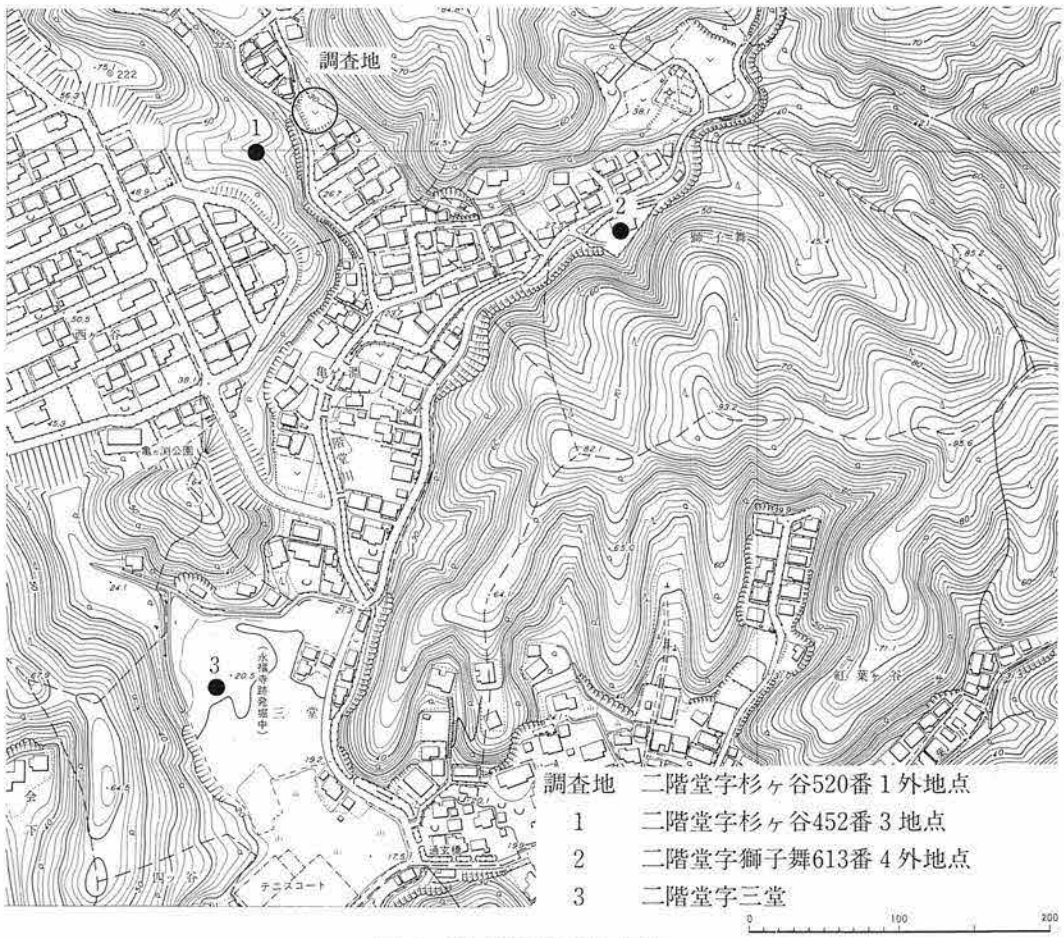


図1　調査地点及び周辺図

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は、鎌倉市二階堂520番１他地点に所在する。国指定史跡永福寺跡の北方、杉ヶ谷の一角である。永福寺の伽藍（二階堂、阿弥陀堂、薬師堂、苑池など）があった中心部から約200m、北に向かって延びる杉ヶ谷の中に位置している。

杉ヶ谷は鷲峰山から永福寺まで南北に約600m、二階堂川の浸食でできた開折谷で、鎌倉から室町時代（12世紀末から15世紀中頃）にかけて、永福寺の僧坊等が建ち並んでいた谷戸の一つで、金沢文庫等に残る当時の写経の奥書の中から、永福寺周辺にあった杉ヶ谷坊、眞言院、石井御坊、亀ヶ淵坊、松本坊などの僧坊の名前を見い出す事ができる。しかし坊の位置は特定されていない。

永福寺は源頼朝の奥州合戦の際に見聞した、平泉の堂舎を模して建立されたと伝えられる寺である。文治５年（1185）に事始めを行い、建久３年（1192）に二階堂が、そして相次いで阿弥陀堂、薬師堂が完成し、建久５年（1194）には境内の伽藍がほぼそろったと考えられている。境内には中心の二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の三堂を始め釣殿、鐘楼、多宝塔、総門、南門、別当坊、僧坊があったと推定されている。

この他に永福寺は堂舎の前に大規模な庭園があったことが大きな特徴である。頼朝は作庭に強い関心を示し、わざわざ京都から作庭家を招き寄せたり、自ら庭石の配置について指図している。この創建した永福寺の有様は『吾妻鏡』建久３年（1192）11月の二階堂供養の記事からもうかがえる。

「永福寺営作已終其功。雲軒月殿。絶妙無比類。誠是西土九品荘厳。遷東関二階梵宇者歟。」

この他に13世紀前半に成立した『海道記』貞応２年（1221）「日本古典全書」の十七、鎌倉遊覧では、「……（前略）次に東山のすそに望みて二階堂を禮す。これは餘堂にたくれきして感嘆および難し。第一第二、重なる櫓には、玉の瓦、鴛の翅を飛ばし、両目両足の並び給える臺には、金の盤、雁燈をかかげたり。おほかた、魯般、意匠を窮めて成風天の望にすずしく、毘首、手功を盡せり、發露、人の心に催ほす。見れば又、山に曲水あり庭に怪石あり。地形の勝れたる、仙室といひつべし。三壷に雲浮べり、七萬里の波、池邊によせ、五城に霞そばだてり、十二樓の風、階の上に吹く。誤りて半日の客たり、疑ふらくは七世の孫に逢わんことを。……（後略）」また『東関紀行』仁治３年（1242）「日本古典全書」には「二階堂はことにすぐれたる寺なり。鳳の甍、日にかがやき、鳧の鐘、霜に響き、樓臺の荘厳よりはじめて、林池のありとにいたるまで、殊に心にとまりて見ゆ。」とその有様が記述されている。

幕府の御願寺として手厚く保護され、創建後約60年たった寛元・宝治年間（13世紀中頃）に土台から組み直すような大規模な修理が行われている。弘安３年（1280）と延慶３年（1310）に火災で焼け落ちているが、火災後は創建時と基本的に同じ規模で再建されている。応永12年（1405）の火災後再建された記録はなく、この後15世紀中頃までに廃寺になったと考えられている。永福寺に属する僧坊もこの頃、廃絶していったと考えられる。

永福寺は遺跡の重要性から昭和28年12月、県の史跡指定を受け、昭和41年６月には周辺の景観も含め約86,000㎡の範囲が国指定史跡となった。現在史跡整備のための発掘調査が10年来続けられ、永福寺の中心部分の様子が解明されつつある。だが、僧坊があったと推定されている谷戸（西ヶ谷、杉ヶ谷）の調査はまだ数件程度しか行われておらず、当時の様子が解明されているとは言い難い状況である。

第２章　調査の経過と概要

第１節　調査の経過

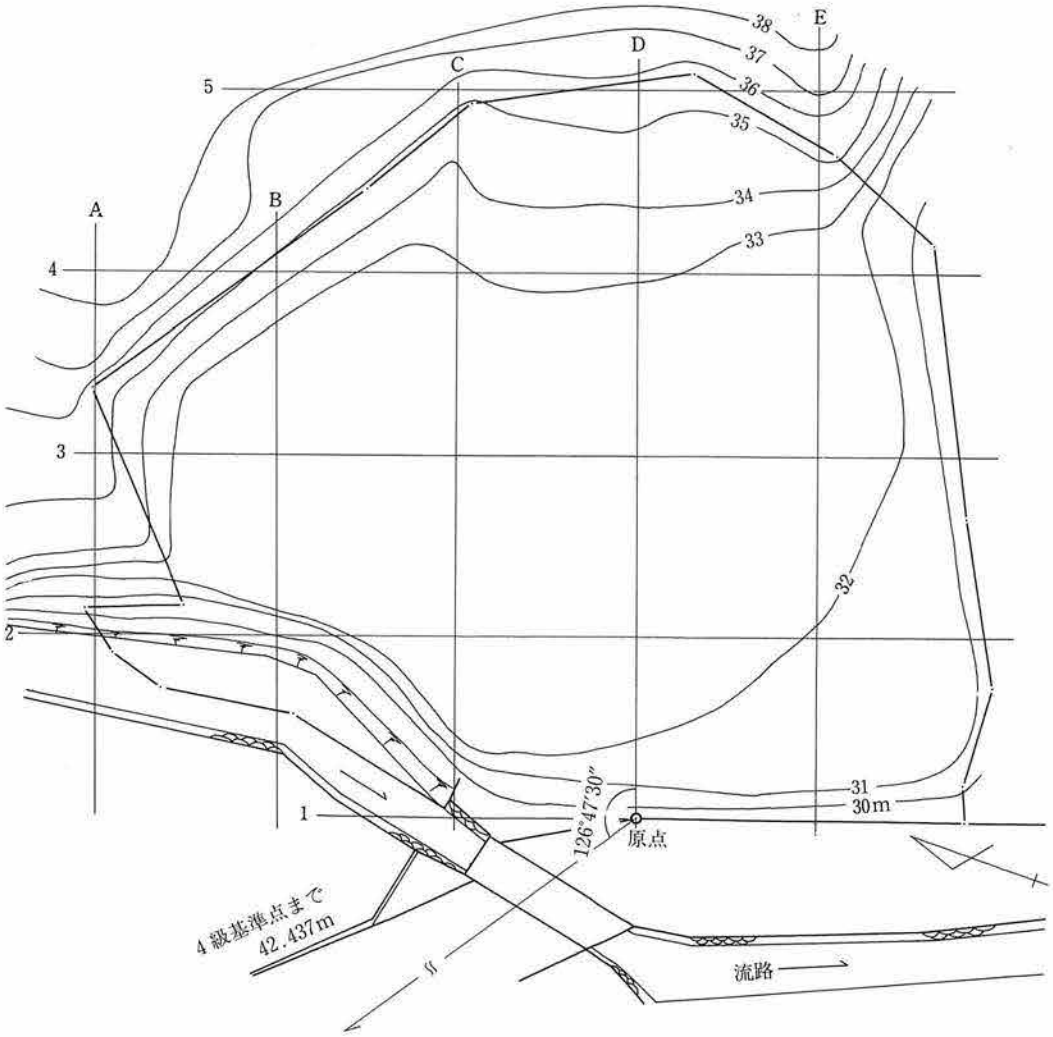


図２　調査地点旧地形とグリット設定図

個人住宅の宅地造成に伴う事前調査として1012㎡の敷地を対象に、３月13日から表土掘削を開始し、５ヶ月間の予定で調査を進めた。事前の試掘調査の結果から、比較的浅いところ（表土下約30～40cm）で中世の遺構面及び遺物が確認された。この試掘の結果をもとに本調査を実施するに至った。調査地は、南北に細長く延びる杉ヶ谷の中でも最も狭く山が迫っている地点で、狭いところの東西幅は約20m程しかない。

北から南に流れる二階堂川の東岸に位置し、現在山裾を切り開いた平場になっている。道路面から平場の地表面までの高さは約３m程で土丹塊で造成されている。

造成の時期は近世と思われるが出土遺物がなく委細は不明である。

第２節　層序

調査地の約1000㎡のうち東側の山際約300㎡は表土をめくると30～40cm程で岩盤面となる。中世に山裾を切り崩し平坦な面を造っている。だが谷の中央をを南北に通る現道路の脇では、岩盤面は確認されていない。急激に谷筋に沿って落ち込んでいるものと思われる。急激に落ち込む岩盤上、二階堂川の堆積土の上面を利用し平坦面（約100㎡）を造っている。中世の遺構面はほぼ現在の道路面と同じ高さで確認された。この東側脇に高さ60cmほどの土丹を使った石垣を南北に積み１段高い平坦面（約600㎡）を造成している。この平坦面を使っていた時期は約100年位と考えられる。この後山際を短期間の内にきめの細かい土を使い盛土して、茶毘を行う場として使われるようになる。この後の変遷は不明だが、近世に遺構の上面に約３mの厚さの土丹で盛土され宅地、耕作地として使われていたと考えられる。調査地のグリッドは、途中検出した石垣の面がほぼ現在に道路と同じであったことから、道路の側溝を南北線と定めた。この際、調査地のほぼ中央にある側溝上の境界杭を原点とした。この南北線は磁北に対して西に約18°振れる。この原点基準に調査地を８m間隔の方眼で覆った。南北線を西から算用数字の１～５、東西線を北側からアルファベットのＡ～Ｅと定め、８m四方のグリットの南北線と東西線の北西隅の交点をグリット名とし、遺物の取り上げの際の基準とした。

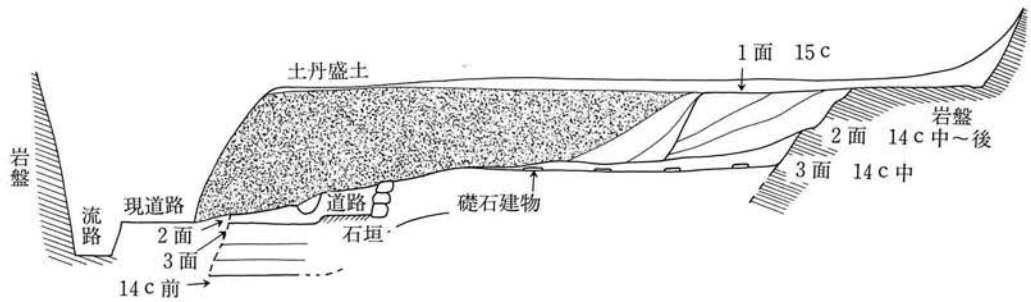


図３　土層模式図

第３章　検出した遺構と遺物

第１節　１面の遺構と遺物

１面で検出した遺構（折り込み図）

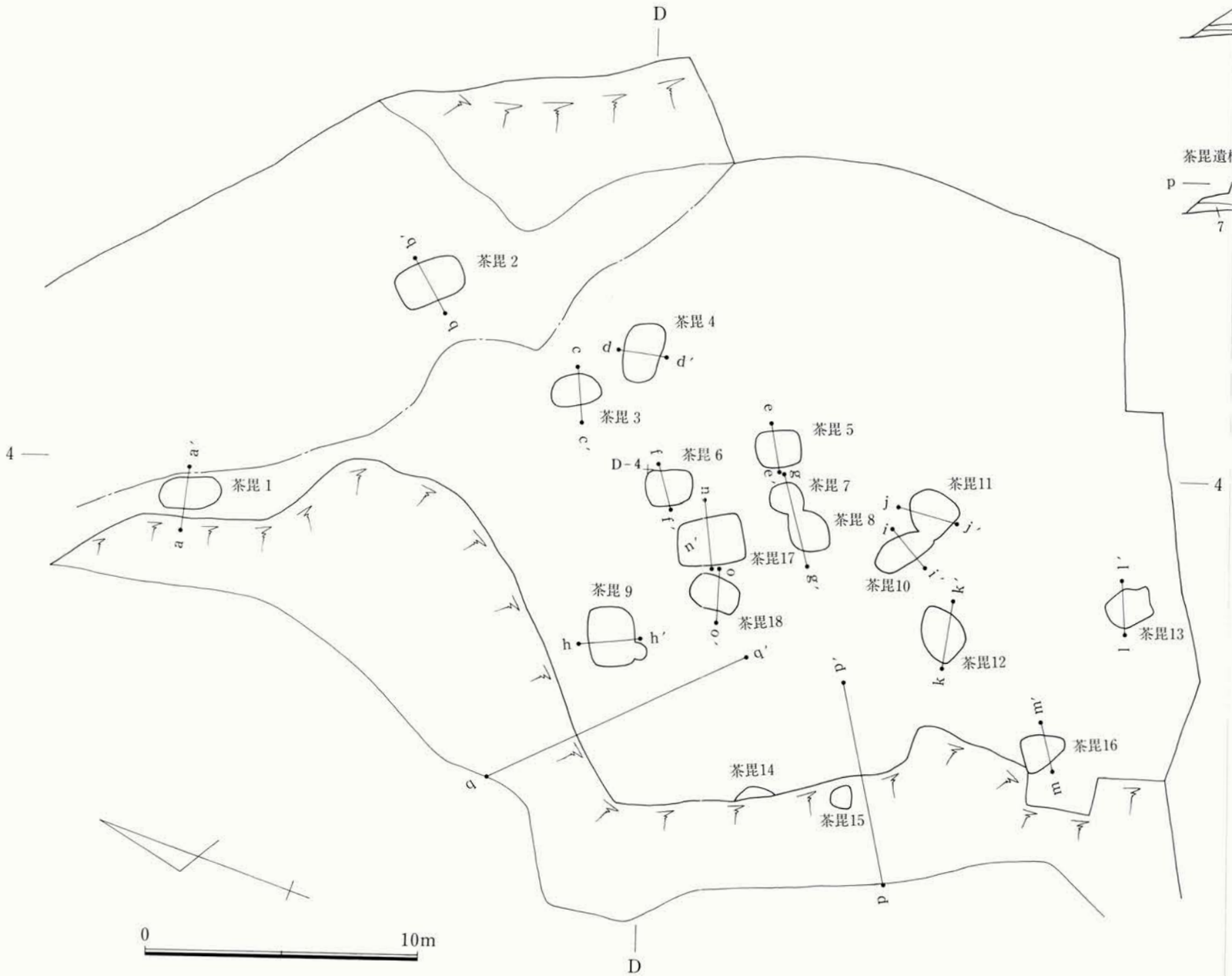
山際の岩盤を削りだした高さに合わせて、西側を造成して約200㎡の平場を造っている。厚いところでは下層の遺構面上に約２ｍ盛土をしている。この盛土は、目の細かい土と砕いた細かい土丹を交互に積みあげた版築で、この土中には遺物がほとんど見られないことから比較的短期間の内に一気に盛土をしたものと思われる。

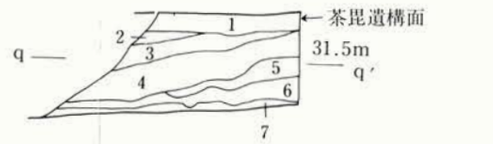
この版築面と岩盤面の上から茶毘に使われた18基の土壙を検出した。いずれの土壙も長辺約１ｍ、短辺約60㎝程の隅丸長方形の平面形を呈し、深さは10～30㎝程である。

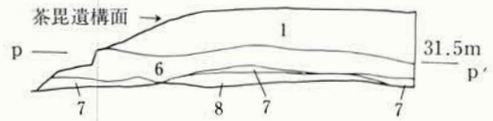
土壙の内面、底面は高熱を受けていずれも赤黒くあるいは赤褐色に変色している。中には煤けた

表１　茶毘遺構観察表　　単位は㎝

遺構名	形	長　辺	短　辺	深　さ	遺　　物	長辺軸方角
茶毘１	隅丸長方形	100	50	13	焼骨	北　西
茶毘２	隅丸長方形	110	78	10	焼骨	北北西
茶毘３	楕　円　形	95	60	8	焼骨、銭	北　西
茶毘４	楕　円　形	110	70	12	焼骨　かわらけ	西
茶毘５	方　　形	88	68	43	焼骨	北　西
茶毘６	隅丸長方形	95	60	16	焼骨	北　西
茶毘７	?	83	—	13	焼骨	—
茶毘８	?	—	—	10	焼骨　銭　常滑	—
茶毘９	長　方　形	110	82	18	焼骨　銭	西
茶毘10	隅丸長方形	90	55	14	焼骨	北　西
茶毘11	隅 丸 方 形	98	70	10	焼骨	北
茶毘12	不　定　形	100	85	8	焼骨　一体分	北北東
茶毘13	楕　円　形	125	105	6	焼骨　かわらけ	北　西
茶毘14	痕跡のみ	—	—	—	焼骨	—
茶毘15	痕跡のみ	—	—	—	焼骨	—
茶毘16	隅丸長方形	83	58	6	焼骨	北北西
茶毘17	隅 丸 方 形	140	112	15	焼骨　香炉	北北西
茶毘18	長　方　形	88	55	25	遺物なし	北







1．暗茶褐色粘質土層（炭焼土含む）
2．土丹層、すきまに茶灰色粘質土
3．淡茶灰色粘質土層
4．暗茶灰色粘質土層
5．茶灰色土
6．土丹層、すきまに淡茶灰色土
7．黒色土層
8．明淡茶褐色土層、7層との間に薄く砂

図4　1面遺構図

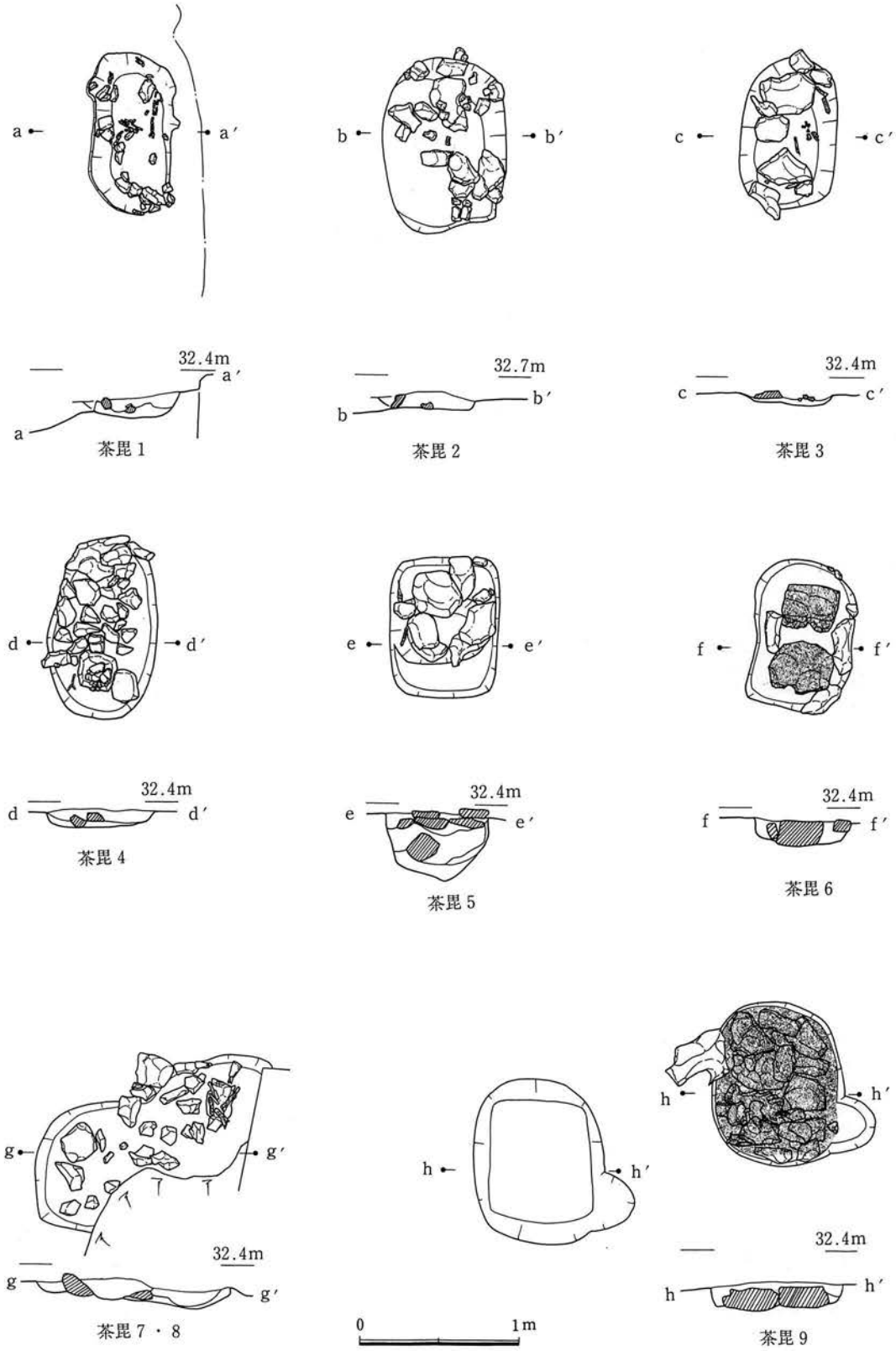

a
a′
32.4m
a
a′
茶毘 1
b
b′
32.7m
b
b′
茶毘 2
c
c′
32.4m
c
c′
茶毘 3
d
d′
32.4m
d
d′
茶毘 4
e
e′
32.4m
e
e′
茶毘 5
f
f′
32.4m
f
f′
茶毘 6
g
g′
32.4m
g
g′
茶毘 7・8
h
h′
h
h′
32.4m
h
h′
茶毘 9
0
1m

図 5　茶毘遺構図 1

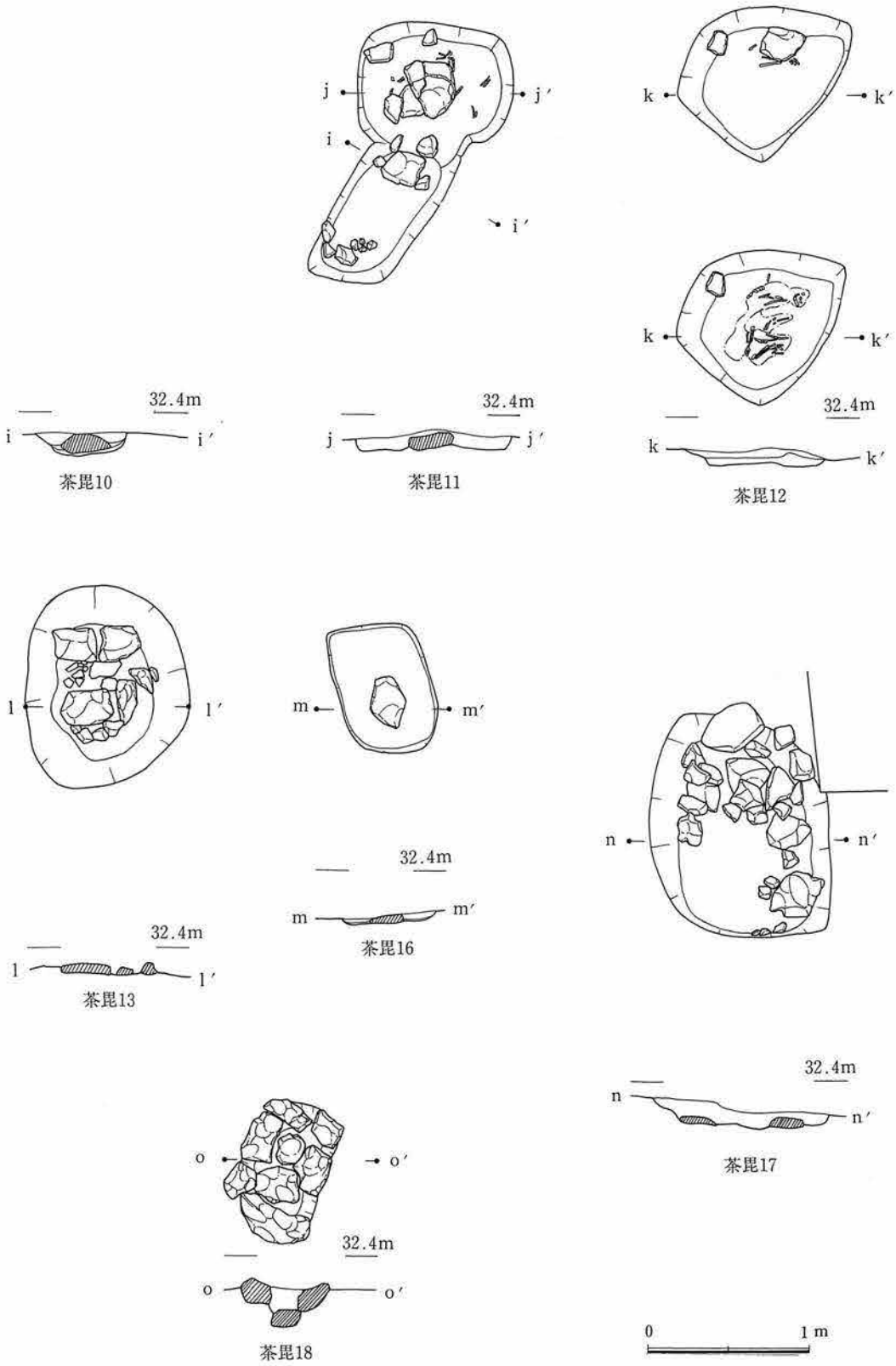

j
j′
i
i′
k
k′
32.4m
i
i′
茶毘10
32.4m
j
j′
茶毘11
k
k′
32.4m
k
k′
茶毘12
l
l′
m
m′
32.4m
m
m′
茶毘16
32.4m
l
l′
茶毘13
n
n′
32.4m
n
n′
茶毘17
o
o′
32.4m
o
o′
茶毘18
0
1 m

図 6　茶毘遺構図 2

人頭大の偏平な土丹、大量の灰、炭化物、火葬した人骨が遺存していた。

検出した18基の土壙の内に未使用のもの（荼毘18）が１基ある。内面、底面ともに熱を受けた痕跡がない。荼毘に使用された可能性のある17基の土壙の内、12基の土壙では、比較的四肢骨を中心に多くの骨が遺存していた。残りの５基の土壙の内には焼骨片が僅かに遺存する。荼毘12では遺存状態が悪いが、荼毘の後骨を取り上げずにそのまま埋めてしまった状況が検出されている。検出時の状況からこれらの18基の土壙群は荼毘場もしくは葬地の様相を呈しているものと考えられる。これら検出した土壙の上部には石塔などの施設のあった痕跡は認められず、また周辺から石塔類の部材の出土もない。土壙内に遺存（副葬）していたかわらけ、銭（永楽通宝・洪武通宝）からこれら荼毘遺構の年代は15世紀代と推察される。

１面荼毘遺構より出土した遺物

図７（10～14・16～22）

10は荼毘13より出土。11・17～22は荼毘９、12・13は荼毘４、14は荼毘１の直下、16は荼毘18の下より出土。23～25は荼毘10より出土。かわらけは体部の立ち上がりが直線的で、口縁部がやや外反する特徴をもち、器肉が比較的厚く焼成の良い15世紀の製品の様相を呈するものである。17は直径約2.9㎝、銭を模した銅製品で、「永楽通宝」と刻んだ表側の面が凸形に出、蓋のような形状となっている。永楽通宝の初銭は1408年であり、17はこれを模した製品であって、この年代を下る時期に製作されたと考えられるが、遺構の年代を考える上では貴重な遺物といえるだろう。

第２節　２面遺構と遺物

２面で検出した遺構（附図１）

近代に１面の遺構面とほぼ同じ高さで、東側の山際から西側の道路までの間の約600㎡を山を切り崩した多量の土丹塊で盛土されていた。このために現在の道路面（海抜約29.3m）から約３m程高い（海抜約32.3m）平坦地になっていた。道路際から東側一帯を重機で約700㎡の範囲の表土を取り除くと、約100㎡の範囲で現道路面とほぼ同じレベルで中世の遺構面を検出した。

石垣

南北に通る現道路脇から東に約6.3mの地点で、南北に延びる一辺が約30㎝四方の土丹を積み、並べた土丹列を検出した。この土丹列を境に東側は20から30㎝ほど高くなることから、この土丹列は石垣と思われる。積まれている土丹塊はさらに下に延びていることから、埋もれている状態と考えられる。

道路

この土丹列に沿って西側で、南北方向に幅約１m、長さ12mの範囲で平坦な硬化面を検出した。脇に幅60cm、深さ30cmの溝が沿うところから道路と考えられる。

以下の遺構は検出した石垣の東側の約600m²の平坦面上で確認した遺構である。

井戸

調査地の東の山際、B－３区で付近で検出した。井戸枠には鎌倉石の切石を２段積み、井戸枠の平面形は一辺が1.25mの正方形である。岩盤を垂直に掘り抜き地表からの深さは7.20mに達し、底面形は井戸枠と同じく一辺約1.25mの正方形で平らである。狭い上に多量の土丹塊と水のため正確な土層観察がなされなかった。

出土した遺物から井戸は14世紀前半に掘られ、15世紀前半に多量の土丹塊で埋められたものと考えられる。井戸枠の高さを基準にして、深さ２mから４m地点の間で多量の獣骨（鹿、兎等）が出土している。また深さ3.5m地点で、三枚打の弓が東壁に沿う形で、本弭からの長さ約1.15m分出土している。

炭溜まり

B－２区、井戸の西側で多量の炭化物が遺存する土壙が検出された。形は不定形で、土壙というよりも遺構面の窪みを利用して火を使ったものかもしれない。

遺構面上からは多くのかわらけが出土しているが、２面は井戸以外の遺構がはっきりしない。かわらけを見ても、３面とあまり時期の隔たりがないのかもしれない。

２面で出土した遺物（図７・８・９・10・11・12・13・14）

図７（１～15）

１～９･15は２面で検出した柱穴の覆土から出土したもの。１～４は柱穴245より出土。５は柱穴201より出土。６・７は柱穴251より出土。８は柱穴246より出土。９は柱穴247より出土、Ⅰ期の男瓦である。

図８・９　炭溜まり・土壙１

１～５は石垣の西側調査区炭溜りより出土。６以下及び図版５は、土壙１より出土したものである。かわらけは近似した形態のものというよりは、14世紀代のものと考えられる製品が混然と出土しているといった状況が窺われる。

図10　２面のかわらけ溜まり・溝

１～19はかわらけ溜りから出土したものである。かわらけは14世紀中葉の製品を主流とする。また、13のような器肉が均一的に厚く14世紀前半のものと思われるものや、７・14・18のように14世紀後葉の製品とおぼしきものが混入する。かわらけ溜りといっても、近似した形態のものが多量に出土する状況とは異なり、14世紀代の製品が混然としているといえよう。

20～25は石垣の西側調査区溝より出土したもの。瓦は24がⅠ期、23・25がⅡ期のもの。

図11　井戸

1～7が井戸覆土上層より出土したものである。2～5のかわらけは、器肉が厚く、体部の立ち上がりが直線的で口縁部が外反するのが特徴で、15世紀の製品の様相を呈する。井戸が埋め立てられた時期を考察する上で、重要なものといえよう。

8以下は下層から出土したものである。12の弓は「三枚打弓」といわれる形態のもの。木芯の両面に竹を張り合わせて作られているもので、表面に黒漆が塗られている。下端部には黒漆の下地に糸を巻きつけているのが観察できる。漆を塗っていない部分には籐が巻きつけられていたと思われるが遺存しない。なお、木芯に使われている材はヒサカキ（ツバキ科）であることが樹種同定の結果明らかになった。

図12　2面のかわらけ

4・5・11・13・19・23・29・30・37・39・41・45は石垣の西側調査区より出土。それ以外のものは石垣の東側調査区より出土したものである。

色調は淡赤灰色を呈し、きめ細かい胎土から成り、焼成が弱く軟質という傾向がある14世紀の製品の特徴を備えた一群といえる。深型で器肉の厚みが均一的な特徴をもち14世紀前葉の製品（顕著にその特徴があらわれているのは1・2・35・45・49）と、これに対してやや浅型で、口縁端部が薄手に作られている14世紀中葉から後葉の製品と思われるもの（12・30・31・45・49）が混然と出土している状況である。

図13　2面

2のみ石垣野西側調査区より出土。その他は石垣の東側調査区から出土したものである。

1・2・3・は胎土が粗く、焼成が良好で比較的硬質な製品。これに対し4・5は精良な胎土でしまりが良く、比較的軟質なものである。いずれも永福寺跡から多量に出土するタイプのもので、このうち4の縄目の叩きで成形される製品はⅠ期（創建時・12世紀末～13世紀初頭）に用いられたもの。2・3・5はⅡ期（寛元・宝治年間の改修時）に用いられたと考えられるもので13世紀中頃のもの。5に関しては埼玉県の水殿瓦窯で生産されたものであることが確認されている。1の胎土は2・3に似ているが2・3に比べて極めて薄いのが特徴である。このタイプの瓦はⅢ期（弘安年間の再建）以後に用いられたものと考えられている。

図14　2面　かわらけ以外の遺物

11のみ石垣の西側調査区より出土。その他のものは石垣の東側調査区より出土したものである。

第3節　3面の遺構と遺物

3面で検出した遺構（附図2）

石垣

２面で検出した土丹列の脇、南北に延びる幅約１ｍの道路部分を約30㎝掘り下げると、この道路の東側に沿って高さ約60㎝に、約30㎝四方の土丹塊を３～４段程積み上げた石垣を検出した。この石垣の上面の高さに合わせて、東側一帯を600㎡の広さで平坦に地業していることが判明した。

道路

２面で石垣に沿って検出した幅約１ｍの道路を約30㎝掘り下げると、脇の溝は消滅してしまうが道路の平坦な硬化面はより鮮明になる。道路の西側一帯は10㎝程低くなる。

道路は谷筋に沿って南から北に延び、遺跡の北西を北東から南西に斜めに横切る二階堂川の手前で石垣と共に西に直角に折れ曲がる。この先は電柱、道路側溝、川の護岸のために撹乱され確認できなかったが、道路はおそらく二階堂川を越え杉ヶ谷の奥に向かって延びているものと思われる。

土壙１

石垣の西、南北に通る道路の脇で検出した遺構である。長さ約2.2m、幅約1.3mの不定形の土壙である。軟弱な地盤の上で、いくつかの遺構が重なり合っているために平面形がはっきりしない。覆土には多くの炭化物とかわらけが混じり合っている。炭化物は土壙の周囲にも散布している。

礎石建物１

Ｃ－２・３区、調査地のほぼ中央に位置する礎石建物である。東西５間、南北３間の総柱の建物で、北西隅に１間の張り出しが付く。東西、南北方向ともに１間の長さは190㎝である。礎石には30㎝大の伊豆石と土丹が使われている。建物の東、山側には幅25㎝から50㎝の溝がめぐる。

敷地のほぼ中央に位置すること、規模が一番大きいことから当遺跡の中心的な建物と考えられる。

礎石建物２

Ｄ－３区に位置する礎石建物である。東西１間、南北２間の小さな建物で、東西方向の１間の長さは190㎝、南北方向の１間の長さは150㎝である。建物の東と北側には、礎石建物１から続く溝がめぐっている。規模が小さいことから、納屋的な用途の建物とも考えられる。

礎石建物１の南で、礎石建物２の西側は建物跡や、柱穴などの遺構の密度が低い約150㎡の平坦な面である。前庭のような空間と考えられる。

掘立柱建物１

Ｂ－４区に位置する。南側の礎石建物１、北側の井戸に挟まれた建物で、東西３間、南北３間の総柱建物で、東西、南北方向ともに１間の長さは185㎝である。建物内の西側の１間は、細かな土丹を叩き締めた土間状の平坦面が井戸まで続く。建物内北東の１間には、４穴の土壙が遺存する。建物内にあることから大甕などを据えていた痕跡と考えられる。

このように、井戸の脇まで続く土間を持ち、建物内に据え甕と考えられる施設があることから南側の中心の建物に附属する水屋的な建物と考えられる。

掘立柱建物２

Ｂ－３区に位置する。掘立柱建物１、礎石建物１の東側で、岩盤を削りだした１段高い平場から迫り出して立てられている掘立柱建物である。東西２間、南北３間の建物で、柱間は170㎝から200

cmとバラバラである。全体に菱形に歪んでもいる。建物の性格は不明である。

建物周囲の溝

東側の山裾、掘立柱建物１から礎石建物１、礎石建物２の東側を建物に沿うように溝が北から南に向かいめぐっている。各建物の西側には連続した溝は検出されていない。雨落ち溝と山からの水を防ぐための溝を兼ねていると思われる。

柵列

Ｂ－２区に位置する。掘立柱建物の西側で多くの柱穴が検出されている。各柱の間隔は狭く、主に南北方向に連なることから幾度も作りなおされた柵列の可能性がある。

岩盤上の溝・柱穴

東側の山際に建物より１段高く山裾を削り出し、岩盤面を露出する100㎡程の平場がある。建物が建つ平坦面からの比高差は約１ｍである。礎石建物の東側に、この平場に昇る岩盤を削り込んだ段数５段の階段が造られている。この平場に数条の溝と柱穴が穿たれている。掘立柱建物２以外の柱穴の深さは浅く、また規則性がない。

井戸

Ｂ－２区に位置する。２面で確認した井戸で、３面の礎石建物、掘立柱建物が建てられた14世紀前半の時期に掘られたものと思われる。井戸枠の外に岩盤を穿った径20cmの柱穴があり、屋根が掛けられていたと考えられる。

３面で出土した遺物（図15・16・17・18・19）

図15　３面まで

１～５・８・11・12・13・15・17・18・20～25が石垣の西側調査区より出土したもの。それ以外は石垣の東側より出土したものである。かわらけの形態は14世紀代の製品とおぼしきものが多様に混然と出土している状況といえよう。瓦はＩ期のもの。

図16　３面の遺構

１～12は土壙３覆土より出土。図版13－２に示した瀬戸の鉢の破片も共伴している。かわらけに関しては14世紀代のものと思われる製品が混然と出土している。

13は柱穴284より出土。14～19は土壙２より出土。20・21・27・28は柱穴323より出土。22・23は道路より出土。24・25は溝より出土。26は柱穴312より出土。29・30は柱穴294より出土。31は柱穴343より出土。

図17　３面かわらけ

28は器肉が厚く、器高が低く外体部に稜線が明瞭にみられ、13世紀末から14世紀初等の製品と思われる。これ以外の製品に関してはおおむね14世紀前葉から後葉の製品と思われるものがほとんどである。

図18　3面瓦

いずれも石垣の東側調査区より出土したもので、1はIII期以後のもの。2～6はI期のもの。

図19　3面かわらけ以外

いずれも石垣東側調査区より出土したものである。2は土壙3覆土より出土したものの破片と接合した。

第4章　まとめ

この杉ヶ谷は文献に永福寺の僧坊が在ったと記載されている谷で、杉ヶ谷坊、石井御坊、亀ヶ淵坊といった僧坊の名を拾うことができる。ただしこれらの僧坊の位置は特定されていない。調査で確認した石垣や礎石建物の規模などから、僧坊もしくは関連する附属の建物と考えられる。ただし13世紀代の遺物、遺構は検出されていない事からこの土地が利用され出したのは14世紀に入ってからと思われる。道路際のトレンチの中から出土したかわらけの年代は14世紀前半、また石垣の裏込めから出土したかわらけも14世紀前半と推察される。このことから山裾を切り開き、道路を整備し石垣を積み土地を居住空間として利用し始めた時期は14世紀前半と考えられる。また居住空間として利用した時期は14世紀前半から15世紀前半までの約100年間と思われる。この後居住空間として利用されなくなり、おそらく15世紀中頃から茶毘を行うような葬地的な空間として使用されたと考えられる。

13世紀代

土地としてまだ利用されていないと考えられる。現在の道路面より約1m掘り下げたところで流木等を含む流路（二階堂川）を検出する。

14世紀代

東側の山裾を切り開き、道路を整備し合わせて石垣を積み、道路より1段高い平坦地を造成する。この時、山際隅に一辺約125cmの正方形に岩盤を7.20m垂直に掘り抜いた井戸を造る。この井戸の脇に柱間185cmで3×3間の掘立柱建物1が建つ。この建物は1間幅の土間を持ち、土間は建物の西側の井戸の脇まで延びている。建物内に大甕を据えたと思われる直径約1m、深さ30～40cmの土壙が3つ検出されている。

平坦地の中心的建物と思われる鎌倉石と土丹を礎石に使った3×5間の礎石建物1、このほかに礎石建物1に伴う1×2間程度の礎石建物2、おそらく3×3間程度になると推察される1段高い岩盤の平場から迫り出す形に建てられた掘立柱建物2、数条の柵列、溝等の遺構が検出されている。

遺物は平坦面出土のかわらけが主体であるが、岩盤を掘り抜いた井戸の中から六器、三枚打の弓、多量の獣骨が出土している。獣骨は、鹿、野兎、猫、鼠等に分類される。鹿は雄、雌が確認されて、頭蓋の数から10体以上、野兎は6体以上数えられ、いずれも食されたものと思われる。これらの骨を投げ込んだ時点で井戸はごみ捨て場となったと思われる。最上部から出土した完形品のかわらけ

は15世紀前半代の様相を呈している。

このことから井戸は一連の建物とともに14世紀前半に掘削され、15世紀前半に埋められていると推察され、この間約100年にわたって開口していたと思われる。市街地の遺跡でも獣骨(馬、牛、海豚、猪）などの発見例が増加しているが、まとまってこれほど多くの獣骨が一括して見つかった例は始めてであり、当時の自然環境、食文化を考える上で貴重な発見である。

15世紀代

永福寺が廃寺になったと推察されている15世紀前半代までで、14世紀から続いた各建物は廃絶してしまう。この後、山際の岩盤の平坦面と同じ高さまで14世紀代の遺構面上に短期間の内に盛土をし、この場所で荼毘を行うようになる。荼毘遺構１・４・９から出土したかわらけや、荼毘遺構９から出土した銭（洪武通寶、永楽通寶）から15世紀中頃代の年代が推察される。

道路を隔てた西側の谷戸（二階堂字杉ヶ谷452番３地点）の調査でもやはり当遺跡と同じような変遷が見られる。14世紀代には掘立柱建物が建ち、15世紀代に入ると埋め立てられて荼毘を行うようになる。いずれの遺構も永福寺や僧坊との関連が考えられる。

18基確認された荼毘遺構は、いずれも１m×0.6mの平面形を呈している。長軸の方向は北、北西、西と規則性は見えない。内壁は赤黒く焼けたり真っ黒く煤け強い火力で火を焚いたことがうかがえる。ただし焼けている範囲が１m×0.6mと狭いため、成人を火葬にするにはあまりにも小さく思われる。改葬の時荼毘に伏したとも考えられなくはないが、先学諸氏のご教示を賜りたいところである。

図７　　１・２面遺構出土遺物　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	7.40	4.40	2.20	0.30
	2	7.50	4.55	2.45	0.70
	3	8.15	5.55	2.00	0.50
	4	10.05	6.65	3.00	0.50
	5	7.40	4.00	2.00	0.40
	6	6.90	4.10	2.25	0.30
	7	16.50	9.40	4.40	＊＊＊＊
	8	10.65	6.00	3.10	0.60
	9	13.00	7.90	3.55	0.65
	10	10.20	5.40	3.70	0.80
	11	10.80	5.85	4.00	0.80
	12	11.60	7.30	3.60	＊＊＊＊
	13	12.00	7.80	3.65	0.70
鉢	14	瀬戸	口径19.6cm。胎土は黄白色を呈し、やや粗い。砂を多く含み、しまりやや悪い。全体に灰釉を刷毛塗り。		
男瓦	15	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ1.5cm。		
硯	16	石製品	長さ9.8cm、幅９cm、厚さ2.4cm。		
模倣品	17	銅製品	永楽通宝の文字あり。		
銭	18	銅製品			
銭	19	銅製品			
銭	20	銅製品	開元通宝		
銭	21	銅製品	開元通宝		
銭	22	銅製品	洪武通宝		
銭	23	銅製品	元　通宝		
銭	24	銅製品			
銭	25	銅製品	政和通宝		

図８　　２面　炭溜まり・土壙１出土遺物　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	11.10	6.20	3.20	＊＊＊＊
	2	11.90	6.65	3.30	＊＊＊＊
	3	11.60	7.45	3.50	0.60
	4	7.60	4.40	2.00	＊＊＊＊
瀬戸入子	5	5.70	3.40	1.85	0.40
かわらけ	6	7.20	4.80	1.70	0.50
	7	7.40	4.50	1.95	0.50
	8	7.50	5.10	1.85	0.60
	9	7.40	3.75	2.20	0.50
	10	7.10	4.10	2.10	0.50
	11	7.20	4.70	1.60	0.50
	12	7.50	4.90	1.75	0.60
	13	7.40	4.30	2.15	0.50
	14	6.80	4.60	1.80	＊＊＊＊
	15	7.50	4.80	2.00	0.60
	16	7.70	5.40	1.55	0.40
	17	7.50	4.80	2.15	0.55
	18	6.90	5.00	1.70	0.50
	19	7.30	5.10	2.10	0.65
	20	7.80	5.40	1.65	0.45
	21	8.40	5.20	2.00	＊＊＊＊
	22	7.60	4.85	1.75	0.60
	23	8.00	4.90	2.00	0.50
	24	7.80	5.10	1.90	0.40
	25	8.30	5.40	2.00	0.35
	26	8.05	5.20	1.70	＊＊＊＊
	27	7.70	4.90	1.70	0.50
	28	10.40	4.90	2.75	＊＊＊＊
	29	12.10	6.50	3.30	＊＊＊＊
	30	12.70	6.35	3.40	0.50
	31	10.70	6.90	2.90	0.60
	32	11.80	7.50	3.30	0.60
	33	12.20	7.90	3.30	0.65
	34	11.00	6.10	3.30	＊＊＊＊

表２　図７・８遺物観察表

35	12.70	7.00	3.65	0.70
36	13.40	6.80	3.50	0.70
37	11.70	6.35	3.20	****
38	12.30	7.25	3.20	0.65

図９　　２面土壙１出土遺物

女瓦	1	縄目叩き	Ⅰ期　胎土は精良。焼成弱く軟質。
おろし皿	2	瀬戸	底径8.1cm、底厚0.8cm。明灰色を呈し、精良な胎土。明緑灰色不透明な釉。底部は掻き落とし。
碗	3	青磁劃花文	同安窯産。胎土は精良、釉は明緑色透明。
甕	4	常滑	口縁部片。黒灰色を呈し、粗い長石粒を多量に含む。表面は暗褐色を呈し、頸部に緑色の降灰が見られる。
捏鉢	5	常滑	底部片。胎土は明茶灰色を呈し、粗い長石粒を多く含みしまり悪い。
鉢	6	常滑	口縁部片。口径34.7cm。胎土は灰黒色を呈し、粗い長石粒を多く含む。表面は茶灰色を呈する。
手焙り	7	瓦器質	底径31.8cm。胎土は灰白色を呈し、比較的精良。体部内面は縦方向に磨きが入る。

図１０　　２面かわらけ溜まり・溝出土遺物　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	7.20	4.30	2.00	0.45
	2	7.10	4.10	1.80	****
	3	7.20	4.50	1.80	0.80
	4	7.70	4.45	2.25	****
	5	7.30	4.30	2.35	0.70
	6	7.40	4.30	2.20	0.50
	7	7.20	4.90	1.80	0.50
	8	7.50	4.30	2.20	0.50
	9	7.50	4.80	2.30	0.50
	10	7.50	3.20	2.30	0.40
	11	7.30	4.90	2.20	0.45
	12	9.20	5.50	3.10	0.90
	13	11.10	6.40	3.10	0.90
	14	12.50	6.30	3.00	0.70
	15	10.50	5.80	3.10	0.40
	16	12.80	7.00	3.70	0.70
	17	13.20	7.80	3.70	0.80
	18	14.30	8.50	3.40	0.65
碁石	19	2.00	****	****	0.70
	20	7.20	4.20	2.10	****
	21	7.40	4.20	1.90	0.60
砥石	22	石製品	幅３cm、厚さ1.8cm。中砥か？		
女瓦	23	斜格子叩き	Ⅱ期　厚さ2.6cm。胎土は粗く、２mm大の砂粒を含む。		
女瓦	24	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ2.2cm、胎土は精良、しまり良く硬質。		
女瓦	25	斜格子叩き	Ⅱ期　厚さ2.6cm。多くの砂粒を含むが比較的硬質。		

図１１　　２面井戸出土遺物　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	7.40	4.60	2.15	0.50
	2	7.20	4.60	2.50	0.80
	3	7.20	4.65	2.50	0.90
	4	10.40	6.50	3.30	0.60
	5	10.40	6.50	3.30	0.70
手焙り	6	瓦器質	厚さ1.9cm。菊花文スタンプ。井戸上層。		
銭	7	銅製品	皇宋通宝　井戸上層。		
かわらけ	8	6.90	4.50	2.05	0.40
	9	12.90	8.40	3.30	0.75
手焙り	10	瓦器質	厚さ1.7cm。菊花文スタンプ。井戸中層。６と同一か？		
六器	11	銅製品	口径4.3cm、底径2.2cm、器高2.3cm。		
弓	12	木製品	黒漆塗り三枚打　残存長115cm、幅３cm、厚さ1.9cm。		

表３　図８・９・10・11遺物観察表

図１２　　２面出土かわらけ　　単位はcm

かわらけ	口径	底径	器高	底厚
1	7.40	4.60	2.20	0.50
2	6.70	4.00	2.10	0.60
3	7.30	4.60	2.20	0.55
4	7.10	5.10	1.90	0.50
5	7.60	4.40	2.10	0.50
6	7.10	4.50	2.10	0.50
7	7.40	5.10	2.00	0.55
8	7.30	3.80	2.00	0.60
9	7.40	4.50	2.00	0.65
10	7.10	4.60	2.10	0.40
11	7.20	4.50	1.90	****
12	7.80	5.00	1.80	0.50
13	7.40	4.20	2.15	0.50
14	7.25	4.30	2.30	****
15	7.40	5.10	1.80	0.40
16	7.60	4.10	2.00	0.60
17	7.50	4.40	2.15	0.35
18	7.60	5.10	2.15	****
19	7.50	5.00	1.80	0.55
20	7.70	4.75	1.80	0.70
21	7.80	5.00	2.15	0.55
22	7.60	4.10	2.30	0.45
23	7.70	4.30	1.75	0.55
24	7.75	5.10	1.55	0.50
25	7.90	4.50	2.40	0.40
26	7.10	4.60	2.40	0.45
27	7.70	5.05	2.15	0.60
28	7.80	4.70	1.85	0.40
29	7.50	4.60	2.10	0.40
30	7.80	5.05	1.80	0.60
31	8.20	5.10	2.10	0.50
32	8.00	6.00	1.90	0.60
33	11.40	7.50	2.90	0.50
34	11.90	6.90	3.20	0.50
35	9.00	5.55	2.70	0.45
36	11.60	6.40	3.25	0.75
37	12.35	7.80	3.10	0.75
38	10.20	6.00	2.65	0.50
39	12.70	7.25	3.60	0.70
40	12.30	5.50	3.60	0.80
41	10.90	6.20	2.85	0.55
42	12.80	6.90	3.25	0.60
43	12.70	6.40	3.85	0.60
44	11.40	7.40	3.05	0.60
45	13.20	8.10	3.35	****
46	13.30	8.50	3.65	0.55
47	11.50	6.30	3.10	0.60
48	12.90	8.00	4.10	0.60
49	13.90	7.60	3.70	0.65

図１３　　２面　出土瓦

女瓦	1	斜格子叩き	Ⅱ期
女瓦	2	斜格子叩き	Ⅱ期
女瓦	3	斜格子叩き	Ⅱ期
女瓦	4	縄目叩き	Ⅰ期
女瓦	5	水殿産	Ⅱ期

図１４　　２面出土遺物

野沓	1	銅製品	残存長8.5cm。先端孔は0.7×0.4cmの四角形。
釘隠し	2	銅製品	直径2.2cm。表面は鍍金。

表４　図12・13・14遺物観察表

土馬	3	土製品	明赤灰色を呈し、精良な胎土でしまり良く硬質。胴後半部分。片足欠損。
内折かわらけ	4	土製品	口径 3.5cm、底径3cm、器高 0.6cm、底厚 0.2cm。赤灰色を呈し、胎土は精良、少量の砂を含みやや軟質。
白かわらけ	5	土製品	乳白色を呈し、胎土は精良、しまり良いがやや軟質。
碗	6	土製品	口径 10.1cm、底径 3.5cm、器高 4.3cm、底厚 0.3cm。乳白色を呈し、胎土は精良だがやや軟質。釉は黄白色透明、釉層は薄い。
蓮弁文碗	7	青磁	胎土は精良。釉は明緑色不透明。釉層は厚い。
山茶碗	8	美濃	口径11.9cm、底径 3.7cm、器高5cm、底厚0.25cm。胎土は明灰色を呈し、ごく精良でしまり良い。高台部にもみがら痕が明瞭に付く。
褐釉碗	9	瀬戸	胎土は明黄灰色を呈し、やや粗い、しまりやや悪い。釉は黒褐色を呈する。
おろし皿	10	瀬戸	胎土は明灰色を呈し、比較的精良、しまり良い。二次焼成を受けているのか釉は剥がれている。
おろし皿	11	瀬戸	口径15.3cm。胎土は黄灰色を呈し、やや粗い。しまりは良い。体部外面、内部中程まで緑灰色の釉が施される。
入子	12	瀬戸	口径 3.8cm、底径 2.9cm、器高 1.3cm、底厚0.15cm。胎土は明灰色を呈し、精良だが少量の砂を含む。
鉢？	13	瀬戸	
行平鍋	14	瀬戸	口径14.4cm、底径 7.5cm、器高 7.8cm、底厚0.65cm。胎土は明黄灰色を呈し、やや粗い。少量の長石を含みしまり良い。釉は明緑灰色透明で、全体に施されている。
スタンプ	15	石製品	長さ5.3cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm。
銭	16	祥符元宝	
銭	17	宗元通宝	
銭	18	熙寧元宝	
手焙り	19	瓦質	胎土は灰白色を呈し粗い。砂粒が多く、しまり良い。
手焙り	20	瓦質	口径43.6cm、底径35.5cm、器高16cm。胎土は粗く、3mm大までの粗い石粒、砂粒混入。六弁の輪花を呈し、体部外面上部に菊花文の押印を配する。

図15　　3面まで出土遺物　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	7.50	5.35	1.70	****
	2	7.70	5.30	2.15	0.60
	3	7.60	3.70	2.30	0.70
	4	7.10	3.80	2.80	0.50
	5	8.10	5.50	1.75	0.65
	6	7.70	5.60	2.20	****
	7	7.30	3.80	2.20	****
	8	6.70	4.60	2.00	0.30
	9	7.90	5.60	1.80	****
	10	7.70	5.00	2.00	0.60
	11	7.60	4.80	2.00	****
	12	7.70	4.60	2.85	0.50
	13	8.10	5.00	1.70	0.50
	14	7.80	5.10	2.10	****
	15	7.70	3.50	2.35	0.50
	16	7.70	4.50	2.30	****
	17	11.30	6.00	2.70	0.60
	18	9.40	4.70	2.70	0.50
	19	12.70	7.30	3.50	****
	20	9.50	5.10	3.20	****
	21	13.30	7.10	3.25	0.55
	22	11.30	6.20	2.80	****

手焙り	23	瓦器質	厚さ2.7cm。菊花文、胎土はやや粗く、少量の砂を含む
捏鉢	24	山茶碗窯系	口径25.2cm。砂粒を多く含むざっくりした胎土。
捏鉢	25	山茶碗窯系	砂粒を多く含むざっくりした胎土。
双六駒	26	骨（貝）製品	直径1.7cm、厚さ0.9cm。中空。
女瓦	27	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ1.8cm。胎土は精良、焼成良好で硬質。

表5　図14・15遺物観察表

図１６　　３面　遺構出土遺物　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	6.80	4.40	1.90	0.40
	2	7.70	5.00	1.90	****
	3	7.75	5.00	2.00	0.60
	4	7.40	4.70	2.20	****
	5	7.90	5.15	2.10	****
	6	7.30	4.70	2.50	0.60
	7	7.40	4.50	2.30	0.40
	8	7.70	5.20	2.20	****
	9	7.70	5.20	2.55	0.55
	10	10.50	5.40	3.00	****
	11	11.30	6.90	2.85	0.50
	12	13.30	8.00	3.30	0.60
	13	8.00	5.10	2.10	0.30
	14	7.10	4.50	1.80	0.35
	15	7.00	4.70	2.00	0.50
	16	7.90	5.80	1.70	****
	17	8.20	5.30	1.90	0.70
	18	12.50	7.30	3.80	0.60
	19	12.80	7.00	3.80	0.80
	20	7.00	4.70	2.10	0.50
	21	7.70	5.10	2.30	0.45
	22	7.10	4.60	2.20	****
	23	7.90	5.70	1.80	0.30
	24	7.50	4.50	2.35	****
	25	9.10	6.00	1.95	0.55
	26	10.90	6.20	3.00	0.55
	27	10.10	6.25	2.70	0.60
	28	12.00	7.90	3.30	0.90
	29	10.70	5.30	3.00	0.40
	30	10.70	6.50	3.30	0.60
	31	10.70	6.20	3.00	0.50
	32	11.90	7.90	3.40	0.50
	33	6.90	4.60	1.90	0.40
	34	6.75	4.50	1.90	0.40
	35	7.50	4.30	2.40	0.40
	36	7.50	5.00	1.90	0.40
	37	7.40	5.30	1.90	0.50
	38	7.60	4.40	2.00	0.40
	39	7.70	4.10	1.80	0.45
	40	7.60	4.00	2.40	0.50
	41	7.60	4.00	2.40	0.50
入子	42	瀬戸	口径 7.7cm、底径 4.8cm、高さ 2.8cm。明灰色を呈し		
褐釉碗	43		精良な胎土から成り、しまり良い。口縁部内面に緑灰色の降灰。		

図１７　　３面　出土かわらけ　　単位はcm

		口径	底径	器高	底厚
かわらけ	1	7.70	4.70	2.00	0.45
	2	7.20	4.50	2.00	0.50
	3	7.50	4.00	2.10	0.70
	4	7.40	3.80	2.00	****
	5	7.20	4.30	2.25	0.50
	6	7.20	4.50	2.20	0.50
	7	7.00	4.00	2.10	0.50
	8	7.80	4.90	2.00	****
	9	7.30	4.50	2.10	****
	10	7.20	4.40	2.10	0.60
	11	7.70	4.70	2.10	0.40
	12	7.70	5.50	1.80	****
	13	7.40	4.00	2.15	0.50
	14	7.40	4.40	2.30	0.60
	15	8.10	4.80	2.35	0.40
	16	7.70	4.40	1.90	****

表６　図16・17遺物観察表

17	7.80	5.10	2.10	0.60
18	7.30	4.10	2.05	0.60
19	7.90	5.00	2.10	****
20	8.20	5.70	1.90	0.40
21	7.80	4.00	2.20	0.50
22	7.50	4.50	1.95	****
23	8.00	4.50	2.35	0.70
24	7.60	5.30	1.80	****
25	7.80	4.30	2.20	****
26	7.40	4.40	2.00	0.40
27	8.10	5.00	2.20	0.50
28	7.40	5.60	1.70	****
29	7.80	4.50	2.50	0.40
30	7.50	4.25	2.20	4.00
31	8.80	5.40	2.30	****
32	10.20	5.30	2.90	0.55
33	10.90	5.10	3.20	0.90
34	10.90	6.50	2.95	0.50
35	10.70	4.60	2.95	0.50
36	11.30	6.30	2.80	0.60
37	11.10	6.90	3.10	****
38	13.00	7.80	3.60	0.60
39	12.20	6.80	3.20	0.60
40	12.00	6.10	3.90	0.60
41	12.60	7.30	3.50	0.50
42	12.40	6.80	3.20	****
43	12.80	5.70	3.55	0.55
44	13.50	7.60	3.60	****
45	12.60	7.00	3.80	0.80
46	13.00	8.20	3.20	0.45

図１８　　３面　出土瓦

鐙瓦	1	巴文	Ⅲ期以降。瓦当径は推定10cm程度、厚さ1.3cm。胎土は粗く砂粒を多く含み、灰白色を呈する。
女瓦	2	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ2.5cm。胎土は精良。焼成弱く軟質。
男瓦	3	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ2.2cm。胎土は精良。焼成良好で硬質。
女瓦	4	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ2.1cm。胎土は精良。焼成良好で硬質。
女瓦	5	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ2.8cm。胎土は精良。焼成良好で硬質。
女瓦	6	縄目叩き	Ⅰ期　厚さ1.9cm。胎土は精良。焼成弱く軟質。

図１９　　３面　出土遺物

梅瓶	1	瀬戸	最大径17.5cm。唐草文。胎土は黄灰白色を呈し、精良でしまり良い。釉は緑灰色透明。体部外側に均一的に施される。文様はくし描き。
鉢	2	瀬戸	口径10.5cm、底径6cm。胎土は明黄灰色を呈し、やや粗く軟質。釉は暗緑茶褐色を呈し、体部外面に施される。
手焙り	3	瓦質	胎土は明赤灰色を呈し、粗い石粒を多く含むみ、しまり良い。体部外面に一条の沈線。
手焙り	4	瓦質	胎土は赤灰色を呈し、細かい砂粒を含み、しまり良い。
捏鉢	5	常滑	口径26.9cm、底径11.4cm、器高11.2cm。胎土は暗茶灰色を呈し、精良。細かな長石を僅かに含み、しまり良い。表面は茶褐色。内面は使用により研磨。
捏鉢	6	常滑	胎土は暗茶灰色を呈し、精良。しまり良い。
合子	7	青白磁	口径4.2cm、底径2.1cm、器高1.9cm。胎土は灰白色を呈し、精良。焼成良好。釉は灰白色不透明。内面及び外面上部に薄く施される。
碗	8	青磁蓮弁文	胎土は灰白色を呈し、精良。釉は明緑色透明。
釘	9	鉄	残長4.1cm。
釘	10	鉄	残長7.2cm。
釘	11	鉄	残長4.2cm。
土製品	12	かわらけ加工品	直径7.1cm、厚さ0.7cm。かわらけ底部の加工品。明赤灰色を呈し、精良。
硯	13	石製品	長さ13.2cm、厚さ2.4cm。粘板岩製。

表７　図17・18・19遺物観察表

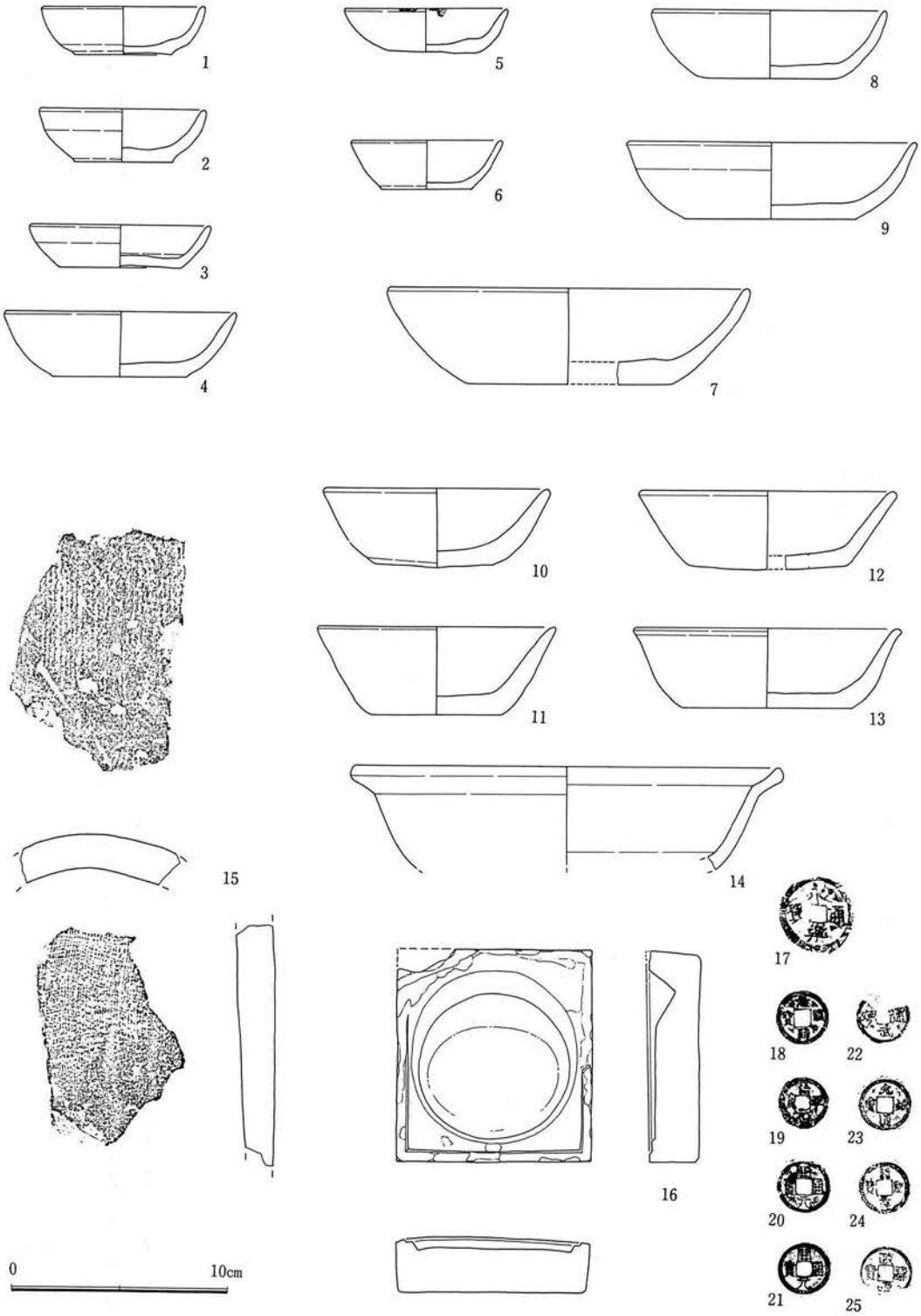


図 7　1・2 面遺構出土遺物

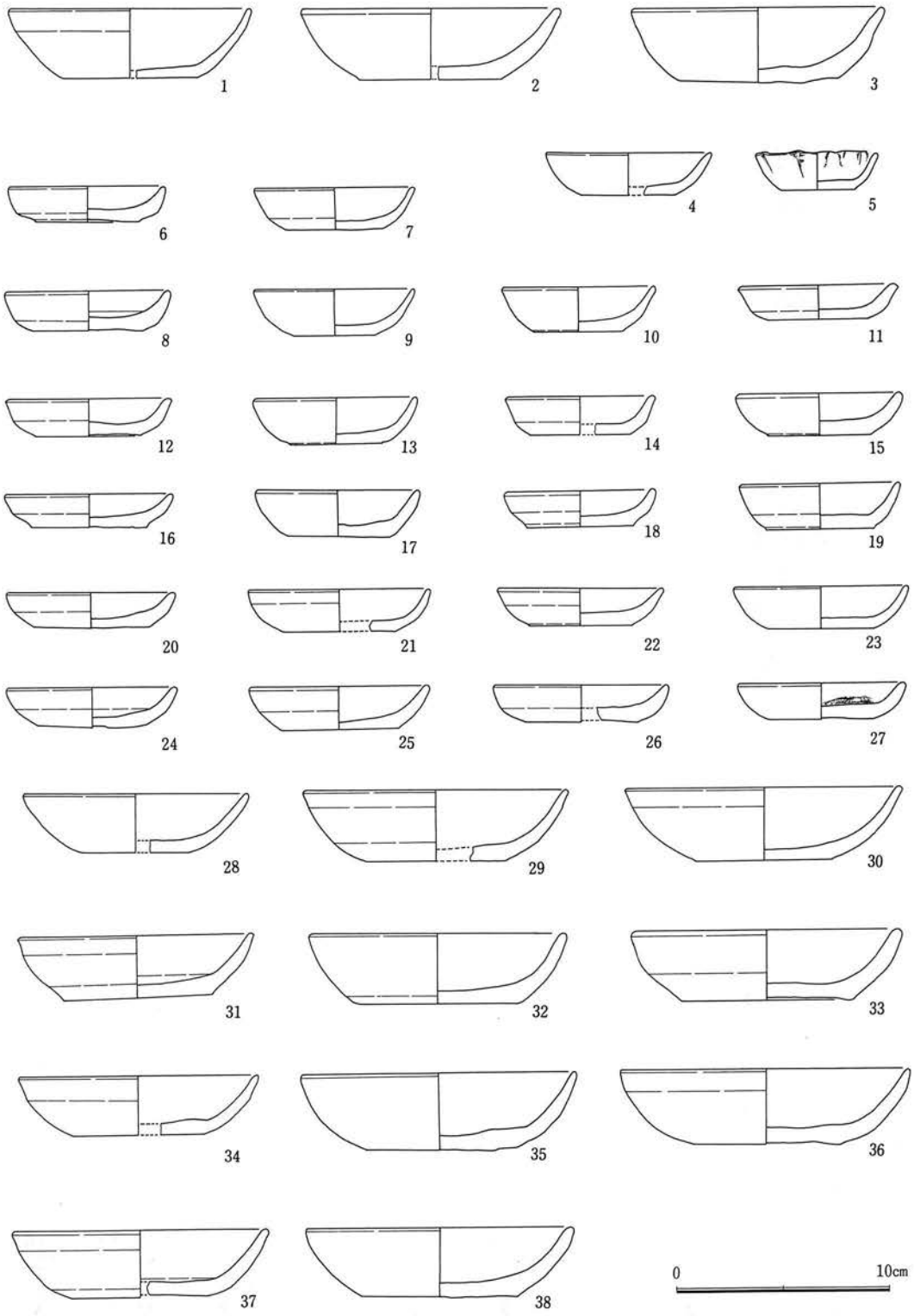


図 8　2 面炭溜り・土壙 1 出土かわらけ

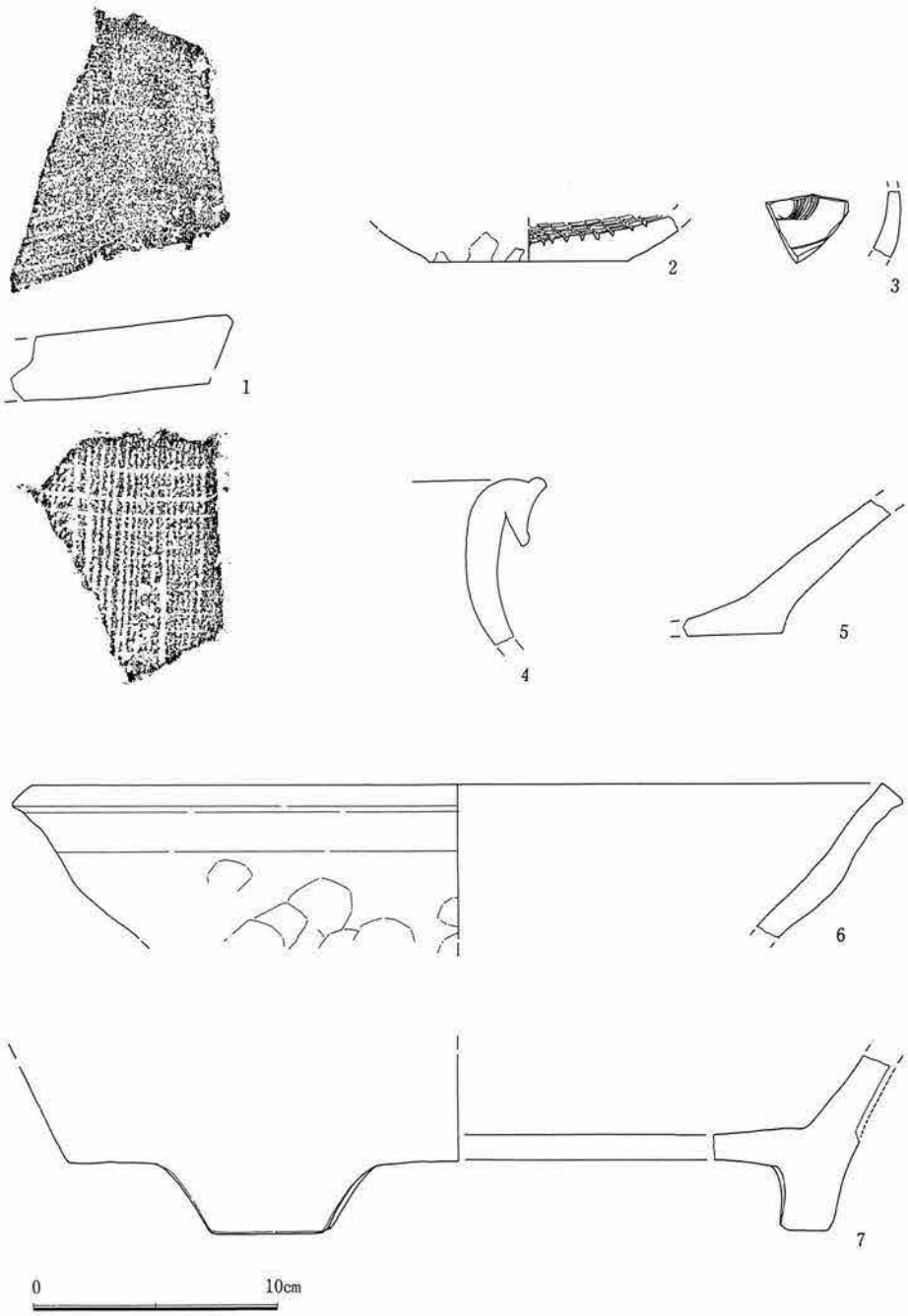


図 9　2 面土壙 1 出土遺物

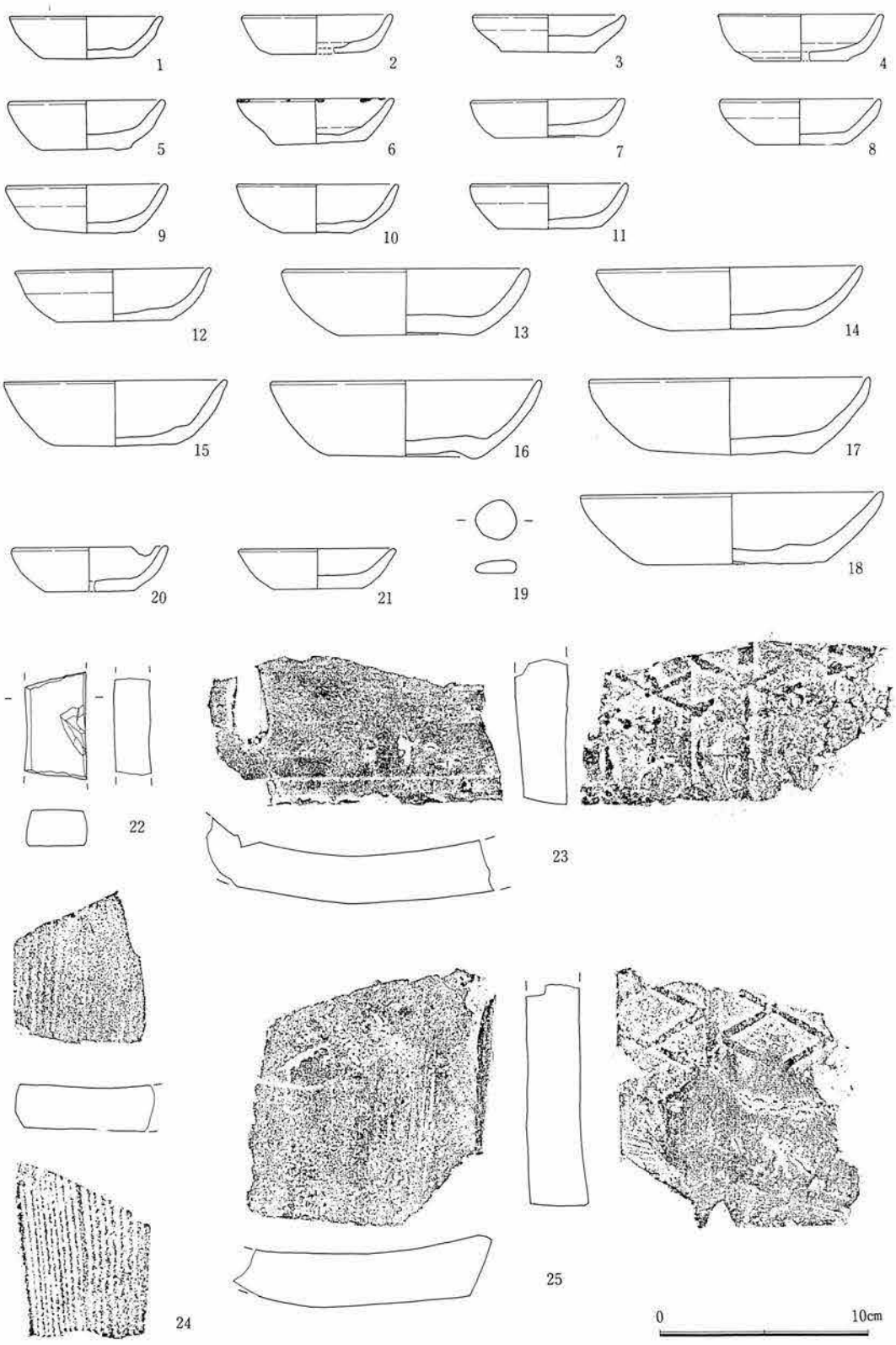


図10　2面かわらけ溜り・溝出土遺物

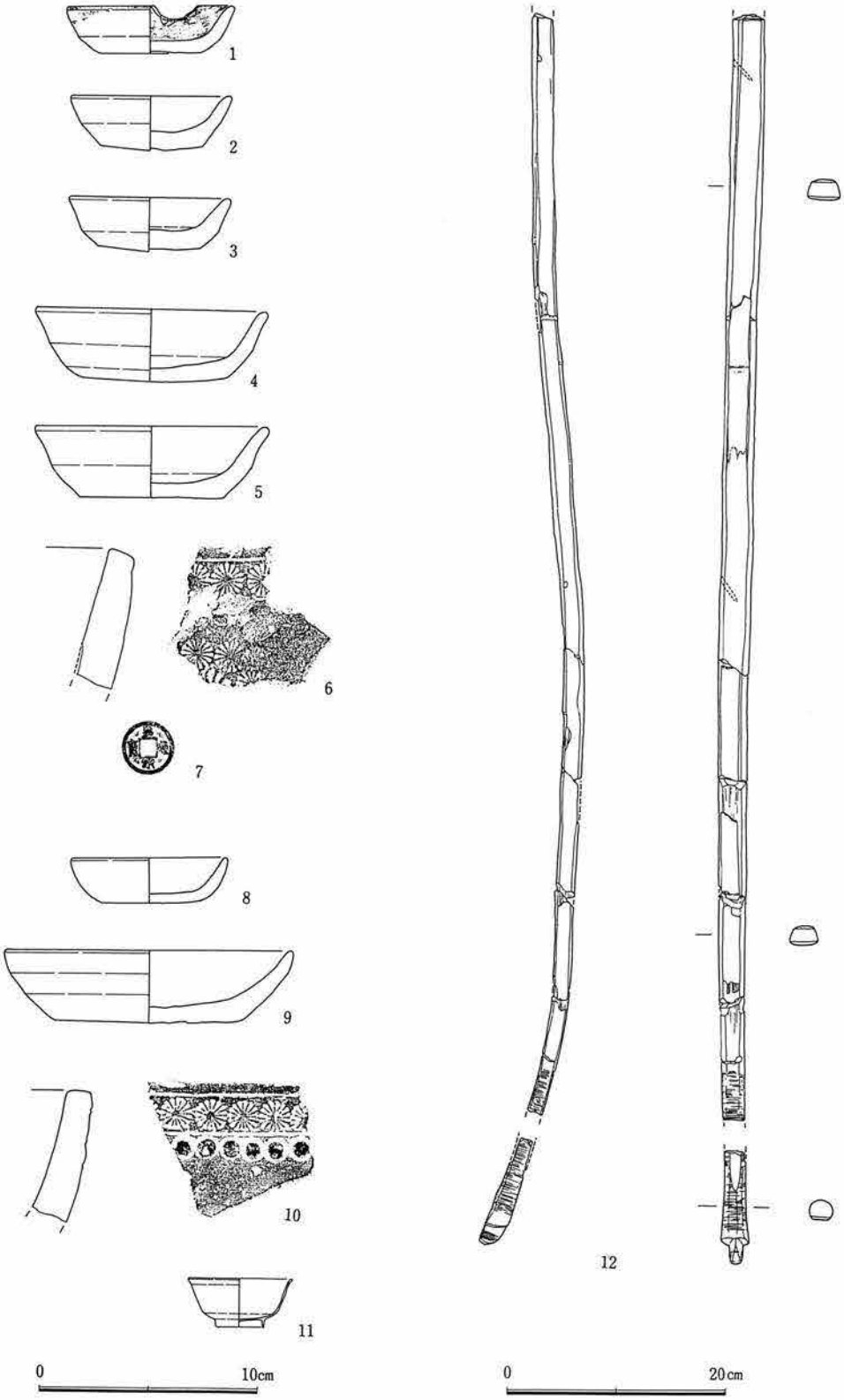


図11　2面井戸出土遺物

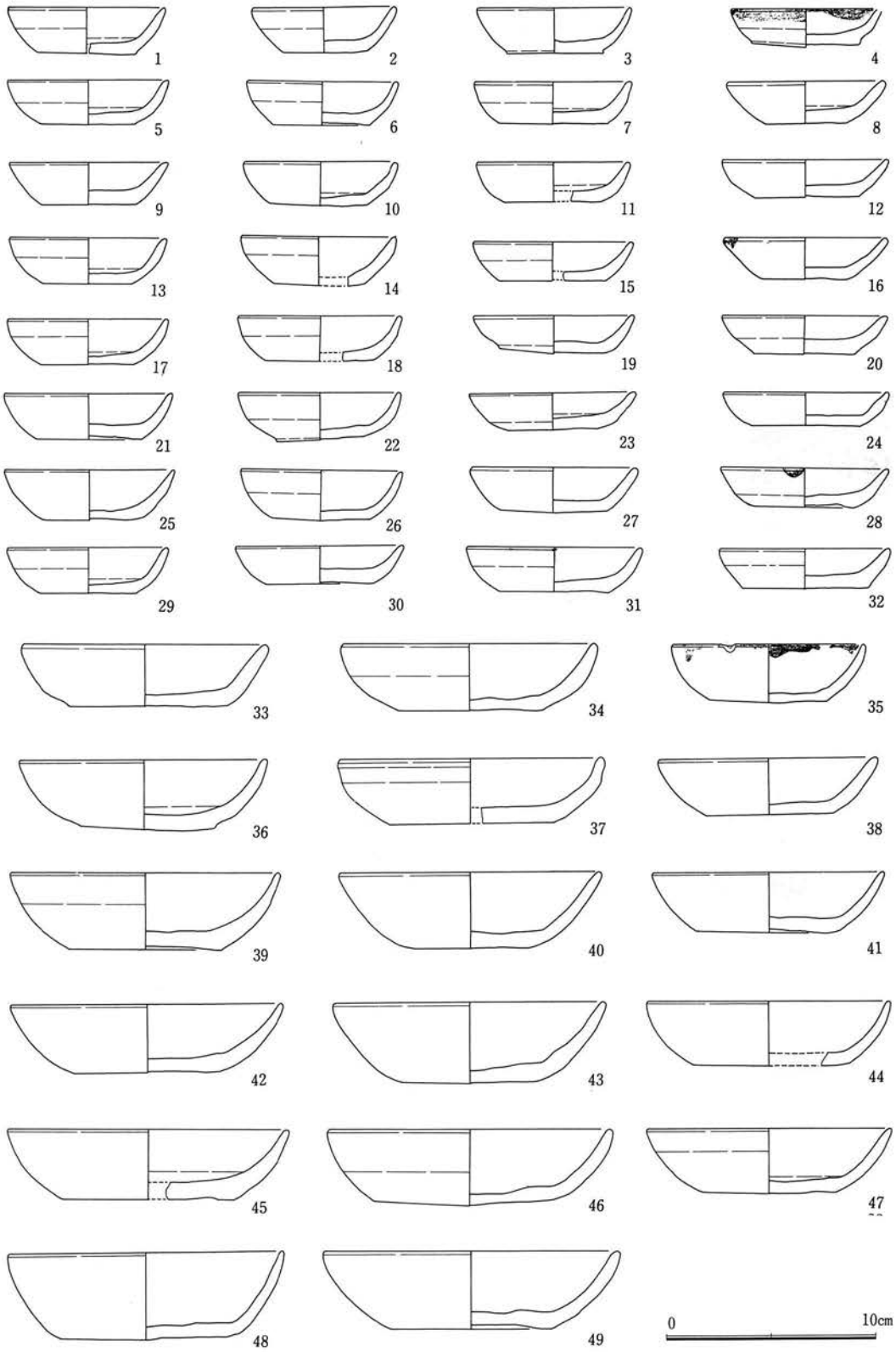


図12　2面出土かわらけ

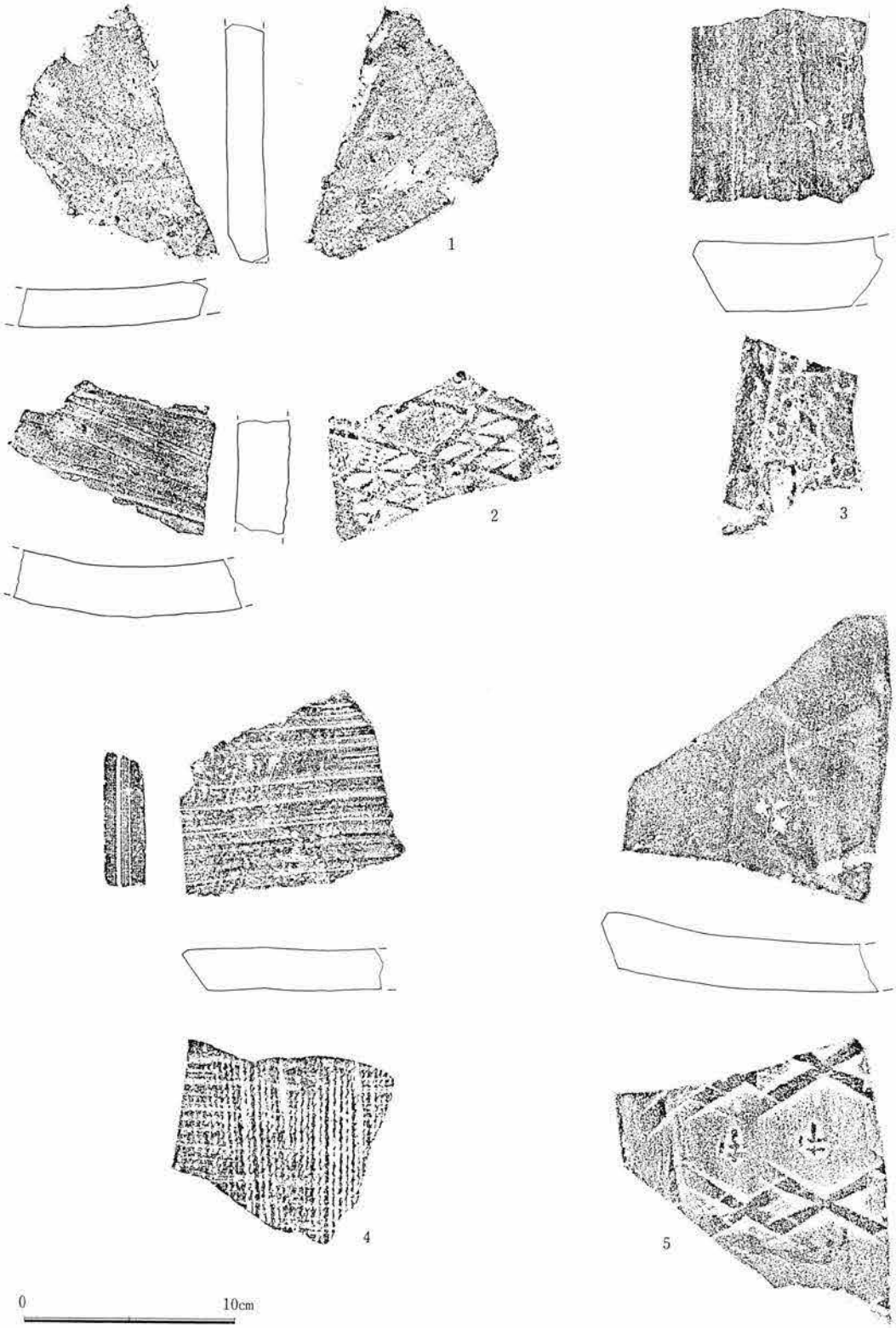


図13　2面出土瓦

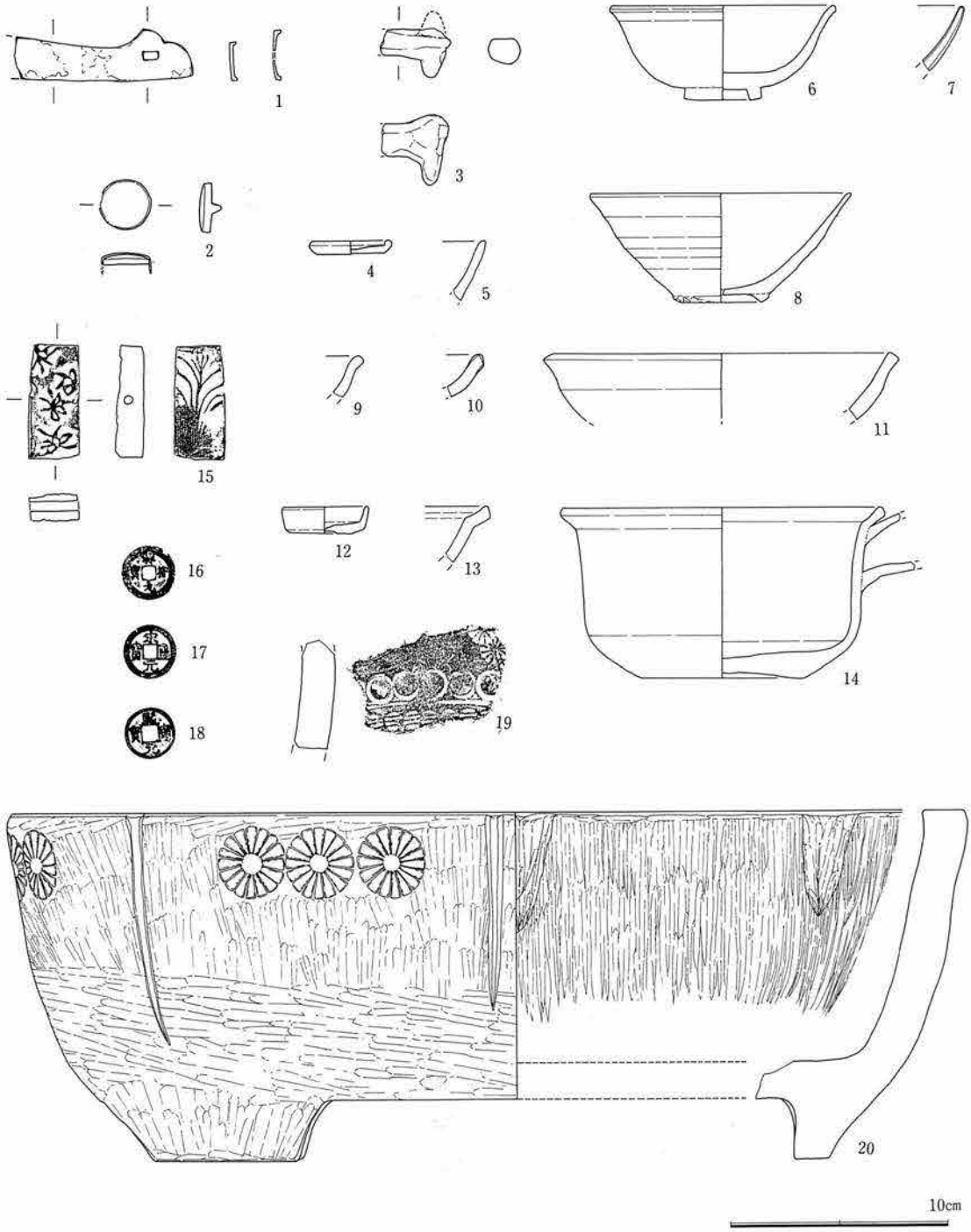


図14　2面出土遺物

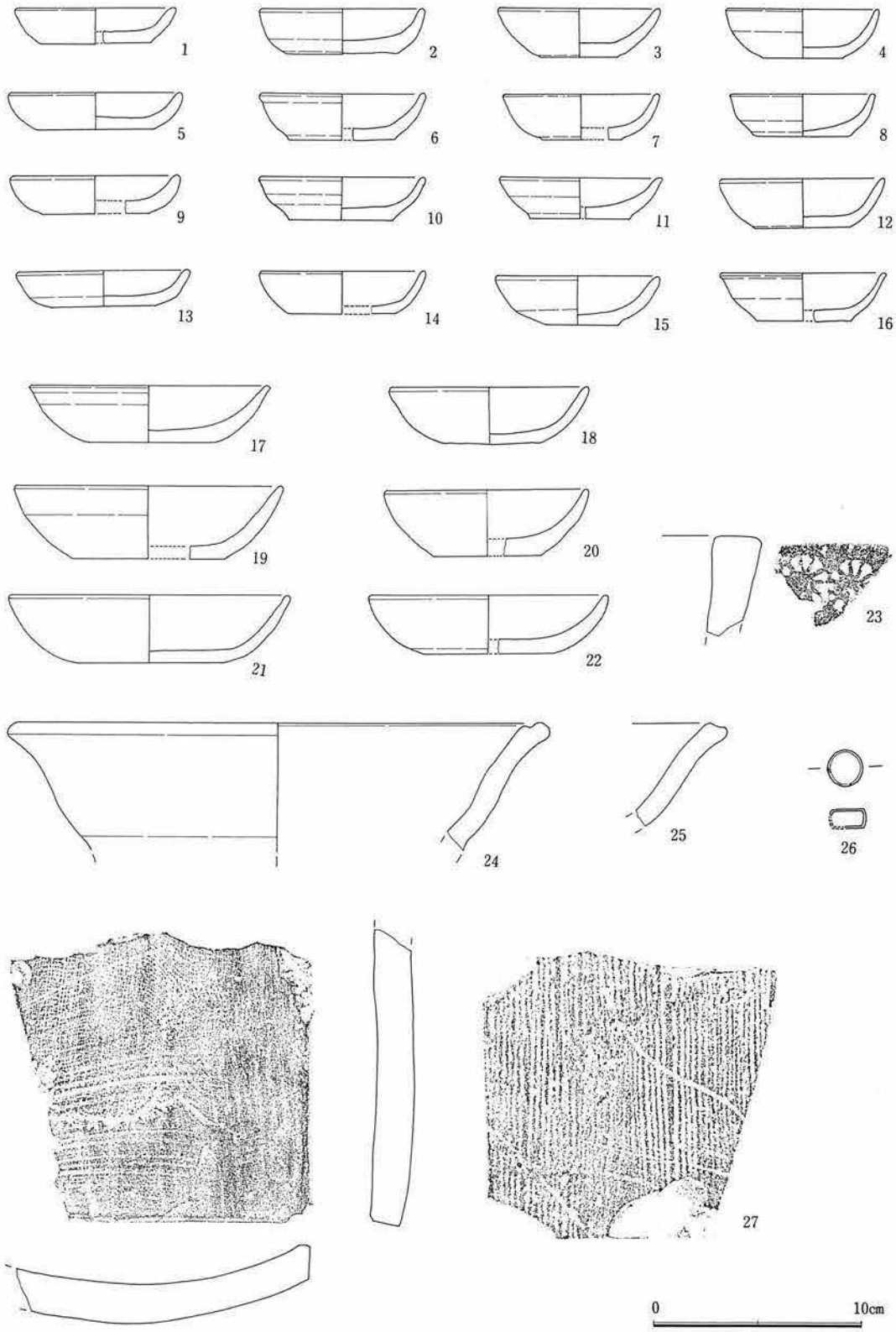


図15　3面まで出土遺物

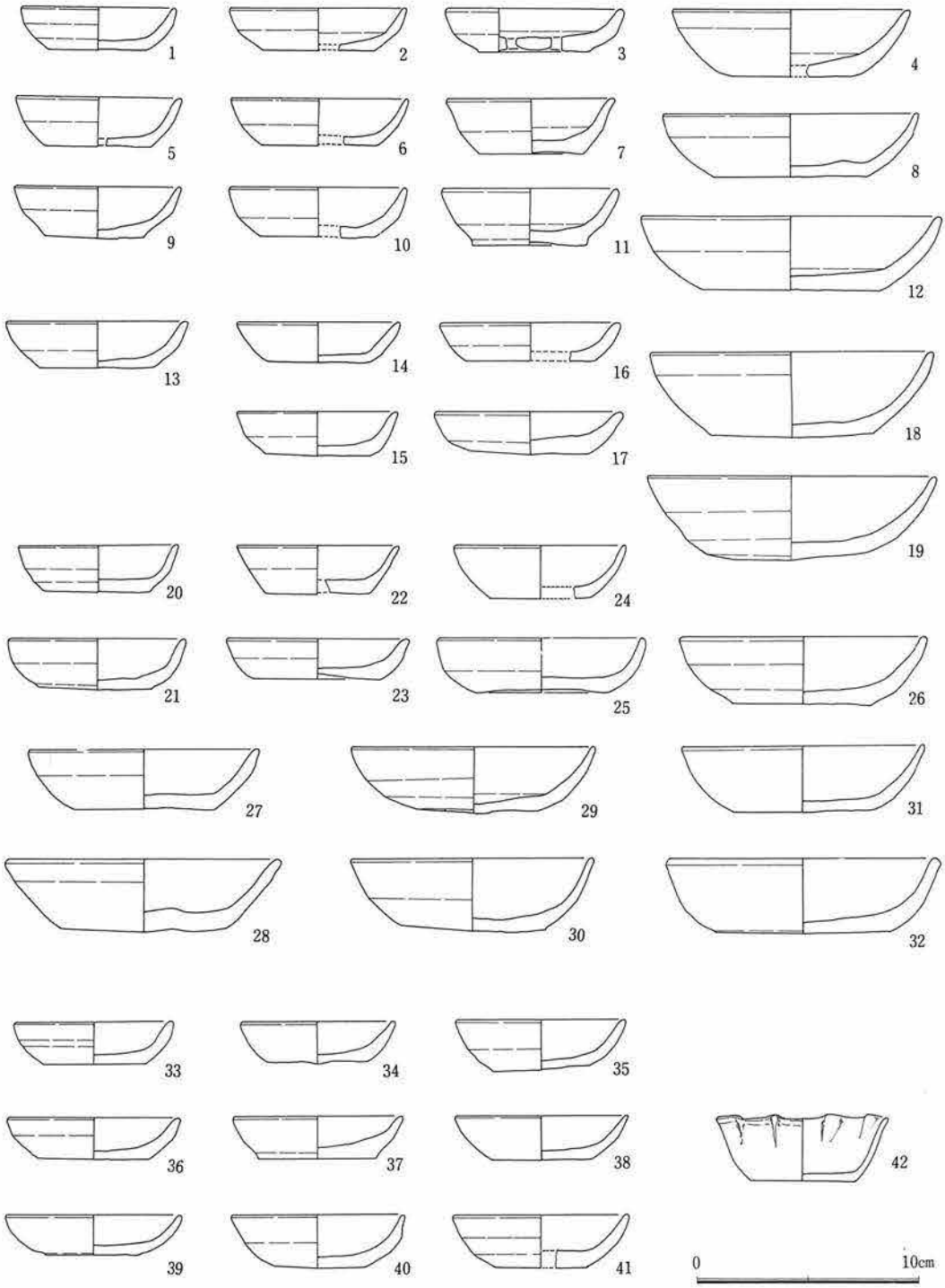


図16　3 面遺構出土遺物

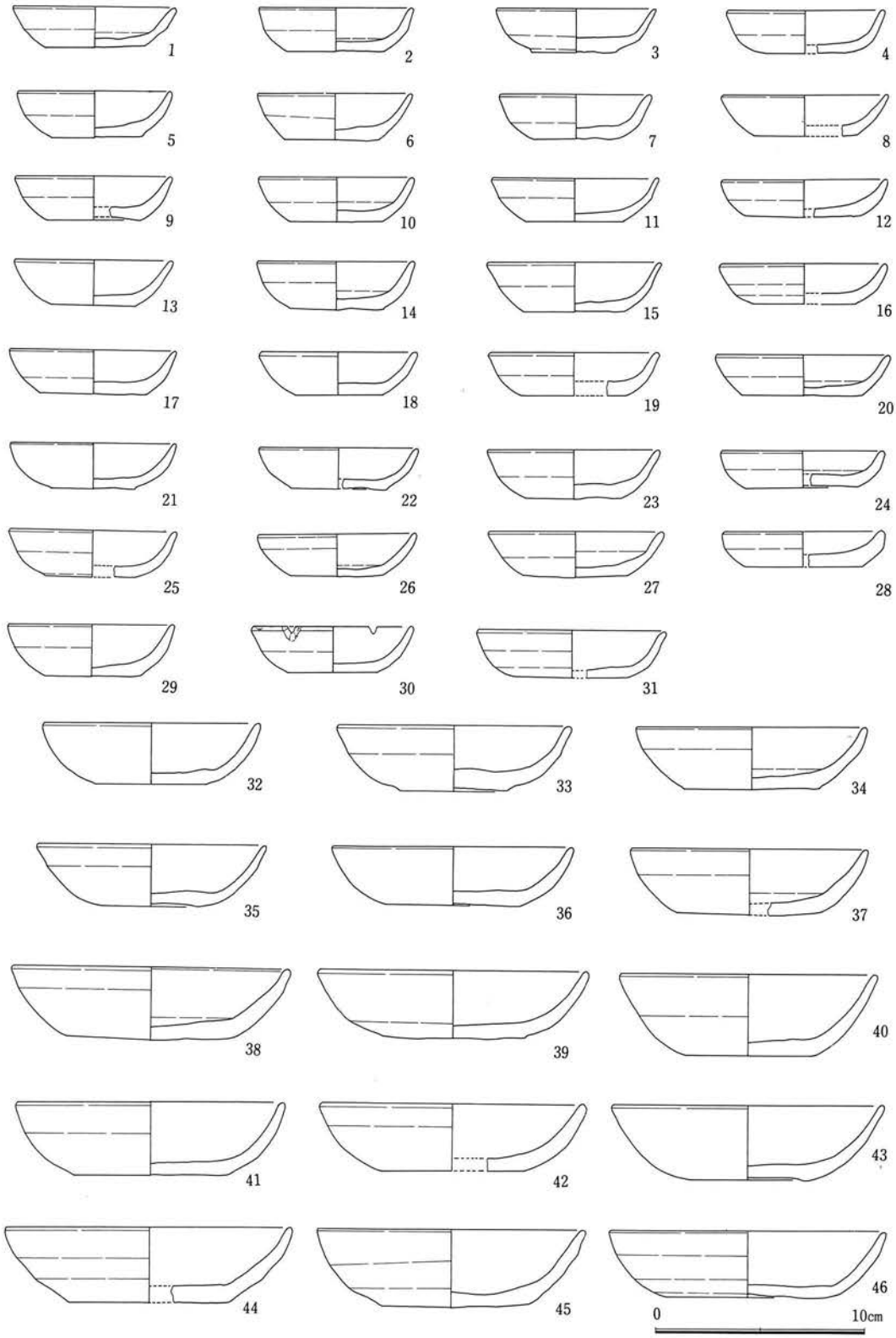


図17　3面出土かわらけ

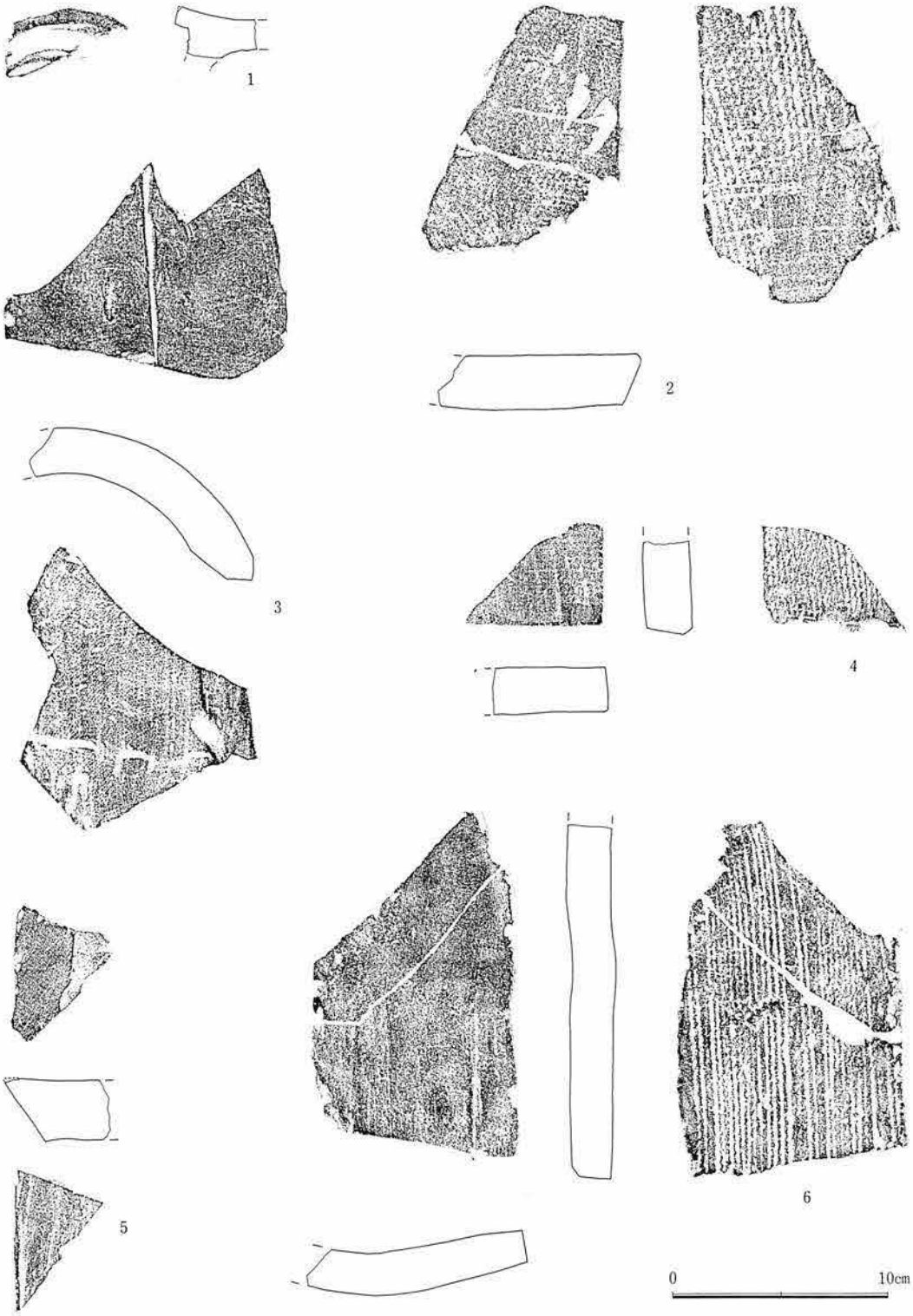


図18　3面出土瓦

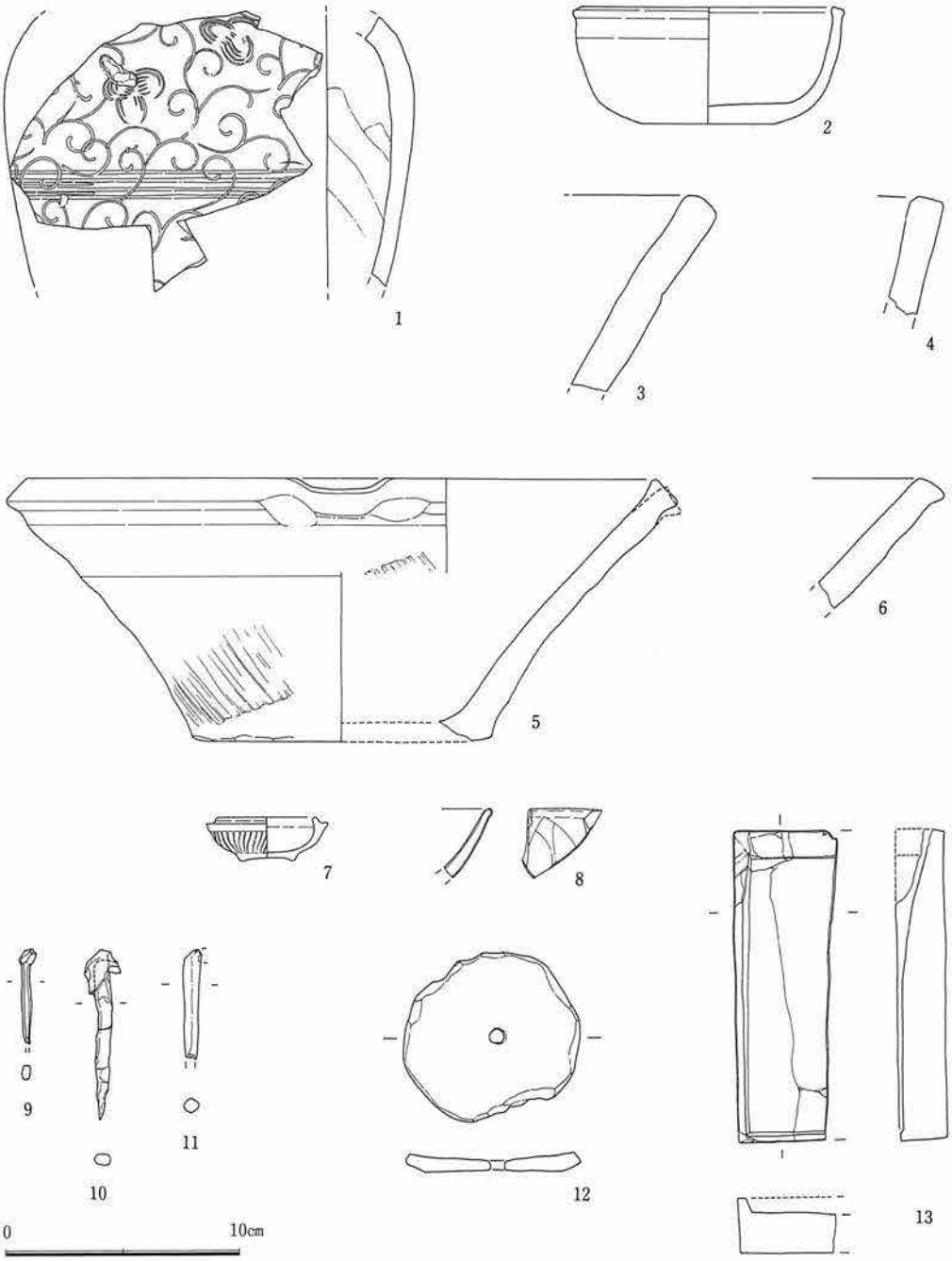


図19　3面出土遺物

永福寺跡(二階堂字520番1外地点)　附図1　第2面遺構図

永福寺跡(二階堂字520番1外地点)　附図2　第3面遺構図

附編１―１　井戸内堆積物の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

１．はじめに

試料採取地点は史跡永福寺跡の北方、二階堂杉ヶ谷の谷間に位置している。この付近は比較的もろい砂岩や泥岩地帯となっており、廃絶後の井戸は短い時間で埋積されていることが予想される。このことはある時期（季節）が堆積物中に良好な状態で保存されている可能性が期待され、遺跡周辺の古植生とともに、こうした観点から採取した試料の上・下２点について花粉分析を行った。

２．試料および分析方法

試料は杉ヶ谷２区の井戸内堆積物の中層より、深さ５cmほどの容器に採取された。分析に用いた試料は乱れが少ないと思われる容器中央部の上から１cm（試料１）と下から１cm（試料２）より採取した。またこの中央部分を３cmほどの角で柱状で予備として切取り、他は一括して大型植物遺体分析用に0.25mmの篩で水洗選別した。この採取された試料は暗灰色の砂質シルト～粘土で、粘性が高く、径５mmほどの暗青灰色凝灰質砂岩（最大径23mm）が散在しており、細かな植物遺体や小材片が多く含まれ、タケ片もみられる。

この２点について次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約１ｇ）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mmの篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液、比重2.1を加えて遠心分離：750rpm30分）を行い、浮遊物を回収して水洗する。次に酢酸処理、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこれらの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

また大型植物遺体については、水洗選別した残渣より実体顕微鏡下で種実などを取り出し、観察・同定した。なおこの作業については吉川純子（パレオ・ラボ）が担当した。

３．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉24、草本花粉17、形態分類で示したシダ植物胞子２の計43であった。これら花粉・胞子の一覧を表１に、また主要な花粉・胞子の分布を図１に示した。なお分布図における樹木花粉総数を基数に、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数にして百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科、バラ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、それぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

検鏡の結果、２点において花粉化石の産出傾向に大きな違いが示された。すなわち下部（試料２）

表8　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1	2
樹木			
モミ属	*Abies*	1	1
ツガ属	*Tsuga*	-	1
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	31	59
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	2	13
スギ属	*Cryptomeria*	6	7
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	1	-
ヤナギ属	*Salix*	5	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	8	4
カバノキ属	*Betula*	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	3	1
ブナ属	*Fagus*	1	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	6	4
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	9	10
クリ属	*Castanea*	3	-
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	9	6
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	1	8
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	5	-
サクラ属近似種	cf. *Prunus*	-	1
コクサギ属	*Orixa*	1	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	1	-
カエデ属	*Acer*	2	3
トチノキ属	*Aesculus*	-	1
ブドウ属	*Vitis*	1083	16
エゴノキ属	*Styrax*	12	-
ガマズミ属	*Viburnum*	32	4
草本			
ガマ属	*Typha*	1	-
イネ科	Gramineae	81	79
カヤツリグサ科	Cyperaceae	12	10
クワ科	Moraceae	10	7
ギシギシ属	*Rumex*	1	9
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	9	3
ナデシコ科	Caryophyllaceae	14	32
カラマツソウ属	*Thalictrum*	2	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	1	1
アブラナ科	Cruciferae	6	3
他のバラ科	other Rosaceae	1	1
マメ科	Leguminosae	4	3
カタバミ属	*Oxalis*	2	2
セリ科	Umbelliferae	15	2
ヨモギ属	*Artemisia*	31	16
他のキク亜科	other Tubuliflorae	4	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	16	6
シダ植物			
単条型胞子	Monolete spore	160	81
三条型胞子	Trilete spore	13	24
樹木花粉	Arboreal pollen	1223	139
草本花粉	Nonarboreal pollen	210	177
シダ植物胞子	Spores	173	105
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	1606	421
不明花粉	Unknown pollen	64	31

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

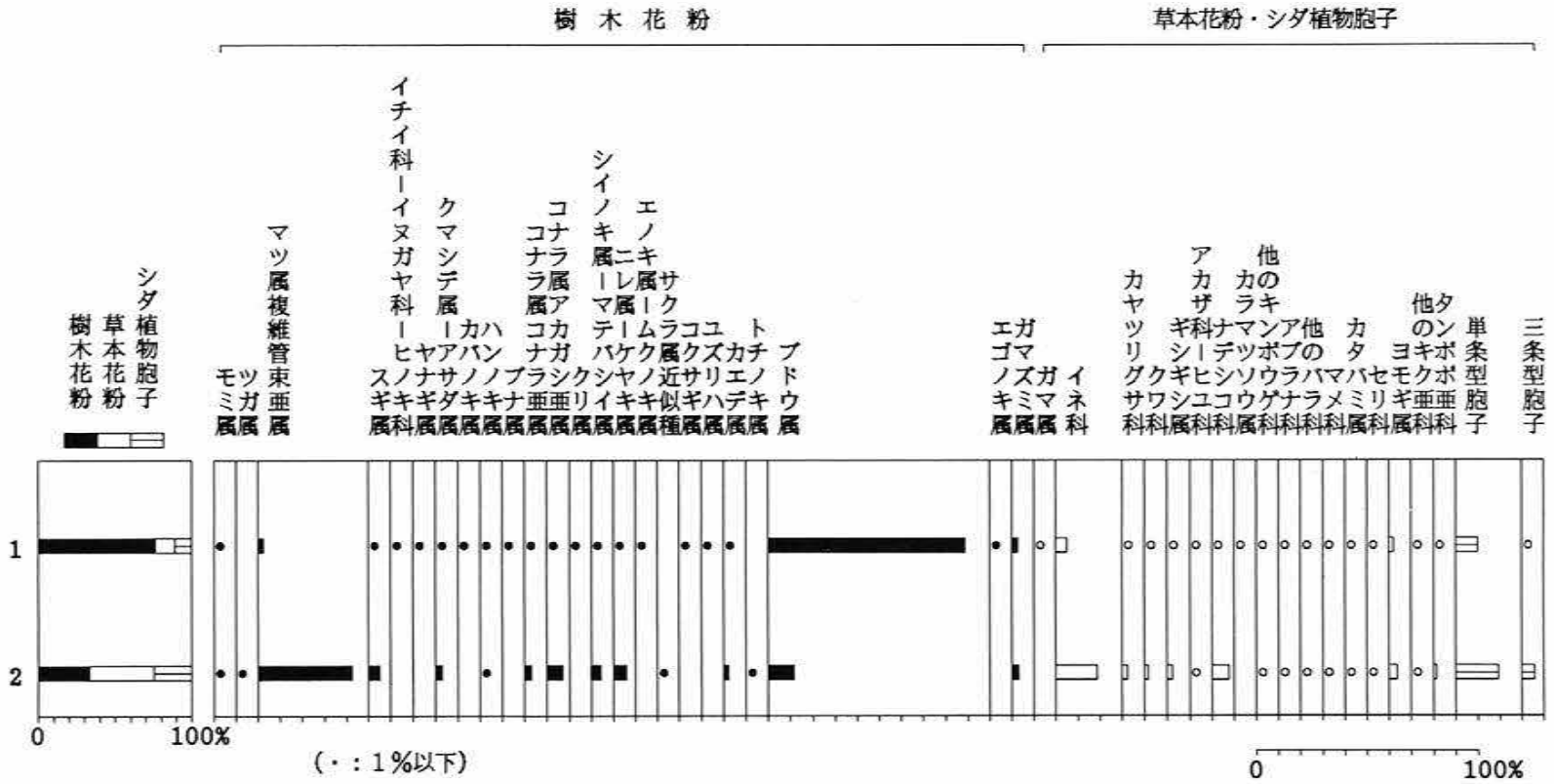


図20　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の主要花粉化石分布図

(樹木花粉は樹木花粉総数、草木花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

表9　杉ヶ谷2面井戸内堆積物の大型植物一覧表

分類群	産出部位	産出個数
イグサ属	種子	4
ホシクサ属近似種	種子	2
ツユクサ	種子	2
ムギ類（炭化）	炭化果実	2
アワ（未炭化）	穎果	3(6)
イヌエビ近似種	穎果	1
スゲ属A	果実	3
スゲ属B	果実	3
カヤツリグサ科	果実	4
カラムシ属	種子	36
サンショウソウ属	種子	1420
サナエタデ近似種	果実	3
ギシギシ属	果実	2
アカザ科	種子	26
ノミノフスマ近似種	種子	60
ノミノツヅリ近似種	種子	416
ハコベ属近似種	種子	34
ナデシコ科A	種子	146
ナデシコ科B	種子	2
アブラナ科	種子	26
キイチゴ属	核	3
ヘビイチゴ属・オランダイチゴ属・キジムシロ属	核	27
カタバミ属	種子	100
エノキグサ	種子	8
キランソウ属	果実	11
イヌコウジュ属	果実	8
オカトラノオ属コナスビ亜属	果実？	7
ナス科	種子	3
メナモミ	果実	3
キク科A	果実	3
キク科B	果実	3
藻類	母植物体破片	120
シダ植物	小葉破片	1
菌核（5mm径）		5

カッコ内の数字は破片の数

においてはマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類）が40％を越える出現率を示し優占しており、上部の試料１ではブドウ属が90％近くを占め、他の分類群はいずれも低率である。試料２ではその他にブドウ属が10％をこえて出現しており、スギ属やコナラ属の両亜属、シイノキ属―マテバシイ属、ニレ属―ケヤキ属などが５％前後みられる。草本類ではイネ科が20％弱、ナデシコ科が10％弱出現している。

４．井戸周辺の植生

大型植物遺体分析の結果を表２に示した。水洗選別をする前の堆積物の観察では殆ど種子類はみられないと思われたが、結果は草本の種子や果実などが多数検出された。その中ではサンショウソウ属の種子が飛び抜けて多く、一例として、サンショウソウは山地の林下にはえる多年草で、花は３～６月である(佐竹　1981)。おそらく井戸周辺の丘陵部よりレキなどとともにこの種子が多量に供給されたものと思われる。その他ではノミノツヅリ近似種などナデシコ科に属するものが多く検出されており、カタバミ属の種子も100個体得られている。これらは道ばたなどに普通にみられるもので、井戸周辺は開けた環境が予想される。

また周辺丘陵部はニヨウマツ類や照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属―マテバシイ属が分布を広げていたのであろう。

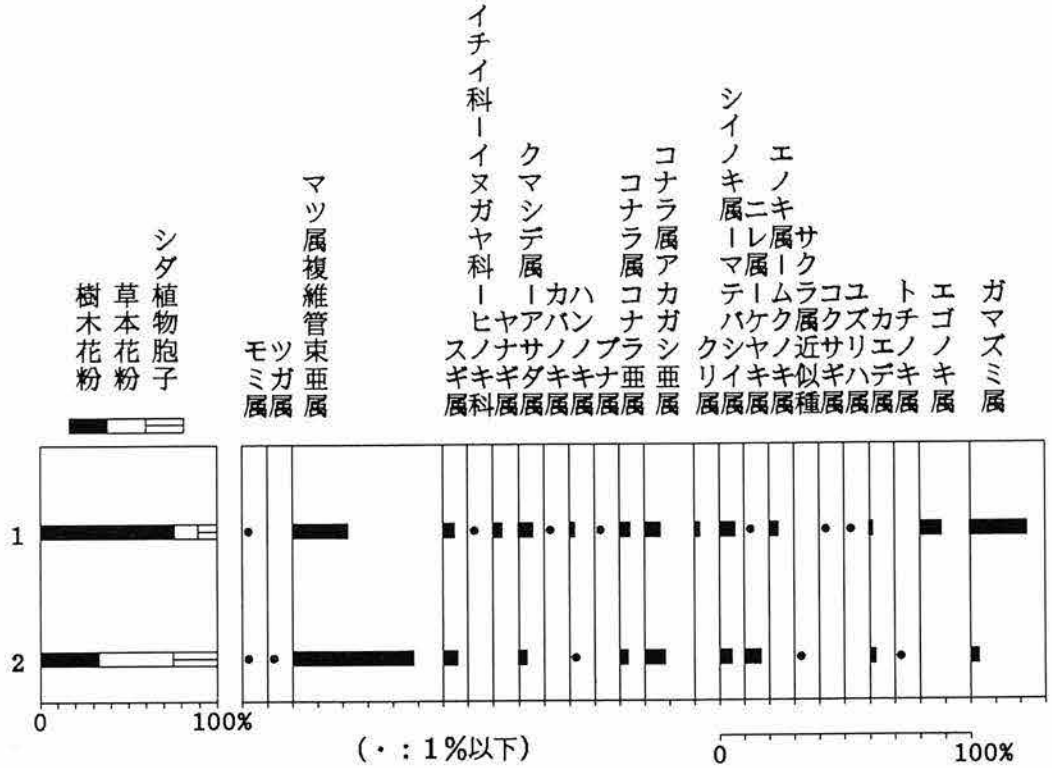


図21　杉ヶ谷２面井戸内堆積物の樹木花粉化石分布図
（樹木花粉総数からブドウ属花粉を除いた数を基数として百分率で算出した）

5．花粉化石からみた堆積物の季節性について

先にも述べたように井戸内堆積物は速やかに埋積されたことが考えられ、分析を行った上下の試料に時間的な差はあまりないと思われる。そうした中、試料1でブドウ属花粉が花粉塊とともに大量に得られており、おそらく開化時に花序とともに埋積されたためであろう。この特異な出現のため他の分類群の出現率が歪められていることが予想され、ブドウ属花粉を除いた樹木花粉総数を基数にして示したのが図2である。これをみるとエゴノキ属やガマズミ属などを除いて出現率について上下の違いはあまり無いようである。これは堆積物中にレキもみられることから、埋積時には攪乱作用も受けていたことが考えられ、上下の試料が混ざりあい、出現率はある程度平均化されたのではないかと思われる。そうした中、試料1においてブドウ属が大量に検出されており、これは花の時期をそのまま示しているのではないかと思われる。ブドウ属は主に初夏に咲き、試料1において特徴的な出現を示しているエゴノキ属も同時期である。またガマズミ属は種類によって花の咲く時期が多少異なるが、多くが晩春～初夏であり、ここで予想されるガマズミの花期は晩春～初夏である。一方試料2で優占しているニヨウマツ類は春に開花する。このように試料2は春の、試料1は初夏といった季節を表している可能性があると考える。

こうした季節性については千葉県市原市に一例がある。辻（1984）によれば千葉県市原市の上総国分尼寺構内の井戸内堆積物において大型植物遺体分析とともに花粉分析が4点行われ、そのうち上下2点が秋の花粉群集を、中の2点は秋以外の季節を反映しているものと判断されている。

6．おわりに

この井戸内堆積物について花粉分析をするにあたり、季節性について何等かの問題提示が示されればと予察的な考えでいたため、土層記載、堆積環境、大型植物遺体分析層準など今回はまだまだ不十分であると言わざるを得ず、今後の課題としたい。

引用文献

佐竹　義輔（1981）「イラクサ科」『日本の野生植物II　佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫　編』平凡社　p.3～10

辻　誠一郎（1984）「井戸内堆積物の季節性」『古文化材の自然科学的研究』同朋社出版　p.492～493

附編１－２　永福寺跡（二階堂520番１外）出土材の樹種同定

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

永福寺跡（二階堂520番１外）は、史跡永福寺跡の北側、二階堂杉ヶ谷に所在する。この遺跡からは、14世紀前半の井戸や15世紀中頃の火葬墓が検出されている。井戸からは、この時代としてはきわめて珍しい弓材が出土し、自然木と思われる生材やシカなどの獣骨類も多量に出土している。

ここでは、井戸内から出土した弓材や生材あるいは火葬墓から検出されている炭の樹種について検討する。なお、井戸内堆積物については、同時に花粉化石および大型植物遺体についても検討されている。

２．試料と方法

樹種を検討した材試料は、井戸から出土した比較的大きな生材（自然木）が８試料、花粉分析用の堆積物から取り上げた試料が２点、さらに火葬墓（火葬墓１）から検出された炭化材が２点である。

これら試料のうち生材については、片刃カミソリを用いて横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の３断面について作り、ガムクロラール（Gum Chloral）で封入し、永久標本を作成する。樹種の同定は、これら標本を光学顕微鏡下で40～400倍の倍率で観察を行い、現生標本との比較により行う。

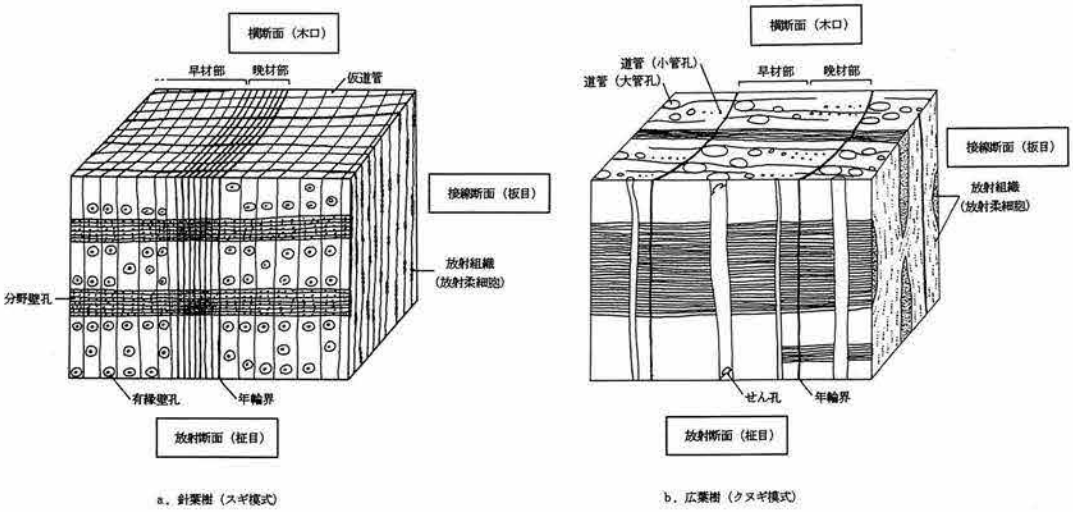


図22　材組織とその名称

また炭化材については、実体顕微鏡下で片刃カミソリなどを用いて上記3断面を作成し、直径1cmの真鍮製の試料台に固定し、金蒸着を施す。これら標本は、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製ＪＳＭＴ－100型）で観察し、現生標本との比較により行う。

以下に、標本の記載及び同定の根拠を述べ、その結果を表1に示す。また、材組織の記載中の用語については、図1にその概略を示した。なお、ここに検討を行った試料のうち生材の標本は、パレオ・ラボに保管してある。

3．記載と結果

表10　出土材とその樹種

試料No.	出土地点	形　状	樹　種
1	井　戸	弓	ヒサカキ
2	〃	〃	タケ亜科
3	〃	自然木	マツ属複維管束亜属（ｸﾛﾏﾂ?）
4	〃	〃	カ　ヤ
5	〃	〃	〃
6	〃	〃	マツ属複維管束亜属（ｸﾛﾏﾂ?）
7	〃	〃	〃
8	〃	〃	アカガシ亜属
9	〃	〃	マツ属複維管束亜属（ｸﾛﾏﾂ?）
10	〃	〃	〃
11	〃	〃（小片）	〃
12	〃	〃（小片）	バ　ラ　属
13	火葬墓1	炭化材	ス　ギ
15	〃	〃	ハンノキ節

［井戸内出土生材について］

カヤ　Torreya nucifera Sieb.et Zucc.　イチイ科　図版1ａ～1ｃ.

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。放射組織は、柔細胞からなり単列で1～10細胞高である。また、分野壁孔はヒノキ型で4個見られる（接線断面）。仮道管の内壁には、2本のらせん肥厚が対になって分布する（放射・接線断面）。

以上の形質から、イチイ科のカヤの材と同定される。カヤの樹木は、本州の宮城県以南の暖帯から温帯にかけて分布しする樹高25m、直径90cmに達する常緑針葉樹である。

マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図版３ａ～３ｃ.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は窓状であるが、放射仮道管の水平壁には鋸歯状である(放射断面)。エピセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で２～11細胞高である（接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属複維管束亜属の材と同定される。マツ属複維管束亜属樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られるクロマツ（Pinus thunbergii)、本州の暖帯から温帯にかけて見られるアカマツ（P.densiflora）があるが、標本は、保存が悪く組織が不明瞭であるが、放射仮道管の水平壁がアカマツの突起ほど著しくないことから、クロマツの可能性が高い。

アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版３ａ～３ｃ.

大型の菅孔が放射方向に配列する放射孔材である（横断面)。道管のせん孔は単一である（放射断面)。放射組織は、柔細胞で単列同性のものと集合放射組織のものとがある。(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ（Q.acuta）やアラカシ（Q.glauca）やシラカシ（Q.myrsinaefolia）をはじめ８種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径１mに達する常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素である。

バラ属　Rosa　バラ科　図版４ａ～４ｃ.

年輪の始めに中型の管孔が２列程度並び、以後径を減じた管孔がほぼ単独で散在する環孔材である（横断面)。道管のせん孔は、単一である（放射断面)。放射組織は、異性で１～５細胞幅で、５細胞幅の細胞の高さは非常に高い（接線断面)。

以上の形質から、バラ科バラ属の材と同定される。バラ属の樹木には、ノイバラ（R.multiflora）やモリイバラ（R.jasminoides）など15種類ほどある。

ヒサカキ　Eueya japonica Thunb.　ツバキ科　図版５ａ～５ｃ.

小型の管孔がほぼ単独で散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、34本程度の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性交互状で１～３細胞幅、３～30細胞高である。

以上の形質から、弓材はツバキ材ヒサカキの材と同定される。ヒサカキは、本州以南の暖帯に普通に分布する樹高10m程度の常緑広葉樹である。

タケ亜科　subfam. Bambusoiseae　イネ科　図版６ａ～６ｃ.

左右の後生木部、外側の後生木部・原生師部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘が取り巻く維管束が、多数散在する（横断面)。

以上の形質から、イネ科のタケ亜科の稈と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的では識別できない。試料は、弓材としてヒサカキの材と合わせて使用されていることから、その直径も比較的大きいタケ類と考えられる。

［火葬墓出土炭化材について］

スギ　Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D.Don　スギ科　図版７ａ～７ｃ.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、春材部から夏材部への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、１分野に２個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、単列で２～11細胞高からなる（接線断面)。

以上の形質から、スギ科のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ハンノキ属ハンノキ節　Alnus　カバノキ科　図版８ａ～８ｃ.

中型の管孔が単独あるいは数個複合してまばらに配列する散孔材で、木部繊維の直径は大きく菅孔と区別がつきにくい(横断面)。道管のせん孔は25本程度からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、単列のものと集合状のものとがある（接線断面)。

以上の形質からカバノキ科のハンノキ属ハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ(A.japonica)、平野部から山地の斜面にかけて育成するヤマハンノキ（A.hirsuta）とがある。

４．考察

井戸内から出土した弓材は、ヒサカキとタケ亜科（タケ類）を重ね合わせて作られることが判明した。ヒサカキの材は、きわめて硬く、緻密で割裂が困難な特徴をもつことから、古くから柄類などに利用されている樹種である。時代あるいは弓の構造も異なるが、これまで出土した弓材を見ると、針葉樹ではイヌガヤやカヤなどが利用され、広葉樹ではマユミやケヤキあるいはカシ類（アカガシ亜属の樹木）などが利用されている。調査例が少ないことと関係するが、ヒサカキの材を使用した報告例はない（島地・伊藤、1988)。

生材あるいは火葬墓から出土した炭化材は、いずれも大きな材を対象としたため、周辺植生あるいは火葬時の樹種選択については言及できないが、井戸内からマツ属複維管束亜属の樹種が多く出土したことなどは、花粉分析の結果から推定されるように、周辺ではマツ属複維管束亜属が卓越していたと考えられる。

引用文献

島地　　謙・伊藤　隆夫（1988)「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣　p.596

附編２　鎌倉市永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺体
―井戸址出土の動物遺体について―

金子　浩昌

Ⅰはじめに

平成４年度における国指定史跡永福寺跡の調査で検出された井戸址から多数の動物遺体が発掘されたことは、その年の９月に行われた鎌倉考古学研究所、中世都市研究会主催の遺跡調査・研究発表会で報告された。その後その調査を鎌倉市教育委員会から委嘱され、精査する機会をもった。筆者はこれまでに幾つかの鎌倉市内の遺跡から出土する動物遺体について調査したことがあり、その際井戸址からの出土例も見ることがあったが、この永福寺の井戸址から出土したような多種類のそして多くの遺物に接したことはなかった。

またこれらの動物遺体はその出土の状況、動物種の内容、そして動物骨にみる加工の様相などもかって見ない事例であった。真に興味ある資料といえよう。以下動物遺体を分析した内容を報告する。調査報告に当たり鎌倉市教育委員会文化財保護課史跡永福寺跡主任調査員福田誠氏のお世話になった。厚く御礼を申しあげる。

本文の計測値は特に記さない限りmmを単位とし、計測項目はA・v・d, Driesh(1976)による。

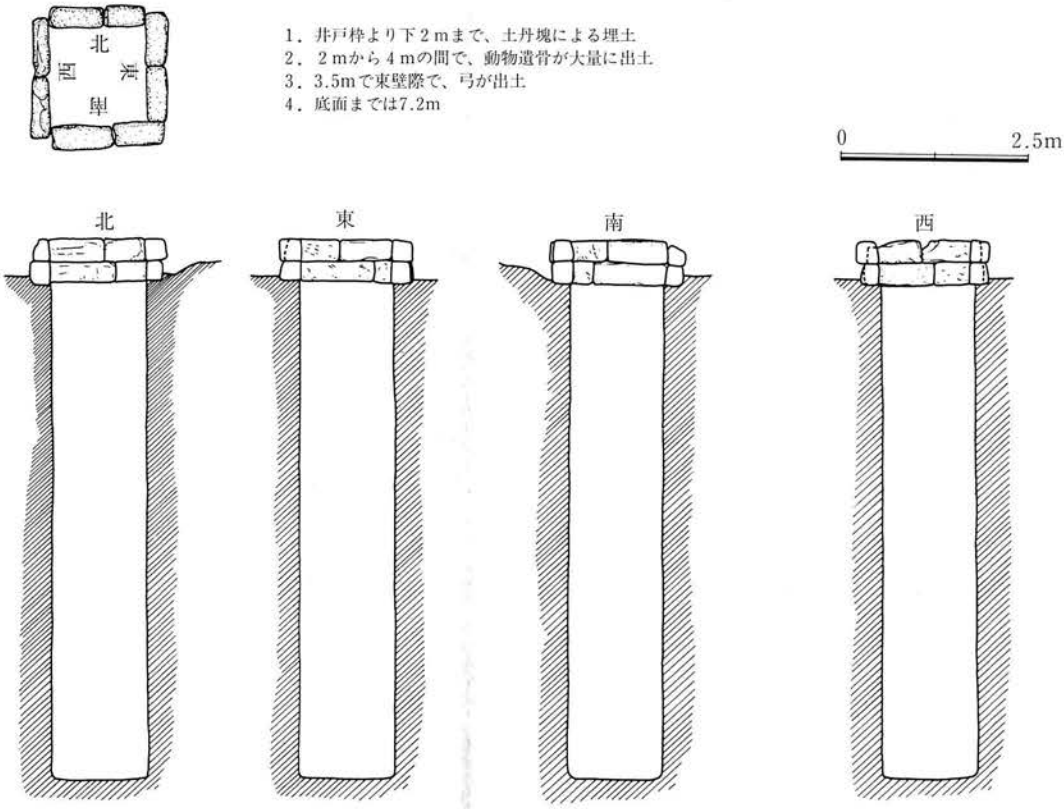


図23　２面井戸

II動物遺体の種類

種名表

両生綱　Class Amphibia

ヒキガエル　*Bufo bufo formosus*

鳥綱　Class Aves

キジ　*Phasianus colchicus*

哺乳綱　Class MAMMALIA

アズマモグラ　Mogeru wogura

ノウサギ　*Lepus brachyurus*

カゲネズミ　*Eothenomys kageus*

ドブネズミ　*Rattus norvegicus*

イヌ　Canis familiaris

ニホンジカ　*Cervus nippon*

以上2綱7種類の動物種が知られた。これらの動物遺体がどのように埋存していたか、層位的にどのような在り方をしていたかという点については、充分記録することができなかった。それは調査時において井戸底からの湧水が多く、遺物は埋没し、手探りで発掘を進めるような状態があったからである。しかし発掘中遺物は土壌ごとメッシュ中にとり、標本はすべて採取するようにしたという。従って、大型の骨についてはほぼ採集されていると思われるが、モグラ、ネズミなどの椎骨、四肢骨が通常の出土状態に比べて少ない。気になることであるが、これについては特にふれないでおく。

III動物遺体の記載

両生綱　Class Amphibia

無尾目　Order Anura

ヒキガエル科　Famiry Bufonidae

ヒキガエル　*Bufo bufo formosus*

少なくとも3個体の遺体があったことが、主要な四肢骨の数から推定される。しかし、それらの骨のすべてが検出されているわけではなく、なぜか橈・尺骨、椎骨が検出されていない。もちろん、頭部の骨格もみることはなかった。検出されたのは次のような骨格である。

左右上腕骨、腸骨、大腿骨、脛・腓骨、中手・中足骨

右側上腕骨全長（現長）34.87、29.69、28.56、26.93

左側大腿骨全長　　41.05、38.93

左側脛・腓骨全長　　39.05、33.15

鳥綱　Class Aves

キジ目　Order Galliformes

キジ科　Famiry Phasianidae

キジ　*Phasianus colchicus*

1個体分のものと思われる骨があるが、全身の骨格が残されていたわけではない。骨には切断された痕跡をもつものもあり、解体された骨が投げ込まれたものと思われる。検出した骨は以下の通りである。小さく雌であろう。

胸骨、鎖骨、左側烏口骨、左側上腕骨、左側橈骨、右側中手骨、複合仙骨、右側大腿骨、左右脛骨、左側中足骨。

上記の四肢骨はその大きさから同一の個体のものと思われる。特に脛骨が左右揃っていたのは、この井戸に投げ込まれる直前まで一個体であったことが考えられる。

右側の脛骨遠位骨端は、内・外顆の直上の位置で斜めに切断されている。

烏口骨全長44.26、上腕骨全長63.64、橈骨全長52.33、中手骨全長34.17

大腿骨全長73.04、脛骨全長93.69、中足骨全長59.26

哺乳綱　Class MAMMALIA

食虫目　Order Insectivora

モグラ科　Famiry Talpidae

アズマモグラ　*Mogeru wogura*

頭蓋2点がある。2点は頭頂骨・後頭骨部分と歯の一部が抜け落ちた状態であるが、頭蓋のかたちはほぼ保っているものである。脆弱な骨がこれ程にかたちのこして採取できたのは、井戸址のような特殊な条件があったからであろう。しかし、この遺構でのモグラの遺骸はこの頭蓋のみで、その他に四肢骨は全くみることができなかった。

標本は大小の二つの頭蓋であって、大きいほうはアズマモグラの大きさで、小さい方はコモグラの大きさに匹敵するが、おそらく雄雌の違いと思われる。

頭蓋骨全長35.37±、33.29

ウサギ目　Order Lagomorpha

ウサギ科　Famiry Leporidae

ノウサギ　*Lepus brachyurus*

ノウサギは本井戸址から出土した動物骨中シカに次いで多く、本遺構の動物の性格を考えるためにも重要な動物である。ノウサギが埋存個体数を調査するために、標本の主要骨を計測し、左右の量差を比較して推定した。

ノウサギの埋存個体数は四肢骨の数から9個体と推定したが、すべての骨がこの個体数の数だけ

あったわけではなく、部位によって数にかなりの差異があった。

四肢骨の近・遠位骨端の骨化の状況は9個体中、3個体が骨化している個体で、他は上腕骨の遠位骨端（近位骨端は不明）、尺骨、大腿骨、脛骨の近・遠位両端が外れており、若い個体であった。

頭蓋骨：5個の頭蓋、6組の下顎骨がある。脆く弱いノウサギの頭蓋骨がこれほど良好な状態で残されていたのは稀にみることであろう。四肢骨から推定される個体数よりも頭蓋骨の数が少なく、井戸のなかに入れられなかった頭蓋骨もあったようである。

頭蓋骨全長91.82、91.25

下顎骨長（id～Goc）71.83、68.17、65.91

歯列長43.37、46.76、43.44、40.11、35.37、30.03

肩甲骨：四肢骨のなかではもっとも数が少ない骨である。7個体分まではあったが、そのうち左右の揃うことを推定できたのは3個体分のみであった。

上腕骨：7個体の推定で、6個体分が左右の組を推定されている。

橈骨　：7個体の推定で、2個体分だけが左右の組を推定されている。

尺骨　：7個体の推定で、3個体分が左右の組を推定されている。

寛骨　：4個体の推定で、1個体分が左右の組を推定されている。

橈骨、尺骨、寛骨は左右の残存率が極端に低い部位である。

大腿骨：9個体の推定で、7個体分が左右の組を推定されている。

脛骨　：8個体の推定で、8個体分が左右の組を推定されている。

距骨と踵骨、中手骨と中足骨も少ない。おそらく早いうちに切断されているのであろう。

左右の組み合わせが少ない部位はこれも別に持ち運ばれたのであろう。結局、上腕骨、大腿骨、脛骨だけが左右残存の率の高い骨であったことになる。肉の付着の多い骨が最後にここに廃棄されたらしいのである。

胴骨　：個体数の割りには胴骨の残されている率は非常に少ない。特に頸骨が少なく、胸椎骨がやや多く、腰椎骨のみが目立った。しかし、その腰椎骨も比較的大形の個体のもののみが目立ったのであるが、それぞれの総数は推定された個体数に及ぶものではなかった。胴体も早くに別に切り離されたのであろう。

齧歯目　Order Rodentia

ネズミ科　Famiry Muridae

カゲネズミ　*Eothenomys kageus*

破損した頭蓋3、下顎骨1、右側寛骨1、左右脛骨各1が出土している・頭蓋骨の割りには下顎骨、四肢骨の数が少ない。次に述べるドブネズミも頭蓋骨と四肢骨の残存する比率が同じである。自然の混入物ではないのかも知れない。

脛骨全長23.91

ニホンドブネズミ　*Rattus norvegicus carago*

頭蓋３(大きな標本１、小さな標本２個がある)、右側下顎骨１、左右寛骨各１があり、そのうち右側下顎と左右の寛骨はもっとも大きな頭蓋と同一の個体のものと思われる。上述したように四肢骨の数が少な過ぎるようである。

頭蓋骨全長49.87、42.03

寛骨全長47.99

食肉目　Order Carnivora

イヌ科　Famiry Canidae

イヌ　*Canis familiaris*

本遺跡でのイヌの遺体は成体と幼体を検出したが、それぞれの個体の骨格がまとまることはなかった。４乃至５個体があった。

成体：右側上腕骨１

この標本は同じ年齢のものとしては他には標本がなく、なんらかの理由でこの井戸中にはいったものである。標本は表面が風化して、他のものとは違うことがはっきりとわかる。そして井戸の周囲にはこのような遊離骨が別にもあったであろうことが推測される。

幼体：１．環椎、右側肩甲骨、左側腸骨。

このイヌはわずかに３点の骨を残すのみであって、非常に小さい個体のものである。おそらく胎児もしくは新生児のものであろう。

幼体：２．頭蓋、左側下顎骨、右側肩甲骨、左側橈骨、左側腸骨、左側脛骨

上述の標本に比べてやや大きくなった個体である。

右側下顎骨全長（関節顆）72.08、右側肩甲骨全長（ＨＳ）51.75、44.00±

右側上腕骨全長55.14、53.16、右側橈骨全長49.17

左側大腿骨全長61.68、右側脛骨56.43

幼体：３．左側尺骨、左側腸骨

さらに大きくなった個体。尺骨全長82.66

偶蹄目　Order Artiodactyla

シカ科　Famiry Cervidae

ニホンジカ　*Cervus nippon*

井戸址から検出された動物遺体の中でもっとも多くの骨を出土した種類であって、本遺跡の特徴を示している動物種といえよう。出土した遺骸は頭蓋骨、胴骨、四肢骨の各部位にわたり、また推定される個体数は幼、成獣を加えると23個体に及び、狭い井戸のなかに是ほど多くの個体が検出されたことはかってなかったであろう。さらにそうした遺骸の大部分にのこる解体時に付いた切痕、

打撃痕などによって、その手法を具体的に知るのである。

シカの骨の遺存部位

環椎：6個が残されていた。成体の大きさであるが、骨化がまだ不完全で若い個体のものである。そのうちの2個に解体時に付いた切り込み痕が環椎翼の両側に深く付くが、首を切断するために切り込んだ痕であろう。

環椎幅71.15、71.91、66.40、64.05、65.44

軸椎：6個がある。おそらく上記の環椎と同じ個体のものになるのであろう。軸椎は環椎よりも切断されている標本が多く、椎体を背部後方から斜めに切断しているもの、横突起部を切断している標本がある。

外側関節面幅47.78、46.14、45.09

頸椎：8個がある。この椎骨にも切痕が多くみられ、No.3・4頸椎には特に両側に真横からあるいは前方向からの切り込み痕が顕著である。軸椎からつづくNo.3・4頸椎の辺りが首の分断位置になったのであろう。No.5・6頸椎にも側方からの切り込みがあり、横突起が切断され、その近くに切痕をみる。

胸椎：26個。ほとんどの標本に切痕がみられる。棘突起の前面に切り込み、これを切断している例が18個、前関節突起の切断がみられる。

腰椎：14個。これにもほとんど同じ切痕、切断がみられる。

この他に胸椎もしくは腰椎の椎体が二つに切断されている標本もある。

仙骨：5個あるが、完全な形を止めている標本はない。4個には何らかのかたちで切り傷がはいっていた。仙骨の側方から切り込むような切痕が顕著である。

肋骨：総数40個ほどがあるのみである。左右が確認され、近位骨端若しくはそれに近い部分をのこす標本は28、右側22、左側5個である。No.1肋骨が右側1、左側1、No.2肋骨が右側1、左側1。

肋骨は上記のように残されていた標本は一部であり、左右は5：22と不釣り合いであった。持ち運ばれていることがよくわかる。

肋骨でかたちの完存していたのは、右側のNo.1のみで、左側No.2には5箇所にも切り込み痕があった。その他のものはすべて近位骨端の肋骨結節から先を切断されているもの、あるいは骨体の中央位に一で切断されている標本が多かった。また、両端を切断して7～8cmの長さになっているものがあった。

頭蓋骨

雄：上顎骨をつける標本2、上顎骨のない標本1

雄：完存1、その他9

雄頭骨全長、290.0、同歯列長、88.2、雌頭骨全長、273.4、同歯列長、87.0

下顎骨

左右：9（M$\overline{3}$萌出5、M$\overline{3}$萌出途次2、M$\overline{2}$まで萌出2）

他に右1（M$\overline{3}$萌出）

四肢骨

(1)骨端が骨化している標本。(13個体分があったと推定されている。ただし、距骨と踵骨は組み合わされていたと推定されるので、腫骨は未骨化標本もここにいれて15個体になっている)

肩甲骨：左右各3個がある。5個体の推定で、2個体分が左右の組を推定されている。

上腕骨：6個があり、6個体の推定で、左右の組が推定される標本はない。

橈骨　：16個があり、9個体の推定で、7個体分が左右の組を推定されている。

尺骨　：12個があり、6個体の推定で、6個体分が左右の組を推定されている。

寛骨　：8個があり、7個体の推定で、1個体分が左右の組を推定されている。

大腿骨：骨端未骨化の標本、破損標本が多く、個体数、左右の組の推定が難しい。

脛骨　：23個があり、13個体の推定で、10個体分が左右の組を推定されている。

距骨　：26個があり、15個体の推定で、11個体分が左右の組を推定されている。

踵骨　：26個があり、15個体の推定で、13個体分が左右の組を推定されている。

(2)骨端が未骨化の標本

上述の個体と重複しない骨である。

上腕骨：近位骨端が外れた標本。6個があり、5個体の推定で、2個体分が左右の組を推定されている。

橈骨　：遠位骨端が外れたもの。
12個があり、7個体の推定で、5個体分が左右の組を推定されている。

尺骨　：7個があり、4個体の推定で、3個体分が左右の組を推定されている。

大腿骨：近・遠位骨端が外れたもの。
6個があり、6個体の推定で、左右の組ができる標本はない。

脛骨　：遠位骨端の外れた標本。
6個があり、3個体の推定で、3個体分が左右の組を推定されている。

踵骨　：10個があり、5個体の推定で、同じ個体分の左右の組が推定されている。

次に四肢骨にみる切断の状況をのべる。

肩甲骨：左右の揃う一組の肩甲骨に、縦横方向から切り込み痕をもつ標本がある。このような切痕をもつのは6例中2例のみである。

上腕骨：骨体を完存する標本が左右各2ある。その他は骨体の中央で割られる。

橈骨　：遠位骨端部を残す標本が大部分で、近位骨端を残す標本が3個のみである。この遠位骨端骨は僅か1個があるだけで他に採集されていない。若し、この骨端が外れた状態であったとすれば、骨が井戸中に投げ込まれるまでにはしばらく間があったことになる。ど

こかに溜めて置かれて、一気に投げ込まれたことになる。どこかに隠されていたのであろうか。

すべて骨体の中央で割られている。螺旋状の割れ口をよくみせる。

尺骨　：近位骨端をのこす標本が左側３、右側２であるのに対して、遠位骨端は左側６、右側６である。

寛骨　：５組左右の揃う寛骨があったが、そのうち２組は切断痕をみない標本で、３組の寛骨は腸骨頸部で切断、その他座骨部に切り込み痕をみる。また左右の組が不明の切断された腸骨部分、座骨部分がある。

大腿骨：この骨にも骨体の完存する標本が５個ある。その他はすべて骨体の中央で割られている。螺旋状の割れ口をよくみせる。

脛骨　：完存標本はない。近・遠位部の両方をみるが、遠位部の方が圧倒的に多い。それには骨端の外れる標本が多いが、橈骨の場合と同様に骨端がやはり採集されていない。

(2)幼体標本（８個体分が推定されている）。

頭蓋骨：後頭骨５、最大幅30.62～35.42、前頭骨11、頬骨突起間幅50.70～106.28

下顎骨：dm４の萌出閉途次の標本左右５個づつがあり、おそらく同一の個体のもの。別にＭ１の萌出途次の標本で左右の揃う１個体がある。

肩甲骨：６個があり、３個体の推定で、３個体分が左右の組を推定されている。

上腕骨：５個があり、４個体の推定で、１個体分が左右の組を推定されている。

橈骨　：８個があり、６個体の推定で、２個体分が左右の組を推定されている。

尺骨　：３個があり、３個体の推定で、左右の組を推定させる標本はない。

中手骨：９個があり、７個体の推定で、２個体分が左右の組を推定されている。

寛骨　：７個があり、７個体の推定で、２個体分が左右の組を推定されている。

大腿骨：５個があり、５個体の推定で、左右の組を推定させる標本はない。

脛骨　：９個があり、７個体の推定で、２個体分が左右の組を推定されている。

距骨　：４個があり、４個体の推定で、１個体分が左右の組を推定されている。

踵骨　：４個があり、５個体の推定で、左右の組を推定させる標本はない。

中足骨：12個があり、８個体の推定で、４個体分が左右の組を推定されている。

幼体の場合も部位によって残されている骨の数はまちまちである。推定される総個体数８個体であるから、左右の骨の揃う率は非常に低く、成体の場合よりも低い。それだけ幼体の骨は井戸に投げ込まれる前に分割されていることになる。橈骨、中手骨、脛骨、中足骨が多く、成体の場合と比べて橈骨、脛骨が同じように多いのは興味がある。このことは、肉量のある上肢部分の骨が持ち運ばれたり、大腿骨のような太い骨がのこされることになるのである。

Ⅳ収　束

井戸址中から人手によっていれられた動物。しかしその間にいろいろな人手があったような様子をみる。自然の混入動物のようにみえる、ネズミ、モグラもそのまま自然死したにしては骨が少ない。何か理由があるのであろう。

まとまった骨の数のあったのはシカ、ノウサギの骨で、これらの骨に普通よくみるようなネズミの噛み痕がないので早くに埋まったからであろう。、また、左右の骨が揃わないのは、分配されていたからであるが、分配元はこの近くであったようである。

今回の永福寺跡で知られた井戸址検出の動物遺体は幼、亜成獣、成獣の個体からなるニホンジカ、ノウサギを主体として、さらに幼体のイヌ、キジの骨格の一部などを含むものであった。これらの鳥獣類は人手によって井戸の中に放棄されたものであった。このうちもっとも興味があるのは主体となったニホンジカ、ノウサギで多くの遺骸があった。ニホンジカは少なくとも23個体があり、そのうち15個体が成・亜成獣、８頭が出産前後の幼体であった。成・亜成獣15個体のうち雄３、雌12個体（９個体まで頭蓋骨で雌を確認）。このことから雌を狙った狩猟があったことがわかる。

幼獣を含めすべての個体は解体され、その切断痕跡はすべての骨格にみられた（幼体の場合はごく一部であったが）。

ノウサギは９個体があったが、解体切断痕のみられるのは一部であった。

シカ、ノウサギの遺骸の多いのは鎌倉の各地遺跡での特徴であるが、永福寺跡地の井戸址から出土した多くの動物遺体がどの様な人々によって捕獲されたものか、あきらかでないが、そこで行われていた猟はかなり対象を限定していたようで、害獣駆除的があったのではないかと思われる。

鎌倉の中世遺跡から出土する動物遺体の研究は幾つかの遺跡の資料の分析を通して漸くその性格が明らかにされてきつつあるのが現状である。そして、こうした動物遺体にも遺跡による差異が認められ、それはまた地域の人々の生活を反映させているのである。今後こうした事実をあきらかにしていくためにも、動物遺体資料の整理と分析研究の重要性はますます高まっているといえよう。

参考文献

金子　浩昌：「鶴岡八幡宮研修道場用地出土の獣骨について」、鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団編「研修道場用地発掘調査報告書」1983年。
金子　浩昌：「蔵屋敷遺跡出土の動物遺体」、鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会編「蔵屋敷遺跡」1984年。
金子　浩昌：「千葉地東遺跡の動物遺存」、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10「千葉地東遺跡」1986年。
金子　浩昌：「中世遺跡における動物遺体―鎌倉市内遺跡の調査例を中心として」、鎌木義昌先生古稀記念論集「考古学と関連科学」1988年。
河野真知郎：「中世鎌倉動物誌―都市遺跡出土の動物遺体と関連遺物からの予報―」〝歴史と民俗〟神奈川大学常民文化研究所論集３号、1988年。
金子　浩昌：「鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の動物遺体の概要」、佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書、1993年。
宗臺秀明、室臺富貴子：「由比ガ浜三丁目229番外（№236）」「長谷小路周辺遺跡」所収、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９、1993、鎌倉市教育委員会、p.145～344

表11　動物遺体観察表

図版25（ニホンジカ）

1　頭蓋　♂
2　頭蓋
3　頭蓋
4　頭蓋
5　頭蓋
6　頭蓋
7　頭蓋
8　頭蓋　♂
9　左下顎骨
10　左下顎骨
11　左下顎骨
12　左下顎骨
13　左下顎骨
14　左下顎骨
15　左下顎骨
16　左下顎骨
17　左下顎骨

図版26

1　環椎
2　環椎
3　環椎
4　環椎
5　環椎
6　環椎
7　軸椎
8　軸椎
9　軸椎
10　軸椎
11　軸椎
12　軸椎
13　胸椎
14　胸椎
15　胸椎
16　胸椎
17　胸椎
18　胸椎
19　腰椎
20　腰椎
21　腰椎
22～43　右肋骨
44～48　左肋骨
49～55　肋骨片
56～58　右肩甲骨
59～61　左肩甲骨
62～64　右上腕骨
65～67　左上腕骨
68～82　右橈骨
83～100　左橈骨

図版27

1～12　右尺骨
13～28　左尺骨
29～33　骨盤
34～36　右腸骨
37～38　左腸骨
39～40　右座骨（107、108同一個体？）
41　左座骨
42～44　右大腿骨
45～50　左大腿骨
51～55　右脛骨
56～65　左脛骨
66～78　右脛骨違位部
79～90　左脛骨違位部
91～101　右距骨
102～116　左距骨
117～128　右踵骨
129～143　左踵骨
5・20・26：亜成獣
99～108：成獣

図版28（ニホンジカ、幼～成獣）

1～4　切歯骨
5　前頭、頭頂骨
6～9　左前頭骨
10～14　後頭骨
15　左下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
16　左下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
17　左下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
18　左下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
19　左下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
20　左下顎骨（M１萌出初期）
21　右下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
22　右下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
23　右下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
24　右下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
25　右下顎骨（dm$\overline{4}$僅かに萌出）
26　右下顎骨（M２萌出初期）
27～29　右肩甲骨
30～32　右上腕骨
33～36　右橈骨
37　右尺骨
38～43　右中手骨
44　右腸骨
45　左腸・座骨
46～48　右大腿骨
49～52　右脛骨

53～59　右中足骨
60・61　右距骨
62～64　右肩甲骨
65・66　左上腕骨
67～69　左橈骨
70・71　左尺骨
72～75　左中手骨
76・77　左腸骨
78　左座骨
79・80　左腸骨
81～84　左大腿骨
85～89　左脛骨
90～95　左中足骨
96～98　左踵骨

図版29
ノウサギ
1～4　頭蓋
5～7　左右下顎骨
8　左右下顎骨
9～11　左右下顎骨
12～18　右肩甲骨（13・14未骨化）
19～25　右上腕骨（21～22近位端外れ、23～24両端外れ）
26～28　右橈骨
29～34　右尺骨
35～37　右寛骨
38　右腸骨（未骨化）
39～46　右大腿骨
47～54　右脛骨（49～53骨端骨外れ）
55　右中足骨
56　右第2中足骨

図版30
ノウサギ
1～3　右肩甲骨
4～9　左上腕骨
10～15　左橈骨
16～18　骨盤
19～27　左大腿骨
28～35　左脛骨
36～39　左尺骨
40　左寛骨
41・42　左腸骨
43　左座骨
44　左第2中足骨
45　左中足骨
46　左第5中足骨

ヒキガエル
1～4　右上腕骨
5～7　左上腕骨
8・9　右腸骨
10　左腸骨
11・12　右大腿骨
13・14　左大腿骨
15・16　右脛骨
17・18　左脛骨
19　踵骨
20　距骨

キジ
21　鎮骨
22　左烏口骨
23　胸骨
24　左上腕骨
25　左橈骨
26　右中手骨
27　複合仙骨
28　右大腿骨
29　右脛骨
30　左脛骨
31　左中足骨

アヅマモグラ
32　頭蓋
33　頭蓋

ドブネズミ
34～36　頭蓋
37　右下顎骨
38　左寛骨
39　右寛骨

ネズミ
40・41　頭蓋
42　右下顎骨
43　左寛骨
44　右脛骨
45　左脛骨

イヌ（62以外幼体）
46　頭蓋
47　左下顎骨
48　右肩甲骨
49　左肩甲骨
50・51　右上腕骨
52・53　左上腕骨
54　左橈骨
55　右橈骨
56　左大腿骨
57　左尺骨
58・59　左腸骨
60　右脛骨
61　左脛骨
62　右上腕骨

部位	計測	1		2		3		4		5		6		7		8		9	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
肩甲骨 sc.	DHA	75.21		73.99	71.72	—					56.40								
	GLP	13.53		12.82		12.47		12.68			11.46								
	SLC	6.72		6.43		6.09		5.58		6.02	6.03	5.89	6.24	5.43					
上腕骨 hu.	GL	93.31	94.20	91.59	91.52	87.43	87.06	(80.29)	(79.60)	(75.23)	(75.55)			(52.54)	(52.82)				
	Bp	15.25	14.68	15.36	15.05	15.38	15.18												
	Bd	11.23	11.24	11.37	11.23	11.16	11.34	11.25	11.51	10.50	10.42	(9.97)		(9.76)	(9.75)				
橈骨 rad.	GL		91.91	86.88	85.83	85.87	86.57	82.87			66.57	60.37		49.17					
	Bp		7.98	8.10	8.35	8.22	8.20	8.02			6.87	6.12		5.77					
	Bd		8.70	9.13	8.77	8.76	9.08	—			9.34	7.24		8.23					
尺骨 ul.	GL		107.35	100.05	101.33	100.67	100.47	—	—	80.38	—	75.28	—	—	(55.37)				
	DPA		9.96	9.47	9.94	9.81	9.61	9.87	9.32	(9.35)	—	(9.02)	—	—	(5.06)				
寛骨 co.	GL	73.52	73.76	72.98	—	67.56	—	—	—										
	SC	9.16	9.10	8.79	8.82	8.77		8.76	8.58										
大腿骨 fe.	GL	121.03	120.47	117.70	118.24	116.40	116.24	111.50	111.74	(98.76)	(98.74)	(91.83)	(91.50)	(85.86)	—	(82.54)	—	—	(69.52)
	Bp	22.41	22.52	22.14	21.79	22.10	21.29	22.13	21.55	(19.37)	(19.72)	(16.55)	(17.62)	(15.61)	(16.20)	(16.91)	—	—	(13.62)
	Bd	19.09	18.92	18.39	18.05	18.66	18.53	18.15	17.86	(15.17)	(15.17)	(13.33)	(13.75)	(12.37)	—	(13.07)	—	—	(12.11)
脛骨 ti.	GL	140.52	140.58	133.76	133.18	130.87	130.46	(111.73)	(111.41)	(99.44)	(100.02)	(93.80)	(93.94)	(91.15)	(90.86)		(73.30)		
	Bp	19.20	18.84	19.12	18.93	18.42	18.68	(15.65)	(15.91)	(16.10)	(16.07)	(14.23)	(13.87)	(14.79)	(14.89)	(13.73)	(12.31)		
	Bd	15.27	15.38	15.25	15.45	14.91	14.96	(13.03)	(12.31)	(12.79)	(12.62)	(11.44)	(11.84)	(12.32)	(12.00)		(11.73)		

( )：ep欠

表12　ノウサギ四肢骨計測表

部位＼標本	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13		14		15	
	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
肩甲骨 SC. GLP	41.77		39.92	39.28		39.69	39.37			38.42																				
BG	31.35		27.09	27.25		26.81	27.23			25.56																				
SLC	23.98		20.89	21.45		20.19	19.08			18.10																				
上腕骨 GL		206.99																												
Bp		56.80(39.08)		46.42(35.60)		(33.27)	(31.81)		(32.85)																					
Bd		42.63				38.00	37.36		36.97		36.55																			
BT		38.60				35.97	35.38		35.47		34.71																			
SD		19.73					16.72		17.50																					
橈骨 rad Bp Bd SD	39.19	38.79	38.70	38.50	38.15	37.27	36.03	35.17	33.60	32.88	33.60	32.82	32.80	32.80	32.43			31.75												
尺骨 ul. SDO 短		33.19	27.73	27.56		28.87	27.61																							
DPA		36.20	31.55	32.14		31.08	30.97																							
	11.05	12.05	10.77	10.89	9.55		11.42	10.34	9.24	9.70	7.49	7.05																		
中手骨 Bp																														
Bd																														
SD																														
寛骨 SC	25.40	25.46		23.00					21.79		21.33		22.70																	
LA						39.21	38.92		38.73		38.46		37.57																	
大腿骨 fe Bp			56.30	56.90																										
Bd(ep.)		最大のものep不完全	52.20	53.00																										
SD			epは不完全																											
脛骨 fi Bp	Shaftのepで	57.15 50.28		54.44 48.86		(?) (46.95)																								
Bd SD	40.63	40.45	39.80	39.62	38.56		36.18	36.46	36.14	35.95	35.58	35.84	35.45	35.66	35.21	35.12	34.87	35.11	34.74	34.76	33.65	33.97	33.44		33.43					
距骨 GL	41.90	41.57	41.29	40.79	40.04	40.04		39.74		39.43	39.15	39.26	37.72	37.76		37.88	37.75	37.64	37.49	37.15		37.23	36.45	37.33	36.76	36.60	36.18	36.29	36.13	35.59
踵骨 GL	91.68	94.61	90.20	90.95	88.81	90.56	85.11	84.75	82.85	83.39	80.06	80.54	79.69	79.71	80.50	80.31		79.04	(78.42)	(78.69)	(77.42)	(76.07)	(77.58)	(77.60)			(73.32)	(74.91)	(71.15)	(71.24)

(　) 内は近位外れ

成体の諸骨はほぼ完存する頭蓋数個のあったのを除くと、埋没していた骨は一個体が生体の状況で埋存していたのはおそらくなかったものと思われ、すべて何らかの形で解体されていたものと思われる。

表13　ニホンジカ成体四肢骨の計測

GL　：最大長
SLC：肩甲頸最小長
BG　：関節窩幅
Bp　：近位端幅
SD　：骨体最小幅
Bd　：遠位端幅
SDO：肘頭最小深
DPA：肘突起横断深
LA　：寛骨臼長(縁部を含む)

		1		2		3		4		5		6		7	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
環　椎		74.78		71.91		71.15		66.40		65.44		64.05			
軸　椎		47.78		46.14		45.09		—		—					
上腕骨 hu.	GL		206.99												
	Bp		56.80		(33.27)										
	Bd		42.63		38.00	37.36	37.50	36.97		36.55					
	SD		19.73												
橈骨 rad.															
	(Bp)	—	(34.14)	(32.78)	(32.57)	(32.77)	(32.22)	(32.53)	(30.98)	(31.43)	(—)	(31.24)	(30.42)	(29.11)	(30.23)
尺骨 ul.	(Bd)	(10.06)	(10.09)	(9.09)	(11.03)	(9.05)	(8.72)		(8.86)						
大腿骨 fe	(GL) (Bp)		(GL) (51.76)	(49.16)	(GL)	(47.63)	(GL) (　)		204 (46.33)		196 (46.32)	208 (44.35)			
	(Bd)		(40.57)		(　)				(36.81)		(34.38)	(34.82)			
	骨端(ep.)のみ h.(高さ)	(70.87)	(70.87)	(47.69) (66.99)			(47.07) (66.36)		(66.14)	(50.40) (65.74)	(48.20) (65.81)				
脛骨 tib	(Bp)	(55.85) (46.42)	(46.50)		(46.15)		(53.86) (44.30)								
	(Bd)	(35.76)	(35.02)	(34.36)	(34.11)	(32.65)	(33.56)								

(　)を付けたのはep.が外れているため。
踵骨の骨端未骨化の標本があるが、距骨との比較のために別表に一括した。

表14　骨端部の外れた四肢骨の計測（骨体の近・遠位端計測）

部位	計測	1		2		3		4		5		6		7		8	
		R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L
肩甲骨 sc.																	
	SLC	10.35	10.52	10.27	10.07	10.05	7.64										
	GLP BG	16.64 12.71	16.59 12.79	15.29 12.05	— —	— —	10.45 8.36										
上腕骨 hu.	(GL)	88.92			86.33	79.78	80.34	75.27									
	Bp	17.58			16.47	—	14.60	14.40									
	Bd	24.99			23.85	21.85	22.14	21.21									
	SD	10.06			10.01	9.23	9.71	8.72									
橈骨 rad.	(GL)	94.95			92.82	90.04	90.13	88.70	89.84	—			58.26				
	Bp	20.33			19.93	18.57	18.64	18.15	17.50	17.64			12.48				
	Bd	22.16			19.26	18.95	19.47	18.30	19.31	—			11.57				
	SD	10.50			10.18	9.19	9.30	9.29	9.16	—			6.99				
尺骨 ul.		18.16			16.27		16.24										
中手骨	(GL)		117.48	110.86	112.62	110.73		109.98	109.90	109.32			107.31	94.43			
	Bp		19.21	18.63	17.83	18.54		17.32	17.38				15.08				
	Bd		18.22	16.91	17.08	—		15.00	16.58	18.23			14.81	13.82			
	SD		9.81	11.69	10.63	10.73		9.18	11.34	11.24			8.90	9.30			
寛骨 pel.	腸骨 L SC		11.12 19.85	10.72 20.95	11.29	10.10	10.11 17.66		8.77 14.36		7.59 12.40						
大腿骨 fe.	(GL)		110.99	98.80			94.77		94.33	—	—		—				
	Bp		25.83	23.79			21.80		22.53	22.01	—		—				
	Bd		22.40	18.80			17.62		—	16.34	—		—				
	SD		11.09	10.82			10.63		9.62	—	—		—				
脛骨 ti.	(GL)		131.47		128.36		125.12	122.68	123.70	122.69	—	118.63	118.51	81.77			
	Bp		22.55		28.54		—	22.96	—	22.91	—	19.32	—	12.88			
	Bd		21.40		21.82		20.19	18.23	19.65	17.64	—	—	18.89	13.04			
	SD		11.98		10.76		11.07	10.96	10.58	10.15	—	10.42	10.96	8.03			
中足骨 mt.	(GL)	122.61	121.25	120.13	121.25		120.49	118.86	120.14	117.82	115.21	101.28		86.67	—	77.04	—
	Bp	15.11	16.83	16.15	16.83			15.90±	14.57	15.52	—	13.69		10.66	—	11.84±	—
	Bd	16.65	17.54	—	—		15.24±	16.72	16.67	16.12	—	14.47		—	—	10.88±	
	SD	8.97	10.36	9.65	10.36		9.00	9.50	9.20	10.16	9.09	8.25		8.47	—	8.53	—
距骨 tal.	GL	23.66	23.66		20.08			17.25									
腫骨	GL		40.56	39.38				27.82		27.54							

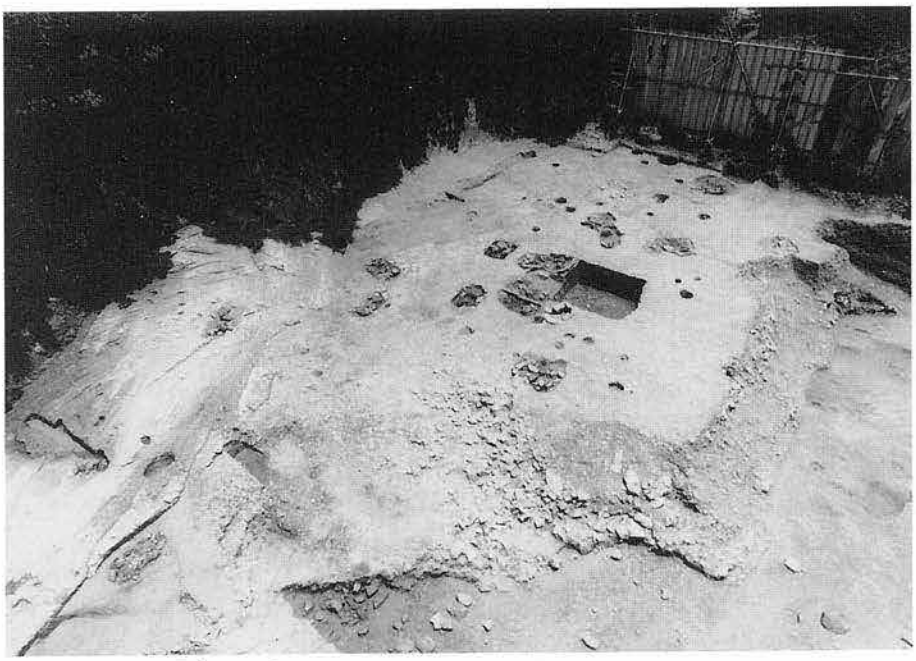
幼体のシカの四肢骨計測であるため、不完全な状況での計測となった。計測の状況もかなり変るので以下にその点を説明する。

(ＧＬ)：全長であるが、近・遠位の骨端はすべて外れている。

ＢＰ：近位端幅
Ｂｄ：遠　〃　} 骨体部の近・遠位計測になる。

ＳＤ：中央径であるが、中手・中足骨は、縦に割れているために完全には原状にもどせない状況での計測である。

表15　ニホンシカ幼体四肢骨の計測



▲第１面全景(北より)

▼第２面上盛土

図版 2

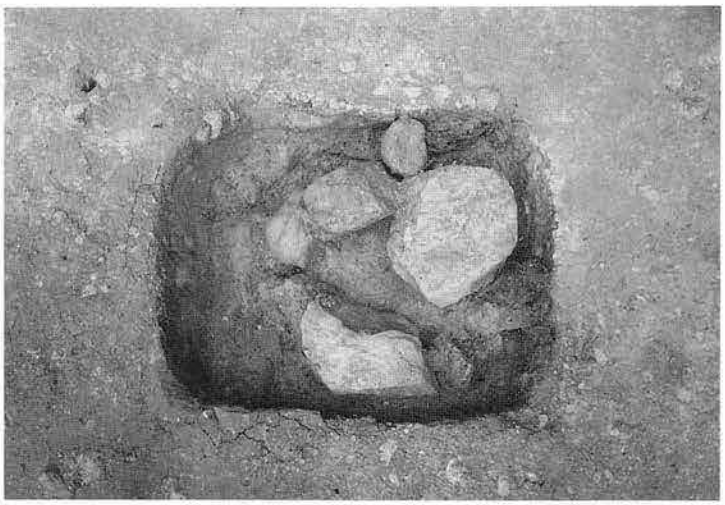
◀茶毘 1

▶茶毘 2

◀茶毘 3

◀茶毘 4

▶茶毘 5



◀茶毘 6

図版 4

◀茶毘 7 ・ 8

▶茶毘 9

◀茶毘10・11

◀茶毘12

▶茶毘13

◀茶毘14

図版 6

◀茶毘16

▶茶毘17

◀茶毘18

▲第 2 面　北側全景(西より)

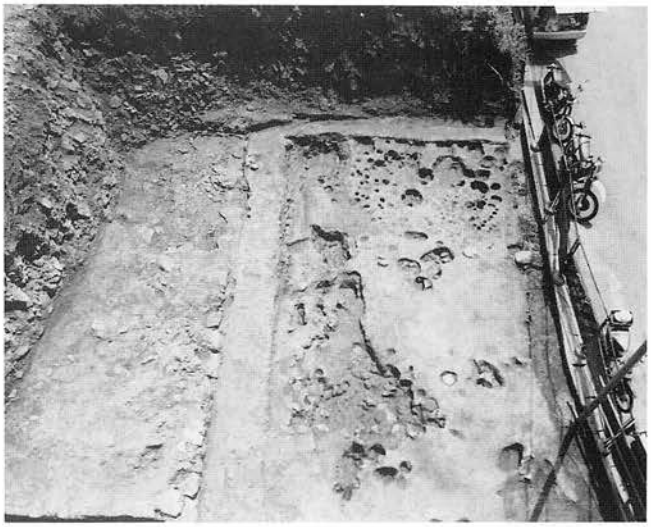
▼第 2 面　南側全景(西より)

図版 8

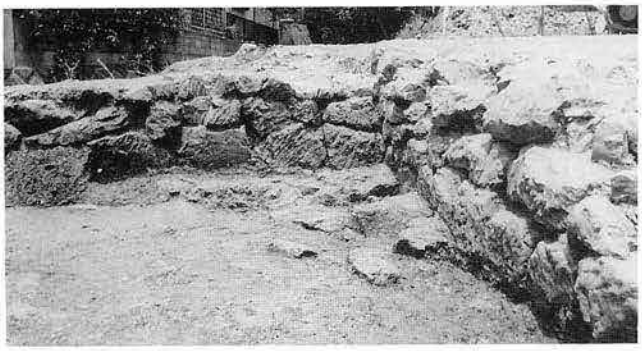
◀第 2 面　西側全景(北より)

◀第 2 面　道路・溝

▶第 3 面　西側全景(北より)



◀第 3 面　石垣(南より)

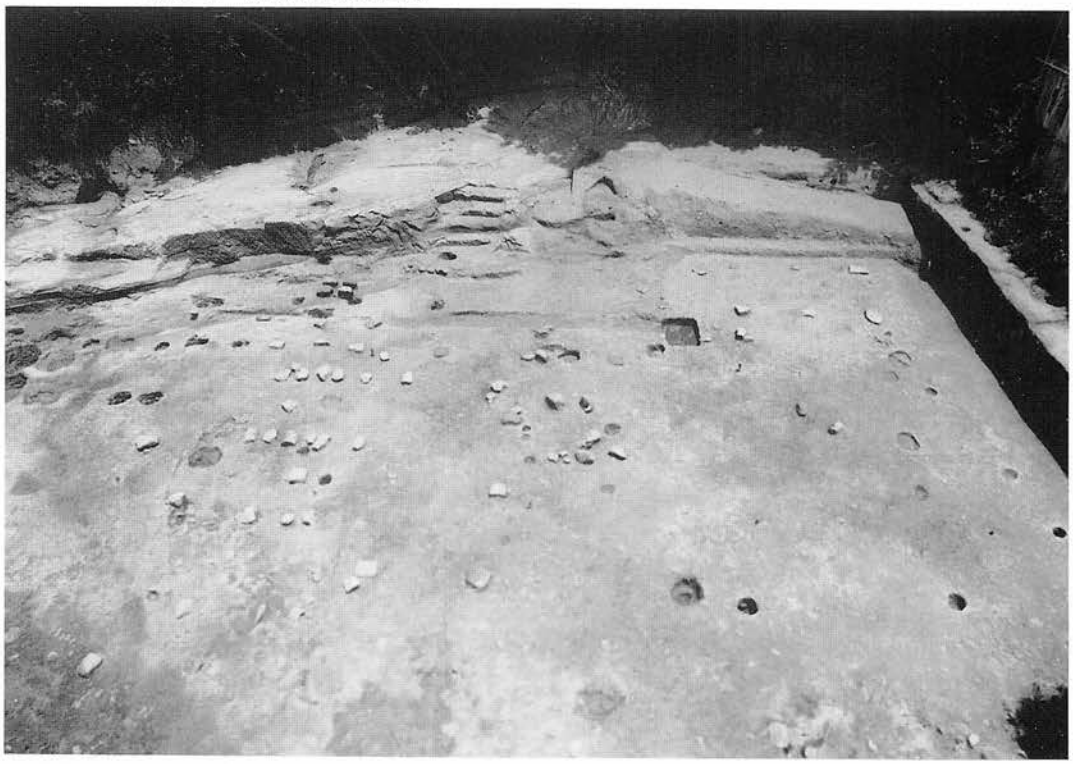


▶石垣裏込め

図版10

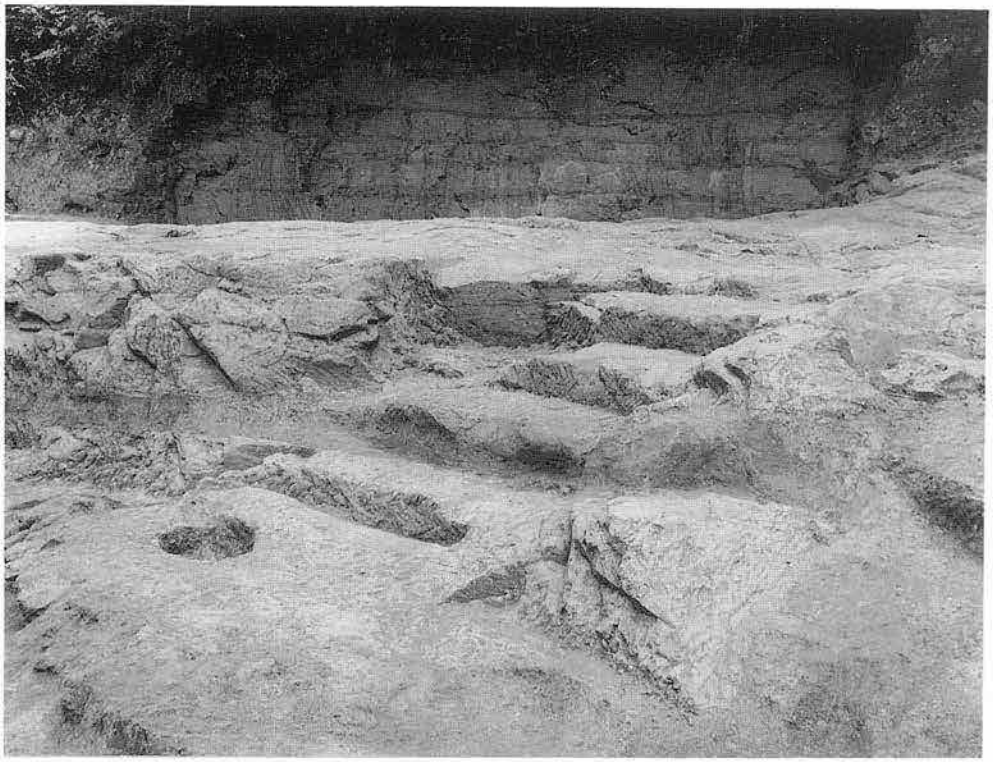
▲第 3 面　北側全景(西より)

▼第 3 面　南側全景(西より)



▲第3面　南側全景(南より)

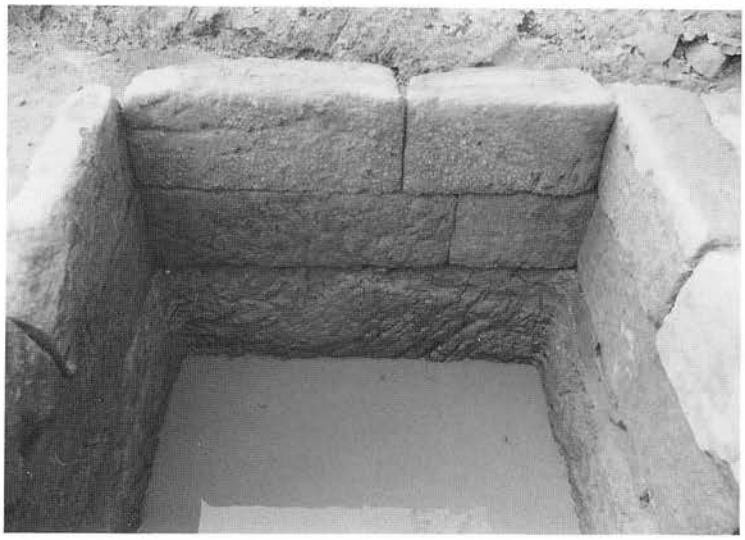
▼岩盤石段

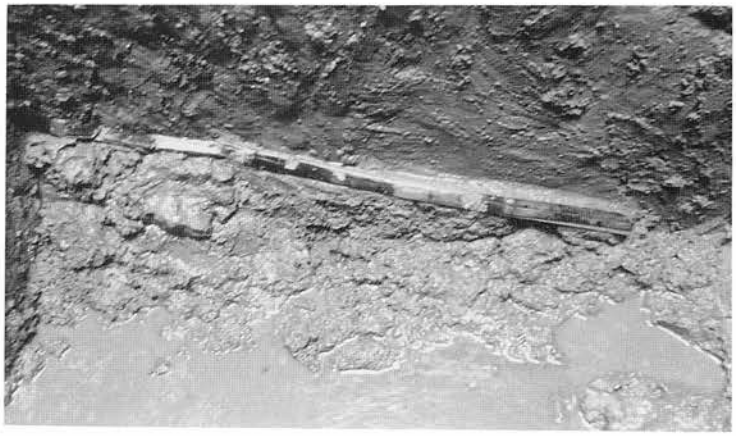


図版12

◀第3面　井戸・掘立柱建物2

▼井戸(二段に積まれた石材)

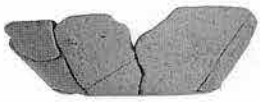




◀井戸内　弓出土状況

2面　P247

茶毘4



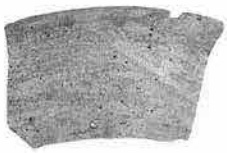
茶毘4

2面　P245

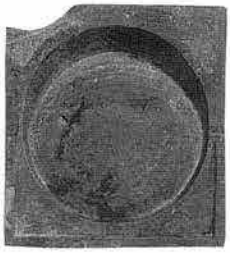
茶毘9

茶毘13

2面　P245
かわらけ



茶毘1直下
瀬戸鉢



硯、茶毘18直下

手あぶり　2面出土

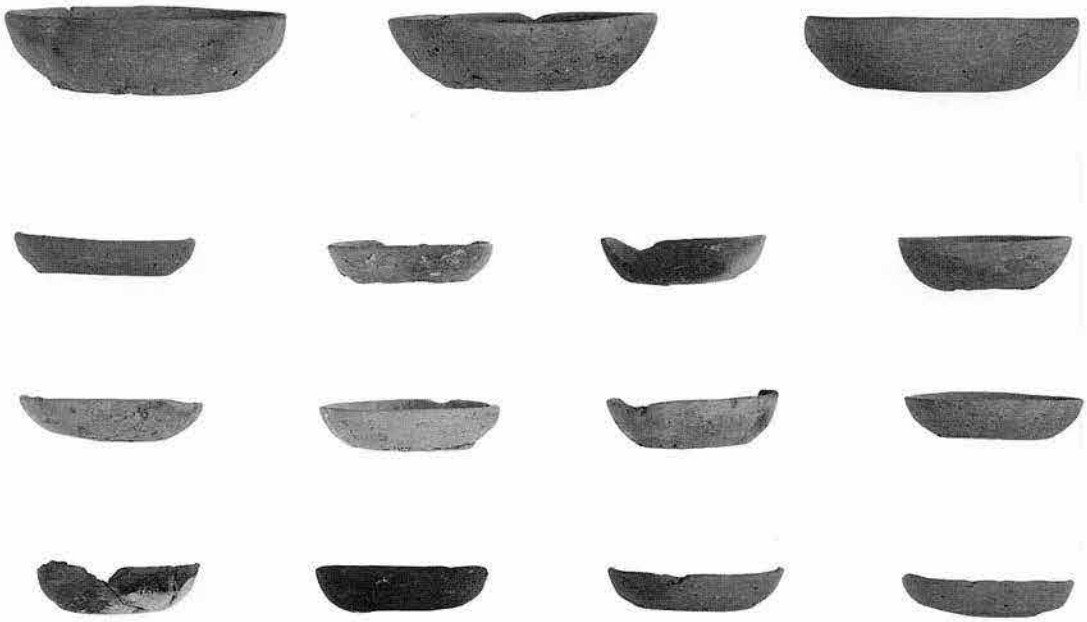
女瓦　2面　P251

銭、茶毘10

茶毘9

銭、茶毘9

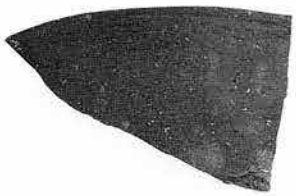
図版14



かわらけ

青磁

瀬戸おろし皿



瀬戸入子

常滑捏鉢

手あぶり

常滑甕

かわらけ溜り

かわらけ

砥石

女瓦
溝1

井戸中層

井戸上層

かわらけ

井戸中層

銭、井戸中層

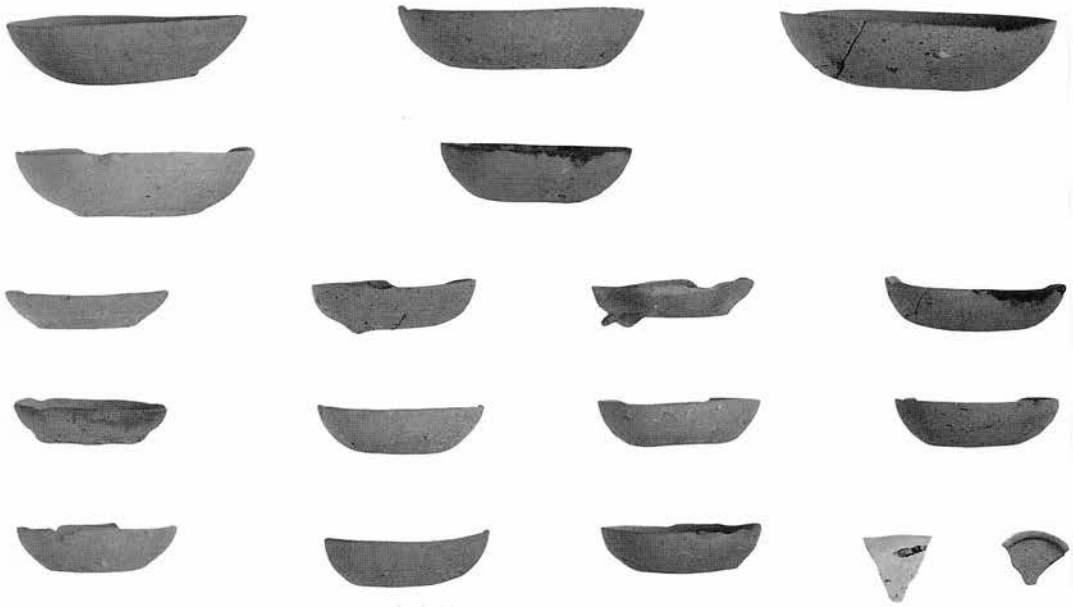
手あぶり
井戸上層

手あぶり
井戸中層

六器、
井戸中層

弓、井戸中層

図版16



かわらけ

瀬戸行平

山茶碗

瀬戸碗

土馬？

手あぶり

滑石スタンプ

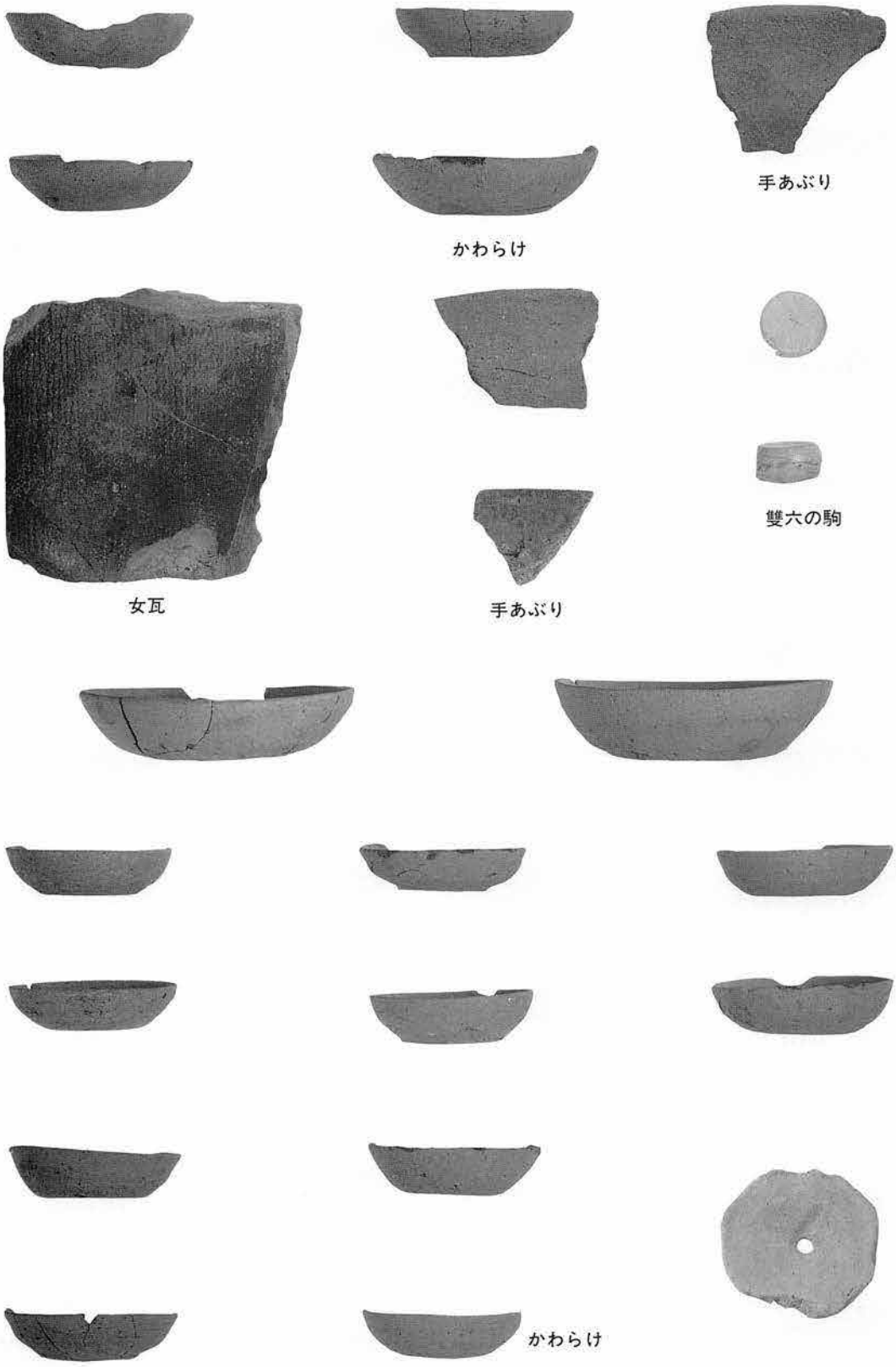
青磁

飾金具

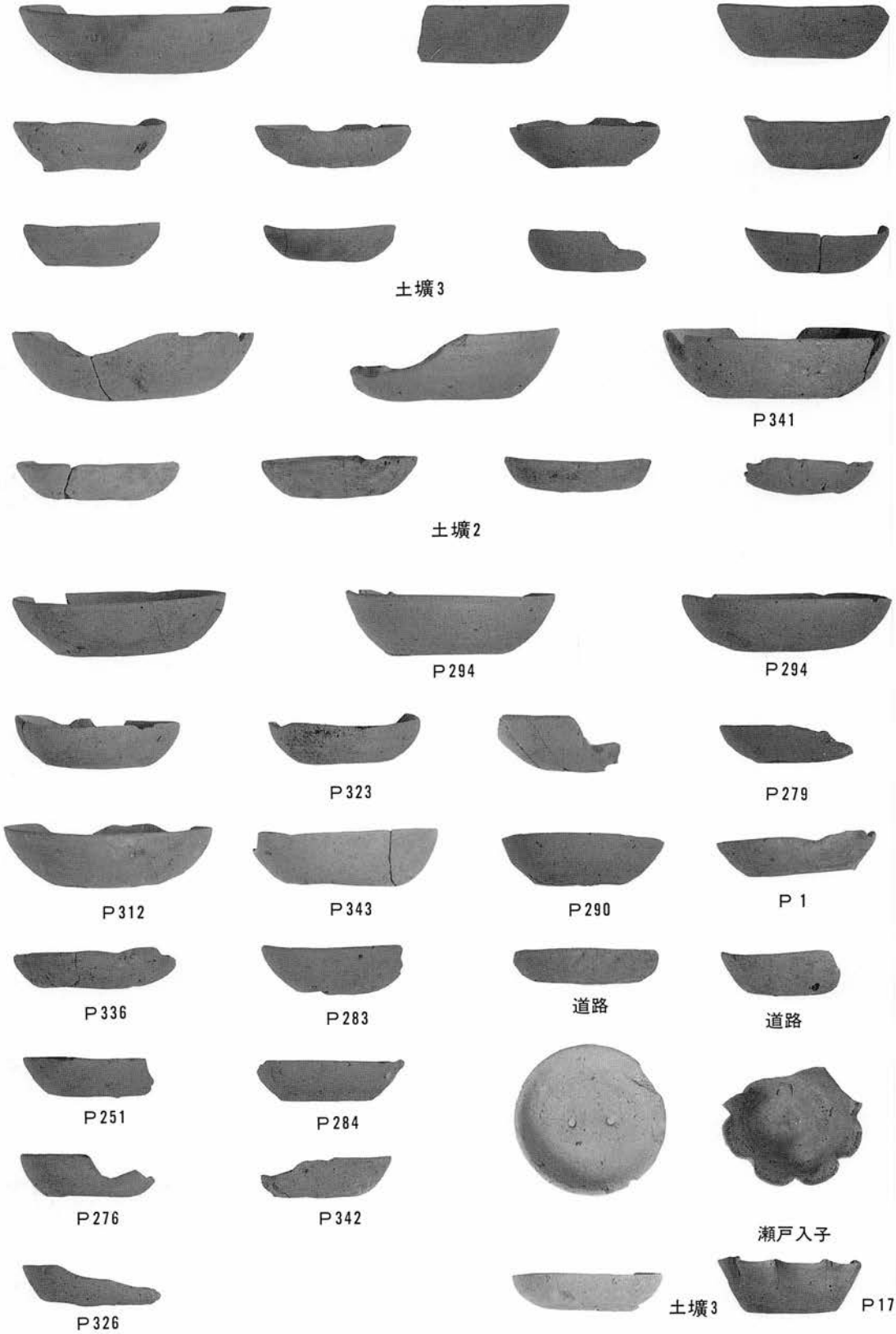
野沓

銭

女瓦

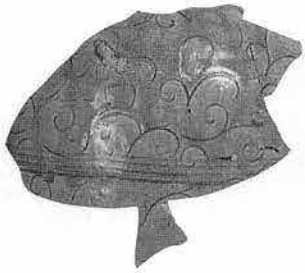

手あぶり
かわらけ
女瓦
手あぶり
雙六の駒
かわらけ

図版18


土壙3
P341
土壙2
P294
P294
P323
P279
P312
P343
P290
P 1
P336
P283
道路
道路
P251
P284
P276
P342
瀬戸入子
P326
土壙3
P17

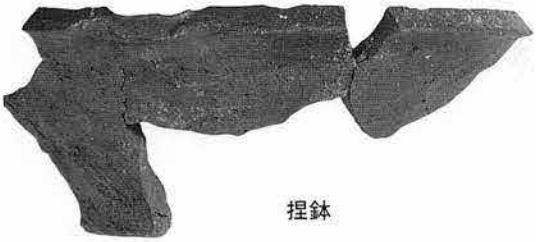
図版19

瀬戸



青磁

青白磁

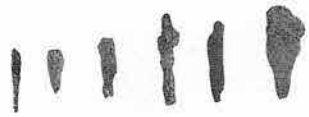


捏鉢

手あぶり

硯

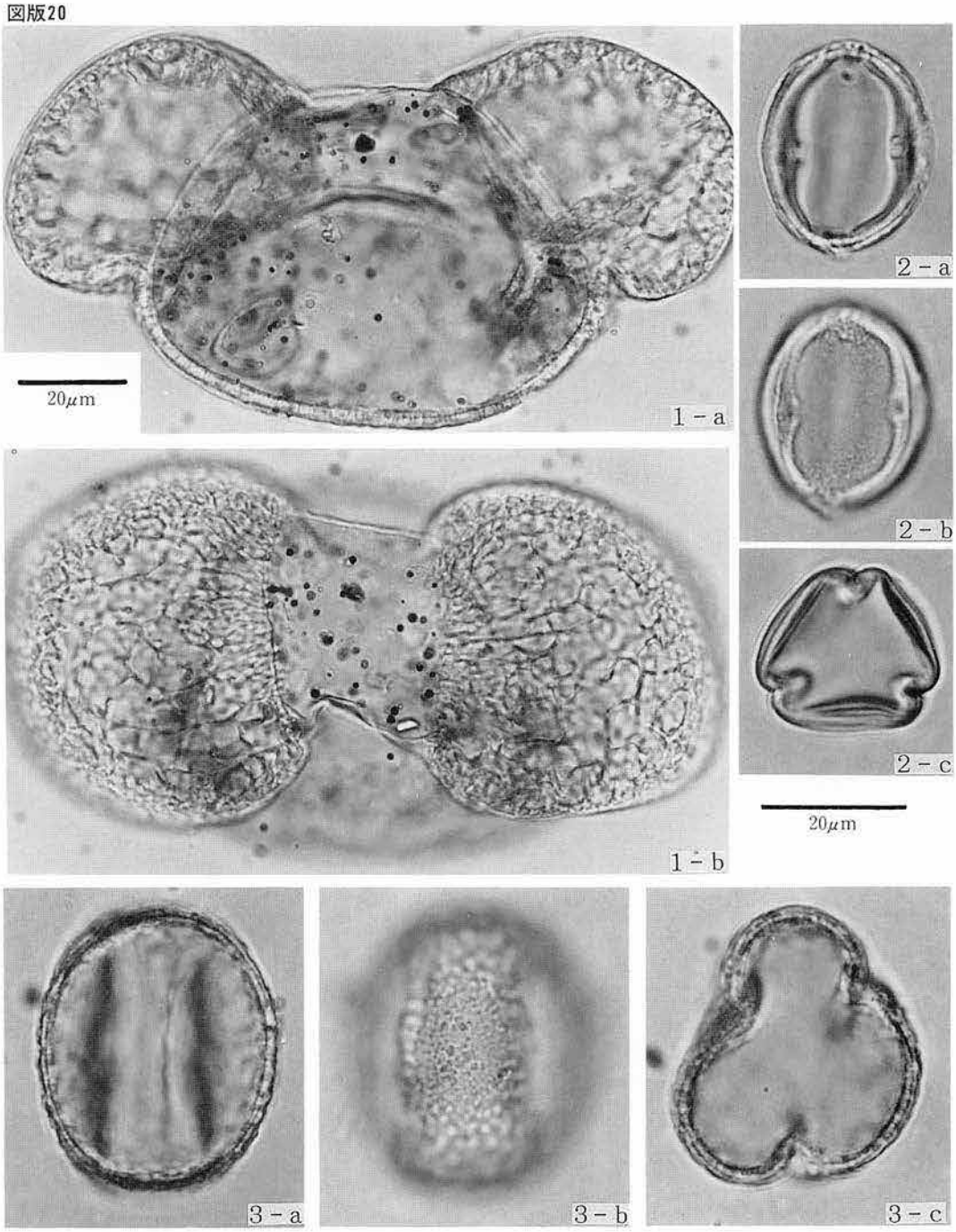
釘



釘

瓦

図版20

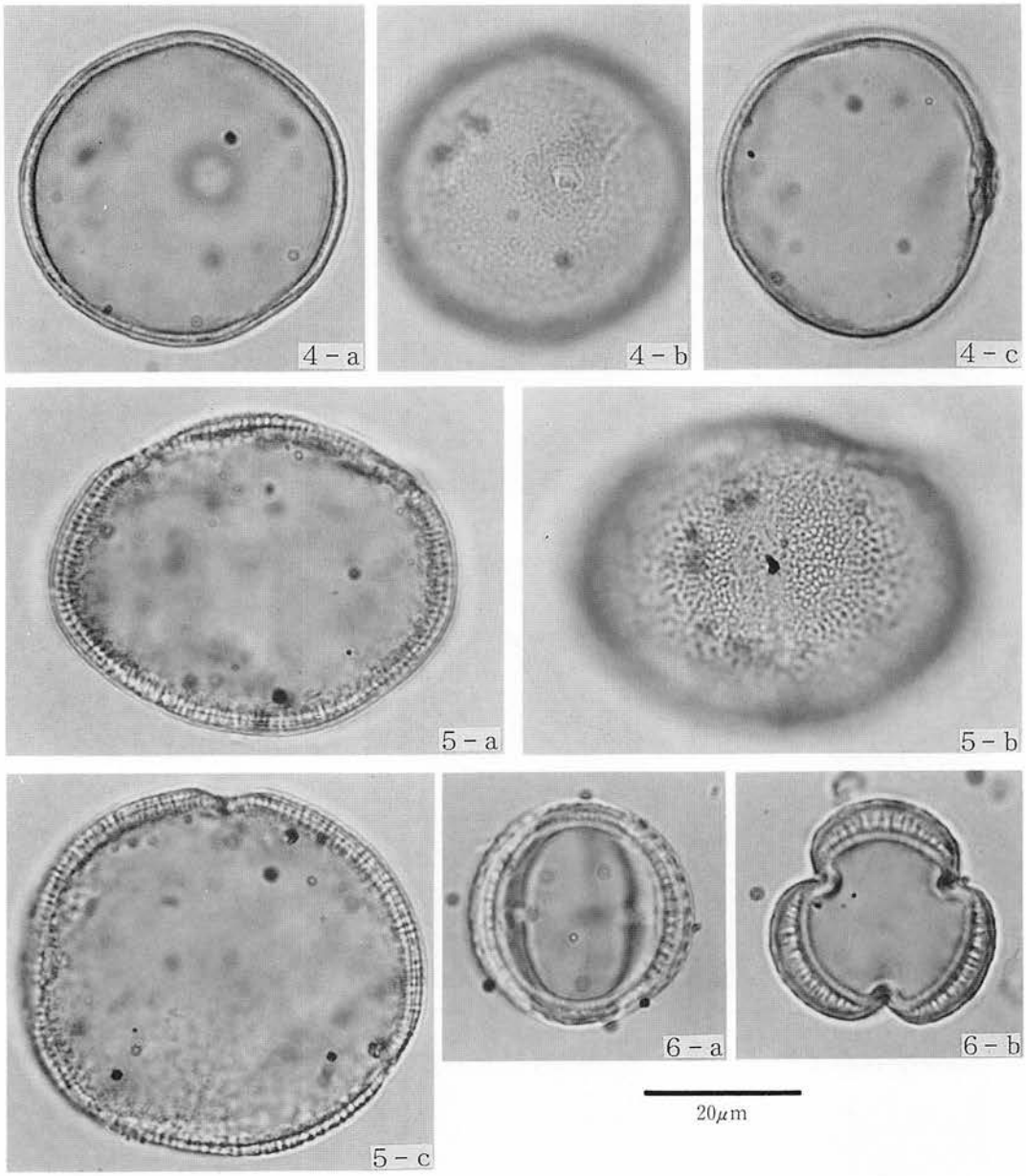


井戸内堆積物の花粉化石

1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS874　試料2

2：ブドウ属　PLC.SS867　試料1

3：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS866　試料1



井戸内堆積物の花粉化石

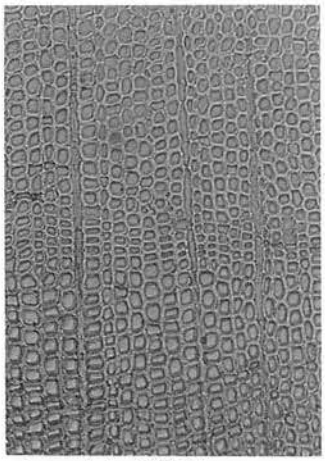
4：イネ科　PLC.SS871　試料2

5：カタバミ属　PLC.SS873　試料1

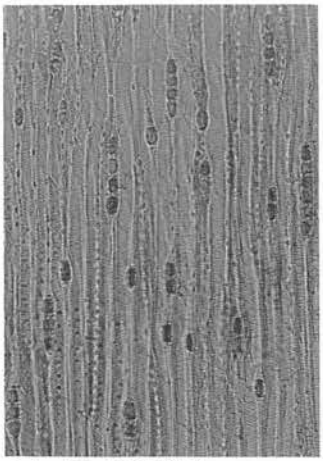
6：ヨモギ属　PLC.SS868　試料1

図版22

永福寺跡（二階堂520番１外）井戸出土材の顕微鏡写真

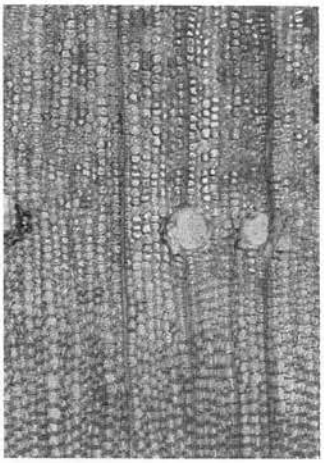


１ａ．カヤ（横断面）
井戸内　bar：0.1㎜

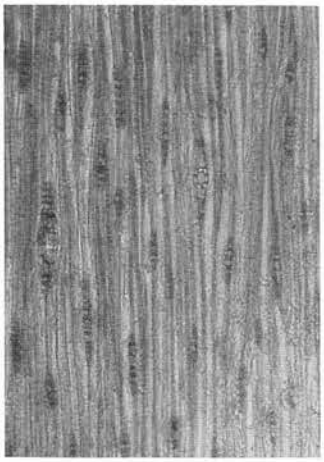


１ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜

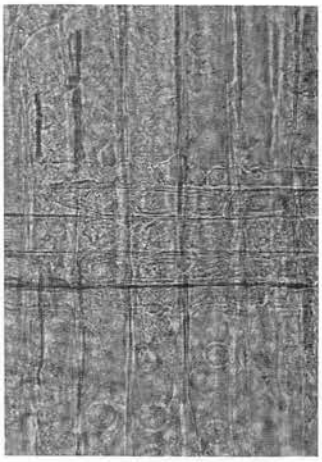
１ｃ．同（放射断面）
bar：0.05㎜



２ａ．マツ属複維管
東亜属(横断面)井戸内　bar:0.2㎜

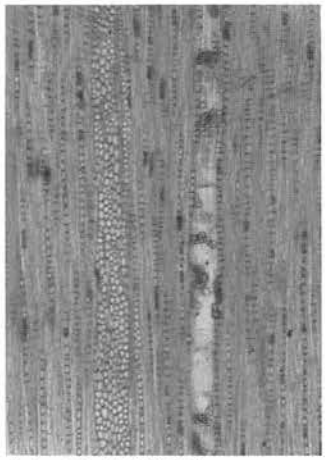


２ｂ．同（接線断面）
bar：0.2㎜



２ｃ．同（放射断面）
bar：0.2㎜

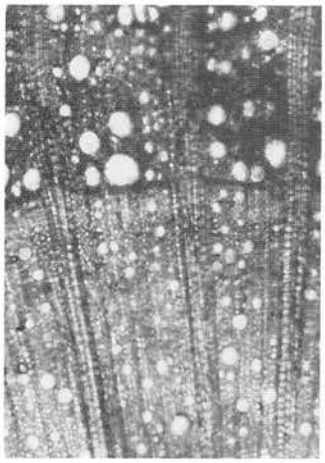
３ａ．アカガシ亜属（横断面）
井戸内　bar：0.2㎜



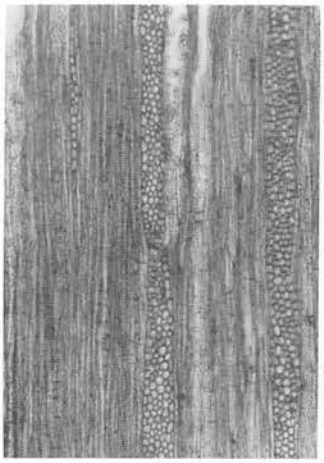
３ｂ．同（接線断面）
bar：0.2㎜

３ｃ．同（放射断面）
bar：0.2㎜

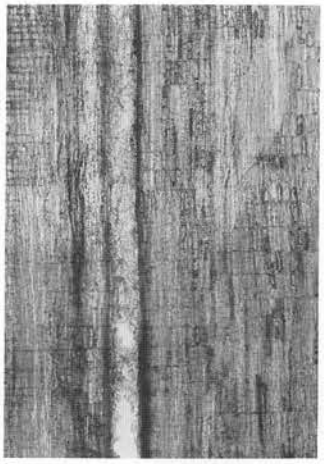
永福寺跡（二階堂520番１外）井戸出土材の顕微鏡写真



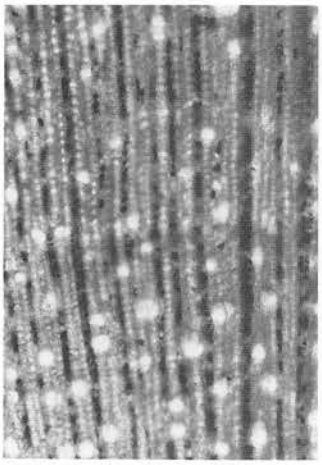
4 a．バラ属（横断面）
井戸内　bar：0.2㎜



4 b．同（接線断面）
bar：0.2㎜

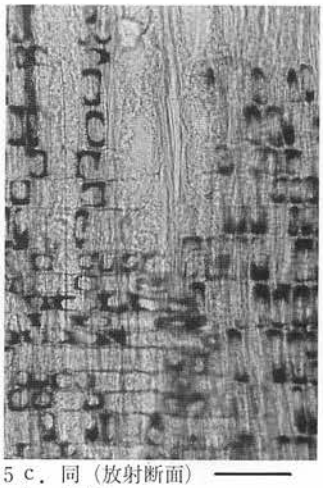


4 c．同（放射断面）
bar：0.2㎜

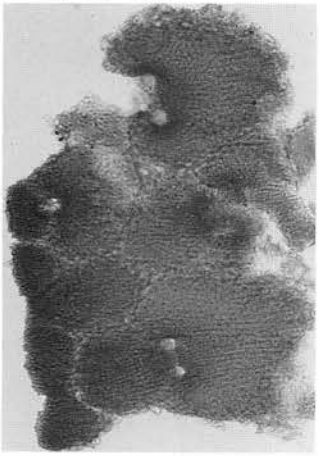


5 a．ヒサカキ
（横断面）弓材　bar：0.2㎜

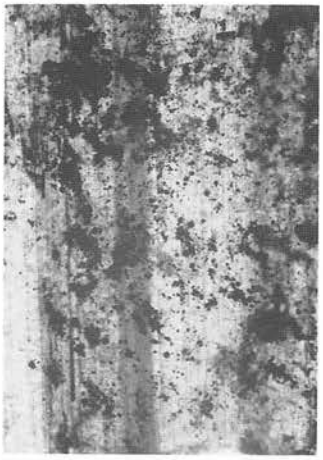
5 b．同（接線断面）
bar：0.2㎜



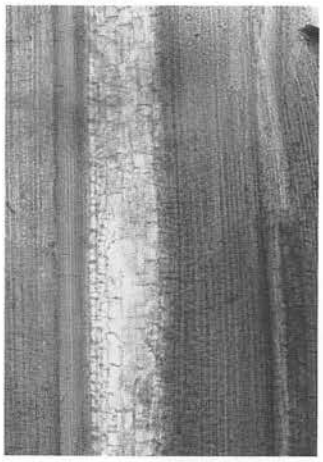
5 c．同（放射断面）
bar：0.1㎜



6 a．タケ亜科（横断面）
弓材　bar：0.2㎜



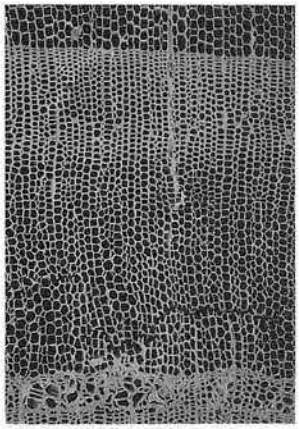
6 b．同（接線断面）
bar：0.2㎜



6 c．同（放射断面）
bar：0.2㎜

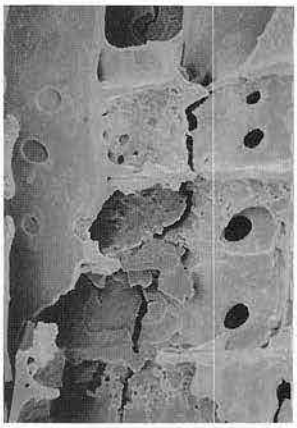
図版24

永福寺跡（二階堂520番１外）茶毘遺構出土炭化材の電子顕微鏡写真

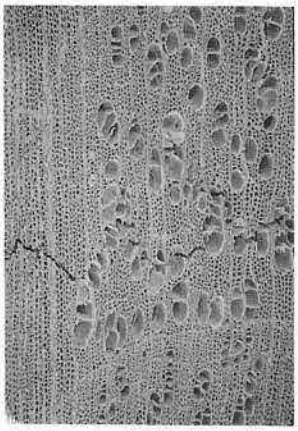


１ａ．
スギ（横断面） bar：0.5㎜

１ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜

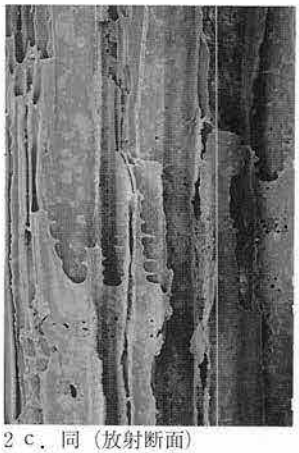


１ｃ．同（放射断面）
bar：0.01㎜

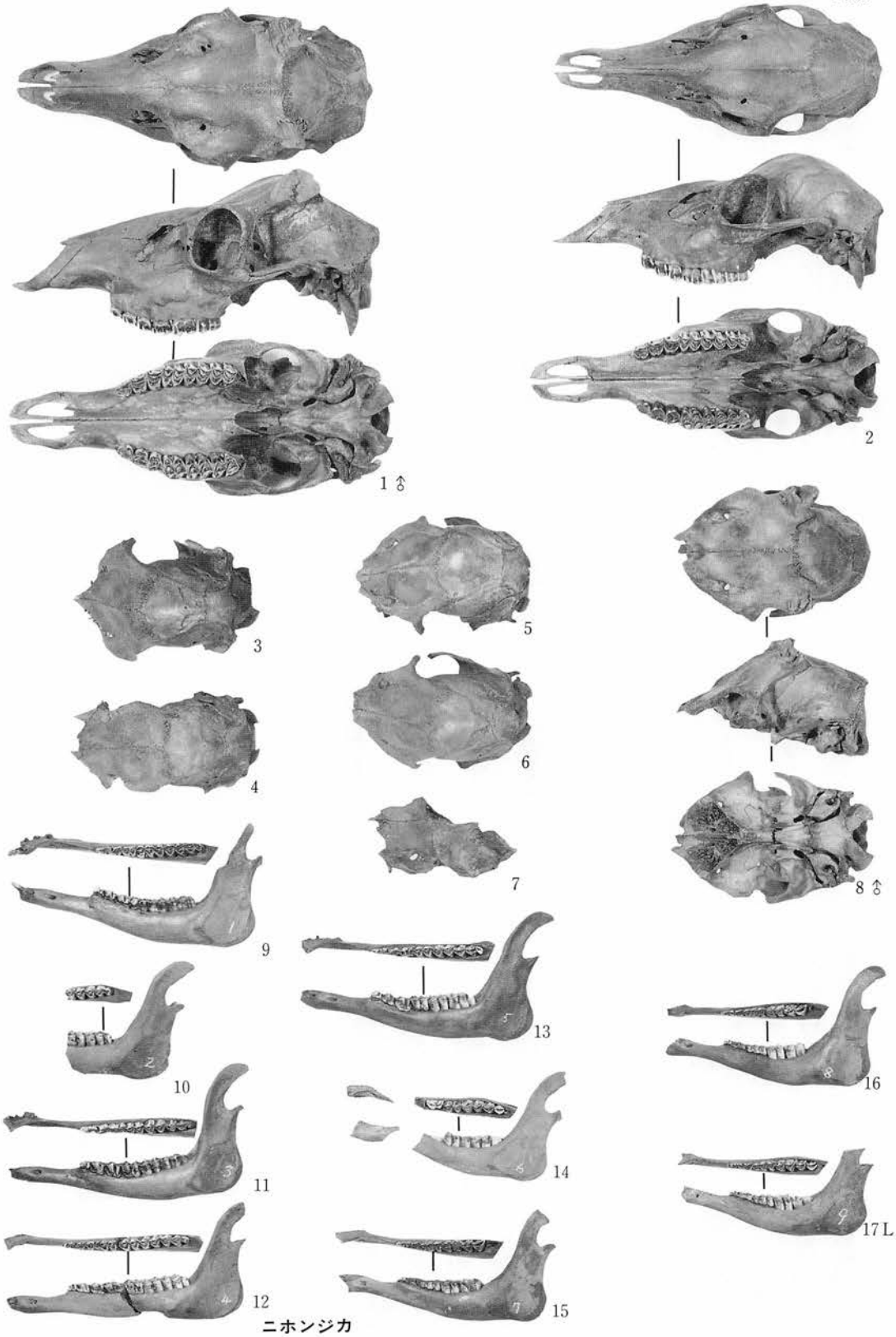


２ａ．ハンノキ節（横断面）
bar：0.5㎜

２ｂ．同（接線断面）
bar：0.1㎜

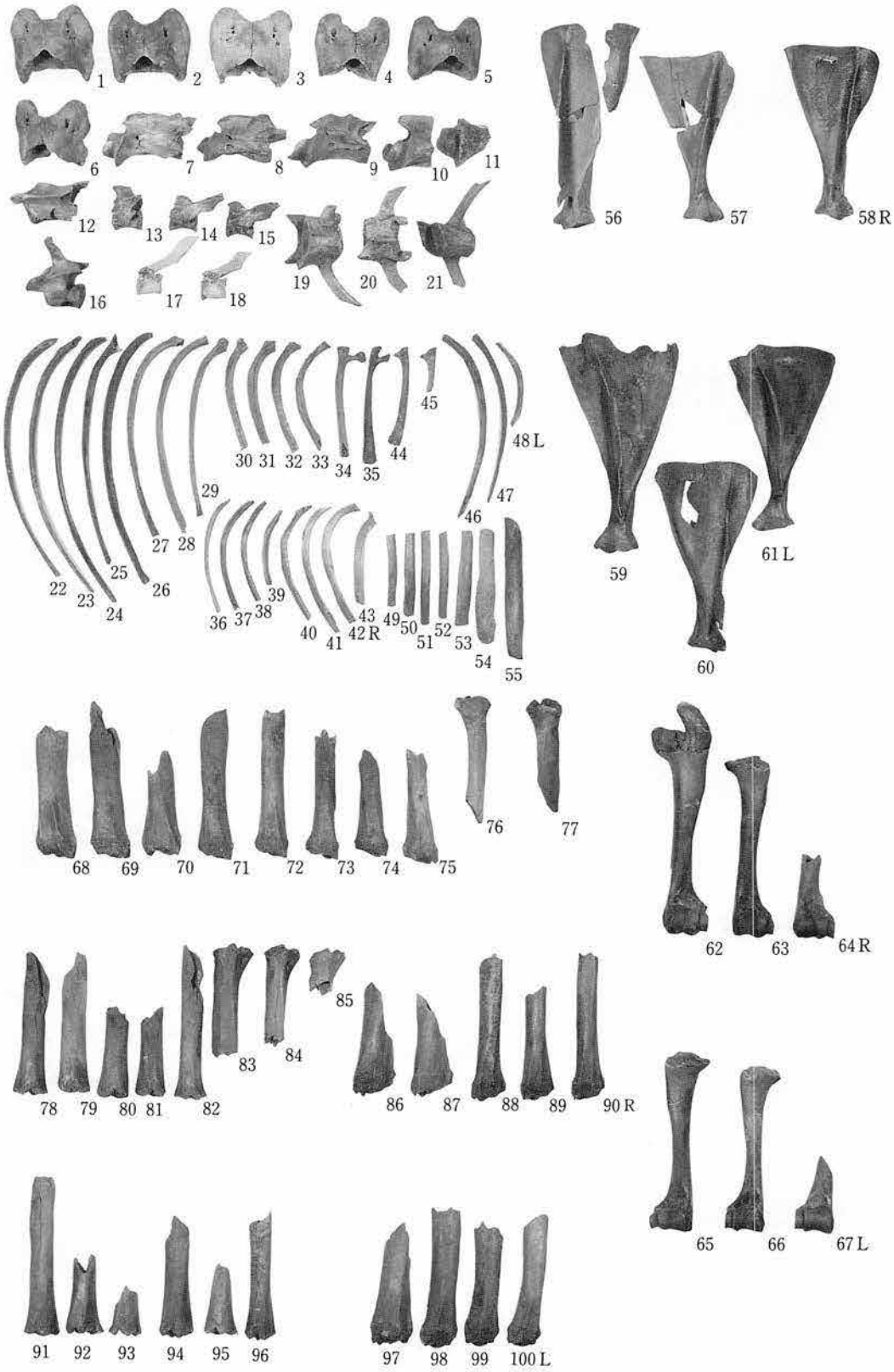


２ｃ．同（放射断面）
bar：0.1㎜

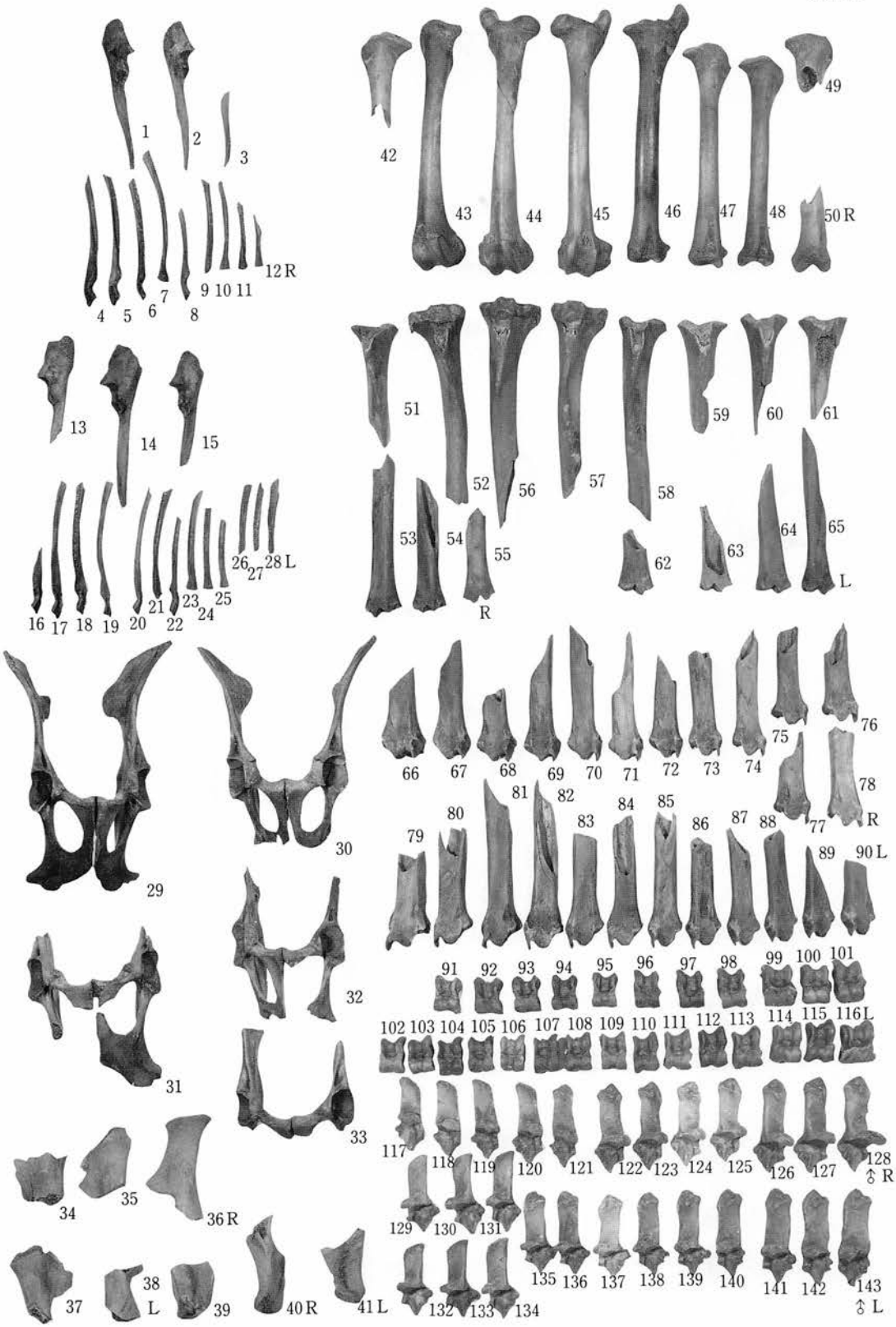


ニホンジカ

図版26

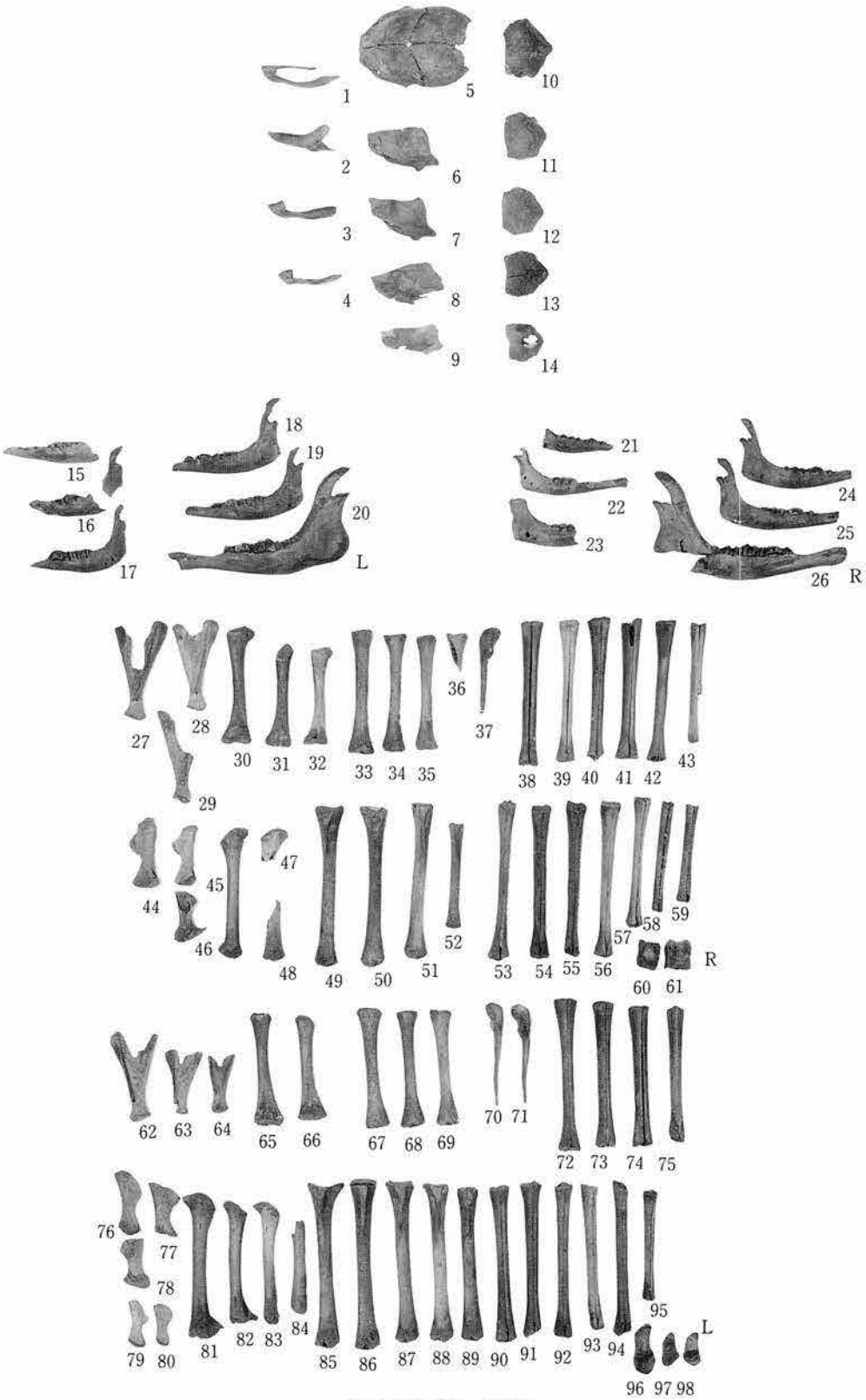

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
56
57
58R
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42R
43
44
45
46
47
48L
49
50
51
52
53
54
55
59
60
61L
62
63
64R
65
66
67L
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90R
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100L

ニホンジカ

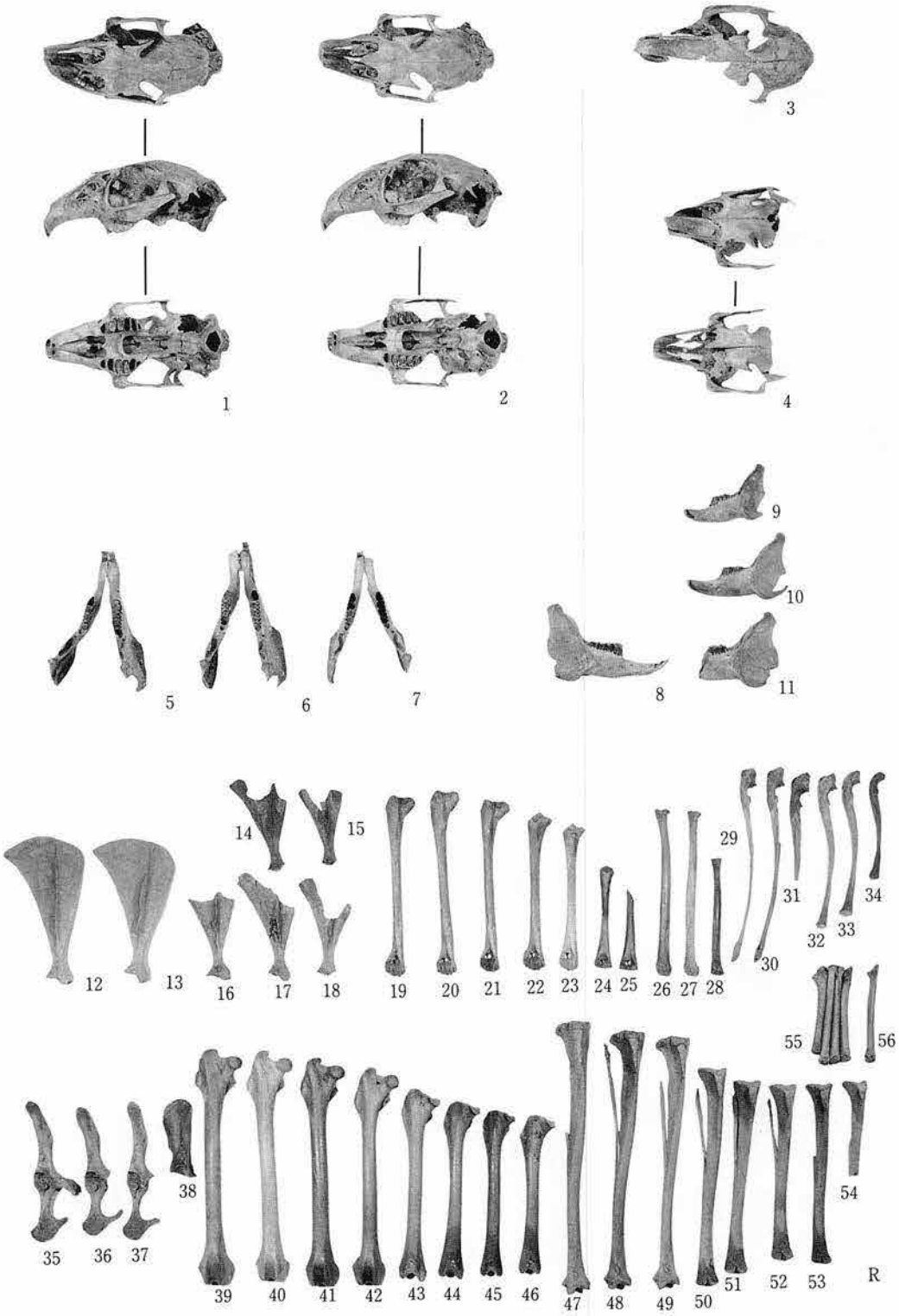

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12 R
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28 L
29
30
31
32
33
34
35
36 R
37
38 L
39
40 R
41 L
42
43
44
45
46
47
48
49
50 R
51
52
53
54
55 R
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65 L
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78 R
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90 L
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116 L
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128 ♂ R
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143 ♂ L

ニホンジカ

図版28

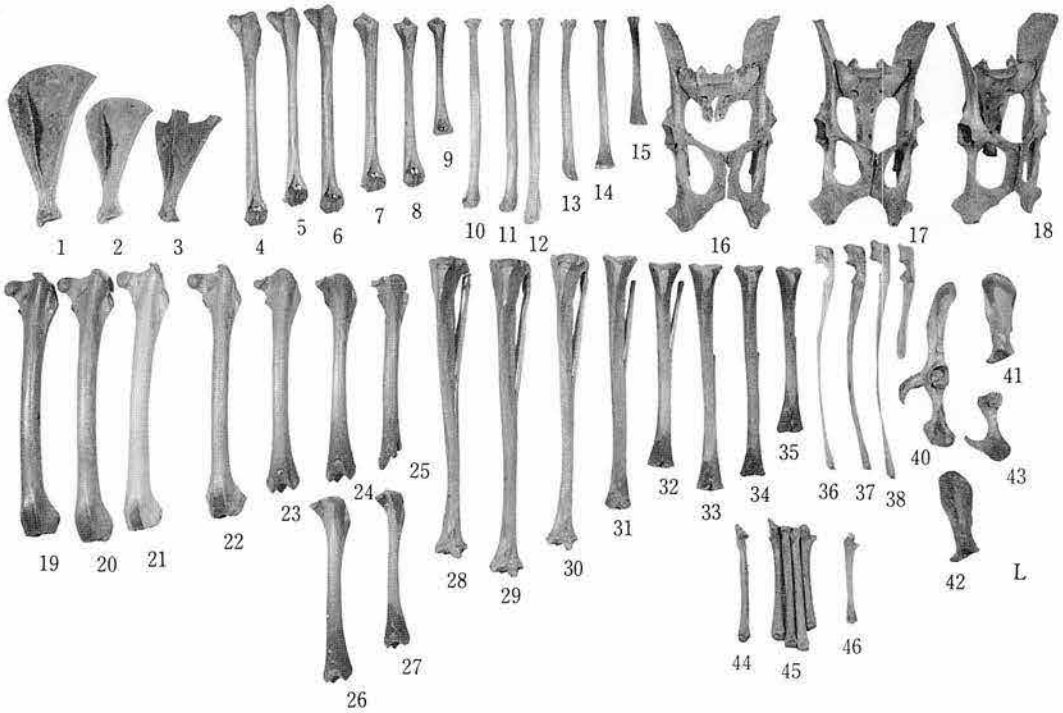


ニホンジカ(幼～成獣)

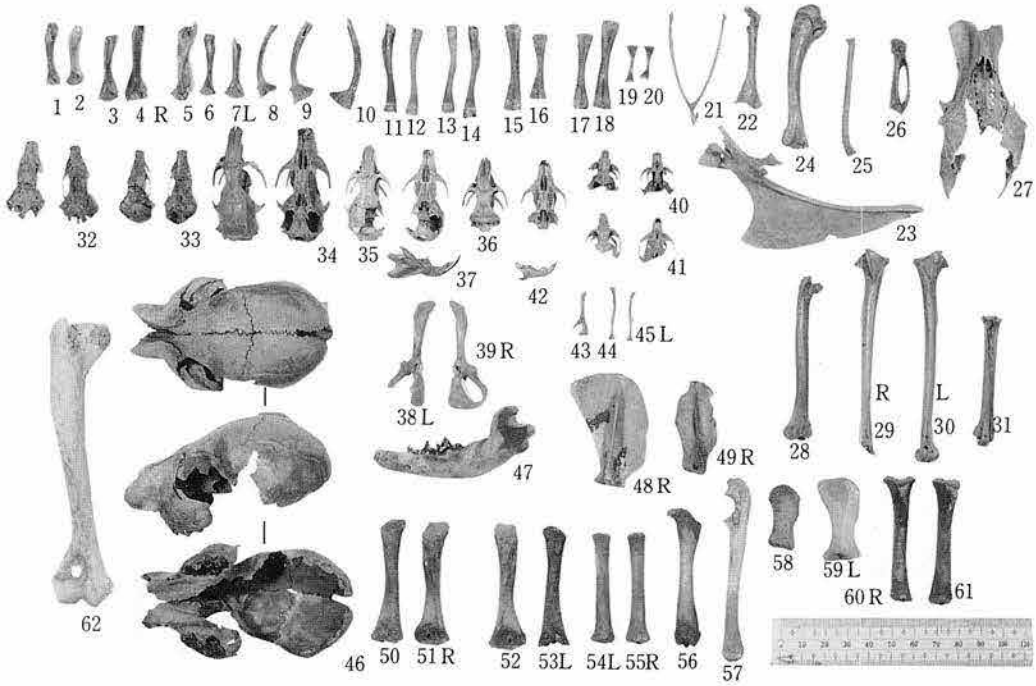

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
R

ノウサギ

図版30



ノウサギ



ヒキガエル・キジ・モグラ・ネズミ・イヌ

3.　大倉幕府（おおくらばくふ）周辺遺跡群（No.49）

雪ノ下三丁目607番外地点

例　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下三丁目607番外に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。

3．調査期間および調査面積については、第二章調査の経過と概要に記述した。

4．本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物実測およびトレースは石丸が担当した。

5．本報に使用した写真のうち、遺構は菊川が、遺物は石丸が撮影した。

6．調査体制は以下の通りである。

主任調査員　菊川英政
調査補助員　石丸運人
同　　上　菊地正明
協力期間　㈳鎌倉市高齢者事業団

7．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

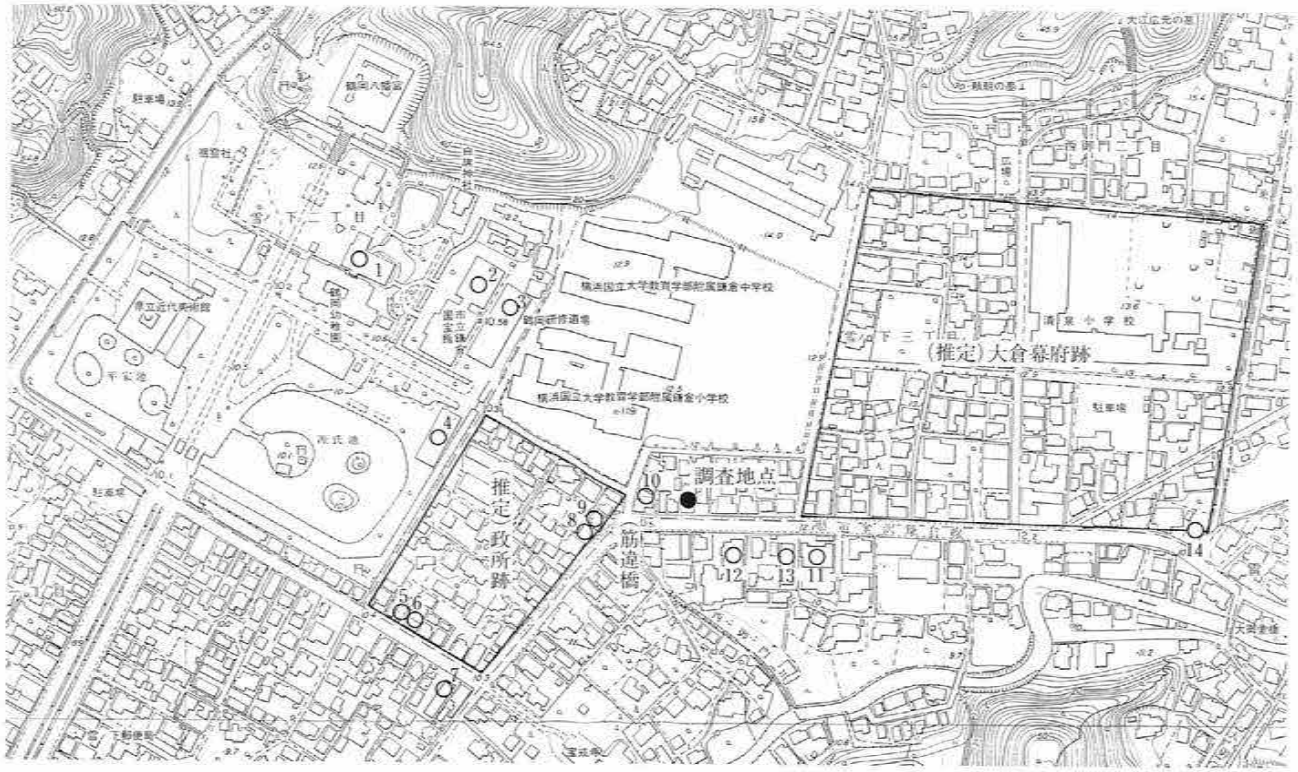
第一章　調査地点と周辺の遺跡 ……203
第二章　調査の経過と概要 ……204
第三章　本調査での成果 ……210
　第１節　二面検出の遺構と遺物 ……210
　第２節　三面検出の遺構と遺物 ……224
第四章　調査のまとめ ……230

挿 図 目 次

図１　遺跡の位置と既調査地点 ……202
図２　試掘壙・先行調査壙・本調査区設定図 …204
図３　試掘壙土層図 ……205
図４　先行調査壙土層図 ……207
図５　側溝確認トレンチ土層図 ……208
図６　土層概念図 ……209
図７　礎石建物址 ……210
図８　二面検出遺構全体図 ……211
図９　柱穴出土遺物 ……212
図10　井戸１ ……212
図11　井戸１出土遺物(1) ……213
図12　井戸１出土遺物(2) ……214
図13　土壙１ ……214
図14　土壙１出土遺物 ……215
図15　土壙２ ……216
図16　土壙２出土遺物(1) ……217
図17　土壙２出土遺物(2) ……218
図18　土壙４ ……218
図19　土壙４出土遺物(1) ……220
図20　土壙４出土遺物(2) ……221
図21　土壙６出土遺物 ……222
図22　溝１出土遺物 ……223
図23　柱穴列 ……224
図24　柱穴出土遺物 ……224
図25　三面検出遺構全体図 ……225
図26　土壙５出土遺物 ……226
図27　井戸２ ……227
図28　井戸２出土遺物 ……228
図29　トレンチ出土遺物 ……229
図30　検出遺構対比図 ……232

図 版 目 次

図版１　試掘調査（TP.A～TP.C） ……233
図版２　試掘調査（TP.A～TP.C土層） ……234
図版３　先行調査（Ｋ１～Ｋ４）……235
図版４　先行調査（Ｋ４～Ｋ５）……236
図版５　先行調査（Ｋ６～Ｋ８）……237
図版６　本調査（Ｉ・II区二面全景）……238
図版７　本調査（井戸１）……239
図版８　本調査（土壙１・土壙２）……240
図版９　本調査（土壙２・土壙４）……241
図版10　本調査（Ｉ・II区三面全景）…242
図版11　本調査（井戸２）……243
図版12　本調査（東・西トレンチ）……244
図版13　出土遺物（土壙４）……245



既調査地点の文献一覧

1.『直会殿用地発掘調査報告書』直会殿用地発掘調査団　1993
2.『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』鶴岡八幡宮境内発掘調査団　1985
3.『研修道場用地発掘調査報告書』研修道場用地発掘調査団　1983
4.鶴岡八幡宮境内遺跡（源平茶屋跡地）未報告。
5.「政所跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』165頁　鎌倉市教育委員会　1993
6.『政所跡』政所跡発掘調査団　1991
7.「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』55頁　鎌倉市教育委員会　1989
8.「政所跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』11頁　鎌倉市教育委員会　1992
9.「政所跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』133頁　鎌倉市教育委員会　1992
10.「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9』131頁　鎌倉市教育委員会　1993
11.南御門遺跡A地点、未報告。
12.南御門遺跡B地点、未報告。
13.南御門遺跡C地点、未報告。
14.『大倉幕府周辺遺跡群』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団　1990

図1　遺跡の位置と既調査地点

第一章　調査地点と周辺の遺跡

調査地点は鶴岡八幡宮の東方にあり、筋違橋交差点を県道金沢・鎌倉線に沿って約40m程東（金沢方面）へ進んだ所に位置している。神奈川県遺跡台帳では、大倉幕府周辺遺跡群（No.49）として包括される地域の西端近くにあたる。

本地点一帯は、滑川右岸に広がる沖積低地上に立地し早く拓けていた場所でもある。南御門遺跡（図１―11地点）で検出された弥生時代中期から後期の竪穴住居址群をはじめ、古墳時代後期の流路あるいは濠（図１―14地点）、平安時代末期の土壙墓（図１－２地点）など、中世以前の遺構も数多く発見されている。

中世に至ってからは、源頼朝が幕府を開いた地として知られ、遺跡名にも冠された大倉幕府は調査地点の東側、東西約270m、南北約220mの範囲と推定されている。文献史料によれば、幕府内には寝殿・対屋・大御所・小御所・常御所等のほか、東西南北に門が付いていたであろうと考えられているが、発掘調査が同範囲に及んだことはなく、唯一南東角隅の調査地点（図１―14地点）でも、中世前期の遺構は明らかにされていない。大倉幕府は嘉禄元年（1225）十二月に焼失し、若宮大路の東側へ移転している。

大倉幕府の執政期間である政所は、調査地点西側の筋違橋を渡った辺りと推定されている。同範囲内では、庁屋（政所）・公文所・問注屋・御倉などの存在が知られるが、幕府跡と同様に未確認であり、わずかに南辺と東辺で行われた発掘調査（図１－５、６、８、９地点）の成果から、南辺を土塁で、東辺を柵（板塀？）で画していたことが判明した。政所も大倉幕府とともに移転している。

幕府と政所に挟まれた地域では、筋違橋に接する北東側（図１―10地点）で調査が行われた。現在整理途中にあるため詳細は不明であるが、西側を西御門川に沿った柵列と溝で画し、南側を土塁（築地？）[註]と溝で画した大規模な屋敷地が存在したものと推測され、相前後する時期には、主軸方位の異なる東西方向の区画溝が数条検出されている。13世紀～15世紀にわたる遺跡である。また、南御門遺跡（図１―11、12地点）では、現在の六浦路（県道）から10m程南で14世紀代の屋敷地がみつかっている。

調査地点の西側にある筋違橋は、文永二年(1265)三月に鎌倉での商業地の一つとして、「小町屋、売買設」の許可された場所である。発掘調査でこれを裏づける遺構はみつかっていないが、簡易な仮設小屋が建つ「市場」的な様相を思い浮かべることもできよう。

鎌倉が衰微する15世紀以降では、遺跡地周辺に係わる文献史料もなく、発見される遺構は激減する。わずか井戸・土壙・溝などが報告されてはいるが、建物址を含む遺跡の全体像や生活の様子を知るには不十分であり、より綿密な調査が行われることに期待するほかはない。

註　土塁については、本調査地点の成果から訂正する必要が生じた。（第四章）

第二章　調査の経過と概要

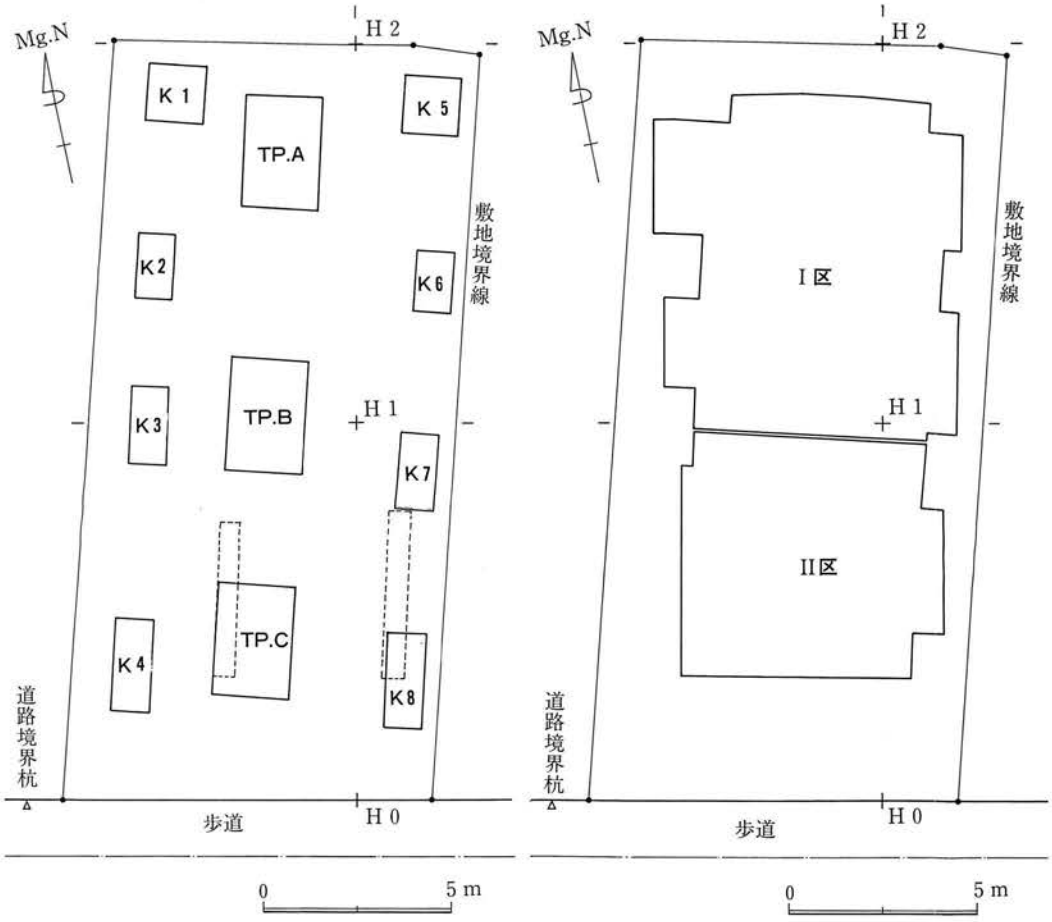


図 2　試掘壙・先行調査壙・本調査区設定図

調査は断続的に 3 回行われているため、順を追って記すことにする。各調査区の配置は図 2 に示した。また、各調査資料をもとに土層のつながりと遺構の関係を概念図化したのが図 6 である。

試掘調査……平成 4 年 5 月11日～13日の 3 日間で行われた。試掘壙は敷地中央部に 2 m× 3 m 幅で 3 箇所、計18m²分が鎌倉市教育委員会によって設定され、北側からTP.A、TP.B、TP.Cとした。

各試掘壙では、表土下30～50cmで中世遺物包含層に達しているため、開発にあたっては発掘調査が避けられないと判断された。したがって、良好な遺構面は極力残し、個別の遺構も本調査を待って発掘することにした。

TP.A、TP.Bでは堅固な整地層（三面）を残して西側半分を地山（中世基盤層）近くまで下げ、TP.Cでは溝（六浦路側溝）の平面プランが確認できるレベルで止めている。

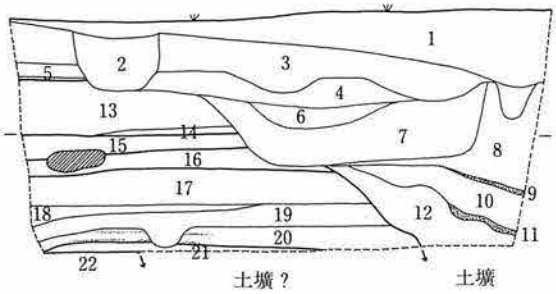
TP.Aでは、1 ～ 7 層までが近現代の表土と攪乱壙、13層以下が中世整地層となる。8 ～12層は土

壙１（本調査で発掘）覆土である。なお、本調査で土壙２とした遺構は、15層上面から掘り込まれていることが確認された。

TP.Bでは、１～５層までが表土と攪乱壙、16層が地山（中世基盤層）である。三面以下では直線的にのびる大形の遺構プランを確認したが、溝か土壙（井戸）かは判別できなかった。

TP.Cでは、１～３層までが表土と攪乱壙、４層が溝１（本調査で発掘）覆土、10～15層が溝（六浦路側溝）の覆土である。11層を挟んで溝の側板が２枚確認された。５～９層は中世整地層であるが分層は非常に困難で、途中に遺構面（生活面）も存在しない。一時期に埋められたものと考えられよう。

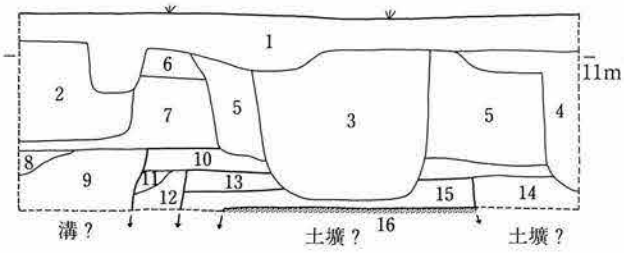
TP.A西壁



土層注記

1	茶褐色土	12	暗灰褐色土＋土丹塊
2	土丹塊＋礫	13	灰黒色土＋小土丹
3	茶褐色土	14	暗灰色粘土
4	灰褐色土	15	灰褐色土＋炭化物(一面)
5	橙褐色砂	16	暗灰色粘土(二面)
6	黄灰褐色土	17	黄褐色土丹層(三面)
7	暗灰褐色土＋土丹粒	18	暗灰色砂質土
8	暗灰褐色土＋炭化物	19	黄灰褐色土丹層(四面)
9	炭化物層	20	灰黒色粘土＋炭化物
10	暗灰色粘土	21	黄褐色土丹層
11	炭化物層	22	暗灰褐色粘土＋炭化物(五面)

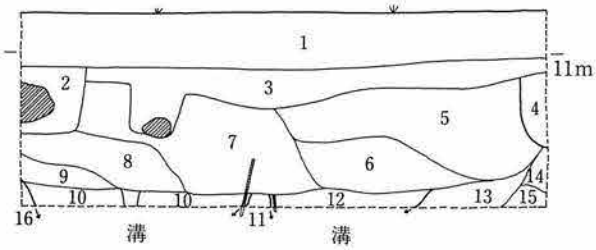
TP.B西壁



土層注記

1	茶褐色土	9	茶褐色砂質粘土＋貝殻粒
2	土丹塊＋礫	10	黄灰褐色土＋小土丹(三面)
3	茶褐色砂質土	11	茶褐色砂＋貝殻粒
4	茶褐色砂質土	12	暗灰色粘質土
5	茶褐色土＋小土丹	13	灰褐色粘質土＋土丹粒(四面)
6	暗灰色粘土	14	灰褐色土＋小土丹
7	暗灰褐色砂質土	15	暗灰褐色粘土＋炭化物(五面)
8	黄褐色土丹層	16	黄褐色山砂層(地山)

TP.C西壁



土層注記

1	茶褐色土	9	灰褐色粘土＋土丹
2	黒灰色土	10	暗灰色粘土＋土丹
3	暗灰色土＋炭化物	11	灰褐色砂質土
4	暗灰色土＋山砂	12	灰褐色粘土
5	黄灰褐色土＋土丹	13	灰黒色粘土＋炭化物
6	灰褐色粘土	14	灰黒色砂質土
7	灰褐色粘土＋土丹	15	灰黒色土＋土丹
8	灰褐色粘土	16	黒灰色粘土＋炭化物

0　　2m

図３　試掘壙土層図

先行調査……建築基礎杭を発掘調査前に打ち込みたいとの申し入れに対応し、基礎杭部分にあたる８箇所（計16.5㎡）の調査を実施した。平成４年６月９日～22日までの間、雨天を除いた実働８日間の調査である。敷地北西隅のものから順に番号を付し、Ｋ１～Ｋ８までとした。

調査にあたっては、土層が変化する毎に精査・遺構発掘・写真撮影・測量（略測）・遺物取りあげを繰り返し、地山（図６―14層）以下では古代遺構の確認にも努めた。ここでいう地山は、黄褐色山砂を主体とする河成砂礫層で、弥生式土器片を混入した中世基盤層でもある。各調査壙での遺構検出結果は以下の通り。

Ｋ１：一～三面の大部分は攪乱壙で消滅。四、五、地山面で柱穴検出。地山層下に遺構なし。

Ｋ２：一～二面は攪乱壙で消滅。三～五面は不明瞭。。地山面で大形の柱穴と東西方向溝の南側肩を検出。地山層下に遺構なし。

Ｋ３：攪乱壙によって地山の一部が残るのみ。遺構なし。

Ｋ４：五面で柱穴と溝を検出。溝の掘り込み面は不明。地山層下（図４―15層上面）で北西方向へ下る浅い自然流路を検出。

Ｋ５：遺構面（生活面）の遺存状態は最も良好。一面遺構なし。二面礎石検出。三、四、五面で柱穴検出。地山面で柱穴と溝（北西―南東方向）検出。地山層下で南方向へ下る浅い自然流路を検出。

Ｋ６：一～四面の大部分は攪乱壙（建物基礎）で消滅。五面で柱穴検出。地山面で柱穴と東西方向溝の北側肩を検出。地山層下で南西方向へ下る浅い自然流路を検出。

Ｋ７：一～三面は消滅。四面で大形の土壙を検出。切り合いが多いため平面形は不明。地山層下に遺構なし。

Ｋ８：一～四面は不明。五面で溝を検出。地山層下に遺構はなく、西側へ緩やかに傾斜する。

先行調査壙土層注記

Ｋ１東壁
1 茶褐色土
2 暗茶褐色土
3 茶褐色粘質土＋炭化物
4 暗褐色粘土（一面）
5 黒灰色土＋炭化物
6 暗灰褐色土＋土丹
7 灰褐色砂質土＋土丹粒（四面）
8 灰褐色砂質土＋貝殻粒
9 灰褐色粘土（五面）
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ２東壁
1 茶褐色土
2 土丹塊＋礫
3 茶褐色砂質土
4 暗茶褐色土＋炭化物
5 橙褐色土＋土丹粒
6 黄褐色土丹層
7 暗褐色粘土＋炭化物（五面）
8 灰色砂質土＋山砂
9 暗灰色砂質粘土
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ３東壁
1 茶褐色土
2 攪乱（浄化槽）
3 暗灰褐色土
4 灰色粘土＋山砂
5 灰褐色土＋土丹粒
6 暗灰色粘土
7 灰褐色粘土
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ４東壁
1 茶褐色土
2 土丹塊＋礫
3 茶褐色砂質土
4 暗褐色土
5 暗褐色土＋切石
6 黄褐色土丹層
7 黄灰褐色土＋土丹
8 灰色粘土
9 黄褐色砂礫層
10 暗褐色粘土
11 黄褐色砂礫＋貝殻粒
12 暗灰色粘土＋炭化物（五面）
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ５西壁
1 攪乱
2 茶褐色土
3 土丹塊＋礫
4 茶褐色砂質土
5 灰褐色土＋土丹
6 黒灰色土＋炭化物
7 暗灰色土＋土丹（二面）
8 暗灰褐色土
9 黄灰褐色砂質土（三面）
10 黄灰褐色土＋土丹（四面）
11 暗灰色粘土＋炭化物（五面）
12 暗灰色粘土＋山砂
13 暗灰色粘土＋山砂
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ６西壁
1 攪乱
2 茶褐色土
3 土丹塊＋礫
4 黄灰褐色土＋土丹
5 黄褐色土丹層（二面）
6 黄灰褐色土
7 灰褐色粘土＋炭化物（三面）
8 暗灰色粘土＋貝殻粒（五面）
9 暗灰色粘土＋炭化物
10 暗灰色粘土
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ７西壁
1 攪乱
2 黄褐色土＋土丹粒
3 暗褐色土＋炭化物
4 黒灰色土（四面）
5 灰褐色粘土（五面）
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

Ｋ８西壁
1 茶褐色土
2 暗灰色粘土
3 暗灰褐色粘土＋土丹
4 灰褐色粘土＋土丹
5 暗灰褐色粘土＋炭化物
6 黄褐色砂質土
7 暗灰色粘土
8 黄褐色土丹層
9 茶褐色粘質土＋炭化物
10 茶褐色砂質土
14 黄褐色山砂層（地山）
15 黒褐色粘土

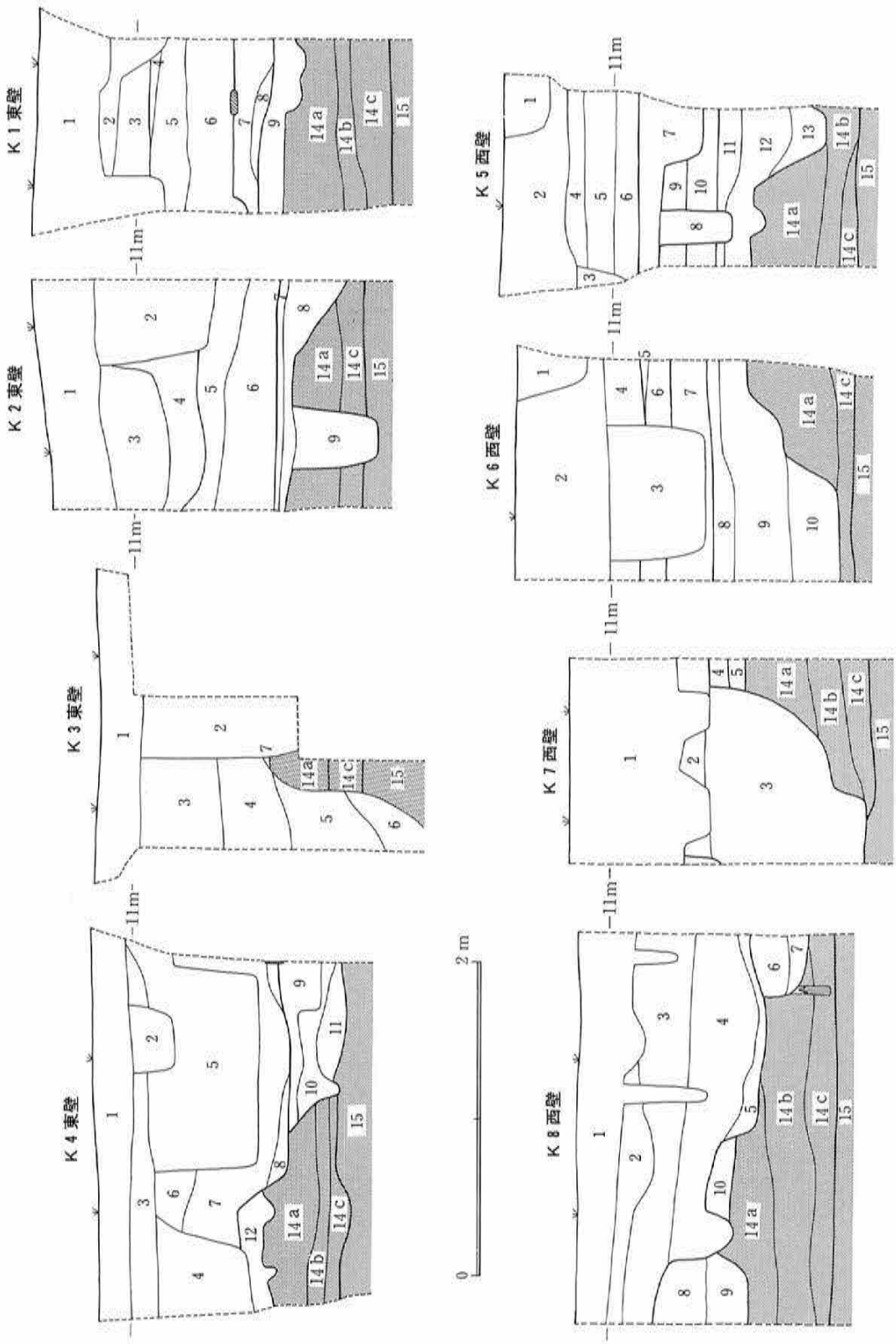


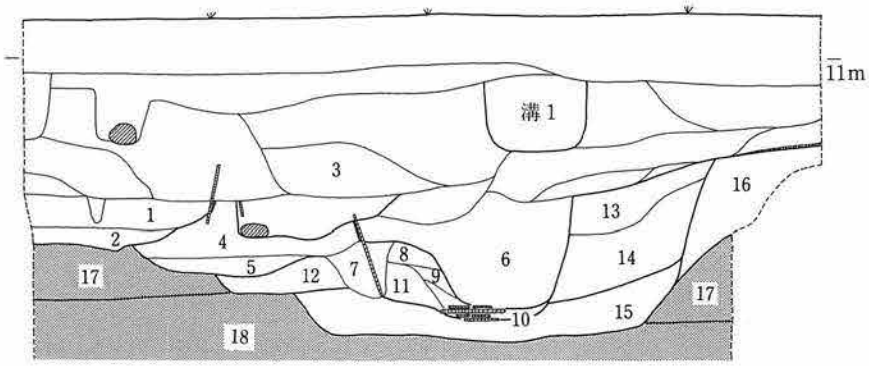
図 4　先行調査壙土層図

本調査……平成４年７月13日～８月25日までの実働34日間の調査である。調査面積は約107㎡で、設計変更に伴う根切り深度はＧＬ－70㎝（県道端の歩道上面が０）となった。

発掘調査は、排土置場を確保する必要上、調査区を南北に２分して行われた。北側Ｉ区は平成４年８月１日に調査を終了している。

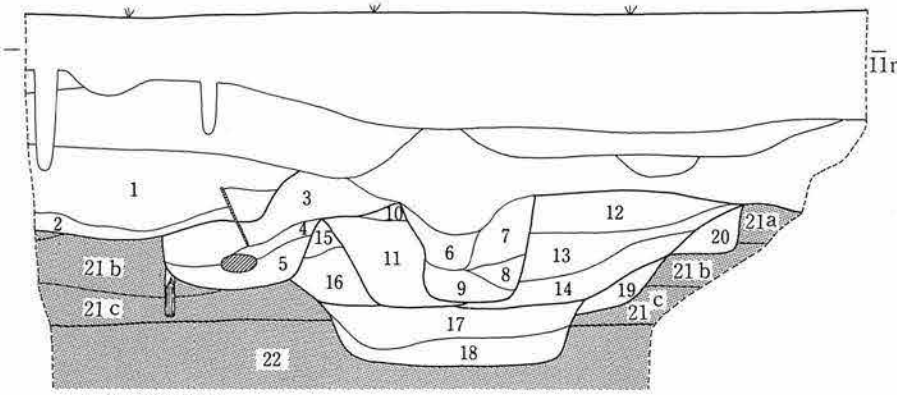
遺構測量に使用した基準軸は、地境杭ａ、ｂを結ぶラインと直交するように設定した。基点となる測点Ｈ０は、ａ－ｂライン上のｂから２ｍ離れた位置にあり、Ｈ０・Ｈ１・Ｈ２の各測点間の距離は10ｍを測る。また、Ｈ０－Ｈ２ラインは磁北に対して11度30分東へ傾いている。（図２）

本調査では、発掘調査に対する認識の違いから、建設業者との間にたびたび問題が生じて調査は難行した。特に根切り深度を越える遺構の発掘には強硬な抗議を受け、六浦路側溝と考えられる溝に関しては発掘を断念し、トレンチで確認を行っている。（図５）また、II区側は根切り深度で止めたため、遺構面（生活面）を確実に調査したと言い難いものであった。本調査で検出できた遺構と遺物は第三章で報告する。



西側トレンチ（西壁）

1 暗灰色粘土＋土丹
2 暗灰色粘土
3 灰褐色粘土
4 黄褐色土丹＋貝殻粒
5 暗灰色粘土
6 灰黒色粘土
7 暗灰色粘土＋土丹
8 黄褐色砂＋灰色粘土
9 黄褐色砂質粘土
10 灰黒色粘土＋木端
11 黄灰白色砂
12 黒灰色粘土＋木端
13 黄灰色粘土
14 暗灰色粘土＋貝殻粒
15 灰青色粘土＋貝殻粒
16 灰褐色粘土＋貝殻粒
17 黄褐色山砂層
18 黒褐色粘土



東側トレンチ（西壁）

1 灰褐色粘土＋土丹
2 暗灰色粘土＋炭化物
3 黄褐色砂質土
4 黄褐色砂
5 暗灰色粘土
6 黄灰褐色土
7 黄灰褐色土＋貝殻粒
8 灰褐色砂＋貝殻粒
9 灰黒色粘土＋木端
10 黄灰色粘土
11 黄褐色砂＋灰色粘土
12 黄灰色粘土
13 灰褐色砂＋貝殻粒
14 灰褐色粘土＋貝殻粒
15 黄灰褐色砂質粘土
16 灰褐色砂質粘土
17 灰青色砂質粘土
18 灰青色粘土
19 茶褐色砂＋貝殻粒
20 黄灰褐色土
21 黄褐色山砂層
22 黒褐色粘土

図５　側溝確認トレンチ土層図

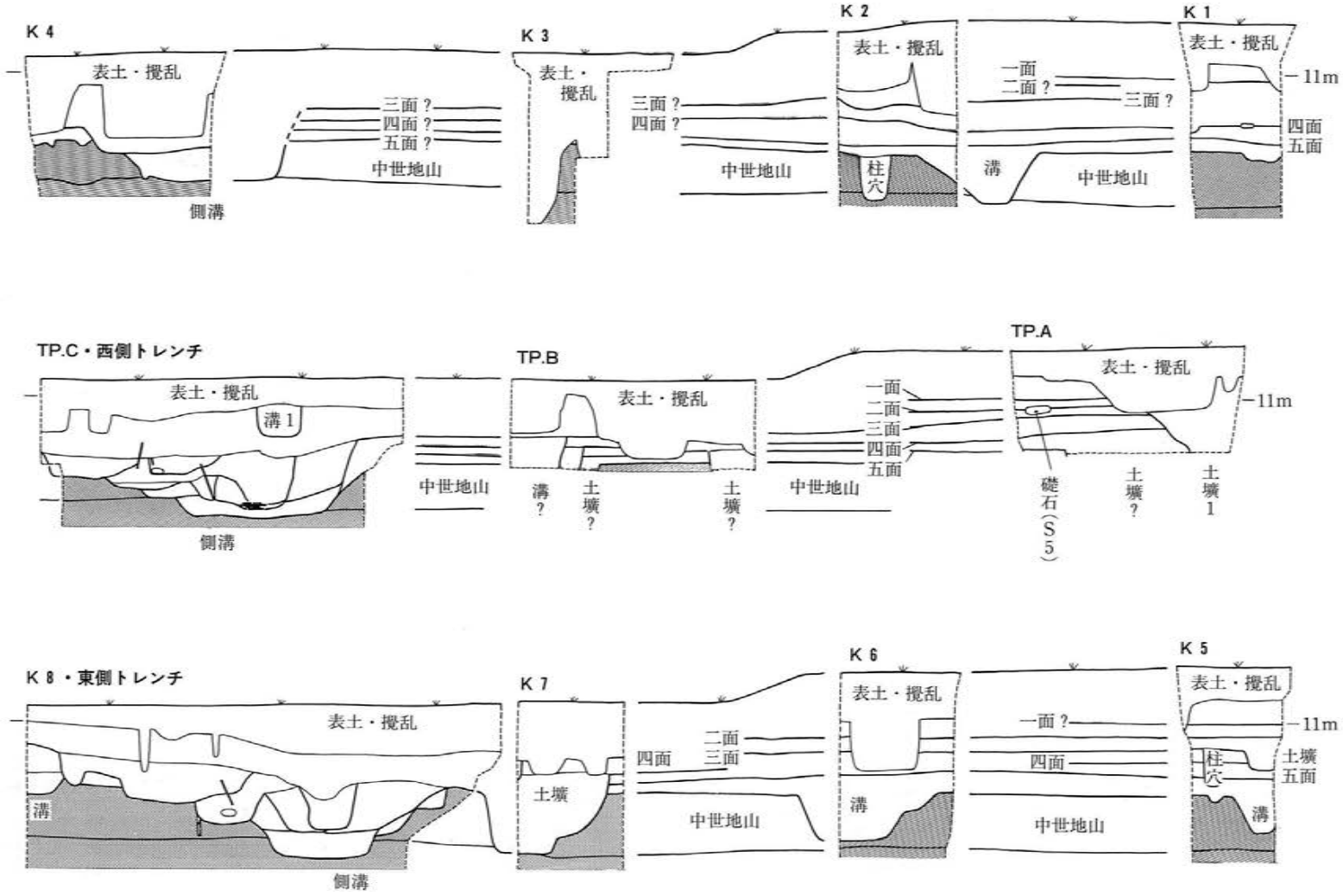

K 4
表土・攪乱
三面？
四面？
五面？
中世地山
側溝
K 3
表土・攪乱
三面？
四面？
中世地山
K 2
表土・攪乱
柱穴
一面
二面？
三面？
溝
中世地山
K 1
表土・攪乱
11m
四面
五面
TP.C・西側トレンチ
表土・攪乱
溝1
側溝
中世地山
TP.B
表土・攪乱
溝？
土壙？
土壙？
中世地山
TP.A
表土・攪乱
一面
二面
三面
四面
五面
11m
礎石（S5）
土壙？
土壙1
K 8・東側トレンチ
表土・攪乱
溝
側溝
K 7
土壙
四面
二面
三面
中世地山
K 6
表土・攪乱
溝
一面？
四面
中世地山
K 5
表土・攪乱
11m
柱穴
土壙
五面
溝

図6　土層説明図

第三章　本調査での成果

本調査で検出された遺構と遺物について扱う。根切り深度（地表下―70cm）までにかかる中世遺構面は３枚あるが、遺存状態の悪い一面は調査を断念し、二面に下げた段階で遺構の検出を行っている。なお、調査時に近代以後の攪乱壙や整地層の一部にも遺構番号を付したため、本報告ではそれらを除外し、遺構番号には欠番が生じることとなった。

第１節　二面検出の遺構と遺物

試掘調査壙（TP.A）で礎石が据えられていた面を二面とした。II区側との土層のつながりは不明瞭であるが、ほぼ同一レーベルで遺構の検出が可能であった。また、Ｉ区側においては、礎石建物址付近と井戸１周辺部に薄い炭化物層が検出され、焼けて赤色化した部分も認められた。火災に遇ったと推測されるが、精査中に削り取られて正確な範囲を記録することはできなかった。

礎石建物址（図７）……Ｉ区北壁寄りに位置する。試掘調査壙（TP.A）と先行調査壙（Ｋ５）で検出された礎石も含めて、東西二間半・南北一間分が確認された。礎石中心間の距離は2.1m、廂あるいは縁の部分で約0.9mを測る。礎石は直径25～40cm、厚さ15cm前後の河原石を使用し、人為的な加工痕はみられない。

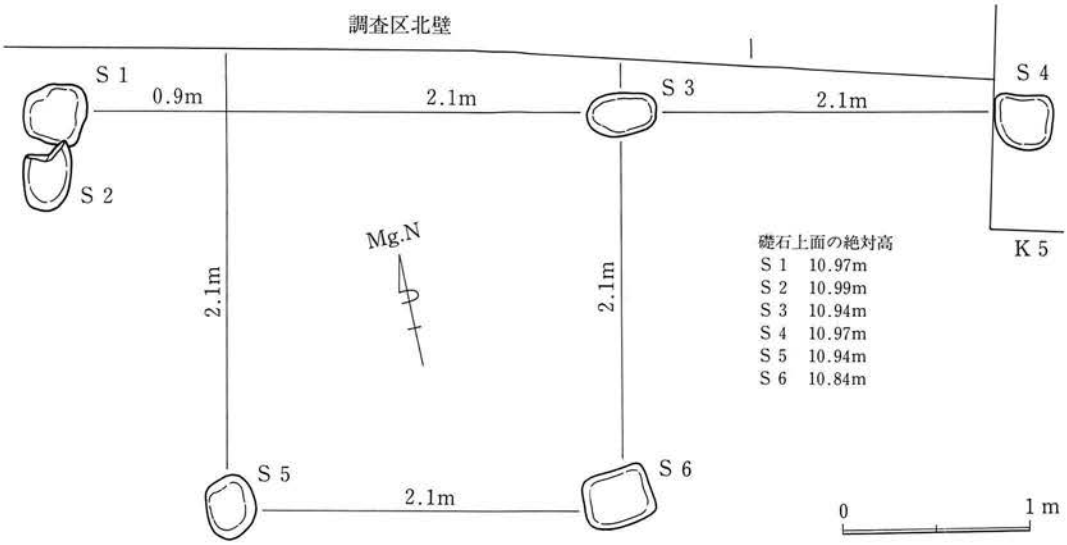


図７　礎石建物址

柱穴（図８）……数穴検出されたが並びは不明。二面に伴うか疑わしいものもある。実測可能な遺物が出土した柱穴のみ番号を付した。

柱穴出土遺物（図９）……すべて小片である。１、２は手捏ね成形のかわらけ皿。３は弥生式土器。壺の肩部小片で、外面に小刻みの櫛描き沈線文を施す。弥生時代中期（宮ノ台式）に属す。４は青磁無文皿。外面体部下半から外底面にかけて、強い回転ヘラ削りを行っている。５は手捏ね

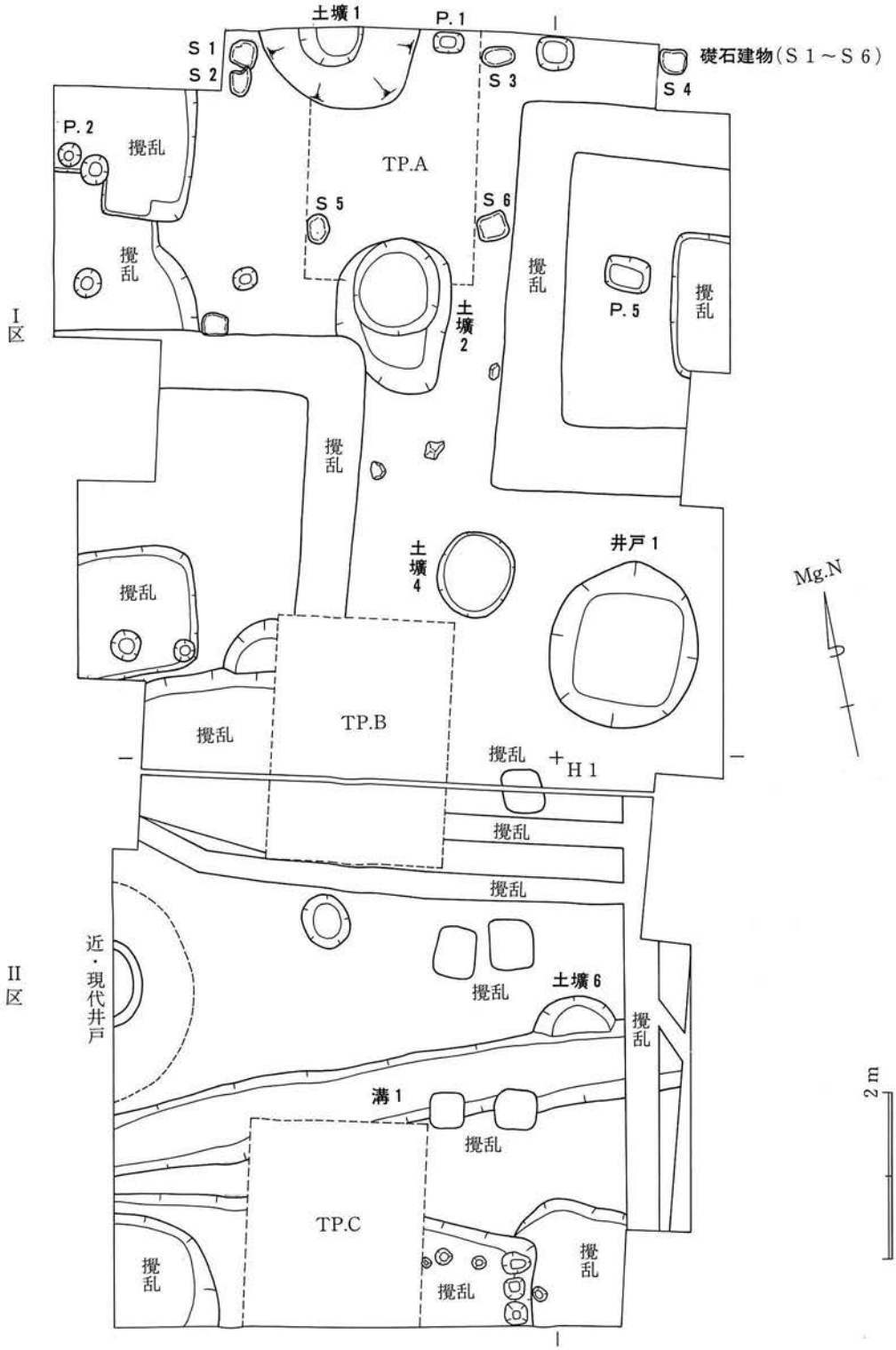


図8　二面検出遺構全体図

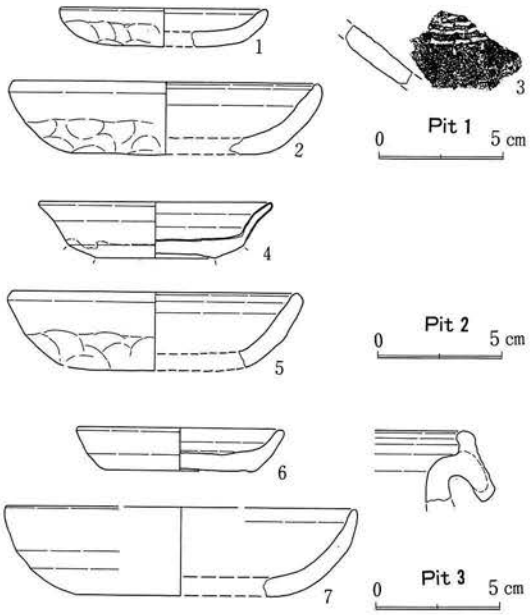


図 9　柱穴出土遺物

成形のかわらけ皿。6・7は糸切り底のかわらけ皿。8は常滑窯産の甕。口縁部の小片である。

これらのうち、1～3はPit 1、4～5はPit 2、6～8はPit 3から出土した遺物である。

井戸 1（図10）……Ⅰ区東南部の壁寄りで検出された。確実に二面から掘り込まれた遺構であり、礎石建物との関連性を窺うことができる。

井戸掘り方は確認面では直径1.8m程の円形に近く、中位以下では一辺1.2m前後の隅丸方形を呈している。下底面は未検出であるが、ボーリング棒による探査では、確認面から約3.6mの深さをもつものと思われる。

井戸木枠は上半部が抜き取られ、下半部は埋没時の土圧によって、西側から大きく倒れ込んだ状態であった。木枠の構造は横桟支柱型と呼ばれるものである。

覆土上位、特に確認面近くには、拳大の土丹塊（破砕泥岩）が多量に投げ込まれており、かわらけ皿等の遺物がまとまって出土した。

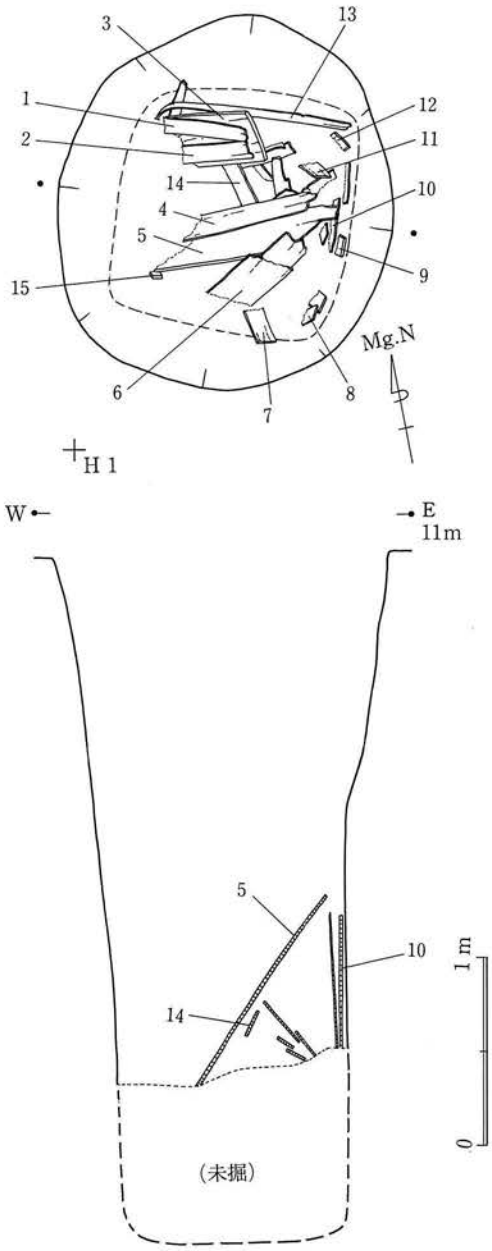


図10　井戸 1

井戸枠部材表（幅×厚×長）単位cm

1	西側縦板	11×0.8×(118)	12	北側縦板	10× 1×(94)
2	西側縦板	10×0.5×(107)	13	北側縦板	12×0.5×(129)
3	西側縦板	28× 1×(116)	14	西側横桟	12× 4×97
4	西側縦板	10×0.3×(115)	15	南西支柱	6× 3×(15)
5	西側縦板	32×3.5×(138)			
6	南側縦板	27× 2×(110)			
7	南側縦板	15×0.3×(87)			
8	東側縦板	8×0.5×(84)			
9	東側縦板	12× 1×(81)			
10	東側縦板	10× 3×(80)			
11	北側縦板	10×0.3×(80)			

＊長さについては、計測できた範囲内の数値。

井戸１出土遺物（図11、12）……覆土上位で出土した遺物は、上層遺物（図11－１～21）として区別した。井戸埋め戻しの最終段階に一括して投棄された遺物と思われるが、厳密な層序区分は行っていない。

１～18はかわらけ皿。すべて糸切り底である。法量的には大皿・中皿・小皿の別があり、型式的にみれば３種類が混合している。１～５はより古い特徴をもつ一群、７～９・11～12はより新しい特徴をもつものである。主体となる皿は器壁が薄く体部に丸味をもつ皿で、数量的に最も多く出土している。４・７・８・14は略完形品である。

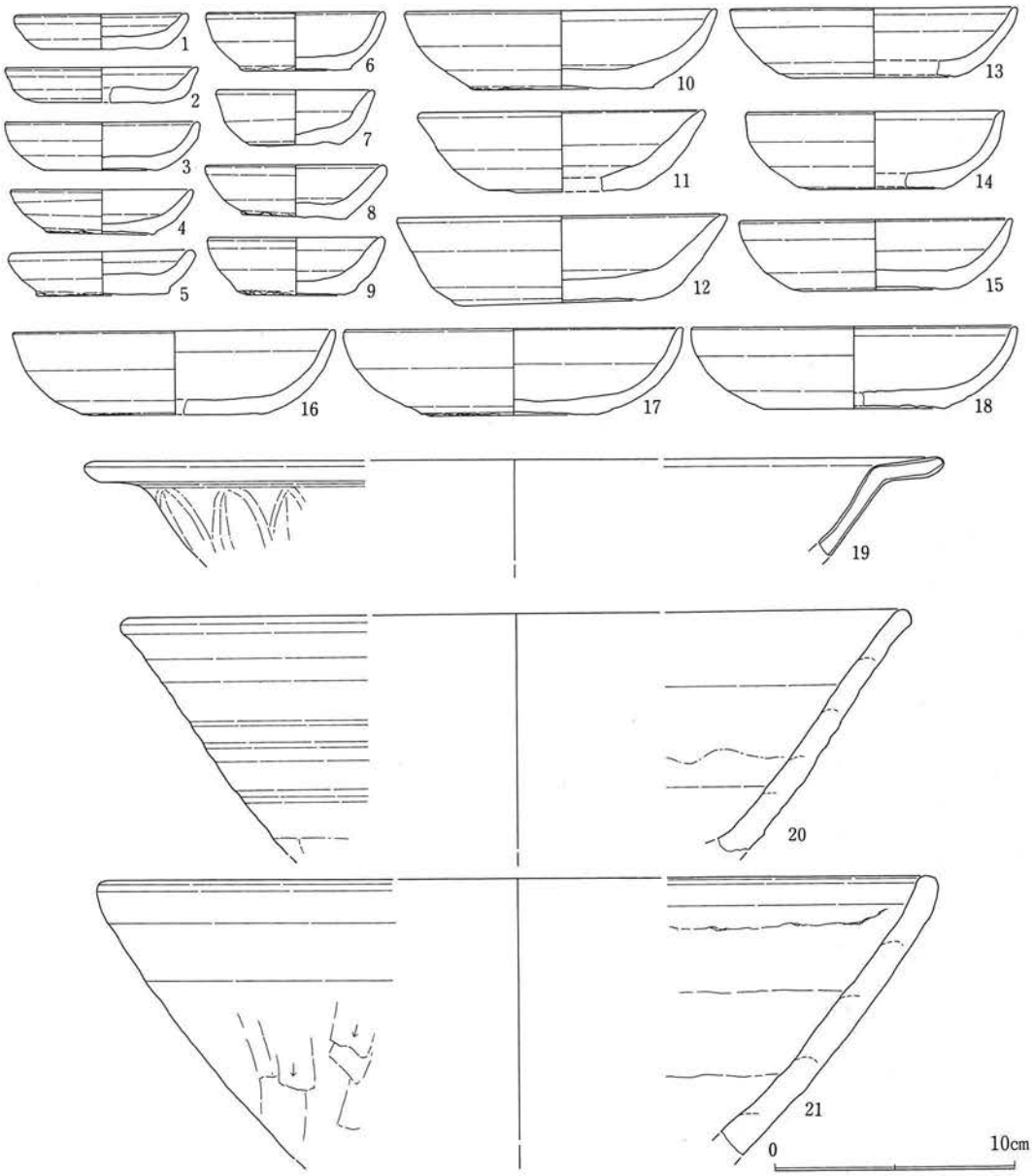


図11　井戸１出土遺物(1)

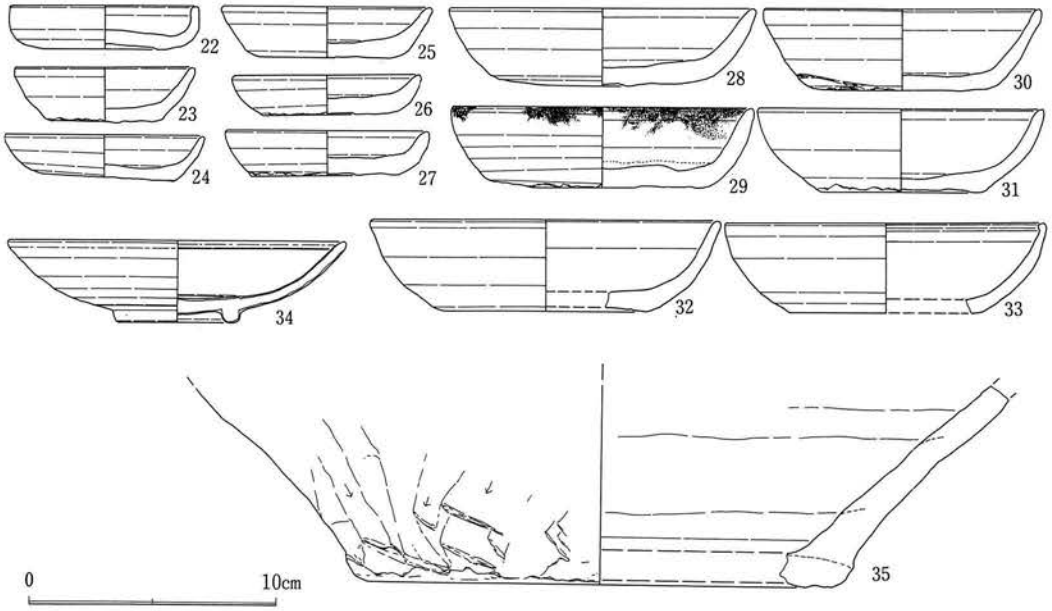


図12　井戸１出土遺物(2)

19は青磁鎬蓮弁文鉢。小片である。

20は山茶碗窯系捏ね鉢。体部下端にヘラ削り調整を行う。

21は常滑窯産の捏ね鉢。体部外面にササラ状工具による調整痕が残る。

22～35は覆土の中位以下から出土した遺物である。22～33はかわらけ皿。すべて糸切り底で、29は灯明皿として使用されている。薄手タイプの皿も含まれてはいるが、全体に古い要素をもつ皿が主体となっている。26・27・29は略完形品。

34は白磁口兀皿。口縁部内面と見込み部分、外面体部下位に沈線をめぐらせ、口唇部を除いた全面に釉がかかる。

35は常滑窯産の甕である。

〈井戸１出土遺物の内訳〉

上　　層：かわらけ皿74点（手捏ね１・糸切り68・不明５）、青磁４点（碗３・鉢１）、褐釉壺１点、山茶碗窯系捏ね鉢１点、常滑11点（捏ね鉢１・甕10）、獣骨１点。

中層以下：かわらけ皿41点（手捏ね１・糸切り38・不明２）、青磁２点（碗１・鉢１）、白磁皿１点、山茶碗窯系捏ね鉢１点、常滑甕17点、丸瓦１点、獣骨２点。

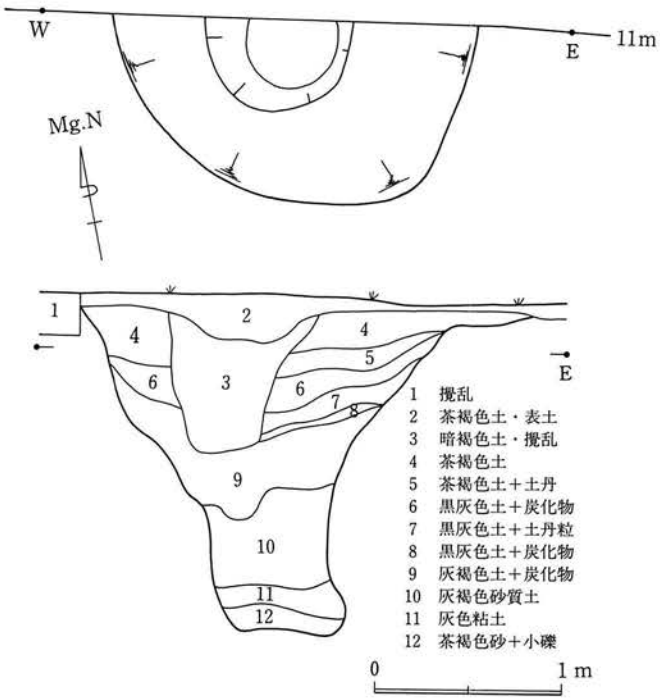


図13　土壙1

土壙１（図13）……Ⅰ区北壁際で検出された。北側半分は調査区外にあるため全容は不明。二面より新しい時期の遺構で、地表から約10cm下で確認することができる。調査中に掘り過ぎたため壁面中位に段をもつが、北壁断面をみる限り、上面径２m、底面径0.5m、深さ1.7m程の漏斗状を呈する遺構と考えられる。覆土中位には２枚の薄い炭化物層が堆積する。

土壙１出土遺物（図14）……遺構下部（図13―10～12層）から出土した遺物（図14―23～27）は区別してとりあげた。中世地山に掘り込まれた部分であり、掘り過ぎによる遺物の混入はない。

１～12はかわらけ皿。すべて糸切り底である。大皿・中皿・小皿の別があり、体部が厚く直線的に外反する器形が主体となる。２・４が略完形品で、４は灯明皿として使用される。

13は土製円盤。かわらけ皿の底部外周を研磨した直径2.5cm程の製品。用途は不明。

14は砥石。淡黄灰色の粘板岩製。仕上げ砥である。

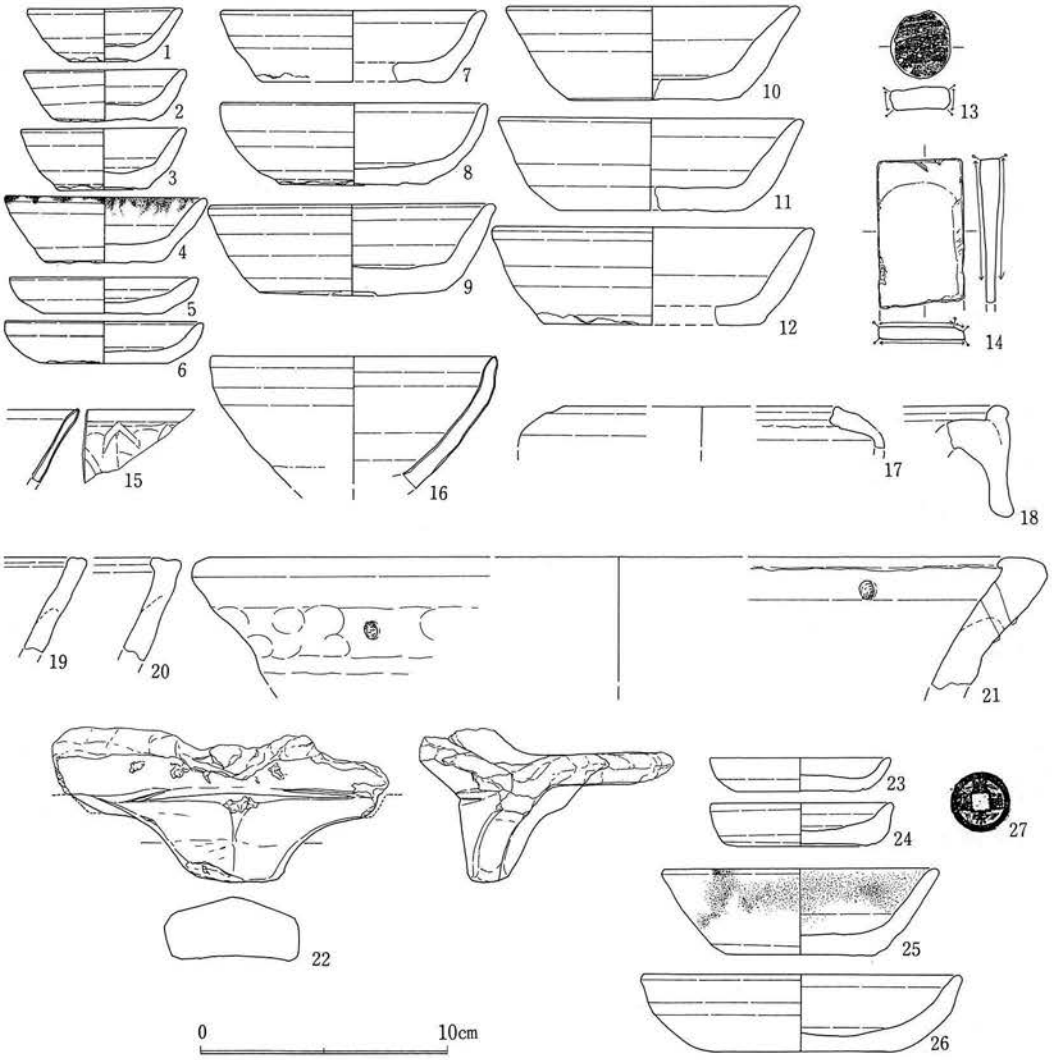


図14　土壙１出土遺物

15・16は舶載陶磁器。15は青磁鎬蓮弁文碗。16は鉄釉天目茶碗。釉は黒茶褐色を呈し、胎土は暗灰色緻密である。

17～20は常滑窯製品。17は無頸壺。18は甕。19・20は捏ね鉢である。

21・22は手焙り。21は土器質。浅鉢形で口縁部に円孔を有す。22は瓦質。底径38cm前後と推定され、板状の脚を貼付する。

23～27は遺構下部から出土したもの。

23～26はかわらけ皿。すべて糸切り底。25は口縁部が黒色化しているが、焼成時のものかもしれない。24・25は略完形品。

27は北宋銭。「皇宋通宝」(初鋳1039年)。

〈土壙 1 出土遺物の内訳〉

上層：かわらけ皿73点（手捏ね１・糸切り69・不明3)、舶載陶磁器（青磁碗１・天目１・褐釉壺)、常滑21点（捏ね鉢３・壺１・甕17)、瀬戸２点（瓶子１・入子皿１)、手焙り類５点、瓦２点（平１・丸１)、硯１点、円盤１点。

下層：かわらけ皿34点（手捏ね１・糸切り31・不明２)、青白磁梅瓶１点、山茶碗窯系捏ね鉢１点、常滑（捏ね鉢２・甕３)、手焙り類１点、砥石１点、銭１点。

土壙 2（図15）……Ⅰ区中央部に位置する。試掘調査壙(TP.A)の南側壁面にかかっており、掘り込み面は15層上面(図３―TP.A西壁)と判明した。二面に伴う遺構ではなく、礎石建物址より新しく、土壙１よりも古い。

土壙掘り方は、1.3m×1.8m程の楕円に近い長方形土壙と直径１m程の円形土壙とを組み合わせた構造であるが、覆土の堆積状態をみると、２つの異なる土壙を同時に発掘した可能性が強く、出土遺物にも新旧２時期が認められる。

土壙 2 出土遺物（図16）……２つの土壙から出土した遺物の多くは混在しているが、確実に下部円形土壙から出土した遺物（図17―40～42）は区別して取り上げた。

１～20はかわらけ皿。すべて糸切り底である。法量的には大皿・中皿・小皿の別があり、６～15は他に比べて古い特徴をもつ。特に７は異質で、外底面に静止糸切り痕を残し、胎土は精良緻密である。１・２・４・５・８・15・18は略完形品。

21～23は舶載陶磁器。21は青磁鎬蓮弁文碗。22は白

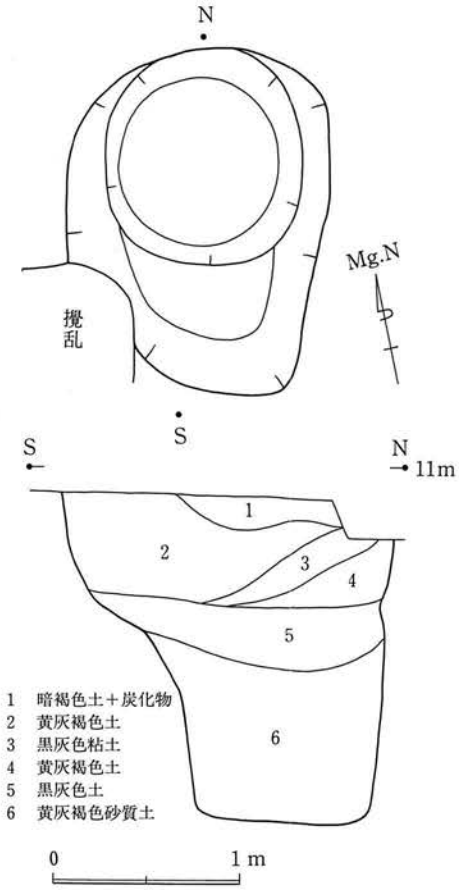


図15 土壙 2

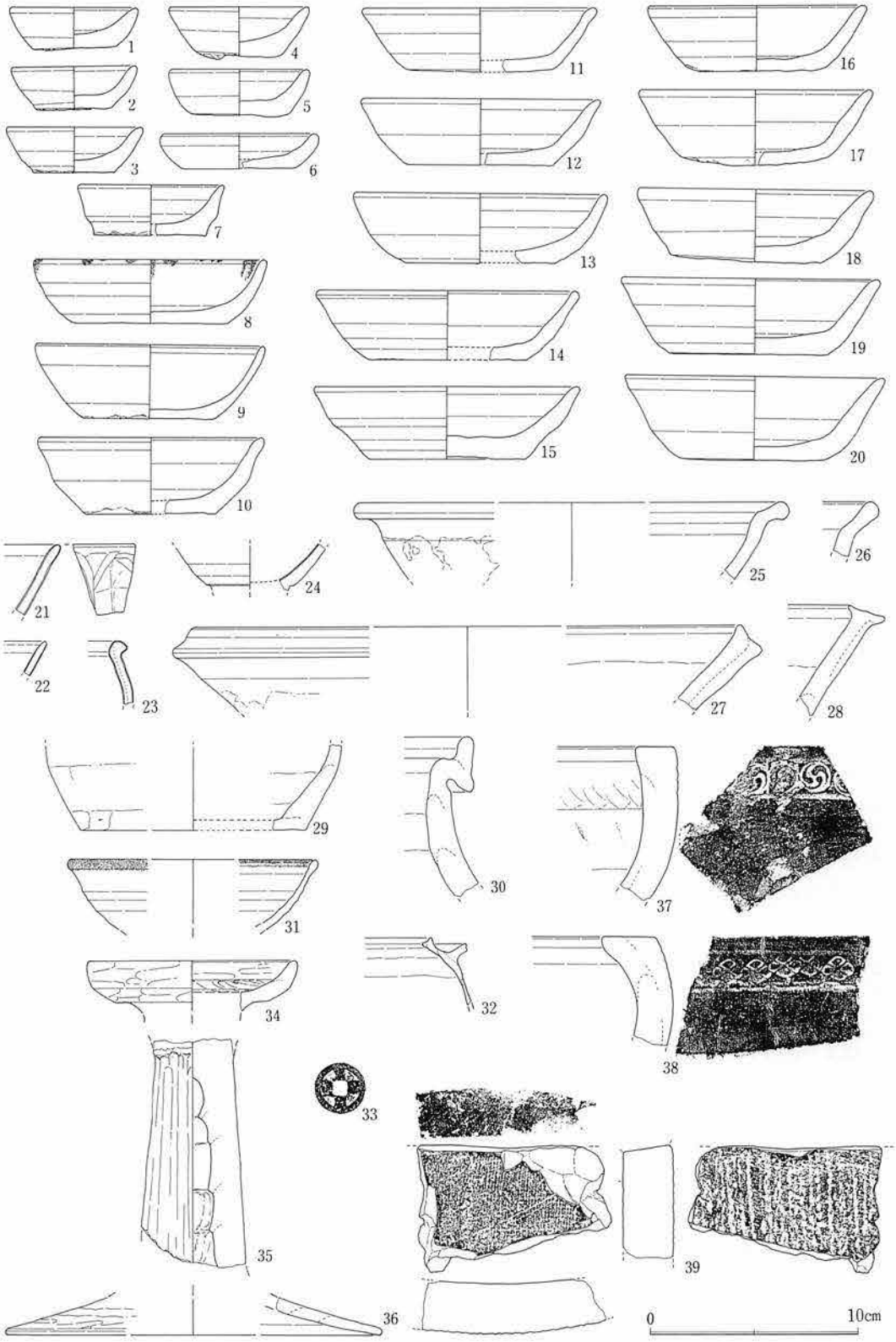


図16　土壙2出土遺物(1)

磁口兀げ皿。23は緑釉陶器盤。

24～26は瀬戸製品。24は鉄釉天目茶碗。25･26は灰釉折縁鉢。

27～30は常滑製品。27・28は捏ね鉢。29は壺。30は甕である。

31は瓦器質黒縁皿。胎土は灰白色精良。ロクロ成形の製品。

32は伊勢型鍔釜。胎土は黄灰白色精良。体部外面はハケ調整。

33は北宋銭。「皇宋通宝」(初鋳1039年)。

34～36は瓦器灯明台。同一個体の可能性あるが接合不能。外面はヘラ磨き調整。

37・38は瓦器質手焙り。2条の沈線とスタンプ文を施す。

39は平瓦。凹面は布目、凸面は縄目が残る。

40はかわらけ皿。糸切り底。

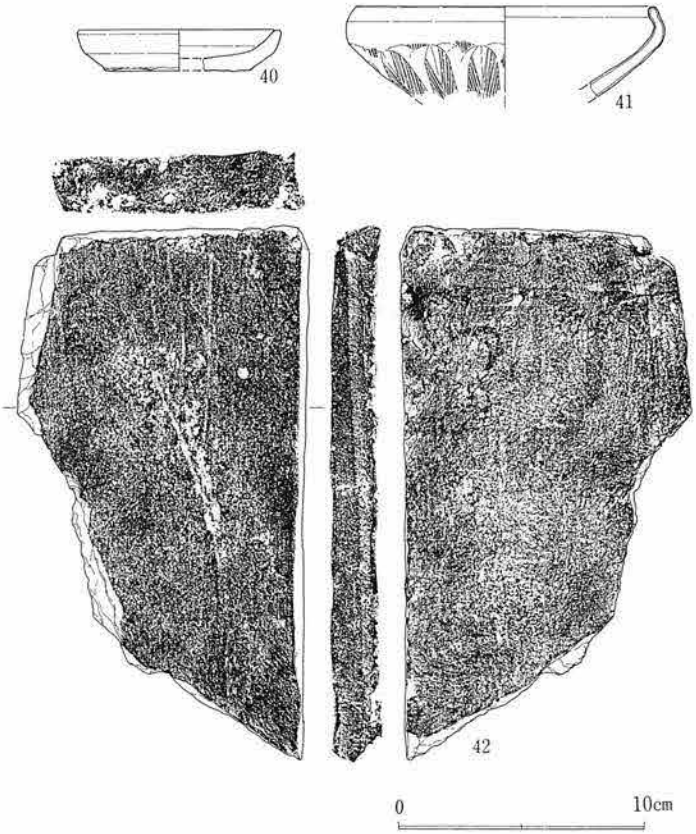


図17　土壙2出土遺物(2)

41は青磁鎬蓮弁文鉢。蓮弁部に6条単位の櫛目を施す。土壙4出土の鉢（図19—22）と同一個体である。

42は平瓦。両面とも砂目が残る。

〈土壙2出土遺物の内訳〉

かわらけ皿214点（手捏ね26・糸切り189）、舶載陶磁器7点（青磁碗5・白磁皿1・緑釉盤1）、瀬戸5点（碗2・鉢3）、常滑86点（捏ね鉢10・壺1・甕75）、渥美甕5点、山茶碗窯捏ね鉢2点、鍔釜10点、瓦器質皿1点、瓦器灯明台4点、手焙り類26点、滑石2点、平瓦1点、弥生土器1点。

下層：かわらけ皿13点（手捏ね3・糸切り10）、青磁鉢1点、瀬戸壺1点、常滑甕8点、手焙り類2点、平瓦2点。

土壙4（図18）……井戸1の西側で検出された。直径1m、深さ80cm程の円筒形を呈し、覆土上位には炭化物層が厚く堆積する。出土遺物の種類は豊富で、手焙り類の出土状況は特異といえよう。土壙2と共通する要素をもつ。

土壙4出土遺物（図19、20）……炭化物層中に鍔釜1個体分が潰れて出土し、その下層から完形に近いかわらけ皿や灯明台を含む多種類の遺物が出土した。特に、手焙り類はタイプの異なる口縁部と脚部が1点づつ出土しており、意識的に集められたようにも考え

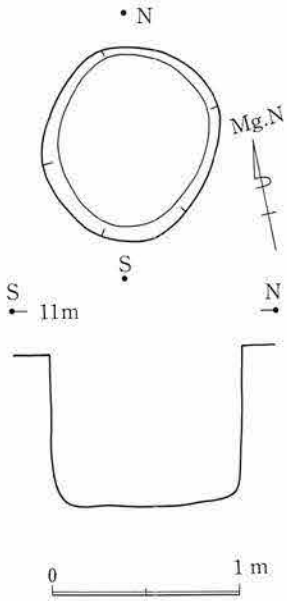


図18　土壙4

られる。

1～21はかわらけ皿。すべて糸切り底である。法量的には大皿・中皿・小皿の別があり、9・18を除いた皿（体部が厚く、直線的に外反する器形）が主体を占める。8・11・15・17・18以外は完形もしくは略完形品である。

22～24は舶載磁器の小片。22は櫛目の加わる青磁鎬蓮弁文鉢。土壙2下層出土の鉢（図16—41）と同一個体である。23は青磁鎬蓮弁文碗。蓮弁の輪郭は線描きに近い。24は青白磁梅瓶である。

25･26は瀬戸製品。25は鉄釉天目茶碗。釉は暗茶褐色、素地は黄灰白色を呈す。26は灰釉大平鉢。外面体部下半に回転ヘラ削り調整を行い、見込み部外周には目痕が残る。

27・28は山茶碗窯系捏ね鉢。小片である。

29～31は常滑製品。29・30は捏ね鉢。31は摺り鉢である。鈍い光沢の鉄錆釉をかけ、6条一単位の櫛目をつける。

32・33は伊勢型鍔釜。32は底部を欠くだけの略完形品で、鍔接合部には2穴一対の穿孔を2箇所にもつ。体部外面は粗いハケ調整。底部内外面はヘラ削り調整である。煤の付着は鍔部以下で顕著に見られ、内底部には〝焦げ〟様の炭化物が付着している。

34は土師器甕。内面は横方向、外面は縦方向の細かいハケ調整を行う。混入品。

35は砥石。淡緑灰白色の凝灰岩製で、中砥あるいは仕上げ砥と思われる。

36～45は手焙り、土風炉類。40は土器質、他はすべて瓦器質である。瓦器質の手焙り・土風炉類に関しては、口縁部が4点（4個体分）、脚部が4点（3個体分）出土しており、胴部と底部の破片はわずかである。

36は土風炉。外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ調整である。

37は手焙り。外面ヘラ磨き。2条の沈線区画→菊花文スタンプ→珠文貼付の順で施文する。

38は手焙り。外面ヘラ磨き。2条の沈線区画内にS字状のスタンプ文と珠文を貼付する。

39は手焙り。四葉形であろうか。外面ヘラ磨き。2条の沈線区画内に菊花文スタンプと珠文を貼付する。

40は土器質の手焙り。体部外面に指頭痕と斜位のハケ目を残す。口縁部に円孔あり。

41は板状の脚。中央部が盛り上がり、弱い鎬状を呈す。同種の脚は土壙1（図14—22）からも出土している。

42は獣脚。ハケ状工具による粗い整形後、細かいヘラナデ調整を行う。

43は雲形装飾板を付けた獣脚。ハケ調整およびヘラナデ調整後にヘラ磨き調整を加えている。

44は瓦器灯明台。脚部下端を欠失するが、略完形品である。外面は細かいヘラ磨き調整。皿中央部には直径約5㎜の穿孔があり、口唇端部には煤が付着する。脚部は中空である。

45は転用硯。瓦器質手焙り類の底部を再加工した製品である。

〈土壙4 出土遺物の内訳〉

かわらけ皿118点（手捏ね6・糸切り88・不明24）、青磁2点（碗1・鉢1）、青白磁壺1点、瀬戸2点（天目1・鉢1）、常滑27点（捏ね鉢3・甕24）、山茶碗窯捏ね鉢3点、手焙り類16点、瓦器灯明台1点・鍔釜3点、平瓦1点、砥石1点、転用品2点（硯1・スタンプ1）、魚骨1点、土師器1点。

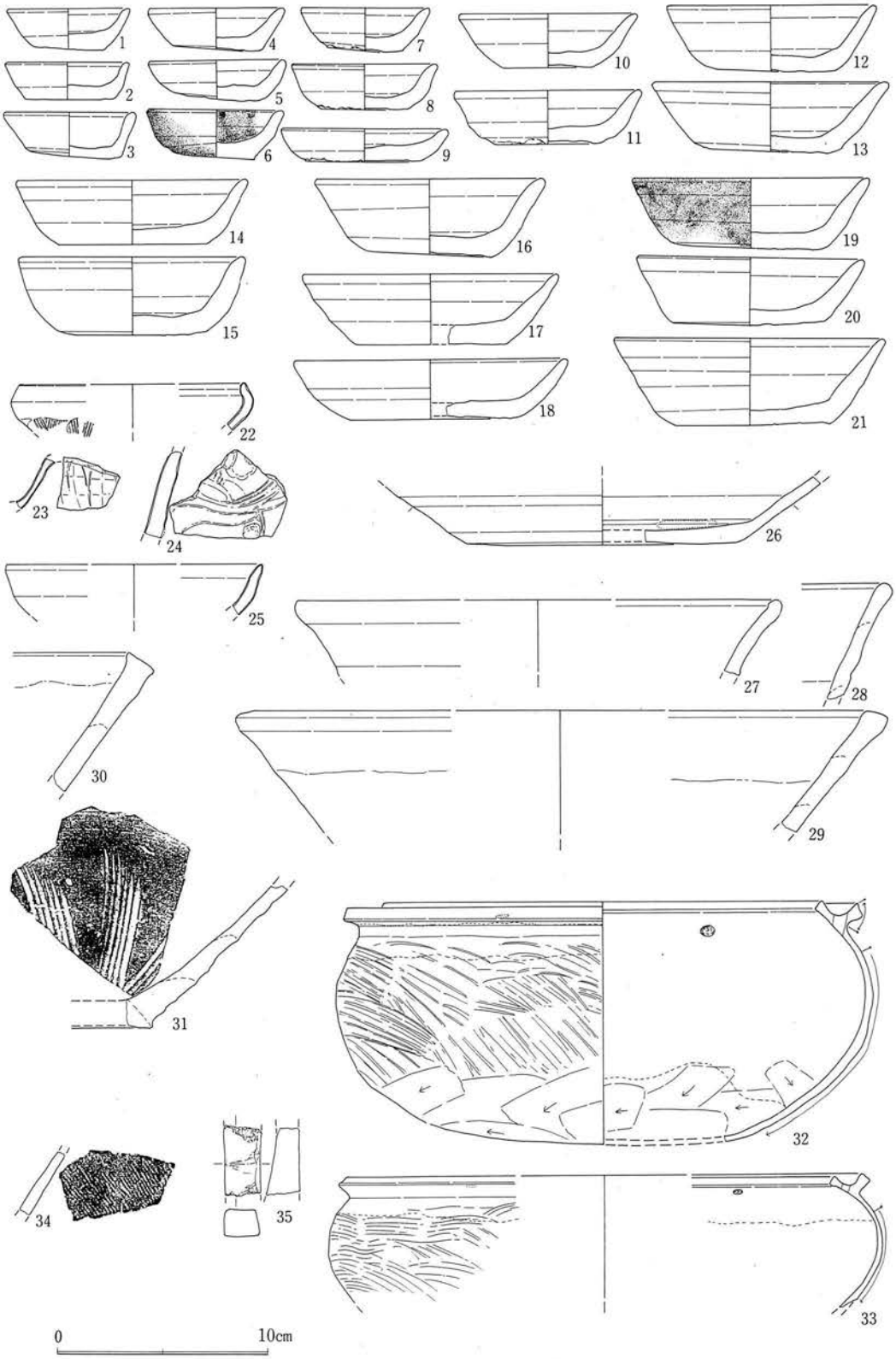


図19　土壙4 出土遺物(1)

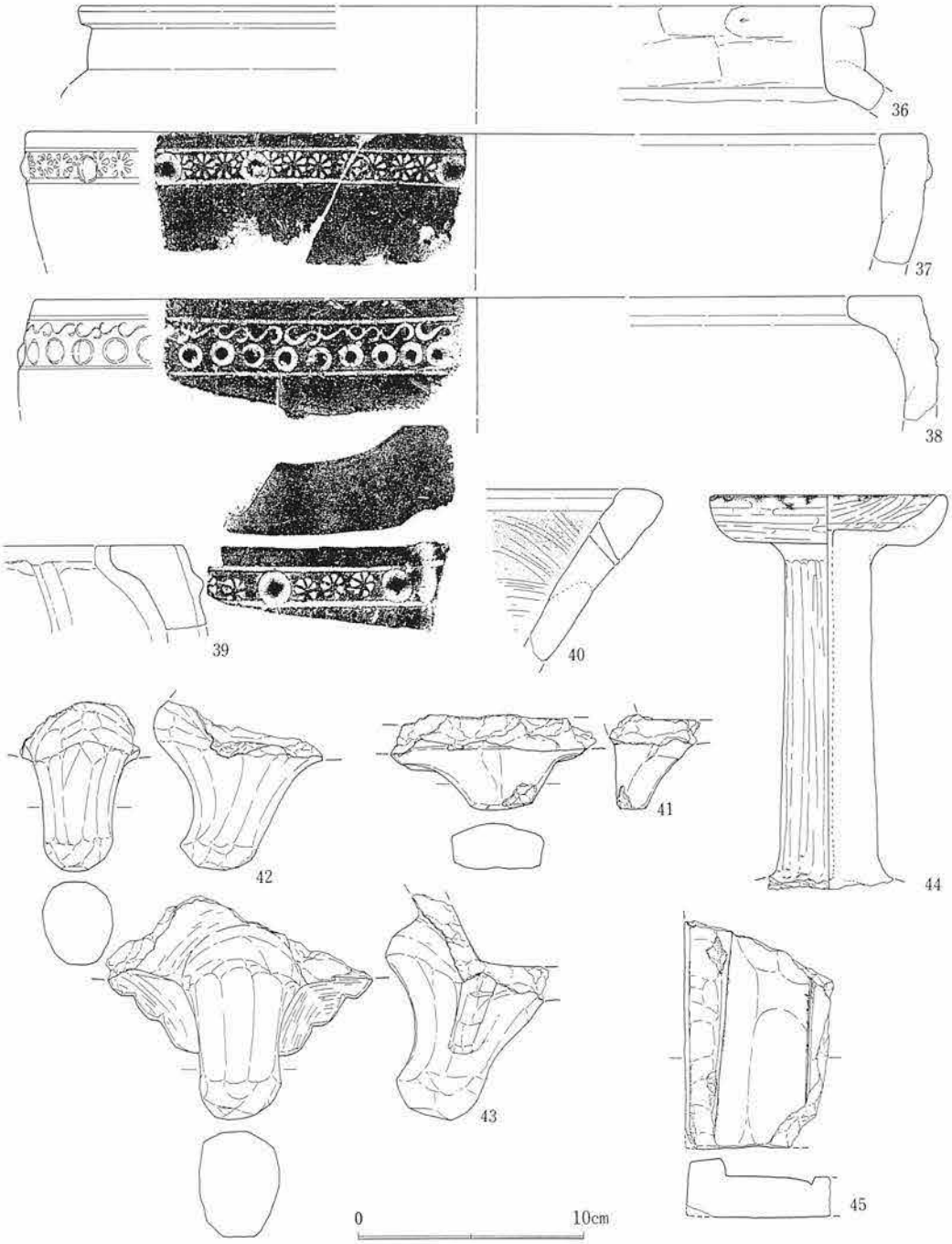


図20　土壙4出土遺物(2)

土壙 6（図８）……Ⅱ区側で検出された。溝１を切って構築され、直径１m、深さ20cm程の浅い丸皿状を呈している。覆土は宝永火山灰で占められ、近世末～近代にかけての遺構と考えられる。

土壙 6 出土遺物（図21）……中世遺物（かわらけ皿、北宋銭）も少量出土したが、遺構に伴わないため除外した。

１は瀬戸美濃産の磁器碗。外面の文様は手描きで、合成コバルトを使用する。

２は瀬戸美濃産の磁器碗。口縁部外面から内面は灰釉、体部外面に鉄釉を掛け分ける。小片のため、口径と傾きは不明である。

３・４は銅製品。ともに直径1.6cm。中央部に釘穴をもつ。

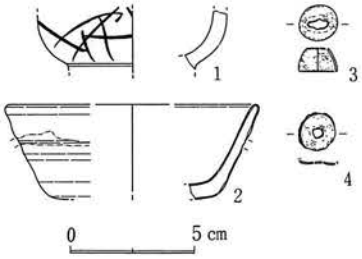


図21　土壙 6 出土遺物

溝 1（図８）……Ⅱ区で検出された東西方面の溝である。表土層下で確認され、掘り込み面は二面より上と考えられる。六浦路側溝と思われる大溝の覆土上位に構築されているため、壁面が弱く部分的に掘り過ぎる結果となった。最も遺存状態が良い箇所では、上面幅約80cm、底面幅約60cm、深さ約30cmを測り、断面形状は箱堀形を呈している。東壁寄りの北側肩部を土壙６によって切られる。

溝 1 出土遺物（図22）……かわらけ皿の出土量が多く、他の遺物は小片ばかりである。掘り過ぎによる遺物の混入があり注意を要する。

１～16はかわらけ皿。すべて糸切り底である。大皿・中皿・小皿の別があるが、小皿・中皿は時期的にやや遡る特徴をもつ。混入品かもしれない。

主体となる器形は、３および７～16のように、器壁が厚く体部の直線的に外反するものである。

３・６・８・16は略完形品。８は口縁部に煤が付着している。

17は青磁鎬蓮弁文鉢。高台畳付け部を除く全面に釉がかかる。

18は瀬戸縁釉皿。口縁部を欠くが、体部外面に暗茶褐色の鉄釉が付着する。内底部は磨耗して滑らかである。

19は常滑甕。口縁部の小片である。混入品か。

20・21は山茶碗窯系捏ね鉢。いずれも小片で、同一個体はない。

22は通称〝磨り常滑〟。常滑甕の体部片を再利用したもので、縁辺部が磨耗する。鉄錆落し用あるいは摺粉木の代用と考えられる。

23は土製円盤と思われる。かわらけ皿の底部外周を欠いて円盤状に残した製品。用途不明。通常縁辺部を研磨するが、本品は打ち欠いただけである。

24は加工痕のある骨片。全体に磨耗するが、一端は明らかに切断している。獣骨と思われる。

25・26は平瓦。凸面は縄目。凹面は25が布目、26が砂目である。

〈溝 1 出土遺物の内訳〉

かわらけ皿177点（手捏ね６・糸切り166・不明５）、青磁６点（碗５・鉢１）、白磁壺１点、褐釉壺１点、瀬戸皿１点、常滑甕32点、山茶碗窯捏ね鉢４点、手焙り１点、平瓦３点・加工品３点（常滑１・かわらけ１・骨１）・獣骨２点。

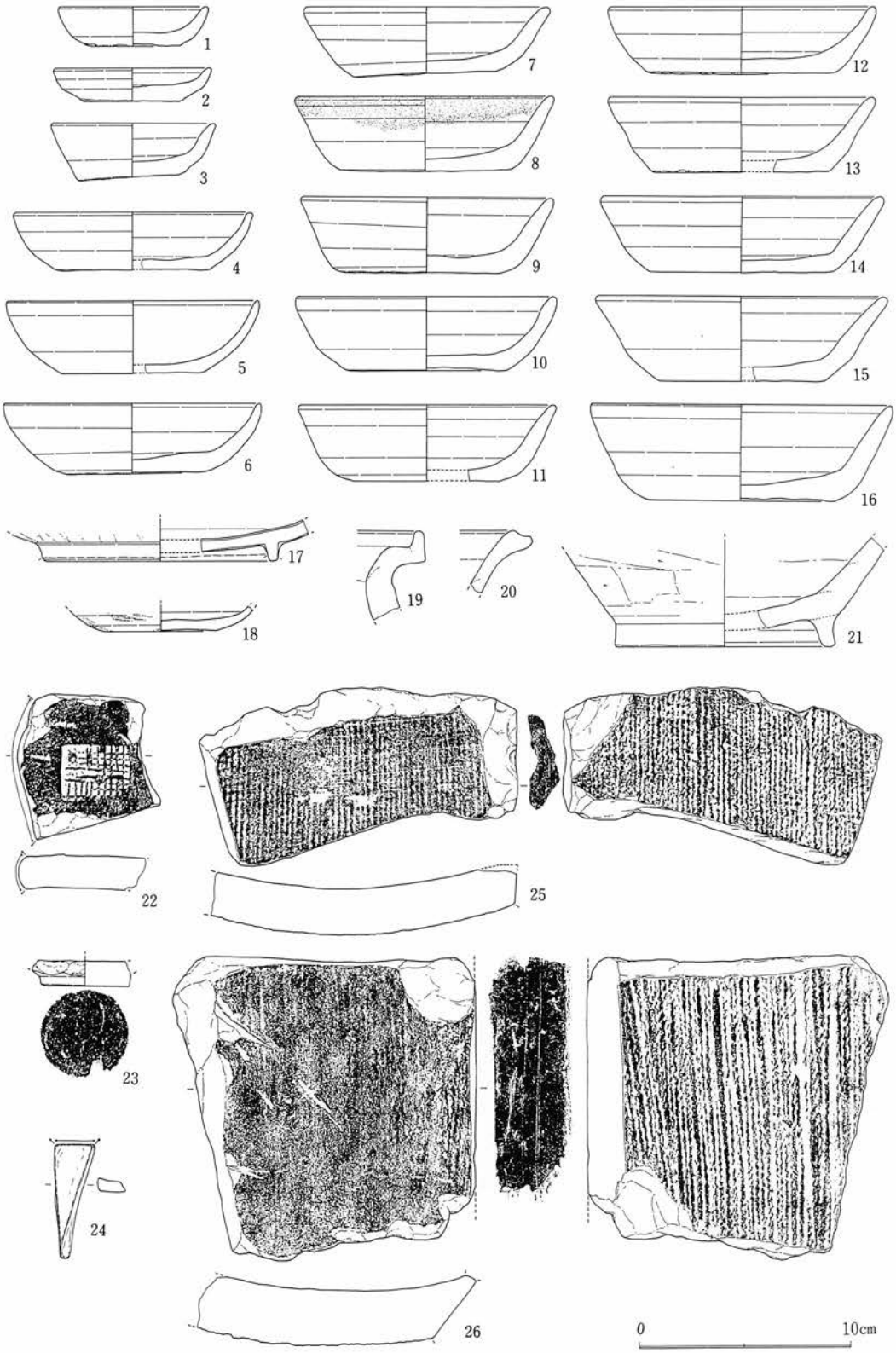


図22　溝１出土遺物

第２節　三面検出の遺構と遺物

試掘調査壙（TP.A、TP.B）で掘り残した整地層上面を三面とした。同整地層は小形の土丹（泥岩）塊を多量に含む明瞭な土層であるが、II区側においては存在せず、貝殻粒を混入した砂質土が広がっている。

三面検出レベルはＩ区北端で標高10.8m前後を測り、南へ向かって徐々に低くなっている。そのため、II区側では根切り深度以下となり、完全に三面を検出することはできなかった。六浦路側溝と考えられる溝も根切り深度以下にあり、トレンチ調査で確認するだけにとどめた。

検出できた遺構と遺物は以下の通りである。

柱穴列（図23）……Ｉ区で検出された。１辺20～28cm程の小形の柱穴で、中心間距離は1.7m～2.0mと不規則である。各柱穴の確認面からの深さと内底面の標高は図23に示した。簡易な板塀を想像させるが、井戸２や土壙５との位置関係には注意する必要があろう。

柱穴出土遺物（図24）……覆土中にかわらけ皿等の細片を混入するが、測図可能な遺物は少ない。１・２はPit c内、３・４はPit f内の出土である。

１はかわらけ皿。手捏ね整形の小皿である。

２は鉄釘。先端部を欠失。

３・４はかわらけ皿。同一個体と思われるが接合不能。糸切り底である。

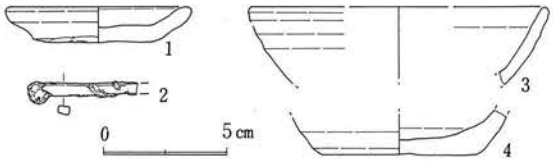


図24　柱穴出土遺物

土壙５（図25）……Ｉ区で検出された。炭化物を少量含む黒灰色砂質土が覆土で、平面プランは長楕円形。下底面は一様でなく、中央最深部で深さ約40cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかで、北東部の壁以外は非常に不明瞭である。整地層の一部かもしれない。

土壙５出土遺物（図26）……１～20はかわらけ皿。手捏ね整形と糸切り底のものがある。２・４・８・10・

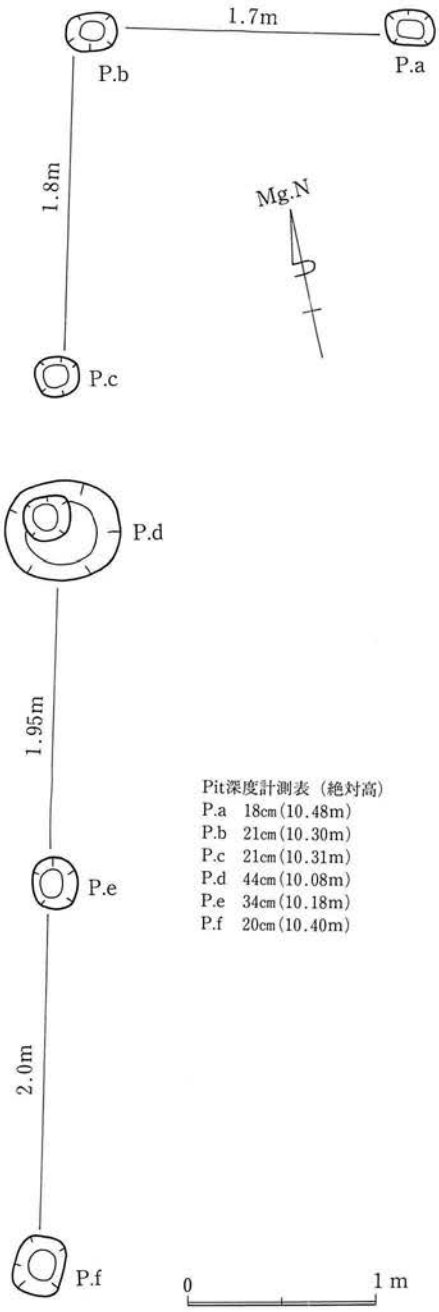


図23　柱穴列

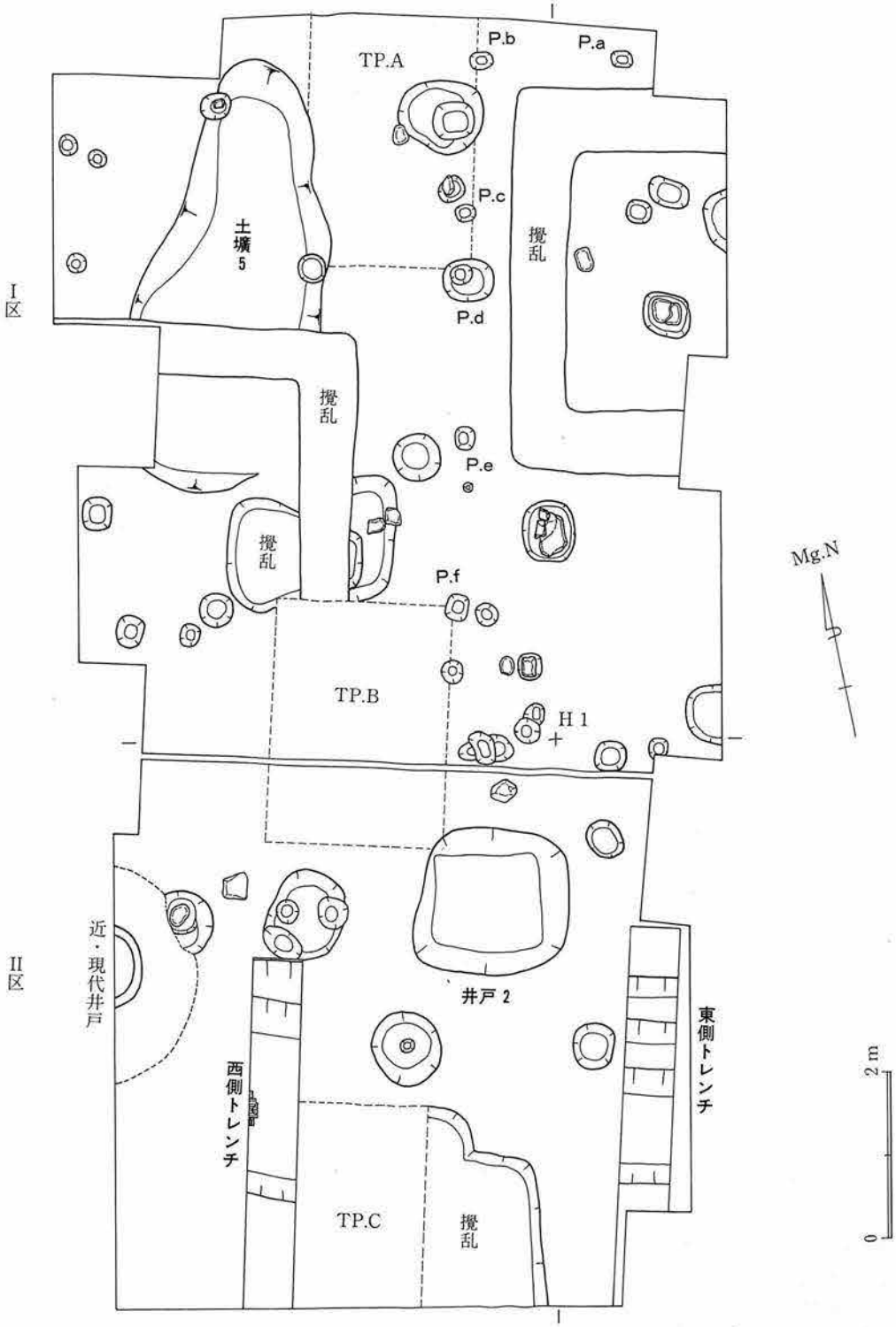


図25　三面検出遺構全体図

14・20は略完形品。

21～29は舶載磁器。21～23・27は青磁無文碗。24～26は青磁鎬蓮弁文碗。28は青磁無文皿。29は白磁皿である。

30～33は国産陶器。30は常滑捏ね鉢。31、32は山茶碗窯系捏ね鉢。33は常滑甕である。いずれも小片で復原はできない。

34は平瓦。凸面に縄目、凹面に布目が残る。

35は鉄製刀子。錆化が著しく、片面に木材圧着痕が残る。

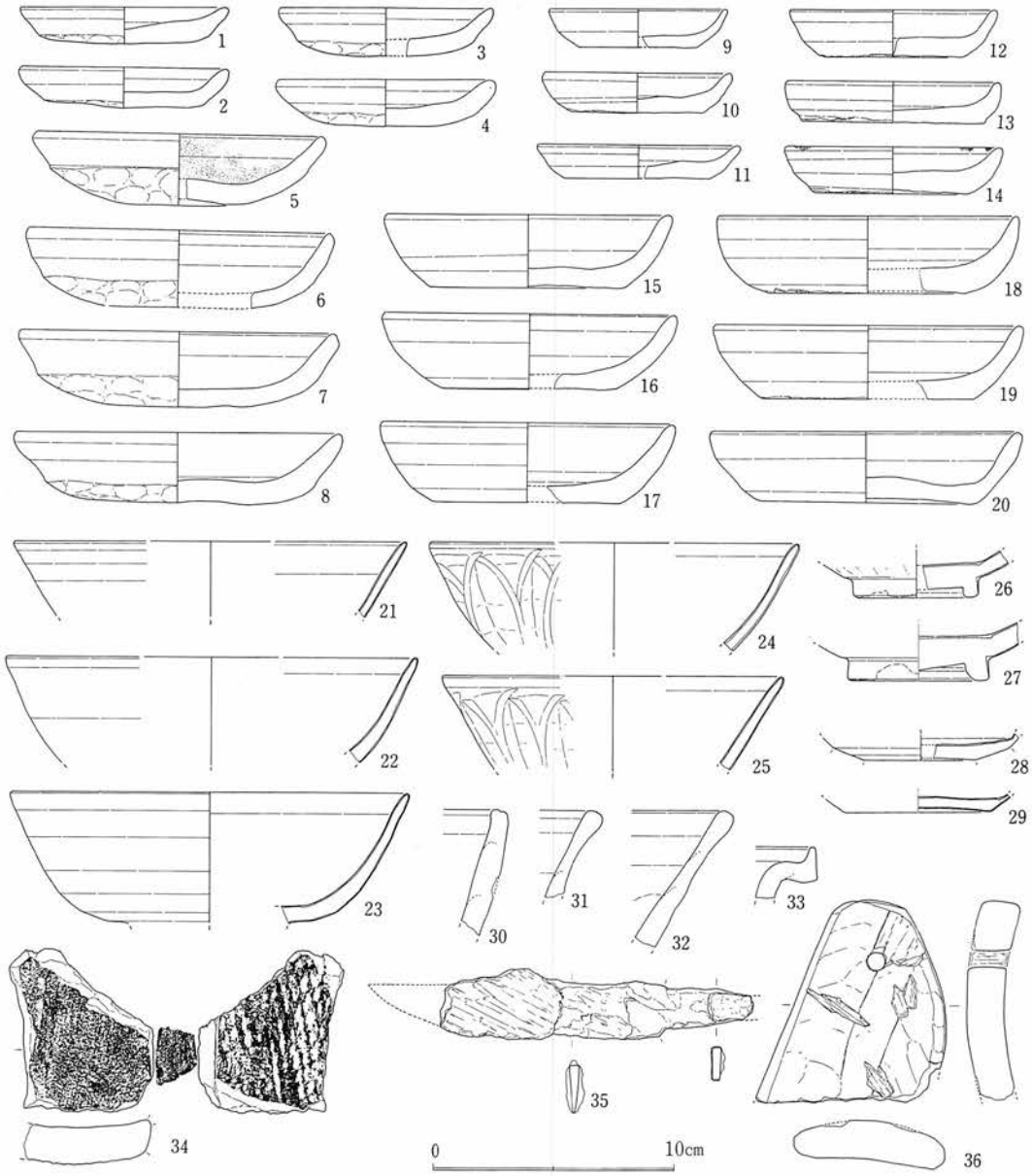


図26　土壙5出土遺物

36は滑石鍋の転用品。温石であろう。鍋の口縁部を左側に残し、鍔は丁寧に削り落している。下端を欠くが三角形を呈すもので、上部に径８㎜程の穿孔を有す。

〈土壙５出土遺物の内訳〉

かわらけ皿275点（手捏ね73・糸切り202）、白かわらけ10点、青磁22点（碗20・鉢２）、白磁２点（皿１・壺１）、常滑107点（捏ね鉢５・壺２・甕100）、渥美甕13点、山茶碗窯18点（碗３・捏ね鉢15）、瓦４点（平２・丸２）、滑石３点（温石１・その他２）、鉄製品６点（釘５・刀子１）、獣骨３点。

井戸２（図27）……Ⅱ区で検出された。二面井戸１とは位置的に大きな変化がなく、近接した時期に掘られたものと考えられる。

井戸掘り方は一辺1.2～1.5mの方形を呈し、下底面中央は一段深く掘り下げている。確認面からの深さは約2.5mである。

井戸木枠は既に抜き取られ、最下部のみが下底面段上に遺存した。横木を枘で連結し、四隅に支柱を立てて組み上げる〝横桟支柱型〟と呼ばれる構造である。残された横桟と側板には数箇所に釘穴が認められた。

井戸２出土遺物（図28）……遺物総量は少なく、焼けた木端片が数点出土している。

１～15はかわらけ皿。手捏ねと糸切りの両タイプがほぼ同量づつ出土した。11は時期的に大きく降る皿で、混入品の可能性が強い。３・５・６・７は略完成品。

16は青磁鎬蓮弁文鉢。高台畳付け部を除く全面に釉がかかる。

17は常滑産の捏ね鉢。小片である。

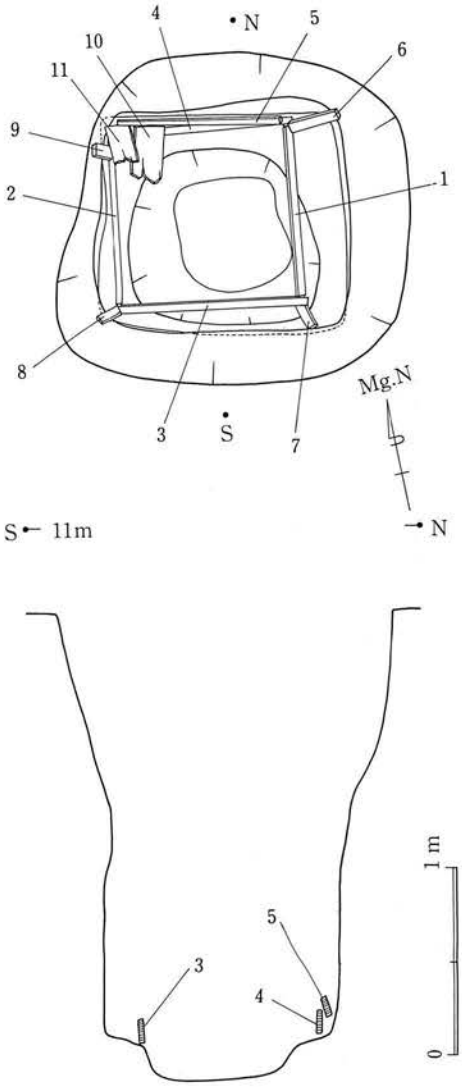
18は砥石。黄灰白色の凝灰岩製で、中砥であろうか。右側面と裏面に丸棒状のものを砥いだ痕跡が残る。

19～23は木製品。19は板草覆。20は著状木製品である。21～23は建具等の一部であろうか。21には鉄釘、22は木釘が遺存し、ともに上端部を焼失する。

24は「永福寺」銘平瓦。凸面は斜格子の叩き目を残す。寛元・宝治年間（1244～1248）の永福寺修造以後に流出した瓦である。

〈井戸２出土遺物の内訳〉

かわらけ皿53点（手捏ね26・糸切り28）、白かわらけ２点、青磁３点（碗２・鉢１）、常滑36点（捏ね鉢１・甕35）、渥美甕１点、、手焙り１点、平瓦４点。



井戸枠部材表（幅×厚×長）単位cm

1．横木（凸枘）	12×３×90	7．支柱	７×４×51
2．横木（凸枘）	12×３×90	8．支柱	７×４×51
3．横木（凹枘）	12×３×90	9．支柱	７×４×51
4．横木（凹枘）	12×３×90	10．縦板（釘痕）	18×２×(75)
5．横桟（釘痕）	10×４×90	11．縦板（釘痕）	16×２×(55)
6．支柱	７×４×51		

図27　井戸２

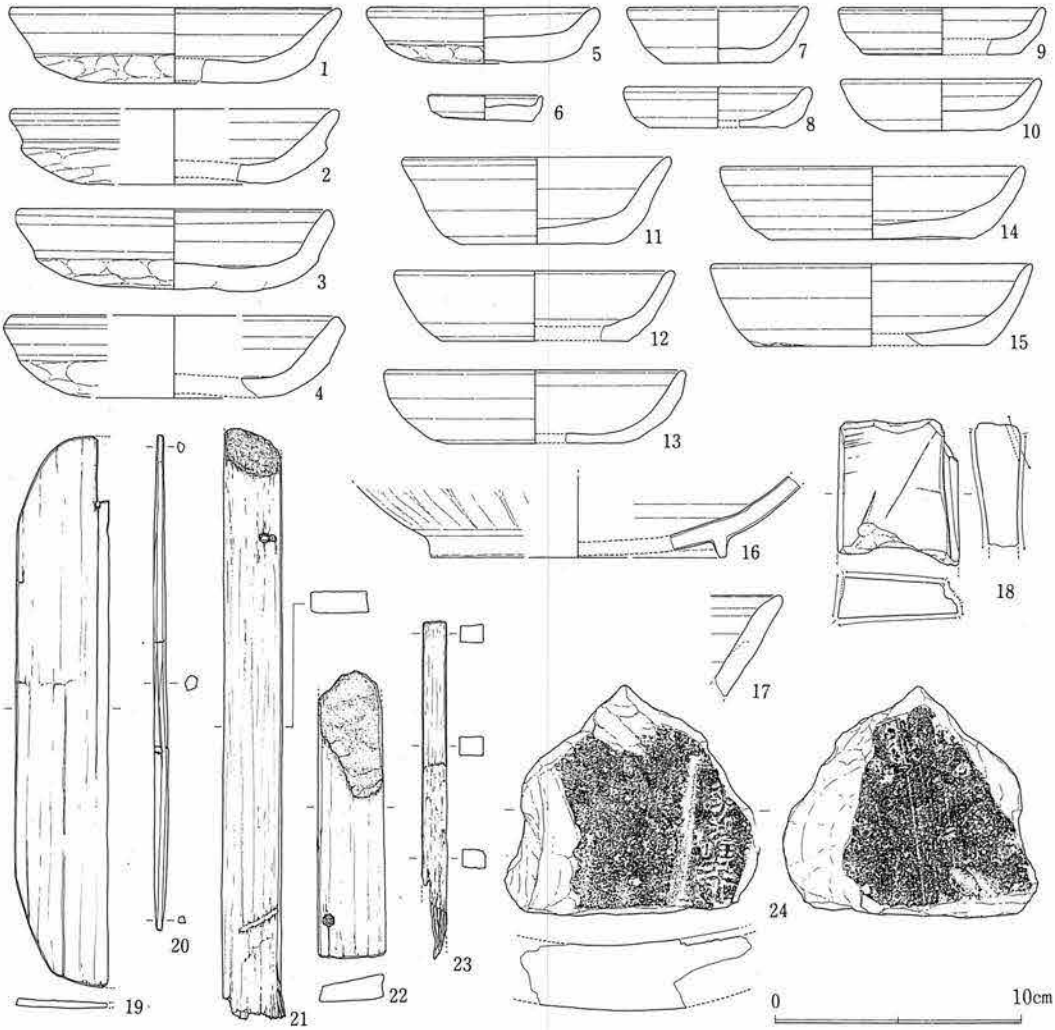


図28　井戸２出土遺物

トレンチ調査（図５・６）……六浦路側溝を確認するため、II区南端部分に東西２箇所のトレンチを入れた。各トレンチは試掘調査壙（TP.C）と先行調査壙（K７・K８）に接する位置にあり、土層の一部は合成して図示することにした。

溝は少なくとも５回以上の掘り直しが行われ、徐々に規模と形態を矮小化させる傾向にあるが、溝の最下底部では幅1.2～1.6m、深さ約１mの逆台形の掘り方をもっている。また、掘り直された溝のなかには、簡易な側板を備えたり、偏平な伊豆石や礎板を据えて橋脚の存在を窺わせる溝もある。

溝の覆土上位は削平を受け、掘り直された各溝に対応する生活面は明らかではないが、確実に三面（図５・西側トレンチ16層上面）から掘り込まれた溝が存在し、その後の削平・整地作業を経て、最終的には単なる区画溝的様相をもつ溝１（二面検出・掘り込み面不明）に至ったものと考えられる。

なお、東西両トレンチにおいても六浦路自体を検出することはできなかった。

トレンチ出土遺物（図29）……西側トレンチからは２・４・５・８・９・14・17～21・23・24が出土し、他は東側トレンチから出土した遺物である。これらのうち、三面直上（図５・西側トレンチ16層上面）からは17・18・24が出土した。

大部分が小片から復原実測した遺物で、完形ないし略完形品は５・17・26だけである。

１～21はかわらけ皿。手捏ね成形と糸切り底の皿が混在する。糸切り底の皿には、薄手タイプの皿や器壁が厚く体部の外反する皿が１点も出土していないことに特徴がある。

22は青白磁皿。口唇部に釉はなく、炭化物が薄く付着している。

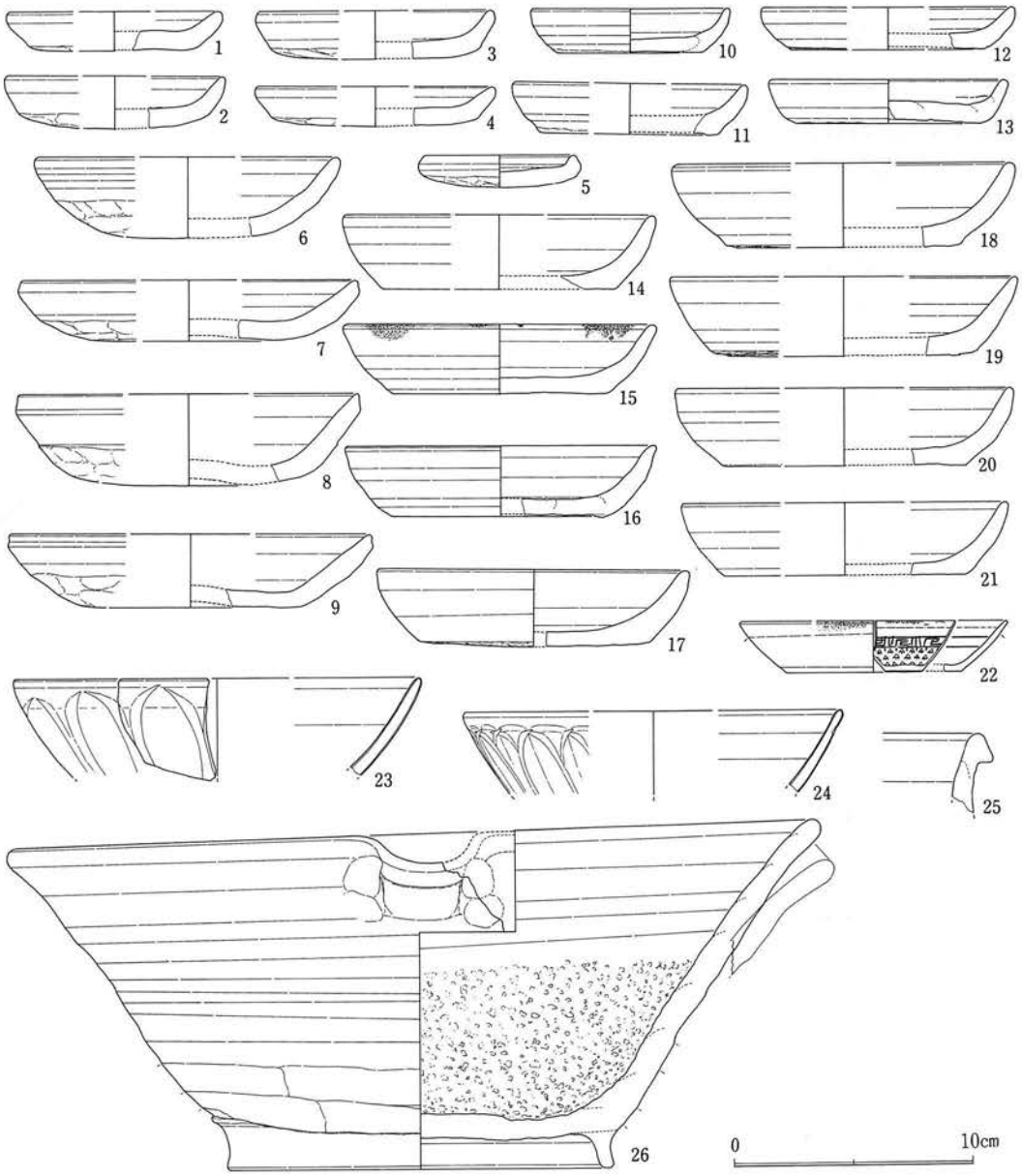


図29　トレンチ出土遺物

23・24は青磁鎬蓮弁文碗。23は幅広の蓮弁で鎬はみられない。24は複弁である。

25は常滑壺。口径12cm前後と思われる。

26は山茶碗窯系捏ね鉢。内面体部下半～内底面にかけて著しく磨耗し、胎土中の粗粒子が抜け落ちた穴が多数みられる。

〈トレンチ出土遺物の内訳〉

かわらけ皿92点（手捏ね35・糸切り57）、白かわらけ１点、青磁碗２点、青白磁皿１点、山茶碗窯系捏ね鉢１点、常滑23点（壺１・甕22）瓦５点（軒平１・平３・丸１）。

第四章　調査のまとめ

検出遺構の年代観

本調査で検出された遺構の新旧関係は、下表で示したように整理される。表中の→印は直接の切り合いがないものの、試掘壙や東西トレンチの土層観察結果から得られた新旧関係を示している。

各生活面に伴う遺構群の変遷は、生活面を構成する整地層の薄さや間層を挟まないことなどから、大きな隔絶期間はなく連続的に営まれたものと考えられる。ただし、六浦路側溝と溝１との間には14世紀中葉～15世紀前半までの出土遺物がなく、断絶していた可能性も考えられる。

実年代の比定には、かわらけ皿の器形と組み合わせを指標とした。掘り過ぎによる遺物混入の恐れがない遺構を例にとれば、井戸２では手捏ね成形と糸切り底のかわらけ皿がほぼ同量出土し、薄手タイプの皿はほとんど含まれていない。寛元・宝治年間（1244～48）に比定される「永福寺」銘瓦の二次的流入があることからみても、13世紀後葉～14世紀前葉の年代観は妥当と思われる。

井戸１では、覆土中に混入した手捏ね成形の皿２点を除くすべてが糸切り底で、薄手タイプの皿が主体を占める。器壁が厚く体部の外反する皿もわずかに含むため、若干時間幅をとって14世紀中葉～15世紀前葉までとした。鎌倉の編年観では、15世紀前葉の良好な資料がないため、かわらけ皿

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">検　出　遺　構</th><th>年　代　観</th></tr>
<tr><td>三面</td><td>井戸２・土壙５</td><td rowspan="2">六浦路側溝</td><td>13ｃ後葉～14ｃ前葉</td></tr>
<tr><td>二面</td><td>井戸１・礎石建物</td><td>14ｃ中葉～15ｃ前葉</td></tr>
<tr><td></td><td>土壙４・土壙２</td><td rowspan="2">溝１</td><td rowspan="2">15ｃ中葉～15ｃ末葉</td></tr>
<tr><td></td><td>土壙１</td></tr>
</table>

の器形変化や組み合わせに不明な点を残すが、今後の資料増加によって年代的に絞り込むことが可能と考えている。

土壙４では、手捏ね成形の皿が６点混入しているに過ぎず、体部が厚く外反する皿が主体を占める。薄手タイプの皿はほとんどみられず、15世紀中葉～15世紀末葉の特徴を備えている。

本調査では三面以下を発掘できなかったが、先行調査において、中世基盤層（地山・黄褐色山砂層）を直接掘り込む遺構が確認されており、13世紀初頭頃～15世紀末葉にわたる遺跡と推定される。

近隣地点との遺構対比

調査地点周辺で検出された遺構の全体図を図30に合成した。同時存在した遺構とは限らないが、筋違橋周辺の様相を探るには好都合である。

政所跡の２地点（図１－８・９地点）では、道路遺構と南北方向の溝（道路側溝）が検出された。南北溝は掘り直しを含めておよそ７m幅の範囲内に納まるもので、道路遺構は10.7m以上あるいは14.3m以上と推測されている。筋違橋以東では道路遺構は検出されていないが、政所跡と同規模の側溝と道路であったと仮定すれば、調査地点での道路遺構は現在の県道の真下に位置することになる。

筋違橋の北東角で行われた調査（図１－10地点）では、近代以後の削平と攪乱壙が深くまで及び、遺構の新旧関係を層序的に確認することが不可能であった。また、遺物整理途中にあるため、本調査地点で検出された13世紀後葉～15世紀末葉の遺構群に対応する遺構を抽出することも困難である。ここでは、延長ラインが本調査地点を通る溝（溝５・溝10・溝11）について、若干の補足と訂正を加えることにしたい。

溝５は北西－南東方向へのびる箱堀状の溝で、先行調査壙（Ｋ２・Ｋ６）にその延長線が確認された。掘り込み面は中世基盤層（地山・黄褐色山砂層）上面。年代的には中世初頭に遡る可能性が高い溝である。Ｋ２壙では溝の南辺に大形の柱穴を伴うが、既調査地点（図１－10地点）に同様の柱穴はない。

溝10は既調査地点を起点として東へのびる溝である。本調査地点では、Ｋ２－Ｋ７壙を通る位置にあるが攪乱を受けて不明となる。根切り深度以下にあるため未掘であるが、試掘調査壙（TP.B）で確認された落ち込み線が溝10とすれば、掘り込み面は三面ということになろう。

溝11は六浦路側溝と考えられる溝である。溝10と平行し、既調査地点に起点をもつ。本調査の結果をもとに見直すと、以前報告した内容[註]に誤りがあるため、以下の３点を訂正しておきたい。

①溝の掘り直しが行われている事。

②溝の南辺の土塁状遺構は、掘り直された溝覆土の一部である可能性が高い事。

③溝の存続期間の下限が、14世紀前葉まで降る事。

以上、簡単であるが、本調査のまとめとさせていただきたい。

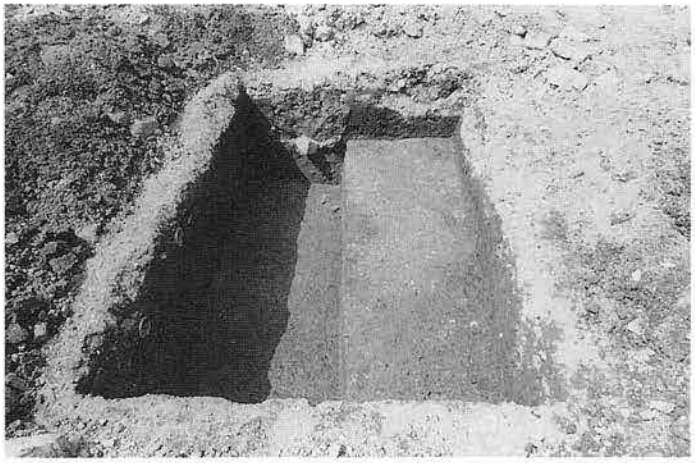
註　菊川英政「大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下三丁目６０６番地１地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９』第３分冊　鎌倉教育委員会　1993

Mg.N
国土座標軸
(推定)政所跡
溝5
調査地点
溝10
溝11
BM(No.53208)
県道金沢・鎌倉線
「筋違橋」
南北溝
道路
0
20m

図30　検出遺構対比図

試掘調査

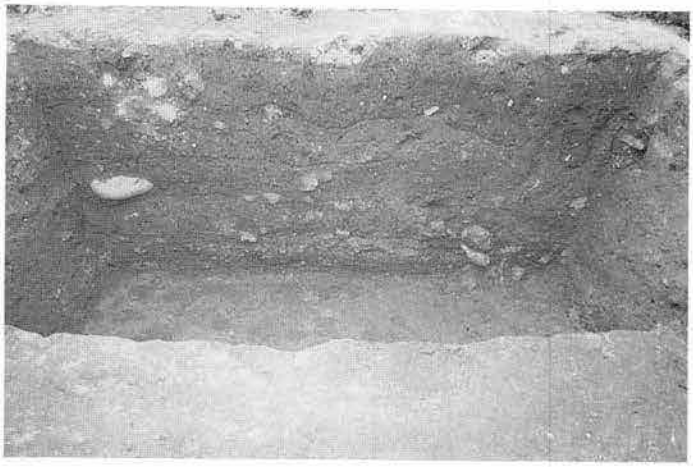
TP. A（右半分は第三面を残す。
南から撮影）



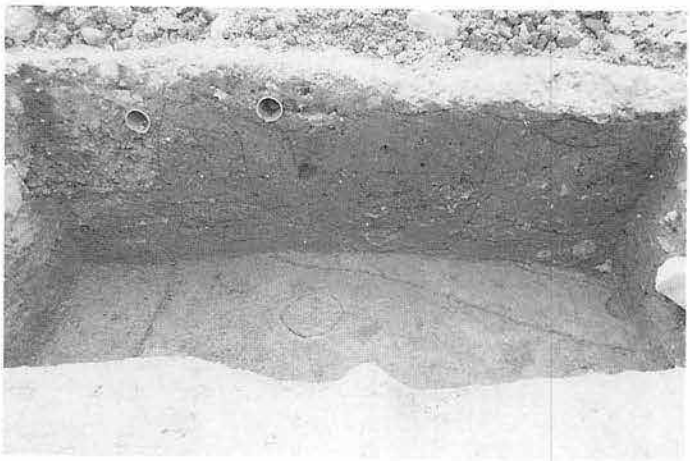
TP. B（右半分は第三面を残す。
南から撮影）

TP. C（溝確認レベルまで下げた
状態。南から撮影）

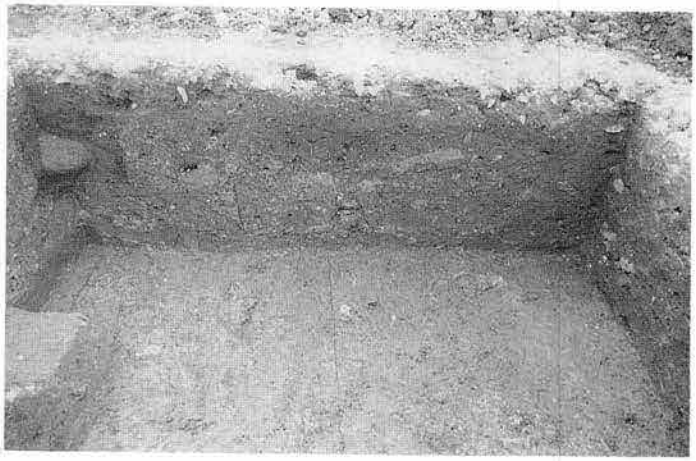
図版 2



TP.A　西壁



TP.B　西壁



TP.C　西壁

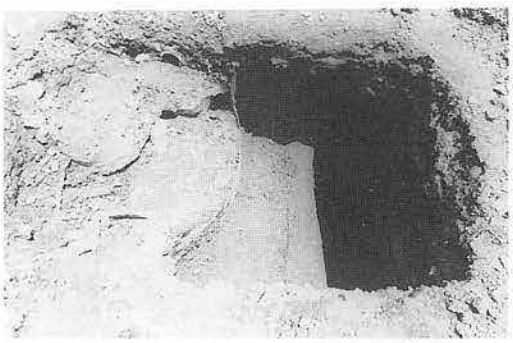
先行調査

調査地点近景

K 1 ・三面　柱穴群(西から撮影)

K 2 ・地山面　柱穴と溝(西から撮影)

K 1 ・四面　柱穴群(西から撮影)



K 3 ・地山面　攪乱　(西から撮影)

K 1 ・地山面　柱穴群(西から撮影)

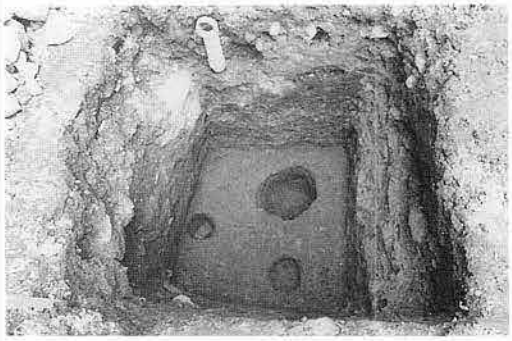
K 4 ・三面　攪乱　(西から撮影)

図版 4

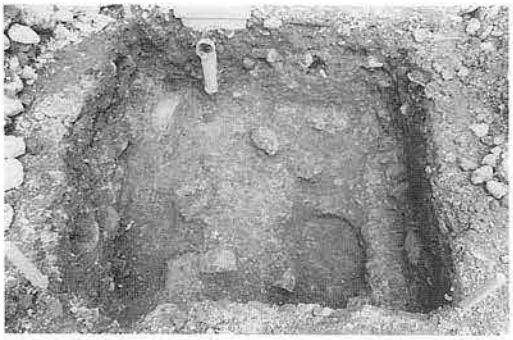
K 4 ・四面　柱穴と溝(西から撮影)

K 5 ・四面　柱穴群(西から撮影)

K 4 ・黒褐色粘土層上面　自然流路(西から撮影)



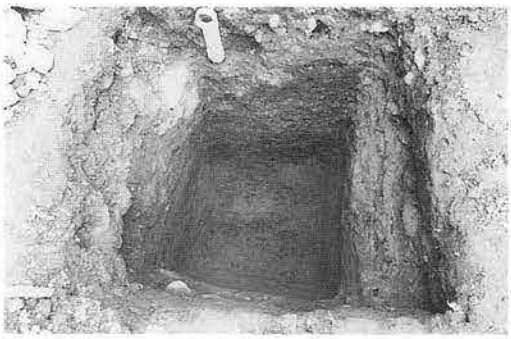
K 5 ・五面　柱穴群(西から撮影)



K 5 ・一面　土丹地業層(西から撮影)

K 5 ・地山面　柱穴と溝(西から撮影)

K 5 ・二面　礎石(西から撮影)



K 5 ・黒褐色粘土層上面　自然流路(西から撮影)

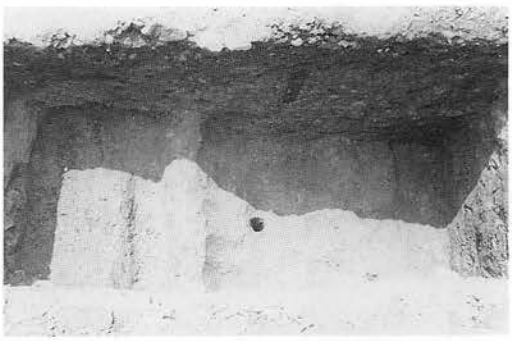
K 6 ・一面　攪乱壙(西から撮影)

K 7 ・黒褐色粘土層上面(西から撮影)

K 6 ・四面　柱穴群(西から撮影)

K 8 ・三面　土丹地業層(西から撮影)

K 6 ・地山面　柱穴と溝(西から撮影)



K 8 ・四面　溝(東から撮影)

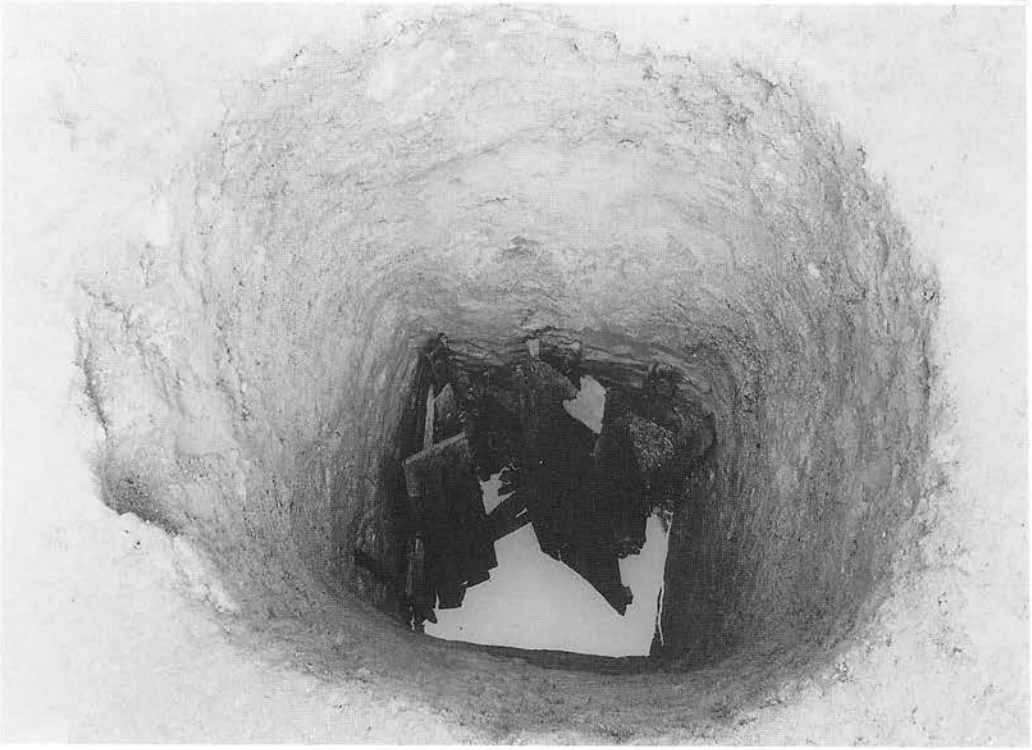
K 6 ・黒褐色粘土層上面　自然流路(西から撮影)

K 8 ・地山面　溝(西から撮影)

図版 6

本調査　　I 区二面・全景(南から撮影)

II区二面・全景(南から撮影)

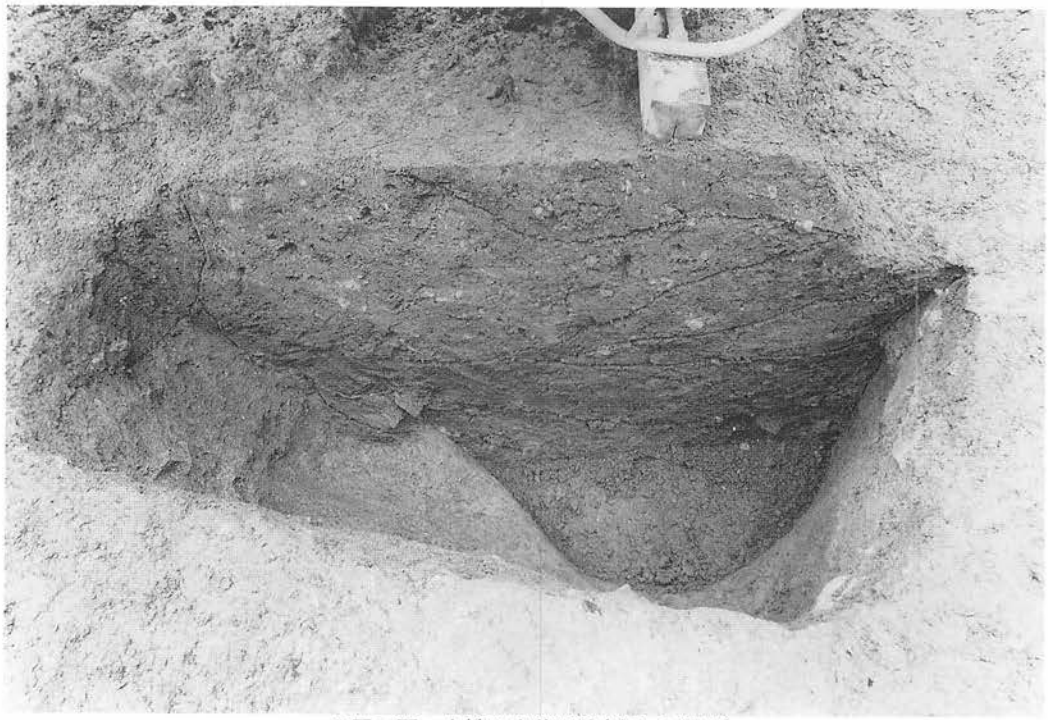


Ⅰ区二面・井戸 1（西から撮影）

同上・井戸木枠の状態（南から撮影）

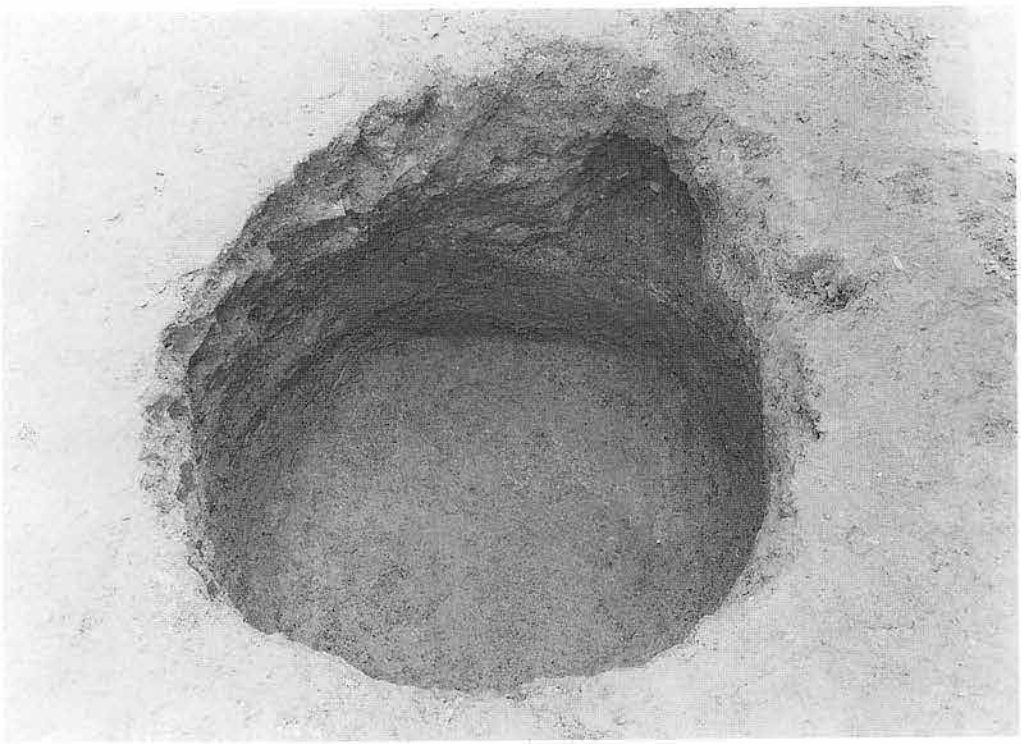
図版 8

Ⅰ区二面・土壙 1（南から撮影）



Ⅰ区二面・土壙 2 半截状態（東から撮影）

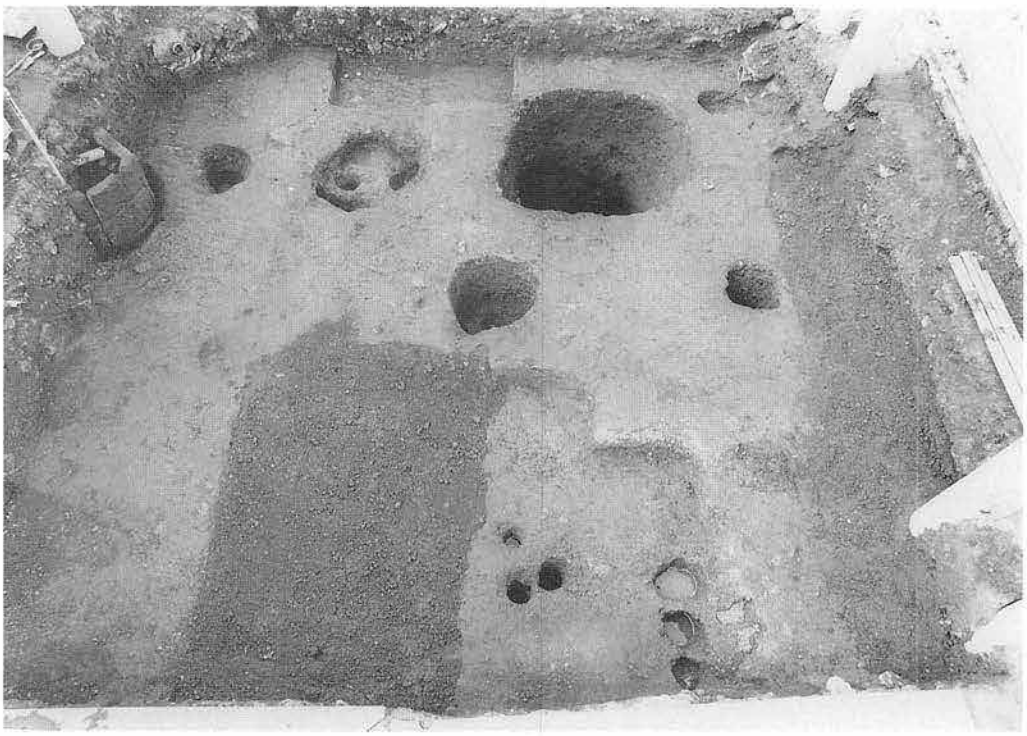
Ⅰ区二面・土壙 2 完掘状態(東から撮影)



Ⅰ区二面・土壙 4 (西から撮影)

図版10

I区三面・全景(南から撮影)



II区三面・全景(南から撮影)

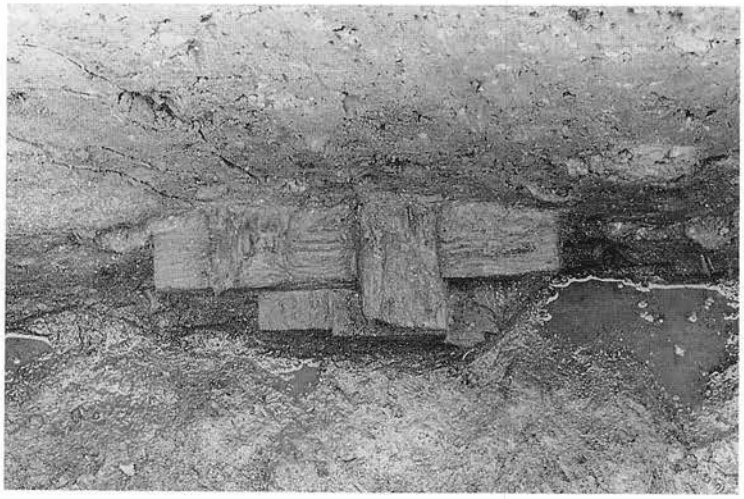
II区三面・井戸2(東から撮影)

同上・井戸木枠(枘部)の状態(南から撮影)

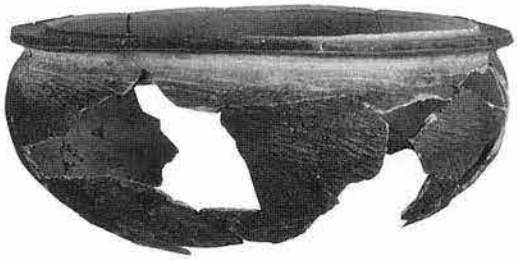
図版12

II区・西側トレンチ（南から撮影）

II区・東側トレンチ（南から撮影）



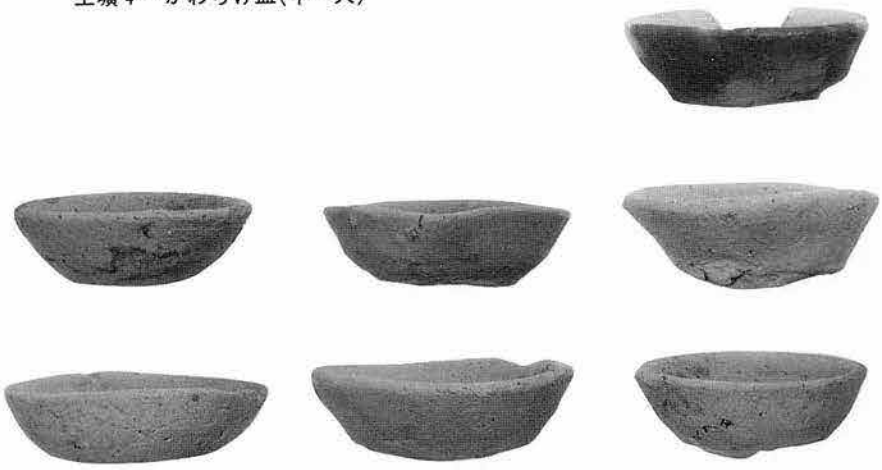
西側トレンチ内・礎板
（東から撮影）



土壙４・鍔釜

土壙４
瓦器灯明台

土壙４・かわらけ皿(中・大)



土壙４・かわらけ皿(小)

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10

平成５年度　発掘調査報告（第１分冊）

発 行 日　平成６年３月

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　中川印刷株式会社